



1960年

モッキンバードを殺すには

ハーパー・リー著

著作権 (C) 1960 by Harper Lee

著作権 (C) 1988 年に Harper Lee によって更新されました

マッキントッシュおよびオーティス社との協定により出版。

献身

リーさんとアリスのために

愛と愛情を考慮して

弁護士もかつては子供だったのではないのでしょうか。

チャールズ・ラム

パート 1

第1章

13歳近くのとき、弟のジェムは腕の肘を骨折しました。病気が治って、もうサッカーができないのではないかとジェムの不安が消えたとき、安心したので、彼は自分の怪我についてほとんど意識しませんでした。彼の左腕は右腕より若干短かった。彼が立ったり歩いたりするとき、手の甲は体に対して直角になり、親指は太ももと平行になりました。パスとパントができる限り、彼はそれほど気にすることはできなかった。

十分な年月が経ち、私たちがそれらを振り返ることができるようになったとき、私たちは時々彼の事故につながった出来事について話し合った。私はイーウェル夫妻がすべてを始めたと言っているが、4歳年上のジェムはそれよりずっと前から始まっていたと語った。彼は、ディルが私たちにやって来た夏から始まり、ディルが初めてブー・ラドリーを登場させるというアイデアを私たちに与えたときから始まったと言いました。

私は、もし彼が物事を広い視野で捉えたいのなら、それはアンドリュー・ジャクソンから始まったと言いました。もしジャクソン将軍がクリーク川を遡上していなかったら、サイモン・フィンチは決してアラバマ川を漕いでいなかったでしょう。もし彼がいなかったら、私たちはどこにいたのでしょうか？

私たちは殴り合いで議論を解決するにはあまりにも年をとりすぎていたので、アティカスに相談しました。私たちの父は、私たちは両方とも正しいと言った。

南部人として、ヘイスティングズの戦いのどちらの側にも先祖が記録されていないことは、家族の一部にとって恥の源でした。私たちにあったのは、コーンウォール出身の毛皮捕りの薬剤師、サイモン・フィンチだけでした。

それを越えたのは彼の吝嗇さだけだった。イギリスでは、サイモンは、よりリベラルな同胞たちの手によるメソジストと名乗る人々の迫害にイライラし、サイモンは自らをメソジストと称して、大西洋を渡ってフィラデルフィア、そこからジャマイカ、そしてモビールへと向かいました。そしてセント・ステファーンズを上ります。売買における多くの言葉の使用に関するジョン・ウェスレーの制約を念頭に置いて、サイモンは医学の練習に山を積んだが、この追求において彼は、栄光のためではないとわかっていることをするように誘惑されるのではないかと不満を感じていた。

それは、金や高価な衣服を着るのと同じように、神のものです。それでサイモンは、人間の動産の所有に関する教師の命令を忘れて、3人の奴隷を購入し、彼らの援助でアラバマ川のほとりに農場を設立した人もいる。

セント・スティーブンス上空40マイル。彼は妻を見つけるために一度だけセント・スティーブンスに戻り、彼女とともに娘たちに至るまでの血統を確立した。サイモンは驚くべき年齢まで生き、裕福に亡くなりました。

家族の男たちはサイモンの屋敷であるフィンチズ・ランディングに残り、綿花で生計を立てるのが慣例であった。この場所は自給自足でした。周囲の帝国と比較すると質素でしたが、それでもランディングでは氷、小麦粉、衣料品以外は生命を維持するために必要なものすべてが生産され、モビールからの川船で供給されました。

サイモンは、南北間の動乱を無力な怒りで見ていただろう。なぜなら、そのせいで彼の子孫は土地以外のすべてを剥奪されたのに、その土地に住むという伝統は20世紀になっても途切れることなく残っていたからである。

今世紀、父のアティカス・フィンチは法律を読むためにモンゴメリーに行き、弟は医学を学ぶためにボストンに行きました。彼らの妹のアレクサンドラは、ランディングに残ったフィンチ族でした。彼女は寡黙な男性と結婚しました。彼女は、ほとんどの時間を川のそばのハンモックに横たわって、小走りがいっぱいかどうかを考えて過ごしました。

父は弁護士として認められると、メイコムに戻り、練習を始めました。フィンチズ・ランディングから約20マイル東にあるメイコムが郡だった。

メイコム郡の郡庁所在地。裁判所にあるアティカスの執務室には、帽子掛け、つばつば、チェッカーボード、そして汚れのないアラバマ法典が置かれていただけだった。彼の最初の二人の依頼人は、メイコム郡刑務所で絞首刑にされた最後の二人であった。

アティカス氏は、彼らの嘆願を許可する州の寛大さを受け入れるよう彼らに促していた。

第二級殺人で有罪となり命からがら逃走するが、彼らはジャッカスの代名詞ともいえるメイコム郡のハヴァフォードだった。ハヴァフォード夫妻は、牝馬の不法拘留の疑いから生じた誤解からメイコムの有力鍛冶屋を派遣したが、証人3人の前でそれを行うのは軽率であり、雌犬の息子が来るはずだと主張した。「彼への」は誰にとっても十分な防御策だった。彼らは第一級殺人で無罪を主張し続けたので、アティカスには大したことはなかった

クライアントのためにできることは、彼らの出発に立ち会うこと以外にありませんでしたが、おそらくこの機会が私の父のこの慣習に対する深い嫌悪感の始まりでした。

刑法。

メイコムでの最初の5年間、アティカスは何よりも経済を実践しました。その後数年間、彼は自分の収入を弟の教育に投資しました。ジョン・ヘイル・フィンチは私の父より10歳年下で、綿花を育てる価値がなかった時代に医学を学ぶことを選びました。しかし、ジャックおじさんを始めさせた後、アティカスは法律からそれなりの収入を得ました。彼が言っています

メイコム、彼はメイコム郡で生まれ育ちました。彼は彼の人々を知っており、彼らも彼のことを知っており、サイモン・フィンチの産業のおかげで、アティカスは町のほぼすべての家族と血縁または婚姻関係にありました。

メイコムは古い町ですが、初めて知ったときは疲れた古い町でした。雨天で道路は赤い坂道に変わりました。歩道には草が生え、広場の裁判所はへこんだ。どういうわけか、そのときはもっと暑かった。夏の日に黒い犬が苦しんでいた。広場の生い茂るオークのうだるような日陰で、フーバーカートに繋がれた骨ばったラバがハエをはじき飛ばしていた。男性の堅い首輪がしおれてしまう

朝の9時。女性たちは正午前、午後3時の昼寝の後、入浴し、日が暮れるまでに汗と甘いタルカムのフロスティングで柔らかいティーケーキのようになっていた。

その時、人々はゆっくりと動きまわりました。彼らは広場をふらふらと横切り、足を引きずって出入りした。周りの店はすべてに時間をかけて取り組んでいました。一日は二十四日だった

数時間ですが、もっと長く感じました。急ぐ必要はなかった。行く場所も買うものも買うお金もなかったし、メイコム郡の境界の外には見るものも何もなかったからである。しかし、一部の人々にとっては漠然と楽観的な時代でもありました。

メイコム郡は最近、郡自体を恐れる以外に恐れるべきものはないと言われていた。

私たちは町の主要な住宅街に住んでいました。アティカス、ジェム、そして私、そして料理人のカルプルニアです。

ジェムと私は父が満足していると感じました。彼は私たちと遊んでくれました。

私たちに本を読んでくれて、丁寧な態度で接してくれました。

カルプルニアはまた別のものでした。彼女は角も骨もすべてそっくりだった。彼女は近視でした。彼女は目を細めた。

彼女の手はベッドのすのこほど広く、2倍の硬さでした。彼女

はいつも私にキッチンから出るように命令し、ジェムが年上だと知っているのになぜ私がジェムのように行儀よくできない

のかと尋ね、私に来る準備ができていないときは家に電話しました。私たちの戦いは壮大かつ一方的でした。カルプルニ

アが常に勝ったのは、主にアティカスが常に彼女の味方だったからです。彼女はジェムが生まれたときから私たちと

一緒にいて、私は物心ついた頃から彼女の横暴な存在を感じていました。

私たちの母は私が2歳のときに亡くなったので、母の不在を感じたことはありませんでした。彼女はグラハムだった

モンゴメリー出身。アティカスさんは州議会議員に初当選したときに彼女に出会った。当時彼は中年で、彼女は

15歳年下でした。ジェムは結婚1年目の産物だった。4年後に私が生まれ、2年後に母が突然の心臓発作で亡くなりました

た。彼女の家族にもそれがあつたと彼らは言いました。私は彼女を懐かしんだわけではありませんが、ジェムは寂しかった

と思います。彼は彼女のことははっきりと覚えていて、

時々、試合の途中で彼は長いため息をつき、それから庫の裏で一人でプレーすることもあった。彼がそのようなとき、私はそ

うするよりもよく知っていました

彼を困らせる。

私が6歳近く、ジェムが10歳近くるとき、私たちの夏の境界線（カルプルニアから電話がかかる範囲内）は、2軒北に

あるヘンリー・ラファイエット・デュボース夫人の家と、3軒南にあるラドリー・ブレイスでした。私たちはそれらを破りたいとい

う誘惑に駆られたことは一度もありませんでした。ラドリー・ブレイスには未知の存在が住んでおり、その存在を説明する

だけで、私たちは何日も続けて行動するのに十分でした。デュボース夫人はまさに地獄だった。

それはディルが私たちにやって来た夏のことでした。

ある朝早く、私たちが裏庭でその日の遊びを始めていたとき、ジェムと私は隣のミス・レイチェル・ハヴァフォードのコラードパ

ッチで何かを聞きました。私たちは行った

子犬がいるかどうかを確認するために金網に行くと、レイチェルさんのラットテリアが待っていたのですが、代わりに誰かが座って私たちを見ているのを見つけました。座っていると、彼の身長はコラードよりもそれほど高くありませんでした。彼が話すまで、私たちは彼を見つめました。

"おい。"

「やあ、あなたも」ジェムは楽しそうに言いました。

「私はチャールズ・ベイカー・ハリスです」と彼は言った。"私は読むことができます。"

"だから何?"私は言いました。

「私が読めることを知りたいのだと思ったんです。読む必要のあるものは何でもあります
出来る…"

「あなたは何歳ですか」とジェムは尋ねました、「4歳半ですか?」

「7時に行きます。」

「それなら、撃っても不思議ではないよ」とジェムは私に親指を突き立てながら言った。「向こうのスカウトの彼女は生まれたときから本を読んでいて、まだ学校に通い始めていません。7で行くなんて、あなたは本当に卑劣に見えます。」

「私は小さいですが、年をとりました」と彼は言いました。

ジェムは見栄えを良くするために髪を後ろにかき上げた。「来ませんか、チャールズ・ベイカー・ハリス?」彼は言った。「主よ、何という名前でしょう。」

「あなたの話をもっと面白くないよ。レイチェルおばさんが、あなたの名前はジェレミー・アティカス・フィンチだと言いました。」

ジェムは顔をしかめた。「私は自分の体に合うのに十分な大きさです」と彼は言いました。「君の名前はもっと長いよ。きっとあと1フィート長いよ。」

「みんなは私のことをディルと呼んでいます」とディルは柵の下でもがきながら言った。

「下ではなく上を行ったほうが良いよ」と私は言いました。「どこから来たの?」

ディルはミシシッピ州メリディアン出身で、夏は叔母のミス・レイチェルと過ごしており、今後は毎年夏をメイコムで過ごすことになった。

彼の家族はもともとメイコム郡の出身で、母親はメリディアンの写真家で働いており、美しい子供コンテストに彼の写真を応募し、5ドルを獲得しました。彼女はそのお金をディルに渡し、ディルはその紙芝居を20回見に行きました。

「ここでは写真展はやめてください。法廷で時々イエスの写真を見せるのは別ですが」とジェムは言った。「何か良いものを見たことがありますか?」

ディルはドラキュラを見たことがあり、その啓示がジェムを動かして最初から彼に目を向けさせた

敬意を表して。「それを私たちに話してください」と彼は言いました。

ディルは好奇心旺盛でした。彼はシャツのボタンを留めた青いリネンのショートパンツを着ており、髪は真っ白で、アヒルの綿毛のように頭に張り付いていました。彼は私の1年先輩でしたが、

私は彼の上にそびえ立っていた。彼が私たちに昔話を語ると、彼の青い目は明るくなったり暗くなったりしました。彼の笑い声は突然嬉しかった。彼は習慣的にカウリックを引っ張った彼の額の中央。

ディルがドラキュラを塵に帰し、ジェムが本よりもショーのほうがよかったと言ったとき、私はディルに父親がどこにいるのか尋ねました。「彼については何も言っていないですね。」

「私は持っていません。」

「彼は死んだんですか？」

"いいえ…"

「それでは、彼が死んでいないなら、あなたはそれを持っていますよね？」

ディルは顔を赤らめ、ジェムは私に黙るように言った。それはディルが研究され、受け入れられると判断されたという確かな兆候だった。その後、夏はいつものように満足しながら過ぎていきました。日課の満足感、裏庭の巨大なセンダンの木の間にあるツリーハウスを改善したり、大騒ぎしたり、オリバー オプティック、ビクター アップルトン、エドガー ライス バローズの作品を基にしたドラマのリストを実行したりすることでした。

この件に関しては、ディルがいてくれて幸運でした。彼は、以前私に押し付けられた役柄、つまり『ターザン』の猿、『ローバー・ボーイズ』のミスター・クラブツリー、『トム・スウィフト』のミスター・デモンを演じた。こうして私たちはディルを、頭がいっぱいになったポケットのマーリンとして知るようになりました。

風変わりな計画、奇妙な憧れ、そして奇妙な空想を持って。

しかし、8月末までに、私たちのレパトリーは無数の再生産によって空になり、そのときディルがブー・ラドリーを世に出すというアイデアを私たちに与えてくれました。

ラドリー・プレイスはディルを魅了しました。私たちの警告と説明にもかかわらず、それは月が水を引くように彼を引き寄せたが、ラドリー門から安全な距離にある角の電柱より近くには彼を引き寄せなかった。そこに彼は腕を立てて立つだろう

太いポールの周りを見つめて不思議に思いました。

ラドリー・プレイスは私たちの家の向こうで急カーブに突き出していた。南に歩いていくと、ポーチに面した人もいました。歩道は向きを変えて敷地の横を走りました。家は低かったのも、かつては白く、深い玄関ポーチと緑の雨戸があったが、ずっと前に

周りのスレートグレーの庭の色に合わせて暗くなりました。雨で腐った屋根板がベランダの軒に垂れ下がっていた。樫の木が太陽を遮っていました。酔っぱらって前庭を守っていたピケットの残骸、決して掃除されなかった「掃除された」庭
ジョンソングラスとウサギタバコが豊富に生えていた場所。

家の中には悪意のある幽霊が住んでいた。人々は彼が存在すると言っていました、ジェムと私は彼を見たことはありませんでした。人々は彼が月が沈む夜に出かけたと言いました。

そして窓を覗いた。寒波で人々のツツジが凍ったのは、彼がツツジに息を吹きかけたからだ。メイコムでこっそり行われた小規模な犯罪はすべて彼の仕業でした。かつてこの町は、一連の病的な夜の出来事によって恐怖に陥りました。人々の鶏や家庭用ペットが切断された状態で発見されました。犯人はクレイジー・アディで、最終的にバーカーズ・エディで溺死したにもかかわらず、人々は依然としてラドリー・プレイスに注目し、当初の疑惑を捨てようとしなかった。黒人は夜にラドリー・プレイスを通らず、反対側の歩道を横切り、口笛を吹きながら歩きました。メイコム学校

敷地はラドリーの敷地の裏側に隣接していた。ラドリーの養鶏場からは、背の高いピーカンの木が実を校庭に落としていましたが、その木の実は子供たちの手に触れずに横たわっていました。ラドリーのピーカンナッツはあなたを殺します。ラドリーヤードへの野球の打球はロストボールであり、問答無用であった。

その家の悲惨さは、ジェムと私が生まれる何年も前から始まりました。ラドリー一家は町のどこにでも歓迎されるが、メイコムでは許されぬ偏愛を自分たちだけに秘めていた。彼らはメイコムの主な娯楽である教会には行かず、自宅で礼拝を行った。ラドリー夫人は近所の人たちと午前中にコーヒブレイクをするために通りを渡ることはめったになかったし、宣教師の輪に加わったことも決してなかった。ラドリー氏は毎朝11時半に町へ歩いて行きました。

12時にすぐに戻ってきましたが、近所の人々が家族の食料品が入っていると思っていた茶色の紙袋を持っていることもありました。先生が何歳なのか全く知りませんでした。

ラドリーさんは生計を立てていた——ジェム氏は「綿を買った」（何もしないことを表す丁寧な言葉）と語った——だが、ラドリー氏とその妻は、誰もが覚えている限りずっとそこに二人の息子とともに住んでいた。

ラドリー家の雨戸とドアは日曜日には閉まっていたが、これもメイコムのやり方とは異質だった。ドアが閉まっているということは病気と寒さだけを意味するのだ。すべての日の中で、日曜日は午後の正式な訪問の日でした。女性はコルセットを着て、男性はコートを着て、子供たちは靴を履いていました。でもラドリー正面の階段を登るには

日曜日の午後に「やあ」と呼びかけるのは、近所の人たちが決してしなかったことだった。

ラドリーの家には網戸がありませんでした。私は一度、アティカスに何かあったのかと尋ねたことがあります。アティカスはそうだとはいいましたが、私が生まれる前でした。

近所の伝説によると、ラドリー少年は10代のとき、郡北部に居住する巨大で紛らわしい部族である
オールド・セーラムのカニンガム族の何人かと知り合い、

彼らはメイコムでこれまでに見られたギャングに最も近いものを形成しました。彼らはほとんど何もして
いませんでしたが、町で議論され、3つの説教壇から公に警告されるほどでした。彼らは日曜日にバスに乗っ
てアボッツビルに行き、紙芝居を見に行きました。彼らは郡の川沿いにあるギャンブル地獄、デュード
ロップ・イン&フィッシング・キャンプでのダンスに参加した。彼らはスタンプホール・ウィスキーを実験し
た。メイコムには、ラドリー氏に息子が間違っただけの群衆と一緒にいると言えほどの度胸のある人は
誰もいなかった。

ある夜、過度に高揚した少年たちは、借りてきたフリバーで広場を後ずさりし、メイコムの古代ビードル、コ
ナー氏による逮捕に抵抗し、彼を裁判所の別室に閉じ込めた。町は何かをしなければならないと判断し
た。コナー氏は、彼ら一人一人が誰であるかを知っていると述べた。

拘束されており、このままでは逃げられないと決心したため、少年らは秩序を乱す行為、治安を乱
す暴行、暴行、女性の面前での暴言や冒瀆的な言葉の使用などの罪で検認裁判官に出廷した。裁判官は
コナー氏に、なぜ最後の容疑を含めたのか尋ねた。コナー氏は、彼らの悪口があまりにも大声で、メイコ
ムの女性全員がその声を聞いているのではないかと確信したと語った。裁判官は少年たちを州立工業学校
に送ることを決定したが、少年たちは食べ物や食事を提供するため以外の理由で送られることもあっ
た。

まともな避難所だった。そこは刑務所ではなかったし、恥ずべきことではなかった。ラドリー氏はそう考えた。

もし裁判官がアーサーを釈放した場合、ラドリー氏はアーサーがこれ以上問題を起こさないよう
に配慮するだろう。ラドリー氏の言葉が彼の絆であることを知っていた判事は、喜んでそうした。

他の少年たちは工業学校に通い、州内で最高の中等教育を受けました。そのうちの1人は、最終的に
オーバーンの工学学校に進学しました。ラドリーさんの家のドアは日曜日だけでなく平日も閉まってお
り、ラドリーさんの少年はその後何年も姿を見せなかった。

15年。

しかし、ジェムの記憶にほとんど残っていない日が来ました。ブー・ラドリーの消息が聞こえ、何人かの人々に目撃されましたが、ジェムはそうではありませんでした。彼は、アティカスはラドリー家についてあまり話さなかった、と述べた。ジェムが彼に質問したとき、アティカスの唯一の答えは、自分のことは自分のことにして、ラドリー家には自分たちのことを任せなさい、彼らにはそうする権利があるということだった。しかし、それが起こったとき、ジェムはアティカスが首を振ってこう言ったと言いました。

んー。"

そこでジェムは、近所のお叱り役であるステファニー・クロフォードさんから情報のほとんどを受け取り、彼女はすべてを知っていたという。嬢によると

ステファニー、ブーはリビングルームに座って、スクラップブックに貼り付けるためにメイコム・トリビューン紙からいくつかの項目を切り取っていました。彼の父親が部屋に入ってきた。氏としては、

ラドリーが通り過ぎると、ブーは親の足にハサミを打ち込んで引き抜き、ズボンで拭き、活動を再開した。

ラドリー夫人は、アーサーがみんなを殺そうとしていると叫びながら通りに走った。しかし保安官が到着すると、ブーはまだリビングルームに座ってトリビューン紙を切り裂いているのを発見した。当時彼は33歳でした。

ステファニーさんは、タスカルーサでのシーズンがブーにとって役に立つかもしれないと提案されたとき、老ラドリー氏はラドリーはどこにも亡命するつもりはないと言った、と語った。ブーは気が狂っていたわけではなく、時々神経質になっていた。彼を黙らせても大丈夫でした、ミスター。

ラドリーは認めたが、ブーは犯罪者ではないので何の罪にも問われないと主張した。保安官には彼を黒人と一緒に刑務所に入れる気はなかったので、ブーは裁判所の地下室に閉じ込められていた。

ブーが地下室から家に戻るまでの過程は、ジェムの記憶の中で曖昧だった。

ステファニー・クロフォードさんによると、町議会の一部がラドリーさんに対し、ブーを連れ戻さなければ湿気でカビが生えて死んでしまうだろうと告げたという。それに、ブーは、郡の恩恵で永遠に生きられるわけではない。

ラドリー氏がブーを視界から遠ざけるためにどのような脅迫を行ったのかは誰も知りませんでしたが、ジェムは、ラドリー氏がブー君をベッドに鎖で縛り付けていたのではないかと考えていました。

時間。アティカスは、「いいえ、そんなことはない、人を幽霊にする方法は他にもある」と言いました。

ラドリー夫人が時々玄関のドアを開けて歩いているのを見た記憶が甦りました。

ポーチの端に行き、カンナに水を注ぎます。でも毎日ジェムと私は

ラドリー氏が町へ行ったり来たりしているのが見えるだろう。彼は痩せていて革のような男で、無色の目は無色なので光を反射しませんでした。彼の頬骨は鋭く、口は広く、上唇は薄く、下唇はふっくらしていました。ステファニー・クロフォードさんは、自分はとても正直で、神の言葉を唯一の法則として受け入れていると言いました。ラドリーさんの姿勢はまっすぐだったので、私たちは彼女を信じました。

彼は私たちに決して話しかけませんでしたが、彼が通り過ぎるとき、私たちは地面を見て「おはようございます」と言うと、彼は咳き込んで答えました。ラドリー氏の長男はペンサコーラに住んでいました。彼はクリスマスに帰宅しましたが、私たちがその場所に入出入りするのを見た数少ない人の一人でした。ラドリーさんがアーサーを家に連れ帰った日から、人々は家が死んだと言いました。

しかし、ある日、アティカスが私たちに、もし私たちが庭で騒音を立てたら私たちを疲れさせるだろうと言い、もし私たちの声が聞こえたらカルブルニアに彼の不在中に奉仕するように依頼したと言いました。ラドリー氏は瀕死の状態だった。

彼はそれに時間をかけて取り組みました。木のノコギリが道の両端で道路をふさぎました。

ラドリーの敷地では、わらが歩道に置かれ、交通は裏通りに迂回されました。レイノルズ博士は私たちの家の前にを停めて、電話をかけるたびに歩いてラドリー家まで行きました。ジェムと私は何日も庭を歩き回りました。やっと

ノコギリ馬は取り上げられ、ラドリー氏が最後の旅で私たちの家の前を通り過ぎるのを、私たちは玄関から見守っていました。

「神が息を吹き込んだ中で最も卑劣な男が去った」とカルブルニアはつぶやいた。

そして彼女は瞑想的に庭に唾を吐きました。カルブルニアが白人のやり方についてコメントすることはめったになかったので、私たちは彼女を驚いて見ました。

近所の人たちは、ラドリーさんが下に行くときブーが出てくるだろうと思っていました。

しかし、別の考えが浮かんできた。ブーさんの兄がペンサコーラから戻ってきて、ラドリーさんの代わりになったのだ。彼と父親の唯一の違いは年齢だった。ジェム氏は、ネイサン・ラドリー氏も「綿を買った」と語った。しかし、私たちがおはようと言うとネイサンさんは話しかけてくれましたし、雑誌を手に町からやってくる姿も時々見かけました。

ディールにラドリー家のことを話せば話すほど、彼はもっと知りたくなり、街角の街灯柱を抱きしめて立っている時間が長くなり、疑問がさらに大きくなった。

「彼はそこで何をしているのだろう」と彼はつぶやいていました。「彼はただ固執するようだ彼の頭はドアから出てきました。」

ジェムは言いました。「彼は、真っ暗なときに出かけます。大丈夫です。」ステファニー・クロフォードさん
彼女はある時真夜中に目が覚めて、彼が窓から彼女をまっすぐに見ているのを見たと言った…彼の頭は彼女を見つ
めている頭蓋骨のようだったと言った。夜に目が覚めて彼の声聞いたことはありませんか、ディル？彼はこうや
って歩くんだ——」ジェムは砂利の上を足で滑らせた。「なぜレイチェル先生は夜、あんなに嚴重に鍵を閉めてい
るのだと思いますか？」私は毎朝裏庭で彼の足跡を何度も見ていました、そしてある夜彼がバックスクリー
ンを引っ掻いているのを聞いたのですが、アティカスがそこに着く頃には彼はいなくなっていました。」

「彼はどんな顔をしているだろうか？」ディルは言いました。

ジェムはブーについて妥当な説明をした。足跡から判断すると、ブーの身長は約6.5フィートだった。彼は生のリスや
捕まえられるあらゆる猫を食べていました。そのため、彼の手には血が付いていました。動物を生で食べた場合、
血を洗い流すことは決してできません。彼の顔にはギザギザの長い傷跡があった。彼の歯は黄色く腐っていま
した。彼の目は飛び出て、よだれをたくさん垂らしました

当時の。

「彼を出させてみましょう」とディルは言いました。「彼がどんな顔をしているか見てみたいです。」

ジェムは、ディルが自殺したいなら、立ち上がってノックすればいいだけだと言いました
正面玄関に。

私たちの最初の襲撃が実現したのは、ディルがジェム・ザ・グレイ・ゴーストと二人のトム・スウィフトに対して、ジェム
がラドリー・ゲートより先には進まない賭けたからにはほかなりません。彼の生涯を通じて、
ジェムは挑戦を断ったことはありませんでした。

ジェムは3日間考えました。彼は頭よりも名誉を愛していたのだと思う。なぜなら、ディルは簡単に彼を疲弊させたか
らだ。「君は怖いんだよ」と初日にディルは言った。「怖くないよ、ただ敬意を払うだけだよ」とジェムは言っ
た。次の日、ディルは「怖くて足の親指を前庭に出すことすらできないよ」と言いました。ジェムは、自分はそうではな
いと思っていた、人生の学校の日は必ずラドリー・プレイスの前を通っていたと語った。

「いつも走っているよ」と私は言った。

しかし3日目、ディルはジェムに、メリディアンの人々はメイコムの人々ほど怖がっていない、メイコムの人々ほど
恐ろしい人々を見たことがないと語ったとき、彼は納得した。

これだけでジェムは街角まで行進し、そこで立ち止まり電柱にもたれかかり、手作りの蝶番で狂ったようにぶら下
がっている門を眺めた。

「ディル・ハリス、彼が私たちを一人残らず殺すだろうということを頭の中に入れておいてほしいのですが」私たちが彼に加わったとき、ジェムは言いました。「彼があなたの目をくり抜いても、私を責めないでください。あなたが始めたのです、覚えておいてください。」

「まだ怖いんだね」ディルが辛抱強くつぶやいた。

ジェムはディルに、自分は何も恐れていないということをきっぱりと知ってほしかった。

それに、ジェムには妹のことを考えていました。

彼がそう言ったとき、私は彼が怖がっているのが分かりました。ジェムは妹に次のことを考えさせた

ある時、私は彼に家の屋上から飛び降りるように言いました。「もし私が殺されたら、あなたはどうなるの？」彼は尋ねた。それから彼は飛び降りて無傷で着地したが、ラドリー・プレイスに直面するまで責任感から離れていった。

「思い切って走り出すつもりですか？」ディルは尋ねた。「もしそうなら、それでは——」

「ディル、これらのことについて考えなければなりません」とジェムは言いました。「ちょっと考えてください…亀を出させるようなものです…」

"どのようだ？"ディルは尋ねた。

「彼の下でマッチを擦ってください。」

私はジェムに、もし彼がラドリーの家を放ったなら、アティカスに報告するつもりだと言いました。

ディルは、亀の下でマッチを擦るのは嫌なことだと言った。

「憎しみじゃない、ただ説得するだけだ——彼を火の中に入れるようなことじゃないよ」ジェムはうなり声を上げた。

「試合が彼にダメージを与えないとどうして分かるの？」

「カメには感覚がないんだよ、バカ」とジェムは言った。

「あなたはカメだったことがありますか？」

「私のスター、ディル！さあ、考えてみましょう…彼を揺さぶることができると思います…」

ジェムは長い間考え込んでいたので、ディルは穏やかに譲歩した。

家。"

ジェムは明るくなった。「家に触って、それだけ？」

ディルはうなずいた。

「それで終わりですか？私が言った瞬間に何か違うことを叫びたくないの

戻ってください。」

「はい、それだけです」とディルは言いました。「庭であなたを見つけると、おそらく彼は追いかけてくるでしょう。そうしたら、スカウトして私が彼に飛びついて、彼を傷つけるつもりはないと言えるまで押さえつけます。」

私たちは角を出て、ラドリー邸の前を走る脇道を渡り、門の前で立ち止まった。

「さあ、どうぞ」ディルが言った。「スカウトと私があなたのすぐ後ろにいるよ。」

「行くよ」とジェムは言った、「急がないでね。」

彼は敷地の隅まで歩き、そしてまた戻ってきて、あたかもどうやって進入するのが最善かを定めるかのように、単純な地形を観察しながら、顔をしかめ、頭を掻いた。

それから私は彼を嘲笑しました。

ジェムは門を勢いよく開け、家の横に猛スピードで進み、門を手のひらで叩き、私たちの前を通り過ぎて逃げて戻りました。彼の侵入が成功したかどうかを確認するのを待たずに。ディルと私は彼の後を追った。無事にベランダにいて、息を切らして息を切らせながら私たちは見ました。

戻る。

古い家も同じで、よれよれで病んでいましたが、通りを見つめていると、内側のシャッターが動くのが見えたような気がしました。フリックしてください。ほとんど目に見えない小さな動き、そして家は静止していた。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第2章

ディルはメリディアンに戻るため、9月初めに私たちを去りました。私たちは5時に彼を見送ったバスの時間だったので、思いつくまでは彼がいなかったら惨めでした。

一週間後には学校が始まります。人生でこれほど楽しみにしていた事はありません。冬の間、何時間も私はツリーハウスで校庭を眺め、ジェムがくれた二倍望遠鏡で大勢の子供たちを覗き見し、彼らの遊びを学び、身をよじりながらジェムの赤いジャケットを追っていた。

盲目の男の仲間たちが集まり、不幸や小さな勝利を密かに分かち合っている。

私は彼らに加わることを切望していました。

ジェムは、初日に私を学校に連れて行くのは通常親の仕事であると思着せがましいことを言ったが、アティカスはジェムが喜んで私の部屋の場所を教えてくれると言っていた。この取引でいくらのお金がやり取りされたと思います。なぜなら、ラドリー・プレイスを通り過ぎて角を曲がって小走りしていたとき、ジェムの家の中で聞き慣れないジングルが聞こえたからです。

ポケット。私たちが速度を落として校庭の端を散歩したとき、ジェムは、授業中は私が彼の邪魔をしてはいけないこと、ターザンとアントマンの章を制定してほしいという要求を彼に近づかないように注意して説明しました。彼の私生活について言及したり、休み時間や正午に彼の後ろに付いて行ったりします。私は1年生にこだわり、彼は5年生にこだわりました。要するに、私は彼を放っておくことになったのです。

「もう遊べないってこと？」私は尋ねた。

「私たちはいつも家でやっているようにします」と彼は言いました。
違う。"

確かにそうでした。最初の朝が終わる前に、私たちの教師であるキャロライン・フィッシャー先生は私を部屋の前まで連れて行き、定規で私の手のひらを軽くたたき、それから正午まで私を部屋の隅に立たせました。

ミス・キャロラインはまだ21歳に過ぎなかった。彼女は明るい赤褐色の髪、ピンク色の頬を持ち、深紅のマニキュアを塗っていました。彼女はハイヒールのパンプスと赤と白の縞模様のドレスも着ていました。彼女はペパーミントのしずくのような見た目と香りを持っていました。

彼女は通りを挟んで、私たちの隣のミス・モーディ・アトキンソンの家へ乗り込んだ。

2階のフロントルームで、ミス・モーディが私たちを紹介してくれたとき、ジェムは何日もぼんやりしていました。

ミス・キャロラインは黒板に自分の名前を印刷してこう言いました。「これには私がミス・キャロライン・フィッシャーと書いてあります。私は北アラバマ州のウィンストン郡出身です。」クラスの皆は、彼女がその地域の先住民族の特徴を自分にも持っていることが判明したらどうしようと不安そうにつぶやいた。

(アラバマ州が連邦から脱退したとき

1861年1月11日、ウィンストン郡はアラバマ州から分離し、メイコム郡の子供たちは皆それを知っていた。)北アラバマ州は酒屋、ビッグ・ラバ、鉄鋼会社、共和党員、教授、その他何の経歴もない人々でいっぱいだった。

キャロライン先生は、私たちに猫についての物語を読んであげることからその日を始めました。猫たちは長かったお互いに会話しながら、彼らはずい小さな服を着て、台所のストーブの下の暖かい家に住んでいました。キャット夫人がチョコレートモルテッドマウスの注文のためにドラッグストアに電話したときまでに、クラスの人々はバケツ一杯のカトバ虫のよううごめいていました。キャロライン先生は、ぼろぼろでデニムのシャツを着て、袋サックのスカートを履いた一年生のほとんどが、歩けるようになった頃から綿を切り刻んだり豚に餌を与えたりしていた彼らが、想像力豊かな文学の影響を受けていないことに気づいていないようだった。

ミス・キャロラインが話の終わりに来て、「ああ、それはよかったね?」と言いました。

それから彼女は黒板に行き、巨大な四角い大文字でアルファベットを印刷し、クラスに向かって「これが何なのか知っている人はいますか?」と尋ねました。

誰もがそうしました。1年生のほとんどは昨年不合格でした。

おそらく彼女は私の名前を知っていたので私を選んだのだと思います。私がアルファベットを読んでいると、彼女の眉間にうっすらとした線が現れ、私に初めての本のほとんどを読ませた後、

読者とモバイルレジスターからの株式市場の引用を声に出して言うと、彼女は私が読み書きできることに気づき、かすかな嫌悪感以上の目で私を見ました。逃す

キャロラインは、読書の邪魔になるから、これ以上教えないように父に言ってほしいと言いました。

"教えて?"私は驚いて言いました。「彼は私に何も教えてくれませんでした、ミス・キャロライン。

アティカスには何も教える時間がないのよ」と私が付け加えると、ミス・キャロラインは微笑んで首を横に振った。「だって、彼は夜とても疲れていて、ただリビングルームに座って、読みます。」

「彼が教えなかったとしたら、誰が教えたのですか?」ミス・キャロラインは気さくに尋ねた。

「誰かがやったんだ。あなたは『モバイル・レジスター』を読んで生まれてきたわけではありません。」

「ジェムは私がそうだったと言っています。彼は本の中で、私がフィンチではなくウソであると読んでいました。

ジェムは、私の名前は本当はジーン・ルイズ・ブルフィンチで、生まれた時に入れ替わってしまって、本当は――』と言うのです。

キャロラインさんはどうやら私が嘘をついていると思ったようです。「想像力を暴走させないようにしましょう、あなた」と彼女は言いました。「今、あなたは父親に何も教えないように言いました」

もっと。新鮮な気持ちで読み始めるのが最善です。あなたは彼に私が引き継ぐと言いました

ここでダメージを元に戻してみてください――」

「奥様?」

「あなたのお父さんは教える方法を知りません。もうお座りいただけますよ。」

私はごめんなさいとつぶやき、自分の罪を思い返しながら引退しました。私は意図的に読み書きを学んだわけでは
ありませんが、どういわけか日刊紙を不法に読みあさっていました。教会の長い時間の中で、私はそのとき学んだのだろ
うか？賛美歌が読めなかったという記憶はありません。今考えてみると、読書は、椅子を締めることを学ぶことのように
私に思い浮かんだものでした。

周りを見回したり、靴ひもが絡まって二回頭を下げたりすることもなく、ユニオンスーツを着ました。アティカスの動く指
の上にある線がいつ言葉に分かれたのか思い出せなかったが、その日のニュース、法案、ロレンゾ・ダウの日記など何でも
聞きながら、記憶の中で一晩中それを見つめていた。私が毎晩彼の膝に潜り込んだとき、たまたまアティカスは本を讀ん
でいた。失うのではないかと心配になるまで、私は決して本を読むのが好きではありませんでした。人は呼吸が好きで
はありません。

キャロライン先生を困らせてしまったのは分かっていたので、休み時間まで一人でじっと窓の外を眺めていたとき、校庭でジェ
ムが私を一年生の群れから引き離した。彼は私がどうやって過ごしているか尋ねました。私は彼に言った。

「もしここに留まる必要がなかったら、私はここを去るだろう。ジェム、あのクソ女は、アティカスが私に読書を教えて、それを止
めるように言っていると言っているのですが――」

「心配しないでください、スカウト」ジェムは私を慰めてくれた。「私たちの先生は、キャロライン先生が新しい教え
方を導入していると言っています。彼女は大学でそれについて学びました。もうすぐ全学年に届きます。そうすれば、本から多
くを学ぶ必要はありません。牛について学びたければ、乳搾りに行くようなものですよ？」

「ええ、ジェム、でも牛の研究はしたくないんです、私は――」

「確かにそうだね。牛のことはまあまあ知っておいてください、牛はメイコム郡の生活の大きな部分を占めています。」

私はジェムに正気を失ったかどうか尋ねることに満足しました。

「私はただ、彼らが一年生を教える新しい方法を伝えようとしているだけです、頑固です。
それがデューイ十進法です。」

ジェムの発言に疑問を抱いたことはなかったので、今から始める理由はありませんでした。

デューイ十進法は、部分的に、ミス・キャロラインがカードを振ることで構成されていました。

私たちには、「the」、「cat」、「rat」、「man」、そして「you」が印刷されていました。ノーコメント

どうやら私たちに期待されていたようで、クラスはこれらの印象派の啓示を静かに受け取りました。私は退屈だったので、ディルに手紙を書き始めました。キャロライン先生は私が書いているところを見つけて、父に教えるのをやめるよう言ってくれと言いました。"その上、" 彼女は言いました。「1年生では字を書くのではなく、印刷をします。書くことは学べないでしょう3年生になるまでは。」

この原因はカルプルニアにありました。おかげで雨の日に彼女を気が狂わせることはなくなりました、推測。彼女は私に、タブレットの上にアルファベットをしっかりと走り書きし、その下にある聖書の一章を書き写すという作文課題を出してくれました。私が彼女の習字を満足のいく形で再現したら、彼女はパンとバターと砂糖のオープンサンドイッチをくれました。カルプルニアの教えには感傷はありませんでした。私が彼女を喜ばせることはめったになく、彼女が私に褒美を与えることもめったにありませんでした。

「昼食のために家に帰る人は皆、手を挙げてください」とキャロライン先生は言い、カルプルニアに対する私の新たな恨みを打ち砕きました。

町の子供たちがそうし、彼女は私たちを見つめました。

「お弁当を持ってきた人はみんな机の上に置きます。」

どこからともなく糖蜜バケツが現れ、天井がメタリックな光で踊りました。キャロラインさんは列を行ったり来たりして、弁当の容器を覗き込んだりつついたりし、中身が気に入らばうなずき、他の人には少し顔をしかめた。彼女

ウォルター・カニンガムのデスクに立ち寄った。「あなたのはどこですか？」彼女は尋ねた。

ウォルター・カニンガムの顔は、自分が鉤虫症に罹患していることを一年生のみんなに告げた。彼には靴がなかったので、どうやって靴を手に入れたかがわかりました。鉤虫を捕まえた人々ヒエや豚のごめきの中では裸足で歩きます。もしウォルターが靴を持っていたら、学校の初日に履いて、真冬まで捨てていただろう。彼は清潔なシャツを着て、きちんと繕ったオーバーオールを着ていました。

「今朝のお弁当忘れた？」キャロラインさんは尋ねた。

ウォルターはまっすぐ前を見つめた。彼の細い顎に筋肉が跳ね上がるのが見えた。

「今朝忘れたんですか？」キャロラインさんは尋ねた。ウォルターの顎が再びピクピクした。

「そうだね」と彼はついにつぶやいた。

キャロラインさんは自分の机に行き、財布を開けました。「これが4分の1です」と彼女はウォルターに言った。「今日はダウンタウンに行って食べてください。明日返金してもらえますよ。」

ウォルターは首を振った。「いえ、ありがとうございます、奥様」彼は静かに声を上げた。

キャロラインさんの声に焦りが忍び寄った。「ウォルター、取りに来て。」

ウォルターは再び首を横に振った。

ウォルターが三度目に首を振ったとき、誰かが「さあ、彼女に伝えてください、スカウト」とささやきました。

振り返ると、町の人々のほとんどとバスの代表団全員が私を見ているのが見えました。ミス・キャロラインと私はすでに二度会談しており、彼らは親しみが理解を生むという無邪気な確信をもって私を見つけていました。

私はウォルターに代わって礼儀正しく立ち上がった。「ああ、キャロラインさん？」

「何ですか、ジャン・ルイズ？」

「キャロラインさん、彼はカニンガムです。」

私はまた座りました。

「何、ジャン・ルイズ？」

私は物事を十分に明確にしたと思っていました。それは残りの部分にとっては十分明らかでした

私たち：ウォルター・カニンガムはそこに座って頭を落としていました。彼は昼食を忘れたわけではありません、何も持っていませんでした。彼には今日も何もありませんでしたし、明日や明後日も何もありません。おそらく彼は、同時に4分の3が一緒にいるところを見たことがなかったでしょう。

彼の人生において。

私はもう一度言いました、「ウォルターはカニンガム家の一人です、キャロラインさん。」

「失礼いたします、ジャン・ルイズ？」

「大丈夫ですよ、奥様、しばらくすれば郡の皆さんと仲良くなれるでしょう。カニンガム夫妻は、教会のバスケットや切手など、返せないものは決して受け取りませんでした。彼らは誰からも何も奪ったことはなく、何事でも仲良くやっています

彼らは持っている。彼らは多くのものを持っていませんが、それで仲良くやっています。」

カニンガム族、つまりその支部についての特別な知識が得られました。

昨年冬の出来事から。ウォルターの父親はアティカスの顧客の一人でした。後

ある夜、私たちのリビングルームで、ミスター・ジョンの前で、彼の関与についての陰惨な会話が合った。

カニンガムはこう言い残して去った。フィンチ、いつ支払えるか分からない

あなた。"

「それは心配しないでください、ウォルター」アティカスは言った。

私がジェムに含意とは何かと尋ねたところ、ジェムはそれを次の条件として説明しました。

尻尾をひび割れさせながら、私はアティカスに、カニンガム氏が私たちにお金を払ってくれるかどうか尋ねた。

「お金はないよ」とアティカスは言った。「でも、今年の退団までには給料は支払われるだろう。あなた時計。」

私たちは見て。ある朝、ジェムと私は裏庭でストーブ用の薪をたくさん見つけました。

その後、ヒッコリーナッツの入った袋が裏手の階段に現れました。クリスマスにはスミラックスとヒイラギの木箱が届きました。その春、カブの葉がいっぱい入ったクロッカーサックを見つけたとき、アティカスさんは、カニンガム氏は報酬以上のものをもらったと語った。

「なぜ彼はあなたにそんな給料を払うのですか？」私は尋ねた。

「それが彼が私に支払う唯一の方法だからです。彼にはお金がありません。」

「私たちは貧しいのですか、アティカス？」

アティカスはうなずいた。「本当にそうですよ。」

ジェムの鼻にしわが寄った。「私たちはカニンガム家と同じくらい貧しいのですか？」

"ではない正確に。カニンガム一家は田舎者で農民であり、事故は彼らを襲った一番難しい。」

アティカス氏は、農民が貧しいため、専門家が貧しいと述べた。メイコム郡は農業地帯であったため、医師、歯科医、弁護士にとってニッケルやダイヤモンドを手に入れるのは困難でした。含意は氏の一部にすぎませんでした。

カニンガムの煩惱。必要のなかったエーカーは根元まで抵当に入れられ、彼が稼いだわずかな現金は利息に充てられた。もし彼が正しく口を押さえていれば、Mr.

カニンガムはWPAの仕事に就くことができたが、そこから離れれば彼の土地は荒廃するだろうし、自分の土地を維持し、好きなように投票するためなら飢えても厭わなかった。氏

アティカスによれば、カニンガムはある種の男性の出身だという。

カニンガム夫妻には弁護士に支払うお金がなかったので、持っているお金で私たちに支払っただけでした。「知っていましたか」とアティカスは言った、「レイノルズ博士も同じように働いているのです」

方法？彼は、赤ん坊の出産のために一部の人々にジャガイモ1ブッシェルを請求している。ミス・スカウト、注意を払っていただければ、含意とは何かをお教えます。ジェムの定義は、場合によってはほぼ正確です。」

これらのことをミス・キャロラインに説明できれば、私自身がいくらか不便を被ることも、ミス・キャロラインがその後屈辱的になることも避けられただろうが、アティカスほど説明するのは私の能力を超えていたので、私はこう言った。

彼を辱めているよ、ミス・キャロライン。ウォルターの家にはあなたに持ってくる4分の1もありませんし、ストーブの薪も使えません。」

ミス・キャロラインはじっと立っていて、それから私の胸ぐらを掴んで自分の机に引き戻しました。「ジャン・ルイズ、今朝はもう十分です」と彼女は言った。

「あなたはあらゆる面で間違っただけのスタートを切っています、愛しい人。頑張ってください手。」

私は彼女がそれに唾を吐きかけるのではないかと思った。それがメイコムの誰もが手を差し伸べた唯一の理由だった。それは口頭契約を締結するための由緒ある方法だったのだ。私たちはどんな取引をしたのだろうかと思いながら、クラスの生徒に話を聞きに行きました。

と答えましたが、クラスの皆は困惑した表情で私を振り返りました。ミス・キャロラインは定規を手に取り、私を数回軽くたたいてから、隅に立つように言いました。キャロライン先生が私を鞭で打ったことがついにクラスの人々に伝わったとき、笑いの嵐が巻き起こりました。

ミス・キャロラインが同様の運命でそれを脅したとき、1年生は再び爆発し、ミス・ブラントの影が彼らの上に落ちたときにのみ冷たく冷静になりました。

ネイティブのメイコンビ人で、十進法の謎についてはまだよくわかっていないミス・ブラウントが、両手を腰に当ててドアのところに現れ、こう言いました。ミス・キャロライン、6年生はこれだけ騒ぎすぎてピラミッドに集中できません！」

隅っこでの滞在は短かった。ベルのおかげで助かったキャロライン先生は、クラス全員が昼食に出かけるのを見守りました。私が最後に出たので、彼女が沈むのを見た椅子に腰を下ろし、腕の中に頭を埋めます。もし彼女の態度が私に対してもっと友好的だったら、私は彼女に同情しただろう。彼女はかなり小さな存在でした。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第3章

校庭でウォルター・カニンガムを捕まえたときは少しうれしかったが、私が彼の鼻を泥でこすっていたら、ジェムがやって来て、やめるように言った。「あなたは

彼はもっと大きいよ」と彼は言った。

「彼はあなたとほぼ同じくらいの年齢です」と私は言いました。「彼は私に間違っただけを切らせた。」

「彼を行かせてください、スカウト。なぜ？」

「彼は昼食を食べていませんでした」と私は言い、ウォルターの食事問題に私が関与していることを説明しました。

ウォルターは立ち上がり、静かに立ってジェムと私の話を聞いていました。

まるで私たち二人からの猛攻撃を予期しているかのように、彼の拳は半分振り上げられていました。私は彼を踏みつけて追い払おうとしましたが、ジェムが手を出して私を止めました。彼は思索的な雰囲気の中でウォルターを調べた。「あなたのお父さんはオールド・セラム出身のウォルター・カニンガムさんですか？」彼が尋ねると、ウォルターはうなずいた。

ウォルターはまるで魚の餌で育ったように見えた。彼の目はディル・ハリスと同じくらい青く、縁が赤く、水っぽくなっていました。顔には色が無く、鼻の頭だけがしっかりとピンク色になっていた。彼はオーバーオールストラップをいじり、

金属製のフックを神経質につついていました。

ジェムは突然彼に笑いました。「家に帰って一緒に夕食を食べましょう、ウォルター」と彼は言った。

「よろしくお願ひします。」

ウォルターの顔は明るくなり、そして暗くなった。

ジェムは「私たちのパパはあなたのパパの友達だよ。このスカウト、彼女は気が狂っている——彼女はもうあなたとは戦わないだろう。」

「それについてはあまり確信が持てません」と私は言いました。ジェムが私の誓約を無償で執行したことに私はイライラしたが、貴重な正午の時間が刻々と過ぎていた。「ああ、ウォルター、もう君に飛びつくつもりはないよ。バタービーンズは好きじゃないの？ 私たちのカルは本当に良いです料理する。」

ウォルターは唇を噛みながらその場に立っていた。ジェムと私は諦め、もうすぐラドリー・プレイスに着くというところで、ウォルターが「おい、行くよ！」と電話した。

ウォルターが私たちに追いつくと、ジェムは彼と楽しい会話をしました。「そこには誰も住んでいないよ」と彼はラドリーの家を指さしながら心から言った。「彼のことを聞いたことがありますか、ウォルター？」

「そうだね」とウォルターが言った。「私が学校に来てピーカンナッツを食べた最初の年に死にそうになった。人々は彼がピーカンナッツをピーカンナッツにして学校の側に置いたと言う。

フェンス。」

ウォルターと私が彼の隣を歩いていたので、ジェムはブー・ラドリーをほとんど恐れていないようでした。実際、ジェムは自慢げになりました。「一度、家まで行ったんです」と彼は言いました。
ウォルターに。

「一度その家に入った人は、今でもその家を通るたびに走ってはいけません」と私は上空の雲に言いました。

「それで誰が走っているの、ミス・プリス？」

「誰も一緒にいないときでも、あなたはいるのです。」

私たちが正面の階段に着くまでに、ウォルターは自分がカニンガムであることを忘れていました。ジェムはキッチンに走って行き、カルプルニアに追加の皿を用意するように頼んだ。アティカスはウォルターに挨拶し、作物について話し始めた。

ジェムも私も従うことができませんでした。

「私が一年生に合格できない理由は、フィンチさん、私はずっと春の間外に出てパパの家事を手伝わなければならなかったのですが、今は家に別の生徒がいます。

フィールドサイズ。」

「彼にジャガイモ1ブッシェルを支払いましたか？」私は尋ねたが、アティカスはこう首を振った。

自分。

ウォルターが皿に食べ物を積み上げている間、彼とアティカスは二人の男のように話し合っていたので、ジェムと私は驚いた。アティカスが農場の問題について詳しく説明していると、ウォルターが家の中に糖蜜があるかどうか尋ねて割り込んだ。アティカス

カルプルニアを呼び出すと、カルプルニアはシロップピッチャーを持って戻ってきた。彼女はウォルターが自分を助けてくれるのを待って立っていた。ウォルターは野菜や肉に惜しみなく手でシロップをかけた。サム・ヒルが何をしているのか私が尋ねなかったら、おそらく彼はミルク・グラスにそれを注いだだろう。

投手を交代する際に銀の皿がカタカタと音を立て、彼はすぐに膝に手を置いた。それから彼は頭を下げました。

アティカスはまた私に向かって首を横に振った。「でも彼は行ってしまい、夕食をシロップに浸してしまいました」と私は抗議した。「彼はそれを全部注ぎ込んでしまった——」

カルプルニアが私に厨房に立ち会うよう要求したのはその時でした。

彼女は激怒しました、そして彼女が激怒したとき、カルプルニアの文法は不安定になりました。

静かなときの彼女の文法は、メイコムの子供よりも上手でした。アティカス氏は、カルプルニア州はほとんどの有色人種よりも教育を受けていると語った。

彼女が私に目を細めると、目の周りの小さなシワが深くなりました。「私たちと同じように食べない人もいます」と彼女は激しくささやきました。「でも、彼らが食べないときにテーブルで反論する必要はありません。あの少年はあなたの会社だ、そしてもし彼が

あなたが彼に与えたテーブルクロスを食べたいのです、そうですか？

「彼は仲間じゃない、カル、彼はただのカニンガムだ——」

「口を黙らせろ！彼らが誰であろうと、誰でもこの家の会社に足を踏み入れると、あなたがとても高く強かったかのようにならぬ道について話しているのを私に捕まえさせないでください！君たちはカニンガム家よりは優れているかもしれないが、彼らに恥をかかせても何の意味もない——食べるのにふさわしい行動をとれないのなら

テーブルならここに置いて、キッチンで食べるだけ！」

カルブルニアは、ヒリヒリする音をたてながら、開き戸を通して私をダイニングルームへ送り込んだ。私は皿を取り出してキッチンで夕食を終えました、しかし、感謝しました、

再び彼らと対峙する屈辱を免れたことを。私はカルブルニアに、待っててください、私が彼女を直します、と言いました。そのうち彼女が見ていないとき、私は立ち去り、バーカーの渦で溺れてしまい、そうしたら彼女は後悔するでしょう。それに加えて、彼女は今日すでに一度私をトラブルに巻き込んでいた、と付け加えた。彼女は私に書き方を教えたのだが、それはすべて彼女のせいだった。「うるさいのは黙ってて」と彼女は言った。

ジェムとウォルターは私より先に学校に戻った。カルブルニアの不法行為をアティカスに忠告するために残ったのは、ラドリー・プレイスを通り過ぎて一人で疾走する価値があった。「とにかく、彼女は私のことよりもジェムのほうが好きなのよ」と私は結論付け、アティカスにすぐに彼女を荷造りするよう提案した。

「ジェムが彼女のことを半分も心配していないと考えたことはありますか？」アティカスの声はきらきらしていた。

「私は今もこれからも彼女を追い出すつもりはありません。カルなしでは一日も成り立ちません。そんなことを考えたことはありますか？カルがどれだけ自分のためにしてくれているか考えて、彼女のことを気にかけてるのね？」

私は学校に戻り、突然の金切り声で私の恨みが打ち砕かれるまで、カルブルニアを着実に憎んでいました。私が見上げると、ミス・キャロラインが部屋の真ん中に立っていて、まったくの恐怖が顔にあふれていたのが見えました。どうやら彼女は十分に復活したようだ

彼女の職業に粘り強く取り組みます。

"生きてる！"彼女は叫んだ。

クラスの男子生徒たちは一斉に彼女を助けに駆けつけた。主よ、私はこう思いました。

彼女はネズミが怖いのです。すべての生き物に対する忍耐力が驚異的だった小さなチャック・リトルはこう言いました。「キャロラインさん、彼はどっちに行ったの？彼がどこに行ったのか教えてください、早く！ DC-」

彼は後ろの少年に向き直った - 「DC、ドアを開けて、

私たちは彼を捕まえます。急いでください、奥様、彼はどこへ行ったのですか？」

ミス・キャロラインは震える指を床や机ではなく、私の知らない大柄な人物に向けた。小さなチャックは顔を引きつらせて言いました。

優しく「それは彼のことですか、奥様？」イエスマ、彼は生きています。彼はあなたを少し怖がらせましたか方法？"

キャロラインさんは必死にこう言いました。

髪の毛が……髪の毛から這い出てきたところだ——」

小さなチャックは満面の笑みを浮かべた。「オオバンを恐れる必要はありません、奥様。見たことないんですか？さあ、怖がらないで、机に戻って、もっと教えてください。」

リトル・チャック・リトルもまた、次の食事がどこから来るのか分からない住民の一員でしたが、彼は生来の紳士でした。彼は手を置いた

ひじの下を抱き、キャロライン先生を部屋の前に導きました。「もう心配しないでください、奥様」と彼は言いました。「オオバンを恐れる必要はありません。連れて行ってあげるよ冷たい水を飲んでください。」オウムの飼い主はこの騒動に少しも興味を示さなかった

彼は努力したのだ。彼は額の上の頭皮を調べ、客を見つけて親指と人差し指でそれをつまみました。

ミス・キャロラインはその過程を恐ろしいほど興味を持って見ていました。小さなチャックは紙コップに水を持ってきて、ありがたく飲みました。ついに彼女は自分の声を見つけた。

「あなたの名前は何ですか、息子さん？」彼女は静かに尋ねた。

少年は瞬きした。「誰、私？」キャロラインさんはうなずいた。

「バリス・イーウェル」

キャロラインさんは自分の名簿を調べました。「ここにはイーウェルはいるけど、名前…あなたの下の名前を綴っていただけますか？」

「方法がわかりません。彼らは私を「プリスは家にいない」と呼んでいます。

「そうですね、バリス」とキャロラインさんは言いました。家に帰って髪を洗ってほしい。」

彼女は机から分厚い本を作り、ページをめくって読みました。

瞬間。「これは良い家庭療法ですよ、バリス、家に帰って灰汁石鹸で髪を洗ってください。それが終わったら、頭皮を灯油でケアしてください。」

「どうしたの、お嬢様？」

「あの、あの、クーティーズを取り除くためです。ほら、バリス、他の子供たちが捕まえるかもしれないし、それは望まないでしょう？」

少年は立ち上がった。彼は私が今まで見た中で最も不潔な人間でした。彼の首は濃い灰色で、手の甲は錆びており、爪は爪の奥まで黒くなっていました。彼は顔のこぶし大のきれいなスペースからミス・キャロラインを見つめた。

おそらく、キャロライン先生と私が午前中ほとんどクラスを楽しませていたため、誰も彼に気づきませんでした。

「そしてバリスさん、」とキャロラインさんは言いました。「帰ってくる前にお風呂に入ってくださいね」
明日。"

少年は意地悪く笑った。「あなたは私を家まで送ってくれるわけではありません、お嬢さん。出発寸前だったので、今年はもうやり遂げました。」

キャロラインさんは当惑した顔をした。「それはどういう意味ですか？」

少年は答えなかった。彼は短く軽蔑的な鼻を鳴らした。

クラスの年配のメンバーの一人が彼女に答えました。「彼はイーウェル家の一人です、奥様」。私は、この説明は私の試みと同じくらい失敗するだろうかと思いました。しかし、キャロラインさんは喜んで耳を傾けてくれるようでした。「学校中が奴らでいっぱいだ。

彼らは毎年初日に来て、その後去ります。不登校の女性は、保安官を使って彼らを脅迫したため、彼らをここに連れて行きましたが、彼女は彼らを拘束するのをあきらめました。彼女は、名簿に名前を載せて初日に彼らをここに追い込んだだけで、法律を実行したと考えています。今年の残りの期間は彼らを欠席としてマークすることになっています...」

「しかし、彼らの両親はどうでしょうか？」キャロライン先生は本当に心配そうに尋ねました。

「母親なんていないよ」と答えた、「そして彼らの右足は物議を醸している」。

バリス・イーウェルはリサイタルをとてもうれしく思いました。「3年ぶりに1年生の初日に来ました」と彼は興奮気味に言った。「もし今年私が賢ければ、彼らは私を2番目に昇進させるだろう...」

ミス・キャロラインは「ちょっと座ってください、バリス」と言った。彼女がそう言った瞬間、私は彼女が重大な間違いを犯したと悟った。少年の見下した態度に怒りが燃え上がった。

「あなたは私を作ろうとしているのよ、お嬢さん。」

リトル・チャック・リトルは立ち上がった。「彼を行かせてください、奥様」と彼は言いました。「彼は意地悪な人で、徹底的に意地悪な人だ。彼は何かを始める傾向がある、そしていくつかの小さなことがある
ここの皆さん。」

彼は男性の中で最も小柄な人物の一人でしたが、バリス・イーウェルが彼の方を向いたとき、リトル・チャックの右手は彼のポケットに行きました。「足元に気をつけてください、バリス」と彼は言った。「君を見ているとすぐに殺してしまおう。さあ、家に帰りなさい。」

バリスは自分の身長の子供を怖がっているようで、キャロラインさんは彼の優柔不断さを利用してこう言いました。「そうしないと校長に電話します」と彼女は言った。「とにかく、これを報告しなければなりません。」

少年は鼻を鳴らして、ゆっくりとドアの方へ前かがみになった。

安全に射程外に出て、彼は振り返って叫びました。そうじゃない
学校教師のような鼻の悪い女は生まれてこない、私に何もさせないでください！あなた
私をどこにも行かせないのよ、お嬢さん。覚えていてください、あなたは私をどこにも行かせないわけではありませ
ん！

彼は彼女が泣いていると確信するまで待ってから、足を引きずりながら建物から出た。

すぐに私たちは彼女の机の周りに集まり、さまざまな方法で慰めようとして
彼女。彼は本当に意地悪な人でした…下では…あなたはそのような人たちに教える義務はありません…それらはメイ
コムのやり方ではありません、キャロラインさん、そうではありません…もう心配しないでください、奥様。キャロライ
ンさん、物語を読んでみてはいかがですか？あの猫のこと
今朝は本当に元気でした…

キャロライン先生は笑って、鼻をかんで、「ありがとう、ダーリン」と言い、私たちを解散させ、本を開いて、ヒキガエル
についての長い物語で一年生を困惑させました。
それはホールに住んでいた。

その日、私がラドリー・プレイスを4度目に通ったとき、全速力で2回だった。
—家の雰囲気に合わせて私の憂鬱も深まった。学期の残りの期間が初日と同じようにドラマに満ちたものであれば、お
そらくそれは穏やかな娯楽になるでしょうが、9か月間読み書きを控えて過ごすことになるとの見通しを
考えると、逃げ出すことを考えました。

午後遅くまでに私の旅行計画のほとんどは完了しました。ジェムと私が仕事から帰宅するアティカスに会うため
に歩道を競走したとき、私は彼にあまり競い合いませんでした。その瞬間にアティカスに会いに走るのが私たち
の習慣だった

私たちは遠くの郵便局の角で彼を見かけました。アティカスは私が正午に墮落したことを忘れていたようだった。彼は学校についての質問でいっぱいだった。私の返事は単音節でしたが、彼は私に迫りませんでした。

おそらくカルブルニアは、私の一日が悲惨なものだったことを察知し、夕食の支度を私に見させてくれました。「目を閉じて口を開けて、サプライズしてあげるよ」と彼女は言った。

言った。

パチパチとはじけるパンを作ることはあまりなく、時間がなかったと彼女は言いましたが、私たち二人が学校にいたので、今日は彼女にとって簡単だったそうです。彼女は私がパチパチとはじけるパンが大好きだということを知っていました。

「今日は会えなくて寂しかったよ」と彼女は言った。「家は2時くらいからとても寂しくなった」ラジオをつけなければならなかったのです。」

"なぜ？うーん、雨が降っていない限り、私は家にいないよ。」

「わかってるよ」と彼女は言った。一日のうちどれだけあなたのことを電話するだけで過ごしているんだろう。そうですね、」と彼女はキッチンの椅子から立ち上がって言いました、「パチパチパンを焼くには十分な時間だと思います。あなたは今すぐ一緒に走って、テーブルで夕食を食べさせてください。」

カルブルニアはかがんで私にキスをした。私は彼女に何が起きたのか疑問に思いながら走って行きました。彼女は私と仲直りしたかった、それだけだった。彼女はいつも私に厳しすぎて、ついに自分の気難しいやり方の誤りに気づきました、残念でしたし、あまりにも頑固すぎてそう言うことができませんでした。私はその日の犯罪に疲れていました。

夕食後、アティカスは新聞を持って座り、「スカウト、読む準備はできた？」と呼びかけた。

主は私に耐えられないほどのことを送ってくださったので、私は玄関に行きました。アティカス私を追ってきた。

「何かあったんですか、スカウト？」

私はアティカスに、気分があまり良くないので、もし彼が大丈夫ならもう学校には行かないと思うと言いました。

アティカスはブランコに座り、足を組んだ。彼の指は時計のポケットへとさまよいました。それが彼が考える唯一の方法だと彼は言いました。彼は愛想よく沈黙して待っていましたが、私は自分の立場を強めようと思いました。「あなたは学校に行ったこともないし、大丈夫だよ、だから私も家にいるだけ。」おじいちゃんがジャックおじさんに教えてくれたように、私にも教えてあげることができるよ。」

「いいえ、できません」とアティカスは言った。「私は生計を立てなければなりません。それに、もし私があなたを家に置いたら、彼らは私を刑務所に入れるでしょう——今夜はマグネシアを投与し、明日は学校に行きます。」

「気分は大丈夫です、本当に。」

"そう思った。さて、どうしたの？"

私はその日の不幸を少しずつ彼に話した。「そして彼女はあなたが私にすべてを教えてくれたと言いました間違っているのです、これ以上読むことはできません。私を送り返さないでください、お願いします

お客様。"

アティカスは立ち上がり、ポーチの端まで歩いた。彼が自分の仕事を終えたとき、藤の蔓を調べながら、彼は散歩しながら私のところに戻ってきました。

「まず第一に、スカウト、簡単なコツを学ぶことができれば、きっと仲良くなれるよ」と彼は言った。

あらゆる種類の人々より良くなります。その人の視点から物事を考えるまでは、その人を本当に理解することはできません。」

"お客様？"

「——あなたが彼の肌に入り込み、その中を歩き回るまでは。」

アティカスは、私は今日多くのことを学び、ミス・キャロライン自身もいくつかのことを学んだ、と言いました。一つには、彼女はカニガムに物を渡してはいけないことを学んでいたが、もしウォルターと私が彼女の立場に立って考えていたら、それは彼女の正直な間違いだとわかっただろう。私たちは彼女が1日でメイコムのやり方をすべて学ぶことを期待することはできませんでしたし、彼女が彼女に責任を負わせることもできませんでした。

もうよくわかっていませんでした。

「しつこくされるよ」と私は言った。「私は彼女に本を読まない以外に方法がなかったので、彼女は私に責任を負わせました。アティカス、聞いてください、私は学校に行く必要はありません！」はちきれんばかりだった

突然の思いつきで。「バリス・イーウェル、覚えていますか？彼は初日に学校に行くだけです。不登校の女性は、名簿に彼の名前が載ったとき、自分が法律を実行したと思っている——」「そんなことはできません、スカウト」アティカスが言った。「時には曲がった方が良いこともある」

特別な場合には法律が少し適用されます。あなたの場合、法律は依然として厳格です。だから学校には行かなければなりません。」

「彼がそうしないのに、なぜ私がそうしなければならないのか分かりません。」

「それでは聞いてください。」

アティカスは、イーウェル家は3世代にわたってメイコムの恥辱であったと語った。

彼の記憶によれば、彼らの誰も、その日ともに仕事をした人はいなかった。彼はこう言いました

あるクリスマス、彼がツリーを処分するとき、彼は私を連れて行ってくれた

そして彼らがどこでどのように住んでいたのかを見せてください。彼らは人間でありながら、動物のように生きていました。「彼らは、教育を受けたいというかすかな兆候を示したときに、いつでも学校に通うことができます」とアティカス氏は言う。「彼らを強制的に学校に通わせる方法はあるが、イーウェル家のような人々を強制的に学校に通わせるのは愚かだ」
新しい環境——」

「もし私が明日学校に行かなかったら、あなたは私に強制的に行くでしょう。」

「このままにしておこう」アティカスは乾いた口調で言った。「スカウトフィンチさん、あなたは一般庶民です。法律は守らなければなりません。」彼は、イーウェル家はイーウェル家で構成される排他的な社会のメンバーであると述べた。特定の状況では、庶民はイーウェル家の活動の一部を盲目にするという単純な方法によって、賢明にも彼らに特定の特権を許可しました。まず第一に、彼らは学校に行く必要がありませんでした。もう一つ、バリスの父親であるボブ・イーウェル氏は、季節外の狩猟と罠を許可されていました。

「アティカス、それはまずいよ」と私は言った。メイコム郡では、季節外れの狩猟は法律上軽犯罪であり、住民の目には重罪であった。

「それは法律違反だ、分かった」と父は言った。この辺りの地主で、父親がどんな試合でも打てるようになって子供たちを恨む人を私は知りません。」

"氏。イーウェルはそんなことはしないはずだ——"

「もちろんそうすべきではないが、彼は決して自分のやり方を変えるつもりはない。彼の子供たちに対してあなたの不満をぶつけるつもりですか？」

「いや、先生」と私はつぶやいて、最後の抵抗をしました。「でも、このまま学校に通い続けたら、もう本を読むことはできなくなるよ……」

「それは本当に気になりますよね？」

"かしくまりました。"

アティカスが私を見下ろしたとき、いつも私に何かを期待させる彼の顔の表情が見えました。「妥協とは何か知っていますか？」彼は尋ねた。

「法律を曲げる？」

「いえ、お互いに譲歩して合意に達しました。このように機能します」と彼は言いました。「もし

あなたが学校に行く必要性を認めるなら、私たちはいつものように毎晩本を読み続けます。お買い得ですか？」

"かしこまりました！"

アティカス氏は、

唾を吐く準備をしている私。

私が玄関の網戸を開けると、アティカスが言いました。

私たちの合意について学校では何も言わないでください。」

"なぜだめですか？"

「私たちの活動は、かなりの不評を持って受け取られるのではないかと心配しています。より知識のある権威者ほど。」

ジェムと私は父の遺言と遺言の言葉に慣れていました。

私たちの理解を超えているときは、いつでもアティカスの翻訳を中断することができました。

「え、先生？」

「私は学校に行ったことはありません」と彼は言いました。「でも、もしあなたがミスに話したら、キャロラインは毎晩読んでいますが、彼女は私を追いかけられるでしょう、そして私は彼女を追いかけたくありません自分。」

その夜、アティカスは、理由も分からず旗竿に座った男についての活字のコラムを真剣に読んでいて、私たちが発作的にさせた。それは、ジェムが次の土曜日をツリーハウスの上で過ごすのに十分な理由だった。ジェムは朝食後から日没まで座っていて、アティカスが補給線を切断していなかったら一晩中残っていたら。私は一日のほとんどを登ったり降りたりして過ごし、彼のために用事をし、文書、栄養、水を提供し、夜は毛布を運んでいたとき、私が彼に注意を払わなかったらアティカスがこう言いました。

ジェムは降りてくるだろう。アティカスは正しかった。

第4章

私の残りの学生時代は、最初の頃ほど幸運なものではありませんでした。実際、それらは終わりのないプロジェクトであり、ゆっくりとユニットへと発展しました。その中で、アラバマ州は私にグループ・ダイナミクスを教えるための善意ではあるものの無駄な努力として、数マイルもの画用紙とワックス・クレヨンを費やしました。ジェムがデューイ十進法と呼んだものは、私の1年生の終わりまでに学校全体に広まっていたので、私はそれを他の教育手法と比較する機会がありませんでした。私は周りを見渡すことしかできませんでした。アティカスと自宅の学校に通っていた叔父はすべてを知っていました。

少なくとも、一方が知らなかったことを、もう一方は知っていました。さらに、私の父は何年も州議会の議員を務め、善良な市民権の発展に不可欠であると教師たちが考えていた調整にも関わらず、毎回反対されずに選出されたことにも気付かずにはいられませんでした。ジェムは、半分十進法、半分ダンスキャップに基づいて教育され、単独でもグループでも効果的に機能しているように見えたが、ジェムは悪い例でした。人間が考案したいかなるチュートリアルシステムも、彼が本を読むのを止めることはできませんでした。私に関して言えば、時間から集めたもの以外は何も知りませんでした

雑誌を読んだり、家で手に入るものはすべて読みましたが、少しずつメイコム郡の学校システムのトレッドミルをゆっくりと歩いていると、何かだまされているような印象を受けずにはいられませんでした。私は知らなかったが、12年間にわたる退屈が解消されないことが、まさに国家が私に意図したものであるとは信じられなかった。

年が明け、3時まで残らなければならなかったジェムより30分前に学校から解放され、私は全速力でラドリー・プレイスの近くを走り、安全な玄関ポーチに着くまで止まらなかった。ある日の午後、急いで通り過ぎたとき、何かが目に留まり、それを捉えたので、深呼吸し、周囲を長く見渡し、戻ってきました。

ラドリーの敷地の端には2本の生きた樫の木が立っていた。根が脇道に伸びていて、でこぼこになっていました。ある木の何かが私の心を惹きつけた注意。

私の目の高さのすぐ上の節穴にアルミホイルが突き刺さっていて、午後の日差しの中で私にウインクしていました。私はつま先立ちで立ち、急いでもう一度周囲を見回し、穴に手を入れ、外側の部分を除いたチューインガムを2枚取り出しました。

ラッパー。

私の最初の衝動は、できるだけ早く口に入れたいということでしたが、私は自分がどこにいるかを思い出しました。

私は走って家に帰り、玄関で戦利品を調べました。

ガムは新鮮に見えました。匂いを嗅いでみましたが、いい匂いでした。舐めてしばらく待ちました。死ななかったとき、私はそれを口に詰め込んだ！リグレーのダブル
ミント。

ジェムが帰宅すると、そんな札束をどこで手に入れたのかと尋ねました。私は彼にそれを見つけたと言いました。

「見つけたものは食べないでください、スカウト。」

「これは地上ではなく、木の中にありました。」

ジェムはうなり声を上げた。

「そうだったんだ」と私は言った。「それは向こうの木に刺さっていた、そこから来た木だ」
学校。"

「今すぐ吐き出せ！」

私はそれを吐き出しました。とにかく、唐辛子は消えていました。「私は午後ずっとそれを噛んでいましたが、まだ死んでいませんし、病気でもありません。」

ジェムは足を踏み鳴らした。「その木には触ってはいけないことを知らないのですか？」そんなことしたら殺されるよ！」

「一度家に触れたじゃないか！」

「それは違いました！うがいをしてください—今、私の声が聞こえますか？」

「どちらでもない、口から味が消えてしまうだろう。」

「やめてください、カルプルニアにあなたのことを知らせますよ！」

カルプルニアともつれる危険を冒すよりは、ジェムの言うとおりにしました。何らかの理由で、私が学校に入学した最初の年に、私たちの関係に大きな変化が起こりました。カルプルニアの圧制、不公平、そして私のビジネスへの干渉は、一般的な不承認の穏やかな不平不満に消えました。私としては、彼女を刺激しないように、時には大変な苦勞をしました。

夏が近づいていました。ジェムと私はそれを待ちきれませんでした。夏は私たちにとって最高の季節でした。それは、ベビーベッドで裏の遮蔽されたポーチで眠ったり、ツリーハウスで眠ろうとしたりしていました。夏は食べるものすべてが美味しかった。乾いた風景には千の色があった。しかし何よりも夏はディルでした。

当局は学校最終日の早めに私たちを釈放し、ジェムと私は歩いて行きました

一緒に家に帰ります。「ディルじいさんは明日帰ってくると思うよ」と私は言った。

「おそらく翌日でしょう」とジェムは言った。「ミシッピは一日後に彼らを解放します。」

ラドリー・プレイスのライブ・オークスに来たとき、私は指を上げてチューインガムを見つけた節穴を100回目で指し、そこで見つけたとジェムに信じさせようとしたが、気がつくとはそこを指さしていた別の作品

アルミホイルの。

「分かりました、スカウト！分かった-」

ジェムは周りを見回し、手を伸ばし、小さな光沢のあるパッケージを慎重にポケットに入れました。私たちは走って家に帰り、玄関でチューインガムの包装紙から集めたアルミ箔の破片をパッチワークした小さな箱を眺めました。それは結婚指輪が入っていたような箱で、紫色のベルベットに小さなキャッチが付いていた。ジェムは小さなキャッチをはじいて開けました。

中にはゴシゴシ磨かれて磨かれたペニー硬貨が2枚重ねて入っていました。ジェムそれらを調べた。

「インディアンヘッズだよ」と彼は言った。「196人とスカウト、彼らの1900人のうちの1人。これらは本当に古いものです。」

「1900です」と私はこだました。「言う-」

「ちょっと待って、考え中なの」

「ジェム、そこは誰かの隠れ場所だと思う？」

「いやあ、そこを通るのは私たち以外誰も通らないよ、大人じゃない限りー」

「大人には隠れる場所がない。ジェム、私たちは彼らを飼うべきだと思いますか？」

「私たちに何ができるか分かりません、スカウト。誰に返せばいいの？実際のところ、誰もそこを通らないことは知っています。セシルは家に帰るために裏通りを通り、街をぐるっと回ります。」

セシル・ジェイコブズさんは、私たちの通りの一番端、郵便局の隣に住んでいたが、ラドリー・プレイスや老夫人を避けるために、授業日ごとに合計1マイルを歩いた。

ヘンリー・ラファイエット・デュボース。デュボース夫人は私たちの通りから2軒隣に住んでいました。近所の意見は、デュボース夫人がこれまで生きてきた中で最も意地悪な老婦人だということで一致していた。ジェムはアティカスが隣にいなかったら彼女の家を通らなかつたらう。

「ジェム、私たちは何をすべきだと思いますか？」

タイトルが証明されない限り、ファインダーはキーパーでした。時々椿を摘んだり、夏の日にはモーディ・アトキンソンさんの牛からホットミルクを一吹きしたり、誰かの一杯を手伝うのは私たちの倫理文化の一部でしたが、

お金が違いました。

「何を言ってもいいよ」とジェムは言った。「学校が始まるまで預かっておいて、それからみんなに自分のものかどうか聞いて回ります。たぶん、バスの子供たちだろう——彼もそうだった。今日は学校を出るのに夢中で忘れてしまいました。これらは誰かのものです、私はそれを知っています。それらがどのように滑らかに磨かれているかがわかりますか？彼らは救われました。」

「そうだけど、どうして誰かがそんなチューインガムをしまいたがるの？」あなたそれは続かないことを知っています。」

「分かりません、スカウト。でも、これは誰かにとって大切なものなんだ…」

「どうだ、ジェム…？」

「まあ、インディアンヘッドは、まあ、彼らはインディアンの出身です。それらは本当に強力な魔法で、あなたに幸運をもたらします。何も求めていないときのフライドチキンのようなものではありませんが、長生きや健康、6週間のテストに合格することなどは、誰かにとって本当に価値のあるものです。トランクに入れておきます。」

ジェムは自分の部屋に行く前に、ラドリー・プレイスを長い間探していました。彼はまた考え始めたようだった。

2日後、ディルは輝かしい輝かしい姿で到着した。彼はメリディアンからメイコム・ジャンクションまで一人で電に乗って（敬称。メイコム・ジャンクションはアボット郡にあった）、メイコムのタクシーでミス・レイチェルに出迎えられた。彼はダイナーで夕食を食べ、セントルイス湾で二人の双子がくっついて電から降りるのを目撃し、脅しにも関わらず自分の話を聞いた。彼は持っていた

シャツのボタンを留めて着ていた忌まわしい青いショートパンツを捨てた。

ベルト付きの本物のショートパンツ。彼はやや体重が重かったが、身長はそれほど高くはなく、父親に会ったことがあると言った。ディルの父親は私たちよりも背が高く、黒いひげ（とがった）をしていて、L&N鉄道の社長でした。

「私はしばらくその技師を手伝いました」とディルはあくびをしながら言った。

「豚の耳でやったんだ、ディル。黙ってろ」とジェムは言った。「今日は何して遊ぼう？」

「トムとサムとディック」とディルは言いました。「前庭へ行きましょう。」ディルがローバー・ボーイズを望んだのは、立派な部分が3つあったからです。彼は明らかに疲れていた

私たちのキャラクターマンです。

「もう飽きた」と私は言った。紙芝居の途中で突然記憶を失い、最後まで台本から外れてアラスカで発見されるトム・ローバーを演じるのには飽き飽きしていた。

「私たちを一つにしましょう、ジェム」と私は言いました。

「でっち上げるのはもう飽きた。」

自由になった最初の日、私たちは疲れていました。夏はどうなるのかと思った

持ってくる。

私たちは前庭まで散歩していましたが、そこでディルは通りの向こう側にあるラドリー・プレイスの陰気な顔を見ながら立っていました。「死

の匂いがする」と彼は言った。「そうです、本気でそう思っています」と彼は言った

私が彼に黙って言ったとき、彼は言いました。

「つまり、誰かが死にかけているとき、その匂いを嗅ぐことができるということですか？」

「いいえ、私は誰かの匂いを嗅いで、その人が死ぬかどうかを知ることができるということです。おばあちゃんがやり方を教えてくれたんです。」ディルは身をかがめて私の匂いを嗅いだ。「ジャン、ルイズ、フィンチ、あなたは三日後に死ぬでしょう。」

「ディル、黙ってなかったら、O脚にしてやるよ。つまり、今は――」

「黙ってろ」とジェムがうなり声を上げた。「ホット・スチームを信じているかのような態度をとっているな。」

「あなたは何もしていないふりをしています」と私は言いました。

「熱い蒸気って何？」ディルは尋ねた。

「夜に人通りの少ない道を歩いていて、暑い場所を通り過ぎた経験はありませんか？」ジェムはディルに尋ねた。「熱い蒸気は天国に行けない人で、ただ寂しい道をうろろろするだけだ、もし君が彼の中を通り抜けたら、死んだら君も天国になるだろう、そして君は夜に歩き回り、人々の息を吸うことになるだろう」-

「どうすればそこを通過しないで済むでしょうか？」

「それはできません」とジェムは言いました。「時々、それらは道路を横切らずずっと伸びていますが、もしあなたがそれを通り抜けようとしたら、あなたはこう言います、『天使のように明るく、死の中の生。道路から離れて、息を吸わないでください。そうすれば、彼らがあなたに巻きつきのを防ぐことができます-」

「彼の言うことは信じないのですか、ディル」と私は言いました。「カルプルニアはあれは黒人だと言っている」
話す。"

ジェムは私に暗い顔をしかめましたが、こう言いました。「それで、何か演奏するつもりですか？」

「タイヤを入れましょう」と私は提案しました。

ジェムはため息をついた。「あなたは私が大きすぎることを知っています。」

「押してもダメよ。」

私は裏庭に走り、家の下から古いタイヤを引っ張り出しました。前庭まで叩き上げました。「私が一番です」と私は言いました。

ディルは、自分が一番になるべきだ、ちょうどここに来たところだと言いました。

ジェムが仲裁し、ディルに延長戦を与えて最初のプッシュを与え、私はフォールドした
タイヤの中の自分。

それが起こるまで、私はジェムがホットスチームで私が彼に反論したことで気分を害していたこと、そして彼が私に報酬を与える機会を辛抱強く待っていたことに気づきませんでした。

彼は体全体の力でタイヤを歩道に押し込みました。

地面も空も家も狂ったパレットに溶けて、耳はズキズキして窒息しそうになった。手を出して止めることもできず、胸と膝の間に挟まれていました。ジェムがタイヤと私を追い抜くか、歩道の段差で止められることを祈るばかりでした。彼が私の後ろで追いかけて叫んでいるのが聞こえました。

タイヤが砂利にぶつかり、道路を横切り、バリアに衝突し、私はコルクのように舗道に投げ出されました。めまいと吐き気がしたので、私はセメントの上に横たわり、じっと首を振り、沈黙するために耳をたたき、ジェムの声を聞きました。「スカウト、そこから離れて、さあ！」

私は頭を上げて、目の前のラドリー・プレイスの階段を見つめた。私は凍った。

「おいおい、スカウト、そこに横たわってんじゃねえよ！」ジェムは叫んでいた。「起きて、できないの？」

雪解けとともに震えながら立ち上がった。

「タイヤを取ってください！」ジェムは大声で叫んだ。「それを持ってきてください！まったく意味が分からないんですか？」

なんとかナビゲートできるようになると、震える膝で全力で走って彼らのところへ戻りました。

「なぜ持ってこなかったのですか？」ジェムは叫んだ。

「なぜ分かりませんか？」私は叫びました。

ジェムは黙っていた。

「さあ、門のすぐ内側です。なんで、一度でも家に触ったのに、

覚えて?"

ジェムは私を激怒して見つめ、断ることができず、歩道を走って門のところで立ち泳ぎし、それからダッシュで入ってタイヤを回収しました。

"そこを見て?"ジェムは勝ち誇ったように顔をしかめていた。「そんなことはないよ。誓うよ、スカウト、時々君はとても女の子らしく振る舞って、悔しいよ。」

それには彼が知っている以上のことがあったが、私は彼には言わないことにした。

カルプルニアが玄関に現れ、「レモネードの時間だ!」と叫びました。皆さんも入ってください

「生きたまま揚げる前に、あの暑い太陽を忘れてください!」午前中のレモネードは、夏の儀式。カルプルニアはポーチにピッチャーと3つのグラスを置き、仕事を始めた。ジェムの好意から外れたことは特に心配しませんでした。レモネードを飲めば彼の機嫌は回復するだろう。

ジェムは二杯目のグラスを飲み干し、胸を叩きました。「我々が何をプレーするかは分かっている」と彼は宣言した。「何か新しいこと、何か違うこと。」

"何?"ディルは尋ねた。

「ブー・ラドリー」

ジェムの頭は時々透明だった。彼は、どんな形であろうともラドリーを恐れていないことを私に理解させるために、自分の恐れ知らずの英雄主義と私の臆病さを対比させようと考えていたのだ。

「ブー・ラドリー?どうやって?"ディルは尋ねた。

ジェムは言った、「スカウト、あなたはラドリー夫人になれるわよー」

「そうするなら宣言します。そうは思わないけどー」

「もっと?」ディルは言いました。「まだ怖いですか?」

「夜、私たちがみんな寝静まったときに、彼は出てくることができます…」と私は言いました。

ジェムはシューツという音を立てた。「スカウト、彼はどうやって私たちが何をしているのかを知ることができるのですか?」それに、彼はまだそこにいないと思います。彼は何年も前に亡くなり、彼らは彼を煙突に詰め込んだのです。」

ディルは、「ジェム、あなたと私はプレーしてもいいし、スカウトが彼女が怖がっていたら見てもいいよ。」と言いました。

ブー・ラドリーがあの家の中にいることはかなり確信していましたが、それを証明することはできませんでした。

口を閉ざしておくのが最善だと感じた。そうしないと、日中は影響を受けなかった「熱い蒸気」という現象を信じていると非難されるだろう。

ジェムは私たちの役割を分担してくれました。私はラドリー夫人でした、そして私がしなければならなかったのは出てくることだけでした

そしてベランダを掃除する。ディルは年老いたラドリーさんだった。彼は道を行ったり来たりして歩いた。

ジェムが話しかけると咳き込んだ。ジェムは当然のことながらブーだった。彼は正面の階段の下に入り、時折金切り声を上げたり遠吠えしたりした。

夏が進むにつれて、私たちの試合も進みました。私たちはそれを磨き上げて完成させました、と付け加えました。小さな劇を作り上げるまで会話やプロットを練り、それに基づいて毎日変更を加えました。

ディルは悪役の中の悪役だった。彼は自分に割り当てられたどんなキャラクター役にも入り込むことができ、悪魔として身長が求められる場合には背が高く見えることもあった。彼は最悪のパフォーマンスと同じくらい良かった。彼の最悪のパフォーマンスはゴシックでした。私はしぶしぶ台本に登場するさまざまな女性を演じました。私はターザンほど楽しいとは思ったことはなく、ブー・ラドリーは死んで何も手に入らない、昼間は彼とカルプルニアがいて、夜はアティカスが家にいるというジェムの保証にもかかわらず、漠然とした不安以上のものを感じながらその夏をプレイした。

ジェムは生まれながらのヒーローだった。

それは、ゴシップや近所の伝説の断片を織り交ぜた、憂鬱な小さなドラマだった。ラドリー夫人は、ラドリー氏と結婚するまでは美しかった。

ラドリーは全財産を失いました。彼女はまた、歯、髪の毛、右手の人差し指の大部分を失いました（ディルの寄稿。ブーは、食べる猫やリスが見つからなかったある夜、それを噛みちぎりました。）。彼女はリビングルームに座ってほとんどの時間泣いていましたが、その間ブーは家にあるすべての家具をゆっくりと削り取りました。

私たち三人はトラブルに巻き込まれた少年たちだった。変わって、私は検認裁判官でした。ディルはジェムを連れて階段の下に押し込み、ほうきでつまみました。ジェムは必要に応じて保安官の姿で再び現れます。

さまざまな町民、そしてメイコムの誰よりもラドリー家について語ったステファニー・クロフォード嬢。

ブーの大事なシーンを演じる時が来ると、ジェムは家に忍び込んで盗みをしていました。

カルプルニアが背を向けたときにミシンの引き出しからハサミを取り出し、ブランコに座って新聞を切りました。ディルが通りかかり、ジェムに向かって咳き込むと、ジェムはディルの太ももに突っ込むふりをした。私が立っていた場所から見ると、それは本物に見えました。

ネイサン・ラドリー氏が街への毎日の旅行中に私たちとすれ違ったとき、私たちは彼が見えなくなるまで黙って立ち尽くし、もし彼が疑われたら私たちに何をしようかと考えました。近所の人が見れたとき、私たちの活動は止まりました。

ミス・モーディ・アトキンソンが、生垣バリカンを空中に構えて、通りの向こう側で私たちを見つめているのが見えました。

ある日、私たちは『ワン・マンズ・ファミリー』第25章、第2章を忙しくプレイしていましたが、アティカスが歩道に立って私たちを見て、丸めた雑誌を膝に叩きつけているのが見えませんでした。太陽が正午を告げました。

「みんな何して遊んでるの？」彼は尋ねた。

「何もないよ」とジェムは言った。

ジェムが言い逃れをしたので、私たちの試合は秘密だと言われたので、私は黙っていました。

「それで、そのハサミを使って何をしていますのですか？なぜその新聞を破るのですか？今日だったら日焼けしてあげるよ。」

"何もない。"

「何もない、何？」アティカスは言った。

「何もありません、先生。」

「そのハサミをください」とアティカスは言った。「彼らは遊ぶものではありません。これはもしかしてラドリー家と何か関係があるのでしょうか？」

「いや、先生」とジェムは顔を赤らめながら言った。

「そうならないことを祈ります」と彼はすぐに言い、家の中に入った。

「ジェム……」

"黙れ！彼はリビングルームに行ってしまったので、そこにいる私たちの声が聞こえます。"

安全に庭に着いたディルは、ジェムにこれ以上遊んでもいいかと尋ねました。

"わからない。アティカスはそれができないとは言っていない——"

「ジェム」と私は言った。「とにかくアティカスはそれを知っていると思うよ。」

「いいえ、彼はそうではありません。もしそうなら、彼はやったと言うだろう。」

私にはよくわかりませんでした。ジェムは私が女の子であること、女の子は常に何かを想像すること、それが他の人が女の子を嫌う理由であること、そしてもし私が女の子のように振る舞うようになったら、すぐに遊びに行く人を見つけることができると私に言いました。

「分かった、それではそのまま続けてください」と私は言いました。「あなたなら分かるでしょう。」

アティカスの登場は、私がゲームを辞めたいと思った2番目の理由でした。最初の理由は、私がラドリーの前庭に転がり込んだ日に起こりました。頭の中全体を通して——

震え、吐き気の鎮め、ジェムの叫び声、とても低い別の音を聞いた。

歩道からは聞こえなかったでしょう。家の中に誰かがいた

笑い。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第5章

私の小言は、最終的にはジェムを打ち負かすことができました。そうなることは分かっていたのですが、私は安心しました。

しばらくゲームの速度を落としました。しかし、彼は依然として、アティカスは我々ができないとは言っていない、だから我々にはできる、と主張した。もしアティカスが私たちには無理だと言ったら、

ジェムはそれを回避する方法を考えていました。登場人物の名前を変えるだけで、私たちは何も演じても非難されなくなります。

ディルはこの行動計画に心から同意した。とにかく、ディルはジェムを追って、試練のようなものになっていた。彼は夏の初めに私に結婚を申し込んだのですが、その後すぐに忘れていました。彼は私を張り込み、自分の所有物としてマークし、私が彼が愛する唯一の女性だと言い、その後私を無視しました。

私は彼を二度殴りましたが、それは役に立たず、彼はジェムに近づいただけでした。彼らはツリーハウスで何日も一緒に計画を立てて過ごし、そのときだけ私に電話をかけてきました。

第三者が必要でした。しかし、私はしばらくの間、彼らのより無謀な計画から距離を置き、女の子と呼ばれるのが苦痛だったため、その夏の残りの黄昏のほとんども、ミス・モーディ・アトキンソンと一緒に玄関先に座って過ごしました。

ジェムと私は、ミス・モーディのツツジを避ければ、その庭を自由に走り回るのをいつも楽しんでいましたが、彼女との接触は明確に定義されていなかった。ジェムとディルが私を計画から除外するまで、彼女は近所のただの女性でしたが、比較的穏やかな存在でした。

ミス・モーディとの私たちの暗黙の約束は、彼女の芝生で遊んでもいいし、東屋に飛び乗らなければ彼女のスカパノンを食べてもいいし、彼女の広大な裏庭を探索してもいいというものだった。あまりにも寛大な条件だったので、私たちは彼女とはめったに話さなかったが、その条件を守るために私たちは細心の注意を払っていた私たちの関係は微妙なバランスですが、ジェムとディルは、彼らの言葉で私を彼女に近づけました。

行動。

ミス・モーディは自分の家が嫌いでした。屋内で過ごす時間は時間の無駄でした。彼女は未亡人で、古い麦わら帽子と男性用つなぎ服を着て花壇で働くカメレオンの女性でしたが、5時の入浴後にはポーチに現れ、威厳のある美しさで通りに君臨していました。

彼女は神の大地に生えるすべてのものを、たとえ雑草であっても愛しました。一つの例外を除いて。彼女が庭でナッツグラスの葉を見つけた場合、それは第二次マルヌの戦いのようなものでした。彼女はブリキの桶でその上に急襲し、死ぬほど強力であると彼女が言った有毒物質で下から爆発させました。

私たちが邪魔にならなければ、私たち全員が。

「なぜ引き上げられないのですか？」高さ3インチにも満たない刃物に対する長期にわたる作戦を目撃した後、私は尋ねた。

「引き上げろ、子供、引き上げろ？」彼女はそのひよろひよろとした新芽を摘み取り、その小さな莖に親指を押し当てた。微細な粒子がにじみ出てきました。「なんと、ナッツグラスの一枝が庭全体を台無しにする可能性があります。ここを見て。秋になるとここは乾いて、風がメイコム郡中を吹き飛ばします！」ミス・モーディの顔は、そのような出来事を旧約聖書の疫病に例えました。

彼女のスピーチはメイコム郡の住民にしては歯切れがよかった。彼女は私たちを全力で呼んだ。彼女は笑いながら、目の歯に挟まれた2本の細い金の突起を見せた。私が彼らに感心し、いつかは食べられるようにと願っていると、彼女は「ここを見てください」と言いました。彼女は舌打ちをしながら橋梁を突き出し、それは私たちの友情を強固にする誠意の表れでした。

ミス・モーディの慈悲は、ジェムとディルが追求の途中で立ち止まるたびに、彼らにまで及びました。私たちは、ミス・モーディがこれまで私たちに隠していた才能の恩恵を享受しました。彼女は近所で最高のケーキを作りました。彼女が私たちに内密に認められたとき、彼女は大きなケーキと小さなケーキを3つ焼くたびに、通りの向こう側でこう呼んでいました。「ジェム・フィンチ、スカウト・フィンチ、チャールズ」

ベイカー・ハリス、こっちに来て！」私たちの迅速さは常に報われました。

夏には、夕暮れは長くて穏やかです。そうではないこともよくあるが、ミス・モーディと私は静かにベランダに座って、日が沈むにつれて空が黄色からピンク色に変わっていくのを眺めたり、マーティンの群れが近所の上空を低く飛んでいくのを眺めたりしたものだった。

校舎の屋上の陰に消える。

「モーディさん、ブー・ラドリーはまだ生きていますか？」と私はある晩言いました。

「彼の名前はアーサーです、彼は生きています」と彼女は言った。彼女は大きな櫛の椅子でゆっくりと体を揺らしていました。

「私のミモザの香りがしますか？今夜は天使の息吹のようだ。」

「イエスサム。どうして知っていますか？」

「知っていますか、子供？」

「あのBさん、アーサーはまだ生きてるの？」

「なんという病的な質問だろう。しかし、それは病的な問題だと思います。私は彼が活着していることを知っています、ジャン・ル
イズ、私はまだ彼が運び出されるのを見ていないので。」

「おそらく彼は死んで、煙突に詰め込まれたのでしょう。」

「どこでそのような考えを覚えたのですか？」

「それは、ジェムが彼らがそうしていると思うと言っていたことです。」

「さ、さ、さ。彼は日に日にジャック・フィンチに似てきています。」

ミス・モーディは、アティカスの弟であるジャック・フィンチおじさんを子供の頃から知っていました。ほぼ同じ年齢の彼ら
は、フィンチズ・ランディングで一緒に育った。

ミス・モーディは、近隣の地主であるフランク・ビュフォード博士の娘でした。博士。

ビュフォードの職業は医学であり、彼の執着は地面に生えるものすべてであったため、彼は貧しいままでした。ジャック・フ
インチおじさんは採掘への情熱を閉じ込めた

ナッシュビルウィンドウボックスに行き、裕福なままでした。私たちは毎年クリスマスにジャックおじさんに会い、毎年
クリスマスになるとジャックおじさんは通りの向こう側でミス・モーディと結婚してくれるように叫びました。ミス・モーディ
は、「もう少し大きな声で電話してください、ジャック・フィンチ、そうすれば郵便局に聞こえるでしょう、まだ聞こえていませ
ん！」と怒鳴り返しました。ジェムと私は、女性に結婚を求めるのは奇妙な方法だと思いましたが、ジャックおじさんはかなり奇妙
でした。彼は、ミス・モーディのヤギを手に入れようとしていたこと、40年間も試みて失敗してきたこと、ミス・モーディが結婚を
考えた世界で一番最後にからかおうと思った人は彼だった、と語った。

そして彼女に対する最善の防御は元気な攻撃であり、私たちはそのすべてを明確に理解していました。

「アーサー・ラドリーはただ家に居るだけ、それだけだよ」とミス・モーディは言った。「そんなことはないだろう」
出たくないなら家に居るの？」

「そうだね、でも出ていきたいんだ。なぜ彼はそうしないのですか？」

ミス・モーディは目を細めた。「あなたもその話は私と同じくらい知っていますね。」

「でも、その理由は聞いたことがないんです。誰もその理由を教えてくださいませんでした。」

ミス・モーディは橋の工事を終えた。「老ラドリー氏は足を洗うバプテストだったことを知っていますね。」

「それがあなたなんですよ？」

「私の殻はそれほど堅くないよ、坊や。私はただのバプテストです。」

「皆さんは足洗いを信じていませんか？」

「そうします。家のお風呂でね。」

「しかし、私たちは皆さんと交流を持つことはできません——」

非公開の聖体拝領よりも原始的な洗礼を定義する方が簡単だと判断したようで、ミス・モーディはこう言った。

罪です。ある土曜日に彼らのうちの何人かが森から出てきて通り過ぎたのを知っていましたか

この場所のそばで、私と私の花が地獄に行くと言った？」

「あなたのお花も？」

"はい奥様。彼らは私と一緒に燃え上がるでしょう。彼らは私が神の屋外で多くの時間を費やし、家の中で聖書を読む時間が十分ではないと考えたのです。」

ミス・モーディがさまざまなプロテスタントの地獄で永遠に煮込まれている光景を見て、説教壇の福音に対する私の自信は弱まりました。確かに、彼女は頭の中に酸っぱい舌を持っていて、ステファニー・クロフォード嬢のように、近所で良いことをして歩き回ることはありませんでした。しかし、一片の分別のある人は誰もミスを信頼しなかったが、

ステファニー、ジェム、そして私はミス・モーディをかなり信頼していました。彼女は私たちに何も話したことがなく、私たちといたちごっこをしたこともなく、私たちの私生活にはまったく興味がありませんでした。彼女は私たちの友人でした。永遠の苦しみの危険にさらされながら、これほど合理的な生き物が生きられるのか、理解できない。

「それは違いますよ、ミス・モーディ。あなたは私が知っている中で最高の女性です。」

ミス・モーディはニヤリと笑った。「ありがとうございます奥様。問題は、足を洗う人は女性だと思っているということです。定義上、罪です。彼らは聖書を文字通りに受け取っているのです。」

「アーサーさんが家に居るのは、女性から遠ざけるためですか？」

「分かりません。」

「それは私には意味が分かりません。まるでアーサー氏が天国を望んでいるように見える

彼は少なくともポーチに出てくるだろう。アティカスは、あなたが自分自身を愛するのと同じように、神の愛に満ちた人々も言っています。」

ミス・モーディは体を動かすのをやめ、声が硬くなった。「あなたはそれを理解するには若すぎます」と彼女は言いました。「でも、ある男の手にある聖書の方がひどい場合もあります

ああ、あなたのお父さんの手の中のウイスキーボトルよりも。」

私はショックを受けました。「アティカスはウイスキーを飲みません」と私は言いました。「彼は生涯一滴も酒を飲まなかった——いや、そうだ、飲んだ。彼は一度お酒を飲んだけど気に入らなかったと言っていました。」

ミス・モーディは笑った。「あなたのお父さんのことを話していませんでした」と彼女は言った。「私が言いたかったのは、もしアティカス・フィンチが酔うまで飲んだとしても、彼はそれほど厳しくはならないだろうということです」

最高の状態にある男性もいます。次の世界のことを心配するのに忙しくて、この世界で生きることをまったく学んでいなかったような人たちがいるだけで、通りを見ればその結果がわかります。」

「彼らがBについて言っているすべてのことは真実だと思いますか、ミスター。」アーサー？」

"どんな物？"

私は彼女に言いました。

「それは4分の3が有色人種で、4分の1がステファニー・クロフォードだ」と述べた。

ミス・モーディは厳しい表情を浮かべた。「ステファニー・クロフォードは、ある時、夜中に目が覚めたら、彼が窓から自分を見つめていたと話してくれました。私は、ステファニー、ベッドに移動して彼のために場所を空けてどうしたの？と言いました。それで彼女はしばらく黙ってしまったんだ。」

そう確信していました。ミス・モーディの声は誰をも黙らせるのに十分だった。

「いいえ、お子さん」と彼女は言いました。「それは悲しい家です。アーサー・ラドリーのことを思い出します

男の子だった。周りが何と言おうと、彼はいつも私に優しく話してくれました。彼はやり方を知っているかのように上手に話しました。」

「彼は気が狂っていると思いますか？」

ミス・モーディは首を振った。「もし彼がそうでないなら、今頃そうになっているはずだ。私たちが実際には決して知らない人々に起こる出来事。密室の中で何が起きているのか、どんな秘密が——」

「アティカスは、ジェムと私に対して、家の中では庭でやっているようなことは決してしません」と、親を守るのが私の義務だと感じながら、私は言いました。

「優しい子よ、私は糸をほどいて、あなたのお父さんのことなど考えていませんでした。」

しかし、今の私はこう言いたい。アティカス・フィンチは家の中でも公道にいるときも同じだ。焼きたてのパウンドケーキのお持ち帰りはいかがですか？」

とても気に入りました。

翌朝目覚めると、奥の裏庭でジェムとディルを見つけました。

会話。私が彼らに加わったとき、彼らはいつものように立ち去れと言った。

「しない。この庭はあなたのものであると同時に私のものです、ジェム・フィンチ。私もあなたと同じようにそこでプレーする権利を持っています。」

ディルとジェムは短い集まりから出てきました。「ここに留まるなら、私たちの言うことを聞かなければなりません」とディルは警告しました。

「さあ、突然、誰がそんなに高く強くなったのですか？」と私は言いました。

「私たちの言う通りにすると言わなければ、私たちは何も言いません。」

ディルは続けた。

「あなたは一晩で10インチも伸びたかのように振る舞っています！わかりました、それは何ですか？」

ジェムは穏やかに言いました、「ブー・ラドリーにメモを渡すつもりです。」

「いったいどうやって？」私は自分の中に自動的に湧き上がってくる恐怖と戦おうとしていた。ミス・モーディが話すのは大丈夫だった——彼女は年老いていて、家のベランダでくつろいでいた。そうだった私たちにとっては違う。

ジェムはただメモを釣り竿の先に置いて雨戸に突き刺すつもりだった。誰かが来たら、ディルはベルを鳴らします。

ディルは右手を挙げた。その中には母の銀のディナーベルが入っていました。

「家の側に回ってみます」とジェムは言いました。「昨日、通りの向かい側から見たところ、シャッターが開いていました。少なくとも窓枠に貼り付けることはできると思うよ。」

「ジェム～」

「今、あなたはその中にいて、そこから抜け出すことはできません、あなたはただそこに留まるだけです、ミス・プリス！」

「わかった、わかった、でも見たくない。ジェム、誰かが——」

「はい、そうします、あなたは敷地の一番後ろを見て、ディルは家の前と通りを見て、誰かが来たらベルを鳴らします。それ

クリア？"

「それでは大丈夫です。彼に何て書いたの？」

ディルさんは、「私たちは彼に時々出てきて、そこで何をしているのか教えてほしいと本当に丁寧をお願いしているんです。私たちは彼を傷つけないで、アイスクリームを買ってあげると言いました。」と語った。

「あなたたちは皆気が狂っている、彼は私たちを殺すでしょう！」

ディルは「これは私のアイデアです。もし彼が出てきて、私たちと一緒にゆっくり座ってくれるなら、そうしてくれるかもしれないと思う気分が良くなった。"

「彼が気分が悪いとどうしてわかるのですか？」

「百年間、猫しか食べずに閉じこもっていたらどう思う？」きっとここまでヒゲが生えているんだらうー」 「お父さんと同じ？」

「彼はひげを生やしていない、彼は——」ディルは思い出そうとしているかのように立ち止まった。

「うーん、キャッチチャ」と私は言いました。「あなたは『電から降りる前に、いいよ』って言いましたね」

お父さんは黒いひげを生やしていた——」

「あなたも同じなら、彼は去年の夏に剃りました！はい、持っています

それを証明する手紙——彼は私にも2ドル送ってくれたんだ！」

「続けてください。彼はあなたに騎馬警察の制服も送ってくれたと思います。それは決して現れませんでしたね？あなたはただ彼らに言い続けてください、息子-」

ディル・ハリスは、私がこれまでに聞いた最大のものを言うことができました。とりわけ、彼は郵便飛行機に17回も乗ったことがあり、ノバスコシア州に行ったこともあり、象を見たこともあり、そして彼の祖父はジョー・ウィーラー准将であり、彼のもとを去った。

彼の剣。

「みんな黙ってろよ」とジェムは言った。彼は家の下に潜り込み、何かを持って出てきた。

黄色の竹竿。「これは歩道から届くくらいの長さだと思いますか？」

「家に上がって触る勇気のある人は、釣り竿を使うべきではない」と私は言いました。「玄関のドアをノックしてみたらどうですか？」

「これは——違う——」とジェムは言った。「それを何回言わなければいけないだろう？」

ディルはポケットから紙を取り出してジェムに渡しました。私たち三人は古い家に向かって慎重に歩きました。ディルは敷地の正面の角にある電柱に留まり、ジェムと私は家の側面と平行な歩道をゆっくりと歩いていった。私はジェムを越えて歩き、カーブの周りが見える場所に立った。

「すべてクリアです」と私は言いました。「魂は見えません。」

ジェムは歩道からディルを見上げ、ディルはうなずいた。

ジェムはそのメモを釣り竿の先に取り付け、庭の向こう側に竿を出し、彼が選んだ窓に向かって押しました。ポールには数インチの長さが足りず、ジェムはできるかぎり身をかがめました。私は彼が突き刺す動作をしているのを長い間見ていたので、私は持ち場を放棄して彼のところへ行きました。

「ポールから外せないよ」と彼はつぶやいた。「あるいは、外してもそのままにしておくことはできない。通りに戻ってください、スカウト。」

私は戻ってきて、カーブのあたりの空いている道路を眺めました。時折、私はジェムを振り返った。ジェムは辛抱強くメモを窓枠に置こうとしていた。それは地面に舞い上がり、ジェムはそれを突き上げました。ブー・ラドリーがそれを受け取ったとしても、彼はそれを読むことができないだろうと私は思いました。夕食のベルが鳴ったとき、私は通りを見下ろしていました。

肩を上げて、私はよろめきながらブー・ラドリーとその血まみれの牙に直面した。代わりに、ディルがアティカスの顔に向かって全力でベルを鳴らしているのが見えました。

ジェムはとてもひどい顔をしていたので、彼にそう言ったと言う気持ちはありませんでした。彼は歩道上でポールを後ろに引きずりながらとぼとぼ歩いた。

アティカスは「そのベルを鳴らすのはやめてください」と言った。

ディルは拍子木をつかみました。その後、続く沈黙の中で、彼がそれを鳴らしてくれたらいいのと思った

また。アティカスは帽子を後頭部に押し込み、腰に手を当てた。

「ジェム、何をしていたんですか？」と彼は言った。

「何ともありません、先生。」

「そんなものは望んでいない。教えて。」

「私は——ただ、ラドリーさんに何かをあげようとしていただけだったんです。」

「彼に何をあげようとしていたの？」

「ただの手紙よ。」

"見せて。"

ジェムは汚い紙を差し出した。アティカスはそれを手に取り、読もうとしました。「なぜラドリーさんに出てきてほしいのですか？」

ディルは「彼が私たちを楽しんでくれるかもしれないと思ったのに…」と言い、アティカスが見つめると枯れ果てた。

彼。

「息子よ」彼はジェムに言った。「一つだけ言っておきます。あの男を苦しめるのはやめてください。」他の二人もそうだよ。」

ラドリー氏がやったことは彼自身の仕事だった。彼が出てきたいと思えば、そうするだろう。

彼が自分の家に留まりたいのであれば、好奇心旺盛な子供たちの注目を避けて家の中に留まる権利がありました。これは私たちのような者にとっては穏やかな言葉でした。

私たちが夜に部屋にいるときに、アティカスがノックもせずに押し入ってきたら、どう思いますか？事実上、私たちはラドリー氏に対して同じことをしていたのです。

ラドリー氏のしたことは私たちににとっては奇妙に見えるかもしれませんが、私たちににとっては奇妙ではありませんでした

彼。さらに、他の存在とコミュニケーションをとるための一般的な方法が側窓ではなく玄関ドアのそばにあるということを私たちは考えたこともなかったでしょうか？最後に、私たちは招待されるまでその家には近づかないこと、彼が私たちがブレイしているのを見た愚かなゲームをしたり、この通りで誰かをからかったりしてはいけないことになった

それともこの街で――

「私たちは彼をからかっているわけでも、笑っているわけでもありません」とジェムは言いました。「私たちはただ――」

「つまり、それがあなたがやっていたことでしたね？」

「彼をからかっているの？」

「いいえ」とアティカスは言い、「近所の啓発のために自分の人生の歴史を展示するつもりだ。」

ジェムは少し腫れているようだった。「私たちがそんなことをしているとは言っていない、私は言っていない！」

アティカスは乾いた笑みを浮かべた。「さっき言ってくれたんだよ」と彼は言った。「皆さん、このナンセンスは今すぐやめてください。」

ジェムは彼を見つめた。

「あなたは弁護士になりたいんですね？」私たちの父の口は疑わしいほど堅かった、まるで彼がそれを維持しようとしているかのように。

ジェムは屁理屈を言っても無駄だと判断し、黙った。アティカスが朝、仕事に持って行くのを忘れたファイルを取りに家に入ったとき、

ジェムはついに、記録上最高齢の弁護士のトリックにやられたことに気づいた。彼は敬意を持って正面の階段から離れて待ち、アティカスを眺めた

家を出て街に向かって歩きます。アティカスの声が届かなかったとき ジェム

「弁護士になりたいと思っていたけど、今は自信がありません！」と彼の後を追って叫びました。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第6章

ジェムがメイコムでの最後の夜なので、ディルと一緒にミス・レイチェルの家の魚だまりのそばに座ってもいいかと尋ねると、「はい」と父は答えた。「私のためにずっと言っていてください。そうすれば来年の夏に会えます。」

私たちはレイチェル先生の庭と私道を隔てる低い壁を飛び越えました。ジェムはボブホワイトの口笛を吹き、ディルは暗闇の中で答えた。

「息も吹きません」とジェムは言った。「あそこを見てください。」

彼は東を指さした。ミス・モーディの家のピーカンの木の後ろに巨大な月が昇っていました。「そうすると、もっと暑く見えるよ」と彼は言った。

「今夜はそれに参加しますか？」ディルは顔を上げずに尋ねた。彼は新聞紙と紐を使ってタバコを作っていました。

「いいえ、その女性だけです。そんなものに火をつけないで、ディル、君はこの終わりまでずっと悪臭を放つことになるよ町。」

メイコムの月に女性がいました。彼女はドレッサーに座って髪をとかしていた。

「君がいなくなると寂しくなるよ、坊や」と私は言った。「エイブリーさんには気を付けたほうがいいと思いますか？」

エイブリー氏はヘンリー・ラファイエット・デュボース夫人の家の向かい側に乗り込んだ。

エイブリーさんは毎週日曜日に収集プレートを交換するほかに、毎晩9時までポーチに座ってくしゃみをしていました。ある晩、私たちは光栄にも彼の最後の公演となったであろう彼のパフォーマンスを目撃することができました。

私たちが見ている限り、彼は二度と同じことをしませんでした。ある夜、ジェムと私がレイチェル先生の家の玄関から出ようとしていたとき、ディルが私たちを呼び止めました。「おい、あそこを見て」。彼は通りの向こう側を指さした。最初は葛で覆われた玄関ポーチしか見えませんでした。よく見てみると、水源から約10フィート離れたところに、木の葉から弧を描いた水が流れ落ち、街灯の黄色い円の中に飛び散っていることが分かりました。

地球、私たちにはそう見えました。ジェムはエイブリー氏の性格が間違っていると言い、ディルは一日に1ガロンを飲まなければならないと言い、その後に行われた相対的な距離とそれぞれの腕前を決定するコンテストは、私には才能がなかったため、再び取り残されたと感じるだけだったエリア。

ディルは伸びをして、あくびをして、あまりにもカジュアルに言いました。「分かった、それでは行こう散歩。」

彼は私には胡散臭いように思えた。メイコムではただ散歩に行く人は誰もいませんでした。「どこへ、ディル？」

ディルは南の方向に頭を振った。

ジェムは「わかりました」と言いました。私が抗議すると、彼は「エンジェルメイ、ついてこなくてもいいよ」と優しく言いました。

「行かなくてもいいよ。覚えて-」

ジェムは過去の敗北にこだわる人ではなかった。それが彼から得た唯一のメッセージのようだったアティカスは反対尋問の技術に洞察力があった。「スカウト、私たちは何もするつもりはありません、街灯まで行って戻だけです。」

私たちはポーチのブランコが軋む音を聞きながら、静かに歩道を歩きました。

近所の重みを感じながら、通りを歩く大人たちの静かな夜のざわめきを聞きながら。時折、ステファニー・クロフォード先生の笑い声が聞こえました。

"良い?"ディルは言いました。

「わかりました」とジェムは言いました。「家に帰ったらどうですか、スカウト？」

"きみはどうする?"

ディルとジェムは、ブー・ラドリーを一目見られるかどうかを確認するために、シャッターが緩い窓を覗くつもりだった。もし私が彼らと一緒に行きたくないなら、まっすぐ家に帰って、太った口を閉じていてもいい、それだけでした。

「しかし、サム聖なる丘で今夜まで何を待っていたのですか？」

なぜなら、夜には誰も彼らを見るができなかったからです、なぜならアティカスはとても深いところにいるでしょうから。

ブー・ラドリーが彼らを殺したら、彼らは休暇ではなく学校を欠席するだろうし、暗い家の中は昼間よりも暗い方が見えやすいから、彼は王国が来るのを聞くことはできないだろう、と私は理解したでしょうか？

「ジェム、お願いしますー」

「スカウト、最後に言います。罌を閉めるか、それとも家に帰りなさい。あなたは日に日に女の子らしくなっていると主に宣言します！」

そうなると、私も彼らに加わるしかありませんでした。私たちは、ラドリーの敷地の後ろにある高い金網の下を通ったほうが良いと考えました。見られる可能性は低いからです。フェンスは広い庭と狭い木造の納屋を囲んでいた。

ジェムは下のワイヤーを持ち上げ、ディルをその下に動かしました。私も後を追って、ジェムのためにワイヤーをかざしました。

それは彼にとってきつい締め付けだった。「音を立てないで」と彼はささやいた。「何があってもコラードの列には入らないでください。彼らは目を覚ますでしょう」

死んだ。"

この考えを念頭に置いて、私はおそらく1分に1歩を歩きました。月明かりの中ではるか前方にジェムが手招きしているのが見えたとき、私はより速く動きました。裏庭と庭を仕切る門のところまで来ました。ジェムはそれに触った。門がきしむ音を立てた。

「唾を吐きなさい」ディルがささやきました。

「私たちが箱に入れたんだね、ジェム」と私はつぶやいた。「そう簡単にはここから出られないよ。」

「し、し。唾を吐きなさい、スカウト。」

私たちは唾を吐きながら体を乾かし、ジェムはゆっくりと門を開け、門を脇に持ち上げて休んだ

それはフェンスの上にあります。私たちは裏庭にいました。

ラドリー家の裏手は表家ほど魅力的ではなかった。荒れ果てたポーチが家の幅いっぱい広がっていた。間には2つのドアと2つの暗い窓がありました

ドア。柱の代わりに、大まかなツーバイフォー材が屋根の一端を支えていました。古いフランクリンストーブがポーチの隅に置かれていました。その上では帽子掛けの鏡が月を捉えて不気味に輝いていました。

「あー、」ジェムは足を上げながら静かに言いました。

「もっと？」

「鶏だ」と彼は息を呑んだ。

私たちがあらゆる方向から見えないものを避けなければならないことは、私たちの前にいたディルがささやき声で神を綴ったときに確認されました。私たちは家の横に忍び寄って、雨戸が下がっている窓の近くまで行きました。敷居は数インチだった

ジェムより背が高い。

「手を挙げてください」と彼はディルにつぶやいた。「でも、待ってください。」ジェムは彼の左手首と私の右手首を掴み、私は私の左手首とジェムの右手首を掴み、私たちは

しゃがみ込むと、ディルは私たちのサドルに座りました。私たちが彼を持ち上げると、彼は窓枠に引っかかりました。

「急いで」とジェムがささやいた。「これ以上は長くは続かないよ。」

ディルが私の肩を殴ったので、私たちは彼を地面に押し倒しました。

「何を見ましたか？」

"何もない。カーテン。でも、どこかに小さな光があるよ。」

「ここから逃げましょう」ジェムは息を呑んだ。「もう一度後ろに回りましょう。しっ、」と私が抗議しようとしていたとき、彼は私に警告した。

「後ろの窓から試してみましよう。」

「ディル、いいえ。」と私は言った。

ディルは立ち止まり、ジェムを先に行かせました。ジェムが一番下のステップに足を乗せると、ステップが軋みました。

彼は立ち止まり、それから徐々に体重を試しました。そのステップは

静けさ。ジェムは二歩飛ばしてポーチに足を置き、そこまで体を持ち上げて、

長い一瞬迷った。彼はバランスを取り戻し、膝をつきました。彼は窓まで這い、頭を上げて中を覗き込んだ。

それから私は影を見た。それは帽子をかぶった男の影だった。最初は私

それは木だと思ったが、風は吹いておらず、木の幹は決して歩きませんでした。裏のポーチは月明かりに照らさ

れ、トーストのようにさわやかな影がポーチを横切ってジェムに向かって動いた。

次にディルがそれを見ました。彼は顔に手を当てた。

それがジェムを横切ったとき、ジェムはそれを見ました。彼は腕を頭の上に置き、体を硬直させた。

影はジェムの約1フィート前で止まりました。その腕は横から出てきて、落ちて、静止していました。それからそれは

向きを変えてジェムを横切って戻り、ポーチに沿って家の脇を歩き、来たときと同じように戻ってきました。

ジェムはポーチから飛び降りて、私たちに向かって疾走した。彼は門を勢いよく開け、ディルと私を踊りながら通過させ、揺れるコラードの二列の間に私たちを押し込みました。

コラードの途中で私はつまずいてしまいました。私がつまずいたとき、散弾銃の轟音が碎け散った

ご近所さん。

ディルとジェムが私の隣に飛び込みました。ジェムは息を呑んですすり泣きました。「校庭のそばに柵

が！——急いで、スカウト！」

ジェムは下のワイヤーを握った。ディルと私は転がって、半分のところまで来ました。

ジェムが私たちと一緒にいないと感じたとき、私たちは校庭の一本の榎の木の避難所にいました。

私たちが走って戻ると、彼は柵の中で格闘していて、ズボンを脱ぎ捨てていました。

ゆい。彼は短パンを履いて榎の木に走った。

無事に後を追ひ、私たちはしびれを切りましたが、ジェムの心は高鳴っていました。「家に帰らなければ、彼らは私たちを寂しがらるだろう。」

私たちは校庭を走って横切り、フェンスの下をくぐり、家の裏にあるディアの牧草地に行き、裏のフェンスをよじ登り、裏の階段に着くと、ジェムが休憩させてくれました。

呼吸は正常で、私たち3人はできるだけ気楽に前庭まで散歩した。私たちは通りを見下ろすと、ラドリーのフロントに近所の人たちが集まっているのが見えました。

ゲート。

「そこに行ったほうがいいよ」とジェムは言った。「私たちが来なかったら、彼らはおかしいと思うでしょう。」

ネイサン・ラドリー氏は自宅の門の中に立っており、散弾銃で腕を折られていた。

アティカスはミス・モーディとミス・ステファニー・クロフォードの隣に立っていました。レイチェル先生とエイブリー氏が近くいました。誰も私たちが近づいてくるのを見ていませんでした。

私たちはミス・モーディの隣に落ち着き、辺りを見回した。「みんなどこにいたの、騒ぎ聞こえなかったの？」

"どうしたの?"ジェムは尋ねた。

"氏。ラドリーは首輪パッチを着た黒人に向けて発砲した。"

"おお。彼は彼を殴りましたか？"

「いいえ」ステファニー先生は言いました。「空中で撃たれた。しかし、彼は青ざめて怖がった。誰かが周りで白人の黒人を見かけたら、それがその人だ、と言う。彼はもう一方のバレルを持っていて、そのパッチで次に聞こえる音を待っている、そして次回には犬であれ、黒人であれ、あるいはジェム・フィンチであれ、高みを目指すつもりはないと言っています！」

「奥様？」ジェムは尋ねた。

アティカスが話した。「息子、ズボンはどこですか？」

「パンツ、先生？」

「パンツ」

それは無駄でした。神とみんなの前でパンツ姿で。私はため息をつきました。

「ああ——先生。フィンチ？」

街灯の眩しさの中で、ディルが孵化するのが見えた。目が大きくなり、太った天使のような顔が丸くなった。

「何ですか、ディル？」アティカスは尋ねた。

「ああ、私は彼からそれらを勝ち取りました」と彼は曖昧に言った。

「彼らに勝ちましたか？どうやって？」

ディルの手が後頭部を探った。彼はそれを額の前に持ってきました。「私たちは向こうの魚だまりのそばでストリップ・ポーカーをしていました」と彼は言った。

ジェムと私はリラックスしました。近所の人たちは満足したようで、皆固まっていました。しかし、ストリップポーカーとは何だったのでしょうか？

私たちはそれを知る機会がありませんでした。レイチェル先生は町の火災のサイレンのように鳴り響きました。

ああ、ジーサス、ディル・ハリス！うちのフィッシュプールでギャンブルしてる？ストリップポーカーしてあげますよ、先生！」

アティカスはディルを即時切断から救った。「ちょっと待ってください、レイチェルさん」と彼は言った。「彼らがそんなことをしているというの聞いたことがありません。みんなトランプしてた？」

ジェムは目を閉じてディルのフライを処理した。「いや、マッチだけでいいよ。」

私は兄を尊敬していました。試合は危険だったが、カードは致命的だった。

「ジェム、スカウト」アティカスは言った。「どんな形であれポーカーの話は二度と聞きたくない。ディルズに行ってパンツを取りに行つて、ジェム。自分たちで解決してください。」

「心配しないで、ディル」私たちが歩道を小走りながらジェムが言いました。「彼女はあなたを捕まえるつもりはありません。彼は彼女にそれをやめさせるよう説得するだろう。それは素早い考えだったね、息子。聞いてください…わかりますか？

私たちは立ち止まり、アティカスの声が聞こえました。「…深刻ではありません…彼らは皆、それを経験しています、レイチェルさん…」

ディルは慰められましたが、ジェムと私は慰められませんでした。朝、ジェムがパンツを見せてしまうという問題があった。

「私のものを少しあげますよ」私たちがミス・レイチェルの足元に来ると、ディルが言った。ジェムは、中には入れなかったけど、とにかくありがとうと言った。私たちは別れを告げ、ディルは家の中に入りました。彼は私と婚約していたことを覚えていたようで、走って戻り、ジェムの前で素早く私にキスをした。「ヤウルは書きます、聞きますか？」彼は私たちの後を追って大声で叫びました。

ジェムのズボンが無事だったら、とにかく私たちはあまり眠れなかったでしょう。

裏玄関の簡易ベッドから聞こえる毎晩の音は3倍に拡大されました。砂利の上の足のあらゆる傷は、ブー・ラドリーが復讐を求めていることを示していました。

夜に笑いながら通り過ぎた黒人は、ブー・ラドリーが自由になって私たちの後を追いかけていました。スクリーンに飛び散る虫は、ブー・ラドリーの狂気の指がワイヤーをばらばらにしたものだった。センダンの木は悪性で、浮遊していて、生きていました。ジェムのつぶやきが聞こえるまで、私は睡眠と覚醒の間をさまよっていました。

「スリーアイズ、寝て？」

"ばかじゃないの？"

「し、し。アティカスの電気が消えたんだ。」

欠けていく月明かりの中で、ジェムが足を床に向かって振り上げるのが見えました。

「私は奴らを追いかけるよ」と彼は言った。

私は直立して座りました。"あなたはできません。させませんよ。"

彼はシャツを着込むのに苦労していた。「そうしなければなりません。」

「そうすればアティカスを起こしてあげるよ。」

「そうすれば、私はあなたを殺します。」

私は彼をベッドの上の私の隣に引きずり下ろしました。私は彼に説教しようとした。"氏。ネイサンは朝には彼らを見つけるつもりだよ、ジェム。彼はあなたが彼らを失ったことを知っています。彼がそれをアティカスに見せたら、かなりひどいものになるだろう、それだけだ。ベッドに戻ってください。」

「それは私が知っていることです」とジェムは言いました。「だから私は彼らを追いかけるのです。」

気分が悪くなり始めました。一人であの場所に戻るとき、私はミス・ステファニーを思い出しました。ネイサンさんはもう一方の樽を持って、次に聞こえる音を待っていました。

それが黒人であろうと、犬であろうと…ジェムは私よりもそれをよく知っていました。

私は絶望的になりました。「ほら、それだけの価値はないよ、ジェム。舐めると痛いけど、長くは続かない。

頭を撃たれるぞ、ジェム。お願いします…"

彼は辛抱強く息を吐き出した。「私は——こんな感じだよ、スカウト」と彼はつぶやいた。「物心ついて以来、アティカスが私を鞭打ったことは一度もありませんでした。このままにしておきたい。」

これは考えでした。アティカスは一日おきに私たちを脅しているようでした。「つまり、彼はあなたを何事にも捕まえたことがないということですね。」

「そうかも知れませんが、私はそのままにしておきたいのです、スカウト。今夜そんなことをすべきではない、スカウト。」

おそらく、ジェムと私が初めて別れ始めたのはその時だったと思います。時々彼の言葉が理解できないこともありましたが、当惑したのは長くは続かなかったのです。これは私には無理でした。「お願いします」と私は懇願しました。「ちょっと考えてもらえませんか――」

あの場所で一人で――」

"黙れ！"

「彼があなたと二度と話さないとかなんとかというわけではありません...私が彼を起こします
起きろ、ジェム、誓うよ、私は――」

ジェムは私のパジャマの襟を掴んできつく締めました。「それでは私も一緒に行きます」
――私は窒息しました。

「違うよ、ただ騒ぐだけだよ。」

それは無駄でした。私は裏口のドアの掛け金を外し、彼が階段を忍び寄り間それを押さえた。

2時だったはずだ。月が沈み、格子の影がぼんやりとした虚無の中に消えていきました。ジェムの白いシャツの裾が浸かって、

小さな幽霊が翌朝から逃げ出すように踊りながら逃げるように、おかつぱを振った。微かな風が脇腹を伝う汗を掻き立て、冷やした。

彼は裏道を通り、鹿の牧草地を通り、校庭を横切り、周りを回った

フェンスに向かって、少なくともそれが彼が向かっていた方向だと私は思いました。もっと時間がかかるだろうから、まだ心配する時期ではない。私は心配する時が来るまで待って、ラドリー氏のショットガンの音を聞きました。そのとき、後ろのフェンスがきしむ音が聞こえたような気がしました。

それは希望的観測でした。

その時、アティカスの咳き込む音が聞こえた。私は息を止めた。私たちが真夜中にトイレに行脚すると、彼が本を読んでいるのを見つけることもありました。彼は、夜中に目が覚めて私たちの様子を確認し、また本を読んで眠ることがよくあったと言いました。私は彼のライトが点灯するのを待ち、それがホールに溢れるのを目にした。それは消えたままで、私は再び息をしました。夜這いたちは撤退していましたが、風が吹くと熟したセンダンが屋根を叩き、暗闇は遠くの犬の吠え声で荒涼としていました。

そこに彼がいて、私のところに戻ってきました。彼の白いシャツは後ろのフェンスを越えて揺れ、ゆっくりと大きくなりました。彼は裏手の階段を上がってきて、後ろでドアの掛け金を掛け、

彼の簡易ベッドに座っていた。彼は無言でズボンを上げた。彼は横になり、しばらくの間私は

彼の寝台が震える音が聞こえた。やがて彼は静止した。彼が再び身動きするのは聞こえなかった。

第7章

ジェムは一週間不機嫌で沈黙を続けた。かつてアティカスが私に勧めてくれたように、私はジェムの肌によじ登り、その中を歩き回ろうとした。もし私が一人で午前二時にラドリー・プレイスに行っていたら、私の葬儀は次の日に行われていただろう。

午後。そこで私はジェムを放っておいて、彼の邪魔をしないように努めました。

学校が始まりました。2年生も1年生と同じくらいひどいもので、さらに悪かったです。依然としてカードをフラッシュし、読み書きをさせませんでした。隣のミス・キャロラインの進歩は、笑いの頻度によって推定できます。しかし、いつもの乗組員はまたしても初級で落ちてしまい、秩序を保つのに役立った。2年生で唯一よかったことは、今年は私がジェムと同じくらい遅くまで残らなければならず、いつもは3時に一緒に歩いて帰宅したことです。

ある午後、私たちが家に向かって校庭を渡っていたとき、ジェムが突然こう言いました。「あなたに言っていなかったことがあります。」

これが数日ぶりの完全な文章だったので、私は彼を励ましました。
何？"

「あの夜のこと」

「あなたはあの夜のことを私に何も話してくれませんでした」と私は言いました。

ジェムはブヨを煽るように私の言葉を振り払った。彼はしばらく黙っていたが、それから彼は

「ズボンを取りに戻ったとき、脱ぐときにズボンがすべてもつれていて、解くことができませんでした。戻ったとき——」ジェムは深呼吸した。「私が戻ると、彼らはフェンスを越えて折り畳まれていました…まるで私を待っていたかのようでした。」

"横切って-"

「あと何か——」ジェムの声は平坦だった。「家に帰ったら見せてね。
縫い合わされていました。女性が縫ったようなものではなく、私がやろうとしていることのように。

全部曲がってます。まるで――」

「――誰かがあなたが彼らのために戻ってくることを知っていました。」

ジェムは震えた。「誰かが私の心を読んでいたような…誰かが私が何をしようとしているかを言い当てていたような。私のことを知られてしまわないように、私がこれから何をするのか誰も言えないでしょう、スカウト？」

ジェムの質問はアピールだった。私は彼を安心させました。「あなたが何をしようとしているのか、あなたと一緒に家に住まなくなるように誰にも言えません。私ですら、時々言えないのです。」

私たちは木の横を通り過ぎていました。その節穴には灰色の麻ひもの玉が落ちていました。

「飲まないで、ジェム」と私は言った。「ここは誰かの隠れ家だよ」

「私はそうは思いません、スカウト」

"はい、そうです。ウォルター・カニンガムのような人は、休み時間になるたびにここに来て持ち物を隠しますが、私たちも一緒に来て、彼から持ち物を取り上げます。聞いて、そのままにして数日待ちましょう。それでなくなっていないなら、私たちが受け取ります、いいですか？

「わかりました、あなたは正しいかもしれませんが」とジェムは言いました。「そこは小さな子供の場所に違いない――自分の持ち物を大きな人たちから隠しているんだ。私たちが何かを見つけられるのは学校にいるときだけです。」

「そうですね」と私は言いました。「でも、夏にはここを通りません。」

私たちは家に帰りました。翌朝、麻ひもは私たちが置いた場所にありました。3日目になってもまだそこにあったので、ジェムはそれをポケットにしまいました。それ以来、私たちは節穴で見つけたものはすべて自分たちの所有物だと考えました。 -

2年生は厳しいものでしたが、ジェムは、年が上があれば上がるほど良い学校になるだろう、自分も同じようにスタートし、人は価値のあることを学ぶのは6年生になるまでだと私に保証してくれました。6年生

最初から彼は気に入ったようだった。彼は私を当惑させた短いエジプト時代を経験した――彼は片腕を前に突き出し、片腕を後ろに突き出し、片足をもう一方の足の後ろに置き、平らに歩こうとしていた。彼は、エジプト人はその道を歩いたと断言した。私は、もし彼らがそうしていたとしても、彼らがどのようにして何かを成し遂げたのか見ていないと言いましたが、ジェムは、彼らはアメリカ人がこれまでに成し遂げたことよりも多くのことを成し遂げ、トイレットペーパーや永久防腐処理を発明したと言い、彼らがいなかったら私たちは今どうなっていたでしょうかと尋ねました。アティカスは私に形容詞を削除するように言った、そうすればそうするだろう

事実。

南アラバマ州には明確に定義された季節はありません。夏は秋へと移り、秋の後には冬が来ないこともありますが、数日前の春に変わり、再び夏に溶けます。その秋は長かった、ほとんど涼しくなかった

軽いジャケットとしては十分です。穏やかな10月のある日、ジェムと私は軌道上を小走りしていました

午後、私たちの節穴が再び私たちを止めた。この中に白いものが入っていました

時間。

ジェムが私に荣誉ある仕事をさせてくれました。私は石鹸に刻まれた2つの小さな絵を取り出しました。一人は少年の姿で、もう一人は粗末なドレスを着ていた。フードゥーなどというものは存在しないことを思い出す前に、私は金切り声を上げて彼らを投げ倒しました。

ジェムは彼らを捕まえた。「どうしたの？」彼は叫んだ。彼は人物をこすって赤いほこりを取り除きました。「これはいいですね」と彼は言った。「これほど良いものは見たことがありません。」

彼はそれらを私に押さえつけました。それらは二人の子供のほぼ完璧なミニチュアでした。

少年はショートパンツを履いており、石鹸のような髪の毛が眉間に落ちた。私はジェムを見上げた。彼の分け目からは真っ直ぐな茶色の髪が下に垂れ下がっていた。今まで気づかなかったのです。ジェムは少女人形から私を見た。女の子人形は前髪をかぶっていた。私はやった。

「これが私たちです」と彼は言った。

「誰がやったと思いますか？」

「この辺で笛を吹く人を誰が知っていますか？」彼は尋ねた。

"氏。エイブリー。"

"氏。エイブリーはまさにこれが好きです。つまり、彫るということです。"

エイブリーさんは平均して1週間にストーブ用の薪1本を消費していた。彼はそれをつまようじまで研いで噛みました。

「ステファニー・クロフォードさんの昔の恋人がいるのよ」と私は言った。

「彼は彫刻は大丈夫ですが、田舎に住んでいます。彼はいつお金を払うのだろうか私たちに注目してる？」

「もしかしたら彼はポーチに座って、ステファニーさんの代わりに私たちを見ているかもしれません。私が彼だったらそうするだろう。」

ジェムはあまりにも長い間私を見つめたので、何があったのかと尋ねましたが、何も得られませんでした、スカウト。私たちが家に帰ると、ジェムは人形をトランクに入れました。

2週間も経たないうちに、私たちはチューインガムのパッケージを丸ごと発見し、ジェムの記憶からラドリー・プレイスにあるものすべてが毒物だったという事実を楽しみました。

翌週、節穴から汚れたメダルが出てきた。ジェムがそれをアティカスに見せたところ、アティカスは、それは綴りのメダルだ、私たちが生まれる前にメイコム郡の学校で綴りのコンテストがあり、優勝者にメダルを授与していたと言いました。アティカスは、誰かがそれをなくしたに違いないと言いました、そして私たちは周りに尋ねましたか？ジェムは私をラクダ蹴った

どこで見つけたのか言おうとしたとき。ジェムはアティカスに、これまでに優勝した人を覚えているかどうか尋ねたが、アティカスは「ノー」と答えた。

私たちの最大の賞品は4日後に現れました。それはそうではない懐中時計でした。アルミ製のナイフで鎖につながれて走ります。

「ジェム、それはホワイトゴールドだと思いますか？」

「分かりません。アティカスに見せてやるよ。」

アティカス氏は、それが新品であれば、ナイフやチェーンなどすべてを含めておそらく10ドルの価値があるだろうと語った。「学校で誰かと入れ替わったんですか？」彼は尋ねた。

「ああ、いいえ、先生！」ジェムは、アティカスがジェムに注意していれば週に一度持たせてくれた祖父の時計を取り出しました。時計を持ち歩いた日、ジェムは卵の上を歩いた。「アティカス、もしよろしければ、代わりにこれをいただきたいのですが。

もしかしたら直せるかも知れません。」

新しい人が祖父の時計をすり減らし、それを持ち歩くのが一日の重労働になったとき、ジェムはもはや毎時時間を確認する必要性を感じませんでした。

五分。

彼はかなりの仕事をし、残りはゼンマイが1つと小さな部品が2つだけでしたが、時計は動きませんでした。

「ああ、彼はため息をつきました。スカウト-？」

"はあ？"

「これらのものを私たちに残してくれた人に手紙を書くべきだと思いますか？」

「それはいいですね、ジェム、彼らに感謝してもいいのですが——どうしたのですか？」

ジェムは耳を押さえて頭を左右に振っていました。「理解できない、とにかく理解できない——なぜだかわからない、スカウト…」彼はリビングルームの方を見た。「私は

覚悟を決めてアティカスに伝えなければ——いいえ、そうではないと思います。」

「私があなたの代わりに彼に伝えます。」

「いいえ、そんなことはしないでください、スカウト。スカウト？」

"何？"

彼は一晩中私に何かを言おうとしていた。彼の顔は明るくなり、私の方に身を寄せるようになり、その後気が変わりました。彼はまたそれを変えた。「ああ、何も無いよ」

「それでは、手紙を書きましょう。」私はタブレットと鉛筆を彼の鼻の下に押し込みました。

"わかった。親愛なるミスター……"

「どうしてそれが男だとわかるの？きっとミス・モーディだ——長い間そう賭けてきたんだ。」

「ああ、ミス・モーディはガムを噛めないんだ——」ジェムは笑い出した。「ご存知の通り、彼女は時々本当にきれいに話すことができます。あるとき、私が彼女にチューをしてほしいとお願いしたら、彼女は「ありがとう」と答えました。チューインガムが彼女の口蓋にくっついてしまい、彼女は言葉を失ってしまったのです」とジェムは注意深く言った。「それは素敵だと思いませんか？」

「そうですね、彼女は時々良いことを言うことがあります。彼女は時計もチェーンも持っていなかっただろうともかく。」

「親愛なる先生」ジェムは言いました。「私たちは、あなたが私たちのために木に入れてくれたものすべてに感謝しています。いいえ、私たちは感謝しています。敬具、ジェレミー・アティカス・フィンチ。」

「そのようにサインしたら、彼はあなたが誰であるかわかりません、ジェム。」

ジェムは自分の名前を消して「ジェム・フィンチ」と書きました。その下に「ジャン・ルイズ・フィンチ（スカウト）」と署名しました。ジェムはメモを封筒に入れました。

翌朝、学校に行く途中、彼は私の前を走って木に止まりました。

ジェムが顔を上げたとき、私の方を向いていて、彼が真っ白になっているのが見えました。

"スカウト！"

私は彼のところへ走った。

誰かが私たちの節穴をセメントで埋めたのだ。

「もう泣かないで、スカウト……もう泣かないで、心配しないで——」彼は学校に行くまでずっと私に向かってつぶやいていました。

私たちが夕食のために家に帰ると、ジェムは食べ物をボルトで締めてポーチに走り、階段に立った。私は彼の後を追った。「まだ通り過ぎていないよ」と彼は言った。

翌日、ジェムは徹夜を繰り返し、報われました。

「そうだね、ネイサンさん」と彼は言った。

「おはよう、ジェム、スカウト」とラドリー氏が通り過ぎながら言った。

"氏。ラドリー"とジェムは言った。

ラドリー氏は振り返った。

"氏。ラドリー、ああ、あそここの木の穴にセメントを入れたんですか？"

「はい」と彼は言いました。「埋めさせていただきました。」

「なぜそんなことをしたのですか、先生？」

「木が死にそうです。病気になったらセメントで塞ぐんだよ。それは分かっているはずだよ、ジェム。」

ジェムは夕方までそれ以上何も言わなかった。私たちが木の近くを通り過ぎると、彼はその木を瞑想的にセメントで軽くたたきながら、じつと物思いにふけていました。彼は自分自身に悪いユーモアを仕込んでいるように見えたので、私は距離を置きました。

いつものように、その夜、私たちは仕事から帰宅するアティカスに会いました。私たちが歩み寄ったとき、ジェムが言いました、「アティカス、あそここの木を見てください、先生。」

「何の木ですか、息子？」

「学校から来るラドリーの敷地の角にあるやつだよ。」

"はい？"

「あの木は枯れてしまったの？」

「いや、息子よ、私はそうは思いません。葉を見てください、すべて緑色でいっぱい、茶色の斑点はどこにもありません。」

「それは病気でもありませんか？」

「その木はあなたと同じくらい健康です、ジェム。なぜ？」

"氏。ネイサン・ラドリーは、それは死につつあると言いました。"

「まあ、そうかもしれないね。ラドリー氏は私たちよりも彼の木についてよく知っていると言っています。」

アティカスは私たちをポーチに残しました。ジェムは柱に寄りかかり、肩をこすりつけた

それ。

「かゆみはありますか、ジェム？」できるだけ丁寧に質問させていただきました。彼は答えなかった。"来て

入って、ジェム」と私は言った。

"しばらくして。"

彼は夜になるまでそこに立っていて、私は彼を待ちました。私たちが家に入ると、彼は泣いているのが見えました。彼の

顔は適切な場所で汚れていましたが、私はそれが奇妙だと思いました

私は彼の言うことを聞いていなかった。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第8章

メイコム郡で最も経験豊富な預言者たちにも理解できない理由で、

その年は秋から冬に変わりました。アティカス氏によると、1885年以来最も寒い天候が2週間続いたという。エイブリー

一氏は、子供たちが親に背き、タバコを吸い、互いに戦争をすると季節が変わるとロゼッタ・ストーンに書かれてい

ると語った。ジェムと私は、自然の異常に加担し、それによって引き起こされた悪影響に加担したという罪悪感を背

負っていた。私たちの隣人の不幸と、

自分たち自身への不快感。

ラドリー老夫人はその冬に亡くなりましたが、彼女の死はほとんど波紋を呼びませんでした。近所の人たち

は、彼女がカンナに水をやるとき以外は彼女の姿をほとんど見ませんでした。ジェムと私は、ついにブーが彼女

を手に入れたと決心しましたが、アティカスがラドリーの家から戻ったとき、彼は彼女が自然死したと言いました。

「彼に聞いてください」ジェムはささやきました。

「彼に聞いてみると、あなたが最年長です。」

「だから彼に聞いてみるべきだよ。」

「アティカス、アーサーさんを見ましたか？」と私は言った。

アティカスは新聞の周りで私を厳しい目で見ました。「私はそうではありませんでした。」

ジェムはそれ以上の質問を私に控えさせた。彼は、アティカスはまだ私たちとラドリー夫妻について気を使っ

ているので、無理に押しつけることは意味がないと語った。ジェムには考えがありました

アティカスは、昨夏のあの夜の私たちの活動はストリップ・ポーカーだけに限定されていないと考えていたようだ。ジェムには自分のアイデアに確固たる根拠はなく、単なる思いつきだったという。

翌朝、目が覚めて窓の外を見たとき、恐怖で死にそうになりました。私の叫び声で、半分割られたアティカスがバスルームから連れ出されました。

「世界は終わりだ、アティカス！何かしてください-！"私は彼を窓に引きずり込み、指をさしました。

「いいえ、そうではありません」と彼は言いました。"雪が降っています。"

ジェムはアティカスにこのままでいいのか尋ねた。ジェムも雪を見たことはありませんでしたが、知っていました

それは何だったのか。アティカスさんは、ジェムほど雪については詳しくないと語った。「でも、あんなに水っぽいと雨になると思いますよ。」

電話が鳴り、アティカスは応答するために朝食のテーブルを離れました。「あれはユーラ・メイだった」と戻ってきた彼は言った。「引用します。『メイコム郡では 1885 年以来雪が降っていないので、今日は学校がありません。』」

ユーラ・メイはメイコムの大手電話交換手でした。彼女は、広報、結婚式の招待状の発行、消火サイレンの鳴動、レイノルズ博士の不在時の応急処置の指示を任されていました。

アティカスがついに私たちに電話して注文し、窓の外ではなく皿を見るように言ったとき、ジェムは「雪だるまはどうやって作るの？」と尋ねました。

「まったく分かりません」とアティカスは言った。「皆さんにはそうなってほしくない残念ですが、雪だるまができるほどの雪が降るかどうかは疑問です。」

カルブルニアがやって来て、それが固着していると思うと言いました。裏庭に走ってみると、そこはうっすらと湿った雪の層で覆われていました。

「その中を歩き回るべきではありません」とジェムは言いました。「ほら、一步一步無駄だよそれ。」

私は自分のどろどろの足跡を振り返った。ジェムは、もう少し雪が降るまで待っていれば、雪だるまを作るためにすべてかき集められるだろうと言いました。舌を出して捕まえた脂肪フレーク。燃えました。

「ジェム、暑いよ！」

「いいえ、そうではありません、焼けるほど寒いです。もう食べないでください、スカウト、無駄ですよ。させてください降りてくる。」

「でも、その中を歩きたい。」

「分かった、ミス・モーディーの家に行ってもいいよ。」

ジェムは前庭を飛び越えた。私は彼の足跡をたどりました。私たちがミス・モーディーの前の歩道にいると、エイブリー氏が声をかけてきた。彼はピンク色の顔とベルトの下に大きなお腹を持っていました。

「自分が何をしたかわかりますか？」彼は言った。「アポマトックス以来、メイコムでは雪が降っていません。季節を変えるのはあなたのような悪い子供たちのせいです。」

エイブリー氏は、私たちが今年の夏にどれだけ希望を持って見ていたかを知っていたのだろうかと思いました。彼に自分のパフォーマンスを繰り返してもらい、これが私たちの報酬であるなら、罪には言うべきことがあると思いました。エイブリー氏が気象統計をどこで収集したのか不思議ではありませんでした。それらはロゼッタ ストーンから直接得られたものでした。

「ジェム・フィンチ、あなたはジェム・フィンチ！」

「ミス・モーディーがあなたに電話しています、ジェム。」

「皆さんは庭の真ん中に留まってください。ベランダの近くの雪の下に儉約品が埋もれています。踏まないでください！」

「イエッサム！」ジェムと呼ばれる。「とても美しいですね、ミス・モーディー？」

「美しい私の後ろ足！今夜凍ったら、うちのツツジが全部落ちてしまうよ！」

ミス・モーディーの古い日よけ帽は雪の結晶で輝いていました。彼女はいくつかの小さな茂みの上にかがみ込み、それらを麻袋で包みました。ジェムは彼女に何のためにそんなことをしているのかと尋ねました。

「暖かくしてね」と彼女は言った。

「花はどうやって暖かさを保てるの？それらは循環しません。」

「その質問には答えることができません、ジェム・フィンチ。私が知っているのは、もし今夜凍ったら、これらの植物が凍ってしまうだろう、だからあなたがそれらを覆い隠しておいてくださいということだけです。それは明らかですか？」

「イエッサム。ミス・モーディー？」

「何ですか、先生？」

「スカウトと私にあなたの雪を貸してもらえませんか？」

「天は生きている、すべてを受け取ってください！家の下に古い桃の籠があるので、その中で運び出してください。」ミス・モーディーは目を細めた。「ジェム・フィンチ、私の雪をどうするつもり？」

「わかるでしょう」とジェムが言い、私たちはミスからできるだけ多くの雪を移しました。

モーディの庭を私たちの庭に、泥臭い作業。

「どうする、ジェム？」私は尋ねた。

「わかるよ」と彼は言った。「さあ、バスケットを持ってきて、裏庭からかき集められるすべての雪を表まで運んでください。ただし、元の位置に戻りなさい」と彼は警告した。

「ジェム、雪の赤ちゃんを産むつもりですか？」

「いいえ、本物の雪だるまです。今は頑張らなきゃね。」

ジェムは裏庭に走り、庭用の鍬を出して、薪の山の後ろを素早く掘り始め、見つけた虫を脇に置きました。

彼は家に入り、洗濯かごを持って戻り、土を詰めて家まで運びました。

前庭。

土のかごが5つと雪のかごが2つあったとき、ジェムは言いました。

始める準備ができています。

「これはちょっと大変なことだと思いませんか？」私は尋ねた。

「今は散らかっているように見えますが、後でそうなることはありません」と彼は言いました。

ジェムは一腕分の土をすくい、それを山に叩きつけ、その上にさらに負荷を加え、胴体が完成するまでさらに負荷を加えた。

「ジェム、黒人の雪だるまなんて聞いたことないよ」と私は言った。

「彼は長くは黒人ではないでしょう」と彼はうめき声を上げた。

ジェムは裏庭からピーチツリーのスイッチをいくつか調達し、編んで曲げました
それらを骨に埋めて土で覆います。

「腰に手を当てている彼はステファニー・クロフォードに似ています」と私は言いました。「真ん中が太くて、二の腕が細い。」

「もっと大きくしてあげるよ。」ジェムは泥男に水をかけてさらに土を加えた。彼はしばらくそれを思慮深く眺め、それからフィギュアのウエストラインの下に大きなお腹を形作りました。ジェムは目を輝かせて私をちらりと見ました。エイブリーは雪だるまのような形をしていますよね？」

ジェムは雪をすくい、塗り始めました。彼は私に背中だけをカバーすることを許可し、公の部分は自分のために取っておきました。エイブリー氏は徐々に向きを変えた
白。

ジェムさんは木片を目、鼻、口、ボタンに使い、エイブリー氏を嫌な顔にすることに成功した。ストーブの薪の棒が絵を完成させました。ジェムが足を踏み入れた戻って彼の作品を鑑賞しました。

「素敵ですね、ジェム」と私は言いました。「彼はあなたと話しているようです。」

「そうですね？」彼は恥ずかしそうに言った。

私たちはアティカスが夕食のために家に帰ってくるのを待ちきれなかったが、電話して言った。

彼には大きな驚きがありました。前庭の裏庭の大部分を見て彼は驚いたようでしたが、私たちは素晴らしい仕事をしたと言いました。「あなたがどうやってそれをするつもりだったのか分かりませんでした」と彼はジェムに言いました。「でもこれからは、あなたがどうなるか心配することはありません、息子、あなたはいつでもアイデアを持っているでしょう。」

アティカスの褒め言葉にジェムの耳は赤くなったが、アティカスが後ずさりするのを見て、彼は鋭く顔を上げた。アティカスはしばらく雪だるまを目を細めた。彼はにっこり笑ってから笑った。「息子よ、あなたが将来何になるのか、私にはわかりません。エンジニアになるのか、弁護士になるのか、それとも肖像画家になるのか。あなたはここの前庭で名誉毀損に近い行為を行いました。

この男を変装しなければなりません。」

アティカスは、ジェムに自分の作品の前面を少し磨き、ほうきをストーブ用の薪に交換し、エプロンを着せるよう提案しました。

ジェムは、もしそうしたら雪だるまが泥だらけになって消えてしまうだろうと説明しました。

雪だるま。

「あなたが何かをする限り、私はあなたが何をするかは気にしません」とアティカスは言いました。「近所の人たちの似顔絵を作り歩くことはできません。」

「性格じゃないよ」とジェムは言った。「彼にそっくりですね。」

"氏。エイブリーはそうは思わないかもしれない。」

"いい考えがある！"ジェムは言いました。彼は急いで通りを横切り、ミス・モーディの裏庭に姿を消し、意気揚々と戻ってきました。彼は雪だるまの頭に日よけ帽をかぶり、生垣バリカンを雪だるまの腕の曲がり部分に押し込みました。

アティカスはそれでいいと言いました。

ミス・モーディは玄関のドアを開けてポーチに出ました。彼女は通りの向こう側で私たちを見た。突然彼女は笑い出した。「ジェム・フィンチ」と彼女は電話した。「悪魔め、帽子を取り戻してください、先生！」

ジェムはアティカスを見上げ、アティカスは首を振った。「彼女はただ大騒ぎしているだけだ」と彼は言った。

「彼女はあなたの業績に本当に感銘を受けています。」

アティカスはミス・モーディの家の歩道まで散歩し、そこで腕を振って会話を交わしたが、私が聞き取れた唯一のフレーズは「…あの庭に絶対的なモルフォダイトを建てた！」だった。アティカス、あなたは決して彼らを育てることはできません！」

午後には雪も止み、気温も下がり、夜になるとMさんは止まりました。

エイブリーの悲惨な予測は的中しました。カルプルニアでは家のすべての暖炉が燃え続けていましたが、私たちは寒かったのです。その夜、アティカスが帰宅したとき、彼は私たちがそのつもりだと言い、カルプルニアに一晩私たちと一緒にいたいかどうか尋ねました。

カルプルニアは高い天井と長い窓を見上げて、こう思ったと言った。
彼女は家にいるほうが暖かいでしょう。アティカスは彼女を家まで送った。

私が寝る前に、アティカスは私の部屋の火にさらに石炭をくべました。彼はこう言いました
体温計は16を示し、それは彼の記憶の中で最も寒い夜だった、そして
外の雪だるまが固く凍っていました。

数分後、誰かに揺さぶられて目が覚めたようです。アティカスの
オーバーコートが私全体に広がりました。「もう朝ですか？」

「ベイビー、起きて。」

アティカスは私のバスローブとコート差し出してくれた。「まずローブを着てください」と彼は言いました。

ジェムはアティカスの隣に立っており、頭がもうろうとして混乱していた。彼はオーバーコートの首を閉じた状態で、もう片方の手はポケットに突っ込んでいた。彼は奇妙に太って見えた。

「急いでください、お嬢さん」アティカスが言った。「これがあなたの靴と靴下です。」

愚かなことに、私はそれらを着ました。「朝ですか？」

「いえ、1時少し過ぎですよ。今すぐ急いでください。」

何かの間違ったことが、ようやく私に伝わりました。"どうしたの？"

その時までには彼は私に言う必要はありませんでした。雨が降ったときに鳥がどこに行くべきかを知っているように、私も通りでトラブルがいつ起こるかを知っていました。タフタのような柔らかな音とくぐもった走り回る音が私をどうしようもない恐怖で満たした。

"だれのですか？"

「ミス・モーディのです、ねえ」アティカスは優しく言った。

玄関のところで、ミス・モーディのダイニングルームの窓から火が噴いているのが見えました。

私たちが見たものを裏付けるかのように、町の火災のサイレンが高音まで鳴り響き、叫び声を上げながらそこに留まりました。

「もうなくなっただすよね？」ジェムはうめき声を上げた。

「そう予想しています」とアティカス氏は言った。「さあ、聞いてください、二人とも。下に降りてRadley Placeの前に立ってください。邪魔にならないでください、聞こえますか？風がどっちに吹いているか見てみましょう？」

「ああ」とジェムは言いました。「アティカス、家具の移動を始めるべきだと思いますか？」

「まだだよ、息子よ。私の言うとおりにしてください。今すぐ実行。スカウトの世話をしてください、そうですか？させないでください

彼女をあなたの視界から遠ざけてください。」

アティカスの背中を押して、私たちはラドリーの正門に向かって出発した。私たちは立って見ていた通りは人々とで埋め尽くされ、火は静かにミス・モーディの家を焼き尽くした。

「なぜ急がないのか、なぜ急がないのか…」とジェムがつぶやいた。

その理由が分かりました。寒さで死んだ古い消防は町から押し出された大勢の男たちによって。男たちがホースを消火栓に接続すると、ホースが破裂し、水が吹き上がり、歩道にチリンチリンと音を立てた。

「ああ、主よ、ジェム…」

ジェムは私の腕に腕を回した。「黙ってる、スカウト」と彼は言った。「まだ心配する時期ではない。いつになったらお知らせします。」

メイコムの子供たちは、あらゆる程度の服を着たり脱いだりして、ミス・モーディの家から家具を通りの向かい側の庭まで運びました。私はアティカスがミス・モーディの重いオーク材のロッキングチェアを運んでいるのを見て、彼女のものを守るのが賢明だと思いました。

最も大切にされています。

時々叫び声が聞こえました。するとエイブリー氏の顔が二階の窓に現れた。彼はマットレスを窓から通りに押し出し、男たちが叫ぶまで家具を投げ捨てた。「ディック、そこから降りろ！」階段が進んでいきます！

そこから出てください、エイブリーさん！」

エイブリー氏は窓から登り始めた。

「スカウト、彼は動けなくなりました…」とジェムは息を呑んだ。「ああ神様…」

エイブリー氏はしっかりと締め付けられた。私はジェムの腕の下に頭を埋め、ジェムが叫ぶまで二度と見ませんでした。彼は大丈夫だよ！」

見上げると、エイブリーさんが二階のポーチを横切っているのが見えました。彼は手すりの上で足を振り上げ、柱を滑り落ちたときに滑り落ちた。彼は転んで叫び、ミス・モーディの植え込みにぶつかった。

突然、男たちがミス・モーディの家から後ずさりして、通りを私たちに向かって進んでいるのに気づきました。彼らはもう家具を運んでいませんでした。火は2階まで燃え上がり、屋根の窓まで燃え上がっていました。

フレームは鮮やかなオレンジの中心に対して黒でした。

「ジェム、カボチャみたいですわね——」

「スカウト、見てください！」

煙が川岸の霧のように私たちの家とミス・レイチェルの家から立ち上り、男たちがホースを彼らに向かって引っ張っていました。私たちの後ろで、アボッツビルから来た消防が叫び声を上げながらカーブを曲がり、家の前で止まりました。

「あの本は…」と私は言いました。

"何？"ジェムは言いました。

「あのトム・スウィフトの本、それは私のものではありません、ディルのものです…」

「心配しないでください、スカウト、まだ心配する時期ではありません」とジェムは言いました。彼が指摘しました。「あそこを見てください。」

近所の人たちのグループの中で、アティカスさんはコートのポケットに手をつっ込んで立っていた。彼はフットボールの試合を見ていたかもしれない。ミス・モーディがそばにいました
彼。

「ほら、彼はまだ心配していないよ」とジェムは言いました。

「なぜ彼は家の屋上にいないのですか？」

「彼は年をとりすぎているので、首の骨を折ってしまうでしょう。」

「彼に私たちのものを取り出させるべきだと思いますか？」

「彼を困らせるのはやめましょう。その時が来たら彼は分かるでしょう」とジェムは言いました。

アボッツビルの消防が私たちの家に水を送り始めました。屋上の男性は最も必要な場所を指さした。私は絶対モルフォダイトが黒くなり、崩れ去るのを見ました。ミス・モーディの日よけ帽が山の上に収まりました。彼女の生垣バリカンの姿は見えませんでした。私たちの家、ミス・レイチェルの家とミス・モーディの家の間の暑さの中、男たちはとっくの昔にコートとバスローブを脱ぎ捨てていた。彼らはそこで働いていました

パジャマの上着とナイトシャツをズボンの中に詰め込みましたが、自分が立っている場所が徐々に凍り付いていることに気づきました。ジェムは私を温めようとしてくれましたが、腕だけでは十分ではありませんでした。私はそれから手を離し、肩を抱きしめた。少し踊ればできる

私の足を感じてください。

別の消防が現れ、ステファニー・クロフォードさんの家の前に止まりました。

別のホースを接続できる消火栓がなかったので、男たちは彼女の家を水浸しにしようとした。

手の消火器。

ミス・モーディのトタン屋根が炎を鎮めた。轟音とともに家が倒壊した。いたるところで火が噴出し、続いて屋根の上に男たちが毛布を大量に投げつけた。

隣接する家々から火花が飛び散り、木の塊が燃え上がります。

夜が明けると、男たちは最初は一人ずつ、次にグループになって出発し始めた。彼らはメイコム消防を押して町に戻し、アボッツビルの消防は出発した。

3番目が残りました。翌日、それが60マイル離れたクラークス・フェリーから来たことが分かりました。

ジェムと私は通りを横切って滑りました。ミス・モーディは煙る黒人を見つめていた

アティカスさんは首を振って話したくないと言った。彼は私たちを家まで導き、肩を抱いて凍った道を渡った。彼は、ミス・モーディは当分の間、ミス・ステファニーと一緒にいるだろうと言いました。

「誰かホットチョコレートが欲しい人はいますか？」彼は尋ねた。アティカスが始まったときは震えたキッチンコンロの火災。

ココアを飲みながら、アティカスが最初は好奇の目で私を見ていることに気づきました。

厳しく。「あなたとジェムにそこに留まるように言ったと思います」と彼は言った。

「なぜですか、私たちはそうしました。私たちは滞在-」

「それでは、その毛布は誰のものですか？」

"毛布？"

「はい、奥様、毛布です。それは私たちのものではありません。」

下を見ると、肩に掛けていた茶色のウールの毛布を、しゃがんだファッションで握りしめていることに気づきました。

「アティカス、分かりません、先生…私は――」

私はジェムに答えを求めましたが、ジェムは私以上に当惑していました。彼は言いました。

彼はどうやってそこにたどり着いたのか分からなかった、私たちはアティカスに言われたとおりに行動し、立ったままだった

ラドリーの門のそばでみんなから離れて、私たちは一歩も動かなかった——ジェムは立ち止まった。

"氏。「ネイスンは火のそばにいたよ」と彼はせせらぎ言った、「私は彼を見た、私は彼を見た、彼はそのマットレスを引っ張っていた——アティカス、誓う…」

「それでいいよ、息子よ」アティカスはゆっくりと笑った。「今夜はメイコムの全員が何らかの形で外出していたようだ。ジェム、食品庫に包装紙があると思うよ。取りに行って、そうすれば——」

「アティカス、いや、先生！」

ジェムは正気を失ったようだった。彼は、自分自身の安全ではないにしても、私の安全をまったく無視して、私たちの秘密を右に左に注ぎ始め、節穴、ズボン、すべてを何も省略しませんでした。

"…氏。ネイスンがあつた木にセメントを入れたんだよ、アティカス、彼は私たちが何かを見つけるのを止めるためにやったんだ——よく言われるように、彼は頭がおかしいと思うけど、でもアティカス、神に誓うよ、彼は私たちに危害を加えたことは一度もなかった、彼はしてない「私たちが傷つけたことは一度もありません。その夜、彼は私の喉を耳から耳まで切り裂いたかもしれませんが、代わりに私のズボンを直そうとしました…彼は私たちが傷つけたことは一度もありません、アティカス-」

アティカスが「おお、息子よ」ととても優しく言ってくれたので、私はとても勇気づけられました。アティカスが言ったのは「あなたの言うとおりです。ジェムの言葉に従わなかったのは明らかです。」

これと毛布は独り占めしておいたほうがいいでしょう。いつか、スカウトは彼女をかばってくれたことに感謝できるかもしれない。」

「誰に感謝しますか？」私は尋ねた。

「ブー・ラドリー。あなたは火を見るのに忙しかったので、彼があなただの周りに毛布をかけてくれたとき、それに気づかなかったのです。」

ジェムが毛布を差し出して私に近づいてきたとき、私のお腹は水になり、吐きそうになりました。「彼はこっそり家から出て——向きを変えて——こっそり近づいてきて、こうなりました！」

アティカスは「これでさらなる栄光を手に入れようと思わないでください、ジェレミー」とドライに言った。

ジェムは顔をしかめた、「彼に何もするつもりはない」だが、私は新鮮な冒険の火花が彼の目から離れていくのを眺めた。「考えてみてください、スカウト、もしあなたが向きを変えていたら」と彼は言った。

周りで彼を見たことがあるでしょう。」

カルプルニアは正午に私たちを起こしました。アティカスは、その日は学校に行く必要はない、一睡もしないと何も学べないと言っていった。カルプルニアは私たちに浄化してみろと言った

前庭。

ミス・モーディの日よけ帽は、琥珀の中のハエのように薄い氷の層にぶら下がっており、私たちは彼女の生垣バリカンを見つめるために土の下を掘らなければなりませんでした。私たちは彼女が裏庭で凍って焦げたツツジを見つめているのを見つけた。「あなたのものを取り戻します。」

ミス・モーディ」とジェムは言いました。「大変申し訳ございません。」

ミス・モーディは周りを見回したが、昔の笑顔の影が彼女の顔を横切った。

「いつも小さい家が欲しかったんです、ジェム・フィンチ。もっと庭をくれます。考えてみてください、これでツツジを植えるスペースがさらに増えるでしょう！」

「あなたは悲しんでいませんか、ミス・モーディ？」私は驚いて尋ねました。アティカスさんによると、彼女の家は

彼女が持っていたものはほろぼすべしだった。

「悲しんでるの、子供？だって、私はあの古い牛舎が大嫌いだったんです。自分で何百回も火をつけようと思ったけど、閉じ込められちゃうからね。」

"しかし-"

「私のことは心配しないでください、ジャン・ルイズ・フィンチ。あなたの知らないことをする方法があります。いいですか、小さな家を建てて下宿を何人か連れて行きます。そして—ありがたいことに、アラバマで一番素晴らしい庭を持ってあげるのです。私が始めると、あのベリングラスはまったくちっぽけに見えるでしょう！」

ジェムと私は顔を見合わせた。「どうでしたか、ミス・モーディ？」彼は尋ねた。

「分からないよ、ジェム。おそらくキッチンの排気ガスでしょう。昨日の夜、鉢植えのために火を焚き続けました。昨夜、予期せぬ仲間がいたそうですが、ジャン・ルイズさん。」

「どうやって知ったんですか？」

「アティカスは今朝、町に向かう途中で私にこう言いました。本当のことを言うと、私はあなたと一緒にいたかったので。そして、私にも方向転換するのに十分な分別があっただろう。」

ミス・モーディは私を困惑させた。彼女の所有物のほとんどと彼女の愛する人を失った

庭がめちゃくちゃになっても、彼女はそれでもジェムと私のことに活発で心からの関心を示してくれました。

彼女は私の困惑を察知したに違いない。彼女は、「昨夜心配したのは、それが引き起こしたあらゆる危険と騒ぎだけでした。この近所全体

上がったかもしれない。エイブリー氏は一週間寝込むことになるが、まさに元気だ。彼はそのようなことをするには年をとりすぎているので、私は彼にそう言いました。すぐに手がきれいになり、ステファニー・クロフォードが見ていないときに、レーン・ケーキを作ってあげます。それ

ステファニーは30年間私のレシピを追い求めています、私が彼女と一緒にいるからといって私がそれを彼女に与えると考えているなら、彼女は別の考えを持っているでしょう。」

ミス・モーディが泣き崩れて彼女にそれを渡しても、ミス・ステファニーはどうせそれに従うことはできないだろうと私は反省した。ミス・モーディが一度私にそれを見せてくれたことがありました。とりわけ、そのレシピには大きなカップ1杯の砂糖が必要でした。

静かな一日でした。空気はとても冷たくて澄んでいて、正時を迎える前に裁判所の時計がカチャカチャとカタカタと緊張する音が聞こえました。ミス・モーディの鼻は私の色でした。見たことがなかったので、調べてみました。

「私は6時からここにいます」と彼女は言いました。「もう凍結されているはずですよ。」彼女は手を上げた。小さな線の網目が彼女の手のひらを横切り、汚れで茶色になった。そして乾いた血。

「あなたが彼らを台無しにしました」とジェムは言いました。「有色人種の男を手に入れてみませんか？」「あるいはスカウト、私たちがあなたを助けますよ」と彼が付け加えたとき、彼の声には犠牲の気配はなかった。

ミス・モーディは「ありがとう、でもあなたには向こうで自分の仕事があるのよ。」と言いました。彼女は私たちの庭を指さした。

「モルフォダイトのことですか？」私は尋ねた。「撃て、すぐに彼をかき集めることができるよ。」

ミス・モーディは私を見つめ、静かに唇を動かしました。突然彼女は彼女を置きました。彼女の頭に手を当てて叫んだ。私たちが彼女と別れたとき、彼女はまだくすくす笑っていた。

ジェムは、彼女に何が起こったのか分からないと言いました、それはただのミスです。モーディ。

[目次](#) - [前へ](#) / [次へ](#)

第9章

「それは取り戻してもいいよ、坊や！」

私がセシル・ジェイコブスに与えたこの命令は、かなり薄い時代の始まりでした

ジェムと私のために。私の拳はしっかりと握られ、飛び立つ準備ができていました。アティカスは、これ以上私が戦っていると聞いたら、私を疲弊させると約束していた。私はそのような子供っぽいことをするにはあまりにも年を取りすぎていて、大きすぎました、そして私がそれを学ぶのが早ければ早いほど待っていればいるほど、みんなが良くなるだろう。すぐに忘れてしまいました。

セシル・ジェイコブスは私に忘れさせてくれました。彼は前日に校庭で、スカウト・フィンチの父親が黒人を擁護したと発表していた。私はそれを否定しましたが、ジェムに言いました。

「彼はどういふつもりでそれを言ったんですか？」私は尋ねた。

「何もないよ」とジェムは言った。「アティカスに聞けば教えてくれるでしょう。」

「あなたは黒人を擁護しますか、アティカス？」その夜、私は彼に尋ねました。

"もちろんするよ。黒人なんて言うなよ、スカウト。それはよくあることだよ。"

「学校みんながそう言ってます。」

「これからはみんなが一人減る――」

「そう、私がそんなふうに話すように育ててほしくないのなら、なぜ私をこんなところに送るの？」

学校？"

父は私を穏やかに見つめ、その目には楽しさを感じていました。私たちの妥協にもかかわらず、学校を避けるという私の運動は、薬を初めて服用して以来、何らかの形で続いていました。昨年の9月初旬には、沈没発作、めまい、軽い胃の不調を引き起こしました。私はレイチェル先生の料理人の息子の頭をこすりつける特権を得るために、一銭も払ったのですが、その息子はひどい白癬に悩まされていました。かかりませんでした。

しかし、私は別の骨を心配していました。「すべての弁護士は非黒人を擁護しますか、アティカス？」

「もちろんそうですよ、スカウト。」

「それでは、なぜセシルはあなたが黒人を擁護していると言ったのでしょうか？彼はまるであなたであるかのような言い方をした静止画を走らせてるよ。」

アティカスはため息をついた。「私はただ黒人、その名はトム・ロビンソンを擁護しているだけだ。彼は町のゴミ捨て場の向こうにある小さな集落に住んでいます。彼はメンバーです。カルプルニアの教会で、カルは家族のことをよく知っています。彼女は彼らが清潔な生活をしている人々だと言いました。スカウト、あなたはまだ物事を理解できるほどの年齢ではありませんが、街中では、私がこの男を守るためにあまりやるべきではないという趣旨の話題になっています。これは特殊な事件で、夏の会期まで裁判が開かれぬ。ジョン・テイラーは親切にも延期を許可してくれました…」

「彼を擁護すべきでないなら、なぜ擁護するのですか？」

「理由はたくさんあります」とアティカス氏は語った。「一番の問題は、もしそうじゃなかったら、できなかったということだ」

町では頭を上げろ、私は議会でこの郡を代表することはできなかった、あなたやジェムに二度と何かをしないように言うことさえできなかった。」

「つまり、もしあなたがあの男を擁護じゃなかったら、ジェムと私はあなたのことを気にする必要がなかったでしょうもう？」

「それはその通りです。」

"なぜ？"

「だって、もう二度と私のことを気にしてくれなんて頼めないから。スカウト、仕事の性質上、どんな弁護士も一生に少なくとも一度は、自分に影響を与える事件を経験することになる。これは私のものだと思います。学校でそれについての醜い話が聞こえるかもしれませんが、もしよろしければ、私のために一つのことをしてください。ただ頭を高く上げて拳を押し下げてください。誰があなたに何と言おうと、彼らにあなたのことを理解させないでくださいヤギ。変化を求めて自分の頭と戦ってみてください…たとえ学習に抵抗があるとしても、それは良いことです。」

「アティカス、勝てるの？」

「いいえ、ハニー。」

"それでなんで-"

「我々がスタートする100年前になめられていたからといって、我々が勝利を目指さない理由にはならない」とアティカス氏は語った。

「いとこのアイク・フィンチみたいだね」と私は言った。いとこのアイク・フィンチはメイコム郡で唯一生き残った南軍退役軍人であった。彼はフッド将軍のようなひげを生やしていたが、それはあまりにも無駄だった。少なくとも年に一度はアティカス、ジェム、そして私が彼を訪ねると、私は彼にキスをしなければならなかった。ひどいものでした。ジェムと私は聞きます

アティカスと従兄弟のアイクに敬意を表して戦争を蒸し返す。「教えてよ、アティカス」いとこのアイクはよく言った、「ミズーリ妥協が私たちを悩ませただけど、もしもう一度それを経験しなければならないなら、私は前と同じように一歩ずつ歩き、一步一步後退するだろう」さらに今度は彼らを鞭打ちするだろう…今は1864年、

ストーンウォール・ジャクソンがやって来ました——若い皆さん、ごめんなさい。あの時は青き光が天国にあった、神よその聖人のような眉を休めて…」

「こっちにおいて、スカウト」とアティカスが言った。私は彼の膝に這って頭を押し込んだ

彼のあごの下に。彼は私の周りに腕を置き、優しく私を揺さぶりました。"違います

今度は」と彼は言った。「今回はヤンキースと戦うのではなく、友人と戦うのだ。でもこれを覚えておいてください、どんなに辛いことがあっても、それはまだ私たちのものです
友達、そしてここは今でも私たちの家です。」

これを念頭に置き、翌日、私は校庭でセシル・ジェイコブスにこう言いました。「それを取り戻すつもりですか？」

「まず私を作らなきゃ！」彼は叫んだ。「うちの人たちは、君のお父さんは恥ずべき人だ、あの黒人は水槽から吊るされるべきだと言っていたよ！」

私は彼にビーズを描き、アティカスが言ったことを思い出し、拳を下ろしました

「スカウトは牛だ——病棟だ！」と言いながら立ち去った。耳鳴りがする。喧嘩から逃げたのは初めてだった。

どういわけか、私がセシルと戦ったら、アティカスががっかりさせるでしょう。アティカスがジェムに尋ねることはめったになかった

そして私が彼のために何かをするなら、彼のために卑怯者と言われても仕方ありません。私はそれを思い出したことに非常に高貴な気持ちになり、3週間の間高貴であり続けました。

そしてクリスマスがやって来て、災害が起こりました。

ジェムと私は複雑な気持ちでクリスマスを祝いました。良い面は木とジャック・フィンチおじさんでした。毎年クリスマスイブの日、私たちはメイコム・ジャンクションでジャックおじさんに会い、一週間一緒に過ごしました。

コインを投げると、アレクサンドラお婆さんの妥協のない血統が明らかになりました

そしてフランシス。

アレクサンドラ叔母さんの夫であるジミー叔父さんも含めるべきだと思いますが、彼は私の人生で一度「柵から出て行け」と言った以外は私に一言も話したことはなかったので、私は彼に注意を払う理由がまったく見つかりませんでした。アレクサンドラお婆さんもそうではなかった。昔、ジミーお婆さんとジミーおじさんは、爆発的な友情の中で、次のような名前の息子を産みました。

ヘンリーは人間として可能な限り早く家を出て結婚し、フランシスを産みました。ヘンリーと彼の妻は、毎年クリスマスにフランシスを祖父母の家に預け、その後は自分たちの楽しみを追求しました。

どんなにため息をついても、アティカスが私たちにクリスマスの日を家で過ごさせてくれることはなかった。

私の記憶では毎年クリスマスに私たちはフィンチズ・ランディングに行きました。お婆さんが料理が上手だったという事実は、宗教的なお金を費やすことを強いられた代償だった

フランス・ハンコックとの休暇。彼は私より一歳年上で、私は原則として彼を避けていました。彼は私が気に入らないことはすべて楽しんで、私の独創的なことは嫌いでした。

気分転換。

アレクサンドラおばさんはアティカスの妹でしたが、ジェムが取り替え子や兄弟について話してくれたとき、私は彼女が生まれたときに入れ替わったのではないかと、祖父母がフィンチではなくクロフォードをもらったのではないかと思いました。もし私が神秘的なものを抱いていたとしたら

山についての概念は弁護士や裁判官にとりつかれているように見えますが、アレクサンドラおばさんはエベレストに似ていたでしょう。私の幼少期を通じて、彼女はそうでした。

寒いし、そこにある。

ジャックおじさんがクリスマスイブの日に電から飛び降りたとき、私たちはポーターが彼に2つの長い荷物を手渡すのを待たなければなりません。ジェムと私は、ジャックおじさんがアティカスの頬をつついたとき、いつも面白いと思っていました。彼らは私たちがこれまでにキスしているのを見た唯一の二人の男でした。ジャックおじさんはジェムと握手して、私を高く持ち上げてくれましたが、十分な高さではありませんでした。ジャックおじさんはアティカスよりも頭ひとつ背が低かったのです。彼は家族の赤ん坊で、アレクサンドラおばさんよりも若かった。彼と叔母さんは似ていましたが、ジャック叔父さんは彼の顔をうまく利用していました。私たちは彼の鋭い鼻を決して警戒しませんでした。

顎。

彼は私を決して怖がらせなかった数少ない科学者の一人でした。それはおそらく彼が決して医師のような態度をとらなかったからでしょう。彼はジェムと私のために足の破片を取り除くなどの小さな奉仕をするたびに、自分が何者であるかを正確に私たちに話しました。

これから行くこと、それがどのくらいの痛みを引き起こすかを推定し、彼が使用したトングの使用方を説明してください。あるクリスマス、私は足にひねった破片を抱えながら隅っこに潜み、誰も私に近づくことを許さなかった。

ジャックおじさんが私を捕まえたとき、ある説教師のことを笑わせてくれました。彼は教会に行くのが大嫌いで、毎日ガウンを着て門の前に立ち、水タバコを吸いながら、希望する通行人に5分間の説教をしていたそうです。精神的な慰め。私はジャックおじさんにいつそれを取り出すかを教えてもらうために中断しましたが、彼は

彼は血の付いた破片をピンセットで持ち、私が笑っている間にそれを引っ張ったと言いました、それが相対性理論として知られているものでした。

「あのパッケージには何が入っているの？」私は細長い包みを指差しながら彼に尋ねました。

ポーターが彼にくれた。

「あなたには関係ないよ」と彼は言った。

ジェムは「ローズ・アイルマーの調子はどう？」と言いました。

ローズ・アイルマーはジャックおじさんの猫でした。彼女は美しい黄色の女性で、ジャックおじさんが永遠に耐えられる数少ない女性の一人だと言っていました。彼はコートのポケットに手を入れ、スナップ写真を何枚か取り出した。私たちは彼らを賞賛しました。

「彼女は太ってきている」と私は言った。

「そう思うはずだ。彼女は病院で残った指と耳をすべて食べます。」

「ああ、それはひどい話ですね」と私は言いました。

"何とおっしゃいましたか？"

アティカスは言った、「彼女には注意しないでください、ジャック。彼女はあなたを試しているのです。カルはここ一週間流暢に悪口を言っているそうです。」ジャックおじさんは眉を上げて何も言わなかった。私は、そのような言葉が本来持っている魅力は別として、もし私が学校でそれを拾ったことをアティカスが知ったら、彼は私を行かせないだろうという漠然とした理論を進めていました。

しかし、その夜の夕食のとき、私が彼にハムを渡してくださいと頼んだとき、ジャックおじさんは私を指さしました。「また会いましょう、お嬢さん」と彼は言った。

夕食が終わると、ジャックおじさんはリビングルームに行き、座りました。彼は私が膝の上に座るように太ももをたたきました。私は彼の匂いを嗅ぐのが好きでした。彼はアルコールのボトルのような、心地よい甘いものようでした。彼は私の前髪を押し上げて私を見つめました。「あなたは母親よりもアティカスに似ています」と彼は言いました。「あなたも

パンツから少し伸びてるよ。」

「ぴったり合っていると思います。」

「あなたは今、クソとか地獄といった言葉が好きですね？」

私はそう思うと言いました。

「まあ、私はそうしません」ジャックおじさんは言いました。「彼らに関連した極端な挑発がない限り、そうではありません。私はここに一週間滞在しますが、ここにいる間はそのような言葉は聞きたくありません。スカウトさん、そんなこと言っていると困るよ。大人になって女性になりたいですね？」

特に無いと言いました。

「もちろんそうですよ。さあ、木に行きましょう。」

寝るまでツリーを飾り、その夜は二人の夢をずっと見ていました

ジェムと私への荷物。翌朝、ジェムと私は彼らのために潜りました。彼らはアティカス出身で、ジャック叔父さんに手紙を書いて私たちに届けてくれました。

私たちが求めていたのです。

ジェムがテレビの写真を狙うと、「家の中に向けないでください」とアティカスが言った。壁。

「彼らに撃ち方を教えないといけないよ」とジャックおじさんは言った。

「それがあなたの仕事です」とアティカスは言った。「私はただ避けられないことに屈しただけです。」

私たちを木から引き離すには、法廷でのアティカスの声が必要でした。彼は許可することを拒否した。私たちがエアライフルをランディングに持って行き（私はすでにフランスを撃つことを考え始めていました）、もし私たちが一歩間違えれば、彼はそれらを私たちから永久に取り上げると言いました。

フィンチズ ランディングは、高い崖を下り、栈橋で終わる 366 段の階段で構成されていました。さらに下流の断崖の向こうには、古い綿花上陸場の跡があり、ここではフィンチ黒人が俵や農作物を積み込み、氷、小麦粉、砂糖、農機具、女性用衣類の塊を降ろしていました。川沿いから二重わだちの道が伸び、暗い木々の中に消えていった。道路の突き当りには二階建ての白い家があり、その上階と階下にポーチが取り囲んでいた。私たちの先祖であるサイモン・フィンチは、高齢になって、口うるさい妻を喜ばせるためにこの建物を建てました。しかし

ポーチもあり、その時代の普通の家との類似点はすべて終わりました。フィンチ家の内部の取り決めは、サイモンの無邪気さと子孫に対する絶対的な信頼を示していた。

2階には寝室が6つあり、そのうち4つは8人の女兒用、1つは一人息子のウェルカム・フィンチ用、もう1つは訪問する親戚用でした。十分にシンプルです。しかし、娘たちの部屋には1つの階段でしかアクセスできず、ウェルカムの部屋とゲストルームには別の階段でしかアクセスできませんでした。娘たちの階段は両親の1階の寝室にあったため、サイモンは娘たちの夜間の出入りの時間を常に知っていました。

家の他の部分から独立したキッチンがあり、そこに木製のキャットウォークが取り付けられていました。裏庭のポールには錆びた鐘があり、現場の隊員を呼んだり救難信号として使われていました。やもめの散歩道は屋上にありましたが、やもめは誰もそこを歩きませんでした。シモンは屋上から監督を監督し、川船を眺めました。

周囲の地主の暮らしを見つめた。

この家には、ヤンキースに関するよくある伝説があった。婚約したばかりのフィンチの女性は、近所の襲撃者から家を守るために、完全に揃ったトルソーを着た。彼女は娘たちの階段のドアにはまってしまいましたが、

水をかけられて、最後には押し通されました。ランディングに到着すると、

アレクサンドラお婆さんはジャックおじさんにキスし、フランシスはジャックおじさんにキスし、ジミーおじさんはジャックおじさんと無言で握手をし、ジェムと私はフランシスにプレゼントを渡しました。ジェムは自分の年齢を感じ、大人たちに惹かれ、私がいとこを楽しませることに任せました。フランシスは8歳で、髪を後ろになでつけていました。

「クリスマスには何をもらいましたか？」私は丁寧に尋ねました。

「まさに私が求めていたものです」と彼は言いました。フランシスは、ニーパンツ、赤い革の本袋、シャツ 5 枚、そしてほどいた蝶ネクタイを要求しました。

「それはいいですね」と私は嘘をつきました。「ジェムと私はエアライフルを持っていて、ジェムは化学セットを持っていました」

「おもちゃだと思います。」

「いいえ、本物です。彼は私に目に見えないインクを作ってくれる、そして私は手紙を書くつもりだ

ディルを入れてください。」

フランシスはそれが何の役に立つのかと尋ねました。

「そうですね、彼が私から何も書かれていない手紙を受け取ったとき、彼の顔を見ることはできませんか？

それは彼を狂わせるだろう。」

フランシスと話していると、ゆっくりと世界の底に落ち着くような感覚が私に与えられました。

海。彼は私が今まで会った中で最も退屈な子供でした。彼はモビールに住んでいたため、学校当局に私のことを知らせることはできませんでしたが、なんとかアレクサンドラ叔母さんに自分の知っていることをすべて話しました。そして、叔母さんはアティカスに自分の重荷を下ろしました。アティカスはそれを忘れるか、私に地獄を与えたか、どちらか彼の気になった方を選んだのです。しかし、私がアティカスが誰かに対して鋭く話すのを聞いたのは、一度彼が「お姉さん、私は彼らに対してできる限りのことをします！」と言ったのを聞いたときだけです。それは私がオーバーオールを着て歩き回っていたことと関係がありました。

アレクサンドラお婆さんは私の服装の話題に熱心でした。パンツを履いていたら、女性になれるはずがありません。私がドレスでは何もできないと言ったら、彼女は私がパンツを必要とすることをすべきではないと言いました。アレクサンドラ叔母さんの私の振る舞いに対するビジョンには、小さなストーブやティーセットで遊んだり、私が生まれたときに彼女がくれたアド・ア・パールのネックレスをつけたりすることが含まれていました。さらに、私はそうあるべきです

父の孤独な人生に一筋の太陽の光が差し込んだ。私は、その 1 つが光線になる可能性があるかと提案しました。

パンツを履いても太陽の光を浴びるのは同じだが、お婆さんは、太陽の光のように振る舞わなければならない、私は生まれつきは善良だったが、年々どんどん悪くなった、と言いました。

彼女は私の気持ちを傷つけ、永久に歯が立たなくなったが、私が尋ねたとき、

それについてアティカスは、家族にはすでに十分な太陽光線があり、

私の仕事を続けてください、彼は私がそうであったように、私をあまり気にしませんでした。

クリスマスディナーのとき、私はダイニングルームの小さなテーブルに座っていました。ジェムとフランシスは座っていました

大人たちと食卓を囲む。ジェムとフランシスが卒業して大舞台上上がった後も、お婆さんはずっと私を孤立させ続けていました。私はよく疑問に思いました、彼女は私が立ち上がって何かを投げるだろうとどう思ったのでしょうか？私は時々、彼女に一度でいいから他の人々と一緒に大きなテーブルに座らせてくれないか、尋ねてみようと思った。私がどれほど文明的な人間であるかを彼女に証明してやるからである。結局、私は大きな事故もなく毎日家で食事をしていました。

私がアティカスに自分の影響力を行使してほしいと懇願したとき、彼は自分にはそんな力はない、と言いました。私たちはゲスト

であり、彼女が座るように言った場所に座りました。また、アレクサンドラお婆さんは女の子のことをあまり理解しておらず、女の子を持ったこともなかったとも述べた。

しかし、彼女の料理はすべてを補ってくれました。3種類の肉、食料庫の棚にある夏野菜。桃のピクルス、2種類のケーキ、アンブロシアでささやかなクリスマスディナーとなった。その後、大人たちは次の準備をしました。

リビングルームでボーッと座っていました。ジェムは床に横たわり、私は裏庭に行きました。「コートを着なさい」アティカスが夢見心地で言ったので、私には聞こえませんでした。

フランシスは裏手の階段で私の隣に座りました。「これまでで最高でした」と私は言いました。

「お婆あちゃんは素晴らしい料理人だよ」とフランシスは言いました。「彼女がその方法を教えてくれるでしょう。」

「男の子は料理をしません。」エプロンを着たジェムのことを考えてクスツと笑った。

「お婆あちゃんは、男はみんな料理を学ぶべきだ、男は妻に気をつけて、気分が悪いときは妻の世話をすべきだと言っています」と私のいとこは言いました。

「ディルに待たせたくないんだ」と私は言った。「私はむしろ彼を待ちたいと思います。」

「ディル？」

"うん。それについてはまだ何も言えませんが、私たちは十分に大きくなったらすぐに結婚するつもりです。去年の夏、彼は私に尋ねました。」

フランシスは野次った。

「彼に何があったの？」私は尋ねた。「彼には何も問題はないよ。」

「つまり、あの小さなお婆あちゃんが、毎年夏にレイチェル先生のところに泊まると言っているということですか？」

「それがまさに私が言いたいことです。」

「私は彼のことをすべて知っています」とフランシスは言った。

"彼についてはどうですか？"

「おばあちゃんは、家がないと言っています。」

「そうですね、彼はメリディアンに住んでいます。」

「——彼は親戚から親戚へと引き継がれるだけで、ミス・レイチェルが毎年夏に彼を引き取ってくれるんです。」

「フランシス、そんなことないよ！」

フランシスは私に笑いました。「君は時々すごくバカになるんだよ、ジャン・ルイズ。推測してください

でも、それ以上は分かりません。」

"どういう意味ですか？"

「おばあちゃんが言うように、アティカスおじさんが野良犬を連れて走り回らせても、それは彼の勝手ですから、あなたのせいではありません。アティカスおじさんが黒人愛好家であるとしても、それはあなたのせいではないと思いますが、私がここに来たのは、それが他の人たちを確かに悔しくさせることであることをあなたに伝えたいです
家族の-

「フランシス、一体どういう意味ですか？」

「まさに私が言ったことです。おばあちゃんは、あなたたちを野放しにするのは十分に悪いことだと言いますが、今では彼は黒人愛好家であることが判明し、私たちは二度とメイコムの通りを歩くことができなくなります。彼は家族を台無しにしている、それが彼のやっていることだ。」

フランシスは立ち上がり、キャットウォークを古いキッチンまで全力疾走した。安全な距離を置いて彼は「彼はただの黒人愛好家だ！」と呼びかけた。

"彼ではない！"私は叫びました。「何言ってるのか分からないけど、やめた方がいいよ」

この真っ赤な瞬間を終わらせてください！」

私は階段から飛び降りてキャットウォークを駆け下りました。フランシスに首輪をつけるのは簡単だった。早く元に戻ってっ
て言いました。

フランシスは体を緩め、古いキッチンに急いで向かいました。「黒人愛好家！」彼は叫んだ。

獲物を狙うときは、時間をかけるのが最善です。何も言わず、そして確実に

卵、彼は興味を持って現れます。フランシスがキッチンのドアのところに現れた。

「まだ怒ってるの、ジャン・ルイズ？」彼はためらいながら尋ねた。

「何も話すことはないよ」と私は言った。

フランシスがキャットウォークに出てきた。

「それを取り戻すつもりですか、フラ、アンシス？」しかし、ドローが速すぎた。フランシスがキッチンに撃ち返したので、私は階段に退いた。辛抱強く待つことができました。おそらく5分ほどそこに座っていたとき、アレクサンドラおばさんがこう話すのが聞こえました。

フランシス？」

「彼は向こうのキッチンにいるよ。」

「彼はそこでプレーしてはいけないことを知っている。」

フランシスがドアのところに来て叫びました。

出さないよ！」

「これは一体何ですか、ジャン・ルイズ？」

私はアレクサンドラおばさんを見上げた。「私は彼をそこにに入れていません、おばさん、私は保持していません」彼。"

「そうです、彼女は」とフランシスは叫びました。「彼女は私を外に出してくれません！」

「みんな大騒ぎしてた？」

「ジャン・ルイズが怒ったんだよ、おばあちゃん」とフランシスが電話した。

「フランシス、そこから出てきて！ジャン・ルイズ、もしあなたから別の言葉が聞こえたら、あなたのお父さんに伝えます。さっきあなたがひどいことを言っていたのを聞きましたか？」

「ノーム」

「そうだと思った。もう聞かないほうがいいよ。」

アレクサンドラおばさんは裏庭の聞き手でした。彼女が見えなくなった瞬間、フランシスは顔を上げて笑いながら出てきた。「私をだまさないでください」と彼は言いました。

彼は庭に飛び込み、距離を保ちながら草の束を蹴り、時折振り返って私に微笑みました。ジェムはポーチに現れ、私たちを見て立ち去りました。フランシスはミモザの木に登って降りて、ポケットに手を入れて庭を散歩しました。「ハッ！」彼は言った。私は彼に、自分が誰だと思いか尋ねました、ジャックおじさん？フランシスは、私がただそこに座っていないと言われたと思ったと言いました

そして彼を放っておいてください。

「迷惑かけてないよ」と私は言った。

フランシスは私を注意深く見て、私が十分に鎮圧されていると判断し、「黒人恋人…」と静かにうなずきました。

今度は、彼の前歯の骨まで指の関節を切り裂いてしまいました。左が障害のある私は、右手で入ったが、長くは続かなかった。ジャックおじさんは私の両腕を脇に押さえつけて、「じっとして！」と言いました。

アレクサンドラお婆さんはフランシスコに奉仕し、一緒に涙をぬぐいました。ハンカチで髪をこすり、頬を撫でる。フランシスが叫び始めたとき、アティカス、ジェム、そしてジミーおじさんが裏玄関に来ていた。

「誰がこれを始めたのですか？」ジャックおじさんは言いました。

フランシスと私はお互いを指差しました。「お婆あちゃん」と彼は叫びました。「彼女は私を売春婦と呼んで、私に飛びついたのです！」

「それは本当ですか、スカウト？」ジャックおじさんは言いました。

「そうだと思います。」

ジャックおじさんが私を見下ろしたとき、彼の顔立ちはアレクサンドラお婆さんに似ていました。

「そんな言葉を使うと大変なことになるって言ったでしょ？先ほども言いました、そうじゃなかった？」

「はい、しかし——」

「まあ、あなたは今困っています。そこに滞在。」

私はそこに立っているべきか、それとも逃げるべきか考えていましたが、優柔不断なまましばらく時間が経ちました。私は逃げようとしたが、ジャックおじさんの方が早かったです。私は突然、草の中でパンくずと格闘している小さなアリを見つめている自分に気づきました。

「生きている限り、二度とあなたと話すことはありません！私はあなたが大嫌いで、あなたを軽蔑し、あなたが明日死ぬことを願っています！」ジャックおじさんを何よりも励ましているような発言だった。私は慰めを求めてアティカスのところへ走ったが、彼は、もうすぐだと言った。

そろそろ家に帰りました。私は誰にも別れを告げずにの後部座席に乗り込み、家に帰って自分の部屋に走ってドアをバタンと閉めました。ジェムは何か良いことを言おうとしたが、私は許しなかった。

被害状況を調査したところ、赤い跡が7～8つしかなく、相対性理論を考えていたとき、誰かがドアをノックしました。私はそれが誰なのか尋ねました。

ジャックおじさんは答えた。

"どこかに行って！"

ジャックおじさんは、そんなことを言ったらまたなめると言ったので、黙っていました。彼が

部屋に入ると私は隅に退き、彼に背を向けた。「スカウト、まだ私のこと嫌いなのか？」と彼は言った。

「続けてください、先生。」

「まあ、あなたが私に反対するとは思わなかった」と彼は言った。「君には失望したよ——あなたもそれが来ることを予期していたし、それを知っていたはずだ。」

「それもしなかった。」

「ハニー、人に電話をかけたりすることはできません—」

「あなたは不公平です」と私は言いました。「あなたは不公平です」

ジャックおじさんの眉毛が上がりました。「公平ではない？どうですか？」

「あなたは本当に優しいです、ジャックおじさん。あんなことをした後でも私はあなたを愛していると思いますが、あなたは子供のことをあまり理解していません。」

ジャックおじさんは腰に手を当てて私を見下ろしました。「そして、なぜ私はそうしないのですか？」

ジャン・ルイズさん、子供たちのことはわかりますか？あなたのような行為にはほとんど理解が必要でした。それは横暴で、無秩序で、虐待的でした—」

「私に話す機会を与えてくれる？私はあなたを軽蔑するつもりはありません、私はただあなたに言いたいのです。」

ジャックおじさんはベッドに座りました。眉を寄せて彼はこちらを見つめた

彼らの下から私を。「続けてください」と彼は言いました。

私は深呼吸をしました。「まあ、そもそも、あなたは私の側面を話す機会を与えるために立ち止まることはありませんでした。

あなたはただ私に真っ直ぐに目を向けただけです。ジェムと私が大騒ぎするとき

アティカスはジェムの意見だけを聞くのではなく、私の意見も聞いています、そして第二に、あなたは私に、極端な挑発以外では決してそのような言葉を使うなどと言いました、そしてフランシスは彼のブロックを打ち破るほど私を挑発しました—」

ジャックおじさんは頭をかいた。「スカウト、あなたはどう思いましたか？」

「フランシスがアティカスに何か電話をかけたんですが、私は彼から電話を切るつもりはありませんでした。」

「フランシスは彼を何と呼んでいましたか？」

「黒人愛好家。それが何を意味するのかよくわからないが、フランシスの言い方は——今すぐ一つだけ言ってください、ジャックおじさん、私はそうします——そこに座ってアティカスについて何か言わせてもらおうか、神の前に誓います」

「彼はアティカスをそう呼んだのですか？」

「はい、彼はそうしました、そしてそれ以上のことをしました。アティカスは家族を破滅させるだろうと言いました
彼はジェムと私を暴走させた…」

ジャックおじさんの顔の表情を見て、私はまたその気になったと思いました。彼が「これについては検討してみます」と
言ったとき、私はフランシスがその気になっていると確信しました。「出かける気はあるよ
今夜そこにあるよ。」

「先生、もう放っておいてください。お願いします。」

「それを手放すつもりはない」と彼は言った。「アレクサンドラもこのことを知っているはずだ。
その考えは——待って、あの少年に手を出そうか……」

「ジャックおじさん、何か約束してください。お願いします。」このことはアティカスには言わないと約束してくだ
さい。彼は——一度、彼のことを聞いても私を怒らせないでほしい、そうしたら私たちが別のことで喧嘩していると思
われた方がいい、と私に頼んだことがある。約束してください…」

「でも、フランシスがそんなことで逃げ出すのは好きじゃない——」

「彼はそうしなかった。私の手を縛ってもいいと思いますか？まだ血が少し出てるよ。」

「もちろんそうするよ、ベイビー。縛ることがこれほど嬉しい手はありません。

こっちに来ますか？」

ジャックおじさんは勇敢にお辞儀をして私をトイレに向かわせた。彼は私の指の関節をきれいにして包帯を巻いている
間、ホッジという名前の猫を飼っていて、街に行くときに歩道の亀裂をすべて数えていた面白い近視の老紳
士の話をして私を楽しませてくれました。「もうそこだよ」と彼は言った。「あなたの結婚指輪の指には、とて
も女性らしくない傷跡が残るでしょう。」

"ありがとうございます。ジャックおじさん？"

「奥様？」

「売春婦って何ですか？」

ジャックおじさんは、下院に座っている老首相についてのもう一つの長い物語に突入しました。老首相は、彼の周りにい
る男たちが皆頭がおかしくなっているときに、下院に座って羽根を空中に吹き飛ばして、そこに留めておこうとしたの
です。彼は私の質問に答えようとしていたのだと思いますが、まったく意味がわかりませんでした。

その後、ベッドに入るはずだったとき、水を飲みに廊下に出たとき、リビングルームでアティカスとジャックおじさんの声
が聞こえました。

「私は決して結婚しません、アティカス。」

"なぜ?"

「私には子供がいるかもしれない。」

アティカスは「ジャック、君には学ぶことがたくさんあるよ」と言った。

"知っている。今日の午後、あなたの娘さんが私に初めてのレッスンをしてくれました。彼女は私が子供のことをあまり理解していないと言い、その理由を教えてくださいました。彼女はまったく正しかった。アティカス、彼女は私が彼女をどのように扱うべきだったのか教えてくださいました——ああ、彼女を悪戯して本当にごめんなさい。」

アティカスは笑った。「彼女はそれを獲得したのですから、あまり後悔しないでください。」

私はジャックおじさんがアティカスに自分の意見を伝えるのを緊張しながら待ちました。しかし、彼はそうしませんでした。彼はただこつこつやっていた。「彼女のトイレでの悪口は想像の余地がない。しかし、彼女は自分が言った半分の意味を知りません—彼女は私に売春婦とは何であるかを尋ねました...」

「彼女に言いましたか？」

「いいえ、私は彼女にメルボルン卿のことを話しました。」

「ジャック！子供が何かを尋ねたら、念のために答えてください。しかし、それを制作しないでください。子供は子供ですが、大人よりも早く回避策を見つけることができ、回避策は彼らを混乱させるだけです。いや、」と父は思案した。「今日の午後、あなたは正しい答えを出しましたが、理由は間違っていました。悪い言葉遣いは、すべての子どもが経験する段階であり、その言葉で注目を集めていないとわかると、時間の経過とともに消えていきます。短気はそうではありません。スカウトは、今後数か月間何が待ち受けているかを考えて、冷静さを保ち、すぐに学ばなければなりません。彼女は

ただし、付いてきます。ジェムは年をとったので、彼女も彼の例によく倣います

今、彼女に必要なのは、時々助けてもらうことです。」

「アティカス、あなたは彼女に手を出したことは一度もありません。」

「それは認めます。これまでのところ、私は脅迫を乗り越えることができました。ジャック、彼女はできる限り私のことを気にかけてくれます。半分の時間はスクラッチすることはできませんが、彼女は努力します。」

「それは答えではありません」とジャックおじさんは言いました。

「いいえ、答えは、彼女が努力していることを私が知っていることを彼女は知っています。それが違いを生むのです。」

私が気になるのは、彼女とジェムがすぐにいくつかの醜いことを吸収しなければならぬことです。ジェムが頭を守ることは心配していないが、スカウトは彼女のプライドが危険にさらされているなら、彼を見るのと同じくらいすぐに誰かに飛びつくだらう…」

私はジャックおじさんが約束を破るのを待っていました。彼はまだそうしなかった。

「アティカス、これはどれほどひどいことになるだろうか？あまりチャンスはありませんでした

それについて話し合う。”

「これ以上に悪いことはありません、ジャック。私たちが知っている唯一のことは、イーウェル夫妻に対する黒人男性の言葉だけだ。証拠は要約すると、あなたがやったか、私がしなかったかということになります。陪審

トム・ロビンソンの言葉をイーウェル一家に反対するなどとは到底期待できなかった——

イーウェル家のことを知っていますか？」

ジャックおじさんは、そうだ、覚えている、と言いました。彼はそれらについてアティカスに説明しましたが、アティカスはこう言いました。今のものも同じだけだね。」

「それで、どうするの？」

「話が終わる前に、陪審員を少し怒らせるつもりだが、控訴する可能性は十分にあると思う。現段階では本当にわかりません、ジャック。ご存知のように、私はこの種の事件に遭わずに人生をやり遂げることを望んでいたが、ジョン・テイラーは次のように指摘した

私に「あなただよ」って言いました。

「このカップは手放しましょうね？」

"右。しかし、そうでなければ私は子供たちと向き合うことができると思いますか？ジャック、あなたも私と同じように何が起ころか知っています、そして私はジェムとスカウトが苦い思いをすることなく、そして何よりもメイコムの常習的な病気に罹ることなく、それを乗り越えることができることを願って祈っています。なぜ理性的な人々は、何かに関わると激しく狂ってしまうのか

黒人の話が出てきましたが、それは私が理解しているふりをしているわけではありません...ジェムとスカウトが町の声聞くのではなく、答えを求めて私のところに来てくれることを願っています。彼らが私を十分に信頼してくれるといいのですが...ジャン・ルイズ？」

頭皮が跳ねました。私は角を曲がったところに頭を突っ込んでしまいました。"お客様？"

"寝る。"

私は急いで自分の部屋に行き、寝ました。ジャックおじさんは私を失望させない仲間の王子様でした。しかし、アティカスが私が聞いていることをどのようにして知ったのか私にはわかりませんでした。そして、彼が私に彼の言うことすべてを聞いてほしかったことに気づいたのは、何年も経ってからでした。

第10章

アティカスは弱っていた、彼はもうすぐ50歳だった。ジェムと私が彼になぜそんなに年をとっているのかと尋ねたとき、彼は自分のスタートが遅かったと言いました。私たちはそれが彼の能力と男らしさを反映していると感じました。彼は私たちの学校の同期生の両親よりもはるかに年上でした。

クラスメートがこう言ったとき、ジェムも私も彼について何も言うことができませんでした。
父親-

ジェムはサッカーに夢中だった。アティカスは疲れてキープアウェイをプレーすることはなかったが、ジェムは彼にタックルをしようとしたが、アティカスは「私はそんなことするには年をとりすぎている、息子よ」と言った。

私たちの父は何もしませんでした。彼はドラッグストアではなくオフィスで働いていました。アティカスは郡のためにダンプトラックを運転したわけでも、保安官でもなければ、農業をしていたわけでもありません。
ガレージで働くか、人の賞賛を呼び起こす可能性のあることをする
誰でも。

それに加えて、彼は眼鏡をかけていました。彼は左目がほとんど見えなくなっており、「左」と言いました。目はフィンチ族の部族の呪いだった。彼は何かをよく見たいときはいつでも、頭を向けて右目から見ました。

彼は私たちの同級生の父親たちがしていたようなことはしませんでした。

ポーカーも釣りも飲酒も喫煙もしませんでした。彼はリビングルームに座って本を読みました。

しかし、これらの特性により、彼は私たちが望んでいたほど目立たないままではいられませんでした。その年、学校は彼がトムを擁護するという話題で持ちきりでした。

ロビンソン、どれも無料ではありませんでした。私が卑怯者の方針を貫いたセシル・ジェイコブスとの試合の後、スカウト・フィンチはもう戦わない、彼女の父親が許さないという噂が流れた。これは完全に正しいわけではありませんでした。私はアティカスのために公に戦うつもりはありませんが、家族は私的な領域でした。私はいとこ以上の誰とでも徹底的に戦うつもりだ。たとえば、フランス・ハンコックはそれを知っていました。

アティカスは私たちにエアライフルを与えたとき、撃ち方を教えてくれませんでした。ジャックおじさんは私たちにその初歩を教えてくれました。アティカスは銃には興味がなかった、と彼は言った。

ある日、アティカスはジェムにこう言いました。

鳥を追いかけることになるのはわかっています。攻撃できるなら、好きなだけアオカケスを撃ちましょう。ただし、マネシツグミを殺すのは罪であることを忘れないでください。」

アティカスが何かをするのは罪だと言ったのを聞いたのはその時だけだった。
ミス・モーディにそれについて尋ねた。

「あなたのお父さんは正しいです」と彼女は言いました。「モッキンバードはただ一つのことをしているのではなく、私たちが楽しむために音楽を作っているのです。彼らは人々の庭を食い荒らさず、トウモロコシの巣に巣を作りません。彼らは何もすることはありませんが、私たちのために心を込めて歌います。だからこそ、マネシツグミを殺すのは罪なのです。」

「モーディさん、ここは古い地区ですよね？」

「町よりもここに長くいるよ。」

「いや、つまり、私たちの通りにいる人たちはみんな年寄りだということです。ジェムと私だけが子供です。この辺です。デュボース夫人はもうすぐ100歳に近づき、レイチェル先生はもうお年をとります。

あなたとアティカスですか？」

「50歳をとて老けたとは言えません」とミス・モーディは辛辣に言った。「まだ振り回されてないですよ？あなたのお父さんでもありません。しかし、プロビデンスは親切にも私の古い霊廟を焼き払ってくれたと言わざるを得ません。私はもう年をとりすぎているので、それを維持するには—おそらくあなたの言う通りです、ジャン・ルーズ、ここは定住地区です。君は若い人たちとあまり関わったことがないんだよね？」

「はい、学校で」

「つまり、若い大人のことです。あなたは幸運です。あなたとジェムは、あなたの父親の年齢の恩恵を受けています。もしあなたの父親が30歳だったら、あなたは人生をとて充実していると感じるだろう。違う。」

「きっとそうするよ。アティカスは何も出来ない…」

「驚くでしょうね」とミス・モーディは言いました。「彼の中にはまだ命が宿っている。」

"彼は何ができますか？"

「そうですね、彼は誰かの意志を非常に密閉して、誰もそれに干渉できないようにすることができます。」

"シュート…"

「ところで、彼がこの町で一番のチェッカープレイヤーだということを知っていましたか？なぜ、我々が近づいてきたとき、ランディングでアティカス・フィンチが両方の面で全員を倒すことができたのか川の両岸。」

「主よ、ミス・モーディ、ジェムと私はいつも彼を倒しました。」

「そろそろ、それが彼が許してくれるからだ、と気づく時期が来た。彼がユダヤ人のハーブを演奏できることを知っていましたか？」

このささやかな功績により、私は彼をさらに恥じることになりました。

「そうですね…」と彼女は言いました。

「それで、何ですか、ミス・モーディ？」

「まあ、何も無いよ。何も、あなたが彼を誇りに思うことはないようです。誰もがユダヤ人のハーブを演奏できるわけではありませ
ん。さあ、大工たちの邪魔にならないようにしてください。家に帰ったほうがいいよ、私はツツジの中にいるから見てられないよ。プランク
が当たるかもしれないよ。」

裏庭に行くと、ジェムがブリキ缶に夢中になっているを見つけました。周りにアオカケスがたくさんいる中で、それは愚かに見えました。
私は前庭に戻り、タイヤ、オレンジ色の木箱、洗濯物かご、ポーチの椅子、ポーチで構成される複雑な胸壁をポーチの側面に組み立てるの
に2時間忙しかった。

ジェムがポップコーンの箱から私にくれた小さなアメリカ国旗。

アティカスが夕食のために帰宅すると、私が通りの向こう側を目指してしゃがんでいるを見つけました。「何を撃っているのです
か？」

「ミス・モーディのお尻です。」

アティカスが振り返ると、私の寛大な標的が茂みの上でかがんでいるのが見えました。彼は帽子を頭の後ろに押し付けて通りを渡っ
た。「モーディ」と彼は言った、「私は
警告したほうがいいと思いました。あなたはかなりの危険にさらされています。」

ミス・モーディは背筋を伸ばして私のほうを見た。彼女は言いました、「アティカス、あなたは
地獄から来た悪魔よ。」

アティカスが戻ってきたとき、彼は私にキャンプをやめるように言った。「二度と誰かに銃を向けているところを私に捕らえさせな
いでください」と彼は言った。

私は父が地獄から来た悪魔だったらよかったのと思いました。私はこの件についてカルブルニアに打診した。

"氏。フィンチ？だって、彼はいろんなことができるんですもの。」

"どのような？"私は尋ねた。

カルブルニアは頭をかいた。「そうですね、正確にはわかりません」と彼女は言った。

ジェムはアティカスにメソジスト派に参加するつもりかと尋ねたとき、そのことを強調したが、もしそうしたら首の骨を折るだろう、そ
んなことをするには年を取りすぎているとアティカスは言った。

もの。メソジスト派は教会のローンを返済しようとしていて、バプテスト派にタッチフットボールの試合を挑んだ。アティカスを除いて、町の父親はみんな遊んでいるように見えた。ジェムは行きたくなかったと言ったけど、

彼はどんな形であってもサッカーに抵抗することができず、悲観的にサイドラインに立っていた。アティカスと私は、セシル・ジェイコブスの父親がバプテスト軍のタッチダウンをするのを見ていた。

ある土曜日、ジェムと私は、ウサギカリスが見つかるかどうかを確認するためにエアライフルを持って探検に行くことにしました。ラドリー・プレイスを500ヤードほど越えたところで、ジェムが通りの先にある何かを目を細めているのに気づいた。彼は頭を横に向け、目の隅から外を見ていました。

「何見てるの？」

「あそこにいるあの老犬だよ」と彼は言った。

「あれは昔のティム・ジョンソンですよ？」

"うん。"

ティム・ジョンソンは、モービル・バスを運転し、町の南端に住んでいたハリー・ジョンソン氏の所有物でした。ティムは肝臓色の鳥犬で、メイコムの子犬でした。

"彼は何をしているの？"

「分かりません、スカウト。家に帰ったほうがいいよ。」

「ああ、ジェム、2月ですね。」

「気にしないよ、キャルに言っておきます。」

私たちは急いで家に帰り、キッチンに走り出しました。

「カル」とジェムが言いました。「ちょっと歩道を下りてもらえませんか？」

「どうしたの、ジェム？あなたが私を望んでいるたびに、私は歩道を降りることはできません。」

「あそここの老犬が何かおかしいんだよ。」

カルはため息をついた。「今はどんな犬の足も包むことはできない。トイレにガーゼがあるから取りに行って自分でやってください。」

ジェムは首を振った。「彼は病気なんです、カル。彼には何か問題があるんだよ。」

「彼は尻尾を捕まえようとして何をしているのですか？」

「いいえ、彼はこんなふうにはやってるんです。」

ジェムは金魚のように息を呑み、肩を丸めて胴体をびくびくと動かししました。「彼はそのように進んでいますが、彼が意図したとおりではないだけです。」

「何か話があるの、ジェム・フィンチ？」カルブルニアの声が硬くなった。

「いいえ、カル、そうではないと誓います。」

「彼は走っていましたか？」

「いいえ、彼はただゆっくりと歩いているだけなので、それがほとんどわかりません。彼はこっちに来てるよ。」

カルブルニアは手を洗い、ジェムを追って庭に出た。「犬が見えないよ」

彼女は言いました。

彼女はラドリー・プレイスを越えて私たちを追って、ジェムが指さした方を見た。ティム・ジョンソンは遠くに点にすぎませんでした。私たちが近くにありました。

彼は右足が左足よりも短いかのように、不規則に歩きました。彼

砂底にはまったを思い出した。

「彼は偏ってしまった」とジェムは言った。

カルブルニアは私たちを見つめ、それから私たちの肩を掴んで家まで走らせました。彼女は私たちの後ろで木のドアを閉め、電話のところに行き、こう叫びました。「ミスター・フィンチのをちょうだい」
オフィス！"

"氏。フィンチ！彼女は叫びました。「こちらはキャルです。神に誓いますが、この通りの先に狂犬がいます——彼はこちらに来ています、そうです、彼です——ミスター・フィンチ、私は彼がそうだと宣言します——ティム・ジョンソン老人、はい、はい、はい、はい——」

私たちがアティカスが何を言ったか尋ねようとする、彼女は電話を切って首を横に振った。

彼女は電話のフックをカチャカチャ鳴らして言いました、「ミス・ユーラ・メイ、もう奥様、フィンチさんとの話は終わりました、もう繋がらないでください、聞いてください、ミス・ユーラ・メイ、レイチェルさんに電話してもらえますか？」ミス・ステファニー・クロフォードとこの通りで電話を持って「狂犬が来る」と告げる者はいるだろうか？お願いします奥様！」

カルブルニアは聞いた。「私は今が2月であることを知っています、ミス・ユーラ・メイ、でも狂犬を見ればそれがわかります。奥様、急いでください！」

カルブルニアはジェムに「ラドリーズは電話を持っていますか？」と尋ねた。

ジェムは本を見て、ノーと言った。「どうせ彼らは出てこないよ、キャル」

「気にしないよ、彼らに言うよ。」

彼女はジェムと私を追いかけて玄関まで走った。「あなたはあの家に泊まってください！」彼女は叫んだ。

カルプルニアさんのメッセージは近隣住民に届いた。私たちの視界にある木製のドアはすべてしっかりと閉まりました。ティム・ジョンソンの痕跡は見当たりませんでした。私たちはカルプルニアがスカートとエプロンを膝上に抱えてラドリー・プレイスに向かって走っているのを見ました。彼女は正面の階段に上がってドアを叩きました。彼女は返事がなかったので、こう叫びました。ネイサン、アーサーさん、狂犬がやってくる！狂犬がやってくる！」

「彼女は後ろに回るはずだよ」と私は言った。

ジェムは首を振った。「今は何も変わらないでください」と彼は言った。

カルプルニアはドアを叩きましたが無駄でした。誰も彼女の警告を認めませんでした。いいえある人はそれを聞いたようだった。

カルプルニアが裏玄関へ全力疾走したとき、黒いフォードが私道に突っ込んできた。

アティカスとヘック・テイト氏は外に出た。

ヘック・テイト氏はメイコム郡の保安官でした。彼はアティカスと同じくらい背が高かったが、より薄い。彼は鼻が高く、光沢のある金属の目の穴が付いたブーツ、ブーツパンツ、そしてランバージャケットを着ていました。彼のベルトには銃弾が数列刺さっていた。彼は重いライフルを携行していた。彼とアティカスがポーチに着くと、ジェムはドアを開けました。

「中にいてください、息子」アティカスが言った。「彼はどこにいるの、カル？」

「もう彼はここにいるはずだ」とカルプルニアは通りのほうを指差しながら言った。

「彼は走っていませんね？」テイト氏は尋ねた。

「いやあ、彼はピクピクしている段階です、ミスター・ヘック。」

「彼を追いかけるべきですか、ヘック？」アティカスは尋ねた。

「待ったほうがいいよ、フィンチさん。通常は一直線に進みますが、それがわかることはありません。彼はカーブをたどるかもしれない——そうなることを願っているが、さもないとラドリーで真っすぐに進むことになるだろう裏庭。ちょっと待ちましょう。」

「彼がラドリーの庭に入るとは思わないでください」とアティカスは言った。「フェンスが彼を止めるだろう。彼はおそらくその道を進むだろう……」

狂犬が口から泡を吹き、疾走し、飛び跳ね、喉に突進するのだと思っていたが、それを8月にやったのだと思っていた。もしティム・ジョンソンがそのように行動していたら、私はそうしていただろう

怖さが減りました。

人けのない待機通りほど危険なものはありません。木々は静まり、マネシツグミも沈黙し、ミス・モーディの家の大工たちは姿を消していた。テイトさんが鼻を鳴らし、鼻をかむ音が聞こえました。彼が銃を腕の曲がり部分に向けるのが見えた。私は、ステファニー・クロフォードさんの顔が玄関のガラス窓に額装されているのを見ました。ミス・モーディが現れて彼女の隣に立った。アティカスは足を踏み入れた

椅子の横木に手を当て、太ももの横をゆっくりと撫でた。

「そこにいるよ」と彼は静かに言った。

ラドリー・ハウスと平行にカーブの内側をぼんやりと歩いているティム・ジョンソンが見えてきた。

「見てください」とジェムがささやきました。"氏。ヘックは彼らは一直線に歩いたと言いました。彼は道路に留まることさえできないのです。」

「彼は何よりも病気のようなのだ」と私は言った。

「彼の前に何かがあると、彼はまっすぐにそれに向かって来るでしょう。」

館さんは額に手を当てて前かがみになった。「彼はすべてをうまくやっています、フィンチさん。」

ティム・ジョンソンはカタツムリのようなペースで進んでいたが、遊んだり木の葉を嗅いだりしていなかった。彼は一つのコースに専念しており、私たちに向かって迫ってくる目に見えない力によって動機付けられているように見えた。彼が馬の脱皮のように震えているのが見えた

ハエ。彼の顎は開閉した。彼は積極的だったが、徐々に引っ張られていった私たちに向かって。

「彼は死に場所を探しているんだ」とジェムは言った。

テイトさんは振り返った。「彼はまだ死んではいません、ジェム、まだ始まっていません。」

ティム・ジョンソンは、ラドリー・プレイスの前を走る脇道にたどり着きました。そして、彼の貧しい心に残っていたことが、彼を立ち止まらせ、どの道を選ぶか考えているようでした。彼はためらいながら数歩進み、ラドリーの門の前で立ち止まった。それから彼は振り向こうとしたが、難しかった。

アティカスは言った、「彼は射程圏内にいるよ、ヘック。」彼が脇道に入る前に彼を捕まえたほうがいいです。角を曲がったところに誰がいるかは主がご存じです。中に入りなさい、キャル」

カルプルニアは網戸を開け、後ろで掛け金を掛け、それから外してフックを掴みました。彼女はジェムと私を体で阻止しようとしたが、私たちは見守った

彼女の腕の下から。

「彼を連れて行ってください、フィンチさん。」テイト氏はライフルをアティカスに手渡した。ジェムと私はもう少しで気を失った。

「時間を無駄にするなよ、ヘック」とアティカスは言った。"続ける。"

"氏。フィンチ、これは一発勝負だよ。"

アティカスは激しく首を振った。彼は一日中あなたのことを待ってくれないだろう——

「お願いします、フィンチさん、どこにいるか見てください！お嬢さん、ラドリーの家に直行してください！私はそんなに上手く撃てません、それは分かっていますよ！」

「私は30年間銃を撃っていません——」

テイト氏はアティカスにライフルを投げつけそうになった。「今そうしてくれたら、とても安心するよ」と彼は言った。

霧の中、ジェムと私は父が銃を手に取り、通りの真ん中に出ていくのを見ていた。彼は足早に歩いていましたが、私は彼が水中を泳ぐ選手のように動いているように思いました。時間が経ち、吐き気がするほど遅くなりました。

アティカスが眼鏡を上げると、カルプルニアは「イエス様、助けてください」とつぶやき、両手を頬に当てた。

アティカスは眼鏡を額に押し付けた。彼らは滑り落ちたので、彼はそれらを通りに落としました。静寂の中で、それらが割れる音が聞こえました。アティカスは目と顎をこすった。私たちは彼が激しく瞬きするのを見た。

ラドリーの門の前で、ティム・ジョンソンは心に残ったことを考えていた。

彼はついに向きを変え、私たちの通りに向かう本来の進路を追求した。

彼は二歩前進し、それから立ち止まって頭を上げた。私たちは彼の体が硬直するのを見ました。

同時かと思われるほど素早い動きで、アティカスの手は銃を肩に持っていき、先端にボールが付いたレバーを引っ張った。

ライフルが割れた。ティム・ジョンソンは飛び跳ねたり、ひっくり返り、茶色と白の山になって歩道に崩れ落ちた。彼は何が自分を襲ったのか分かりませんでした。

テイト氏はポーチから飛び降り、ラドリー・プレイスへ走った。彼は目の前で立ち止まった

犬はしゃがんで振り返り、額の上の額を指でたたきました。

左目。「あなたは少し右にいました、フィンチさん」と彼は電話した。

「いつもそうだったよ」とアティカスは答えた。「もし私に「教師」がいたら、ショットガンを持っていこう。」

彼はかがんで眼鏡を拾い上げ、割れたレンズをかかとの下で粉々に粉砕し、テート氏のところへ行き、立ってティム・ジョンソンを見下ろした。

ドアが一つずつ開き、近所がゆっくりと活気を取り戻しました。ミス・モーディ

ステファニー・クロフォードさんと一緒に階段を下りた。

ジェムは麻痺していました。私は彼を動かそうとつねったが、アティカスが私たちを見たとき

やって来て彼は「そこにいてください」と呼びかけました。

テイトさんとアティカスさんが庭に戻ると、テイトさんは微笑んでいました。「ジーボに集めてもらいます」と彼は言った。「あまり忘

れてはいませんよ、フィンチさん。彼らはそれを言います

決してあなたを離れることはありません。」

アティカスは黙っていた。

「アティカス？」ジェムは言いました。

"はい？"

「何もないよ」

「見たよ、ワンショット・フィンチ！」

アティカスは回転させてミス・モーディと向かい合った。彼らは何も言わずに顔を見合わせ、アティカスは保安官のに乗り込ん

だ。「ここにおいで」と彼はジェムに言った。「あの犬には近づかないでください、わかりますか？」彼に近づかないでください、彼

は生きているのと同じくらい危険な死人です。」

「はい、先生」とジェムは言いました。「アティカス—」

"どうしたの？"

"何もない。"

「どうしたの、坊ちゃん、話せないの？」テイト氏はジェムに笑いながら言った。

「あなたのお父さんのことを知らなかったのですか？」

「黙って、一体」アティカスは言った。「町に戻りましょう。」

彼らが立ち去ると、ジェムと私はステファニー先生の家の玄関先に行きました。私たちはジーボがゴミ収集で到着するのを座って待っていました。

ジェムは呆然として座っていましたが、ステファニー先生はこう言いました。もしかしたら彼は怒っていなかったかもしれないし、ただ気が

狂っていたのかもしれない。私はそうするだろう

ハリー・ジョンソンがモービル・ランから乗り込み、アティカス・フィンチが飼犬を撃ったのを発見したときの顔を見るのが嫌だった。きっと彼はどこからかノミだらけだったのでしょー」

ミス・モーディは、もしティム・ジョンソンがまだ通りに来ていたら、ミス・ステファニーは別の曲を歌うだろう、彼らはすぐにそれを知り、彼の首をモンゴメリーに送るだろうと言いました。

ジェムは漠然とはっきりとした口調でこう言った。「スカウト、彼を見ましたか？」 「彼がそこに立っているのを見ましたか？ …」 「突然、彼は全身リラックスして、まるでその銃が彼の一部であるように見えました…そして彼はとても素早くそれをしました、まるで…私は狙いを定めなければなりませんでした」 10分間

「何かを打てるようになるまでに」 …」

ミス・モーディは意地悪な笑みを浮かべた。「さて、ジャン・ルイズさん、お父さんはまだ何もできないと思っているのですか？」と彼女は言った。まだ彼を恥じているのですか？」

「ノーム、私はおとなしく言いました。

「先日言い忘れましたが、アティカス・フィンチはユダヤ人のハーブを演奏する以外に、当時メイコム郡で最も致命傷を負った人物でした。」

「デッドショット…」ジェムの声が響いた。

「それが私が言ったことです、ジェム・フィンチ。今度は調子を変えようと思います。まさに考えてみたら、彼の少年時代のあだ名がオール・ワンショットだったって知らなかった？なぜ、彼が着陸地点に来て、15発撃って14羽の鳩を撃ったとしたら、彼は弾薬の無駄だと文句を言うだろう。」

「彼はそれについて何も言いませんでした」とジェムはつぶやいた。

「彼はそれについて何も言っていませんでしたね？」

「いいえ、奥様。」

「どうして今、彼は狩りに行かないんだろう」と私は言った。

「もしかしたらお話しできるかもしれません」とミス・モーディは言いました。「あなたの父親が何かあるとすれば、彼は心の中では文明的な人です。射撃は神の賜物であり、才能です。完璧にするには練習する必要がありますが、射撃はピアノなどを弾くのと違います。おそらく彼は、神がほとんどの生き物に対して不公平な優位性を自分に与えてくれたことに気づき、銃を下ろしたのだと思います。おそらく彼は、必要になるまでは撃たないと決めたのでしょう、そして今日そうしなければならなかったのです。」

「彼はそれを誇りに思っているようだ」と私は言った。

「正気の人には決して自分の才能に誇りを持ちません」とミス・モーディは言いました。

ジーボがやって来るのが見えました。彼はゴミ収集の後部からピッチフォークを取り出し、慎重にティム・ジョンソンを持ち上げた。彼は犬をトラックに投げ込み、ティムが落ちた場所とその周囲にガロンの水差しから何かを注ぎました。「あくびをしないで、しばらくここに来てください」と彼は電話しました。

家に帰ったとき、私はジェムに、月曜日に学校で本当に話したいことがあると言いました。ジェムは私を敵に回した。

「それについては何も言わないでください、スカウト」と彼は言った。

"何？確かにそうです。メイコムで一番致命傷なのはみんなのパパじゃないの郡。"

ジェムはこう言った。もし彼がそれを誇りに思っているなら、彼は私たちにそう言いました。」

「もしかしら、それが彼の気を紛らわせてしまったのかもしれない」と私は言った。

「まあ、スカウト、それはあなたには理解できないことです。アティカスは本当に年をとっていますが、彼が何もできなくても私は気にしません。彼が祝福されたことをできなくても私は気にしません。」

ジェムは石を拾うと、庫に向かって大喜びで投げました。彼はそれを追いかけて、「アティカスは私と同じ紳士だ！」と呼び返した。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第11章

ジェムと私は幼い頃、活動範囲を南部に限定していました

近所だったんですが、私が学校の2年生になった頃、

ブー・ラドリーを苦しめるのが時代遅れになったとき、メイコムのビジネス街は私たちをヘンリー

・ラファイエット・デュボース夫人の不動産の横を通る通りに頻繁に引き寄せた。1マイル離れ

て歩きたいと思わない限り、彼女の家を通らずに町に行くことは不可能でした。彼女とのこれまでの

些細な出会いのせいで、私は何の欲求も抱かなくなった

もっと知りたいけど、ジェムは私がもう少し成長する必要があると言った。

デュボース夫人は、私たちから通りの2軒隣にある、正面に急な階段と犬の散歩のホールがある家に、いつも付き添っている黒人の女の子を除いて一人暮らしをしていました。彼女はとても年をとっていた。彼女は一日のほとんどをベッドで過ごし、残りは椅子で過ごしました。彼女は数多くのショールやラップの中にCSAピストルを隠し持っていたと噂された。

ジェムと私は彼女が大嫌いでした。もし私たちが通り過ぎたときに彼女がポーチにいたとしたら、私たちは彼女の怒りの視線でかき集められ、私たちの行動について容赦ない尋問を受け、成長したら私たちがどのようになるかについて憂鬱な予測を与えられたでしょう。

アップ、それはいつも何もありませんでした。私たちはずっと前に、通りの反対側にある彼女の家の前を歩くという考えをあきらめていました。それだけで彼女は声を上げ、近隣住民全員がその問題に巻き込まれることになった。

私たちは彼女を喜ばせるために何もできませんでした。私ができる限り晴れやかにこう言ったら、「ねえ、奥さん。」

デュボース」と答えると、「おい、なんて言わないで、この醜い女！」と返されるだろう。

こんにちは、デュボースさん！」

彼女は意地悪だった。ジェムが私たちの父親を「アティカス」と呼ぶのを聞いたとき、彼女は

反応は脳卒中性だった。私たちは、これまで彼女の前を通りかかった中で最も生意気で失礼な雑種だったことに加えて、母の死後、父が再婚しなかったのは非常に残念だと言われました。私たちの母親よりも素敵な女性はこの世にいなかったし、アティカス・フィンチが子供たちを暴れさせたやり方は悲痛だった、と彼女は語った。

私は母親のことを覚えていませんでしたが、ジェムは覚えていました—彼は彼女のことを私に話してくれました

時々、デュボース夫人が私たちにこのメッセージを送ったとき、彼は激怒しました。

ジェムはブー・ラドリーや狂犬、その他の恐怖から生き残ったので、レイチェル先生の前で立ち止まって待つのは卑怯だと結論付け、アティカスが来るのを迎えるために毎晩郵便局の角まで走らなければならないと決めていた。仕事から。数え切れないほどの夜、アティカスはジェムが次のように激怒しているのを見つけた。

私たちが通りかかったときにデュボース夫人が言っていた言葉です。

「簡単だよ、息子よ」とアティカスはよく言った。「彼女は年老いた女性で、病気なのです。あなたはただ頭を高く上げて紳士でありなさい。彼女があなたに何を言おうと、彼女を怒らせないのがあなたの仕事です。」ジェムは、大した病気ではないはずだと言うだろう、と彼女は大声で叫んだ。私たち3人が彼女の家に来ると、アティカスは帽子を脱ぎ捨て、彼女に勇敢に手を振り、「こんばんは、デュボースさん！」と言いました。あなたは次のように見えます

今晚の写真。」

アティカスが絵に描いたようなことを言ったのを聞いたことがない。彼は彼女に裁判所のニュースを伝え、彼女が明日良い一日を過ごせることを心から願っていると仰いました。

彼は帽子を頭にかぶり、彼女の目の前で私を肩に抱き寄せ、夕暮れの中で家に帰りました。銃が嫌いで戦争に行ったことのない父は、こんな時だったんだ、と思った。

これまで生きて中で最も勇敢な男。

ジェムの12歳の誕生日の翌日、彼のお金がポケットを使い果たしたので、私たちは午後早くに町に向かった。ジェムは、を買うのに十分だと思った

彼自身にはミニチュアの蒸気エンジン、私にはくるくる回るバトン。

私はその指揮棒に長い間注目していました。それはVJ エルモアの家にあり、スパンコールや見掛け倒しで飾られていて、価格は17セントでした。それは私の燃えるような野心でした

大人になってメイコム郡高校のバンドと一緒に演奏しましょう。棒を投げて、それが落ちてくるのをほとんどキャッチできるまでに才能を伸ばした私は、手に棒を持った私を見るたびに、カルプルニアに家の入場を拒否させていました。本物の警棒があればこの欠点を克服できると感じたので、ジェムが私に警棒を買ってくれたのは寛大だと思いました。

私たちが通りかかったとき、デュボース夫人はベランダに立っていた。

「こんな時間に二人でどこに行くの？」彼女は叫びました。「フッキーなプレーをしているんだろうね。校長に電話して伝えておきます！」彼女は椅子の輪に手を置き、完璧な正しい顔を演じました。

「ああ、土曜日ですね、デュボースさん」ジェムが言いました。

「土曜日なら関係ないよ」と彼女は曖昧に言った。「あなたのお父さんはあなたがどこにいるか知っているのでしょうか？」

"夫人。デュボース、私たちはこんなにハイになってからずっと一人で街に行っていたんです。"

ジェムは歩道から約2フィート上に手のひらを置きました。

「嘘をつくなよ！」彼女は叫んだ。「ジェレミー・フィンチ、モーディ・アトキンソンは、今朝あなたが彼女の排水溝の東屋を壊したと言いました。彼女はあなたの父親にそう言うつもりです、そうすればあなたは日の目を見なければ良かったと思うでしょう！来週までにあなたが更生学校に送られなかったら、私の名前はデュボースではありません！」

ジェムは去年の夏以来、ミス・モーディのスカパノン・アーバーの近くにいなかった。

そしてミス・モーディがもし知っていたとしてもアティカスに告げないだろうと誰が知っていたのか、将軍命令を出した。

拒否。

「私と矛盾しないでください！」デュボース夫人は大声で叫んだ。「それであなたは——」と彼女は関節炎の指を私に向けた——「そのオーバーオールを着て何をしているの？ワンピースとキャミソールを着てくださいね、お嬢さん！誰かがあなたのやり方を変えてくれなければ、あなたはテーブルで待っているまま大人になるでしょう——OKカフェのテーブルで待っているフィンチのように——ははは！」

怖かったです。OKカフェは広場の北側にある薄暗い組織だった。私はジェムの手を掴んだが、彼は私を振りほどいた。

「さあ、スカウト」と彼はささやいた。「彼女に気を配る必要はありません。ただ胸を張って紳士らしくいてください。」

しかしデュボース夫人は私たちをこう言いました。「テーブルで待っているフィンチだけではなく、裁判所で黒人を法廷で裁いているフィンチもいるのです！」

ジェムは固まった。デュボース夫人の銃弾は家に帰ったが、彼女はそれを知った。

「確かに、フィンチが育て方に逆らうと、この世界はどうなってしまうのでしょうか？」

私が教えてやろう！"彼女は口に手を当てた。彼女がそれを引き離すと、唾液の長い銀色の糸が尾を引いた。「君の父親は黒人やゴミと何ら変わらない」

のために働きます！

ジェムは真っ赤でした。私は彼の袖を引っ張った、そして歩道で私たち家族の道徳的墮落についてフィリピン人が追いかけてきた、その大前提はとにかくフィンチ族の半分が精神病院に入っているということであったが、もし私たちの母親が生きていたら私たちはこのような状態にはならなかったでしょう。

ジェムが何を最も憤慨しているのかはわかりませんでした、家族の精神衛生に対するデュボース夫人の評価に憤りを感じました。私はアティカスに対する侮辱を聞くことにほとんど慣れていました。しかし、大人から来たのはこれが初めてでした。

アティカスに関する発言を除けば、デュボース夫人の攻撃は日常的なものにすぎなかった。

空気には夏の気配が漂っていました。日陰では涼しかったですが、太陽が輝いていました。

暖かかったので、良い時期が来ることを意味していました。学校もディルもありませんでした。

ジェムは蒸気機関を買ったので、私はバトンを取りにエルモアのところへ行きました。ジェムは彼の買収を喜ばなかった。彼はそれをポケットに押し込み、黙って私の隣を家に向かって歩きました。帰り道、リンク・ディース氏にぶつかりそうになったが、彼はこう言った。

今すぐ出て行け、スカウト！」私がトスを外したとき、そして私たちがデュボース夫人のところに近づいたとき

家では、何度も土の中からバトンを拾い上げたので、バトンが汚れていました。

彼女はベランダにいませんでした。

後年、私は時々、いったい何がジェムにそんなことをさせたのか、何が彼に「君はただの紳士であるだけだ」という束縛を打ち破らせたのか、そして彼が最近入った自意識過剰な正しさの段階を疑問に思った。ジェムはおそらく私と同じようにアティカスが黒人のために法律を制定することについて大騒ぎしていたでしょう、そして私は彼が平静を保っていることを当然だと思いました—彼は生来の穏やかな気質と遅いヒューズを持っていました。しかし、当時私は、彼の行動の唯一の説明は、彼が数分間単に気が狂っただけだと考えていました。

ジェムがやったことは、私がアティカスの禁止令を受けていなかったら当然のことだったし、それには恐ろしい老婦人たちと戦わないことも含まれていると思っていた。私たちがちょうど彼女の門に来たとき、ジェムが私の警棒をひたたくて激しくバタバタと走っていきました

デュボース夫人の前庭に足を踏み入れたとき、アティカスが言ったことをすべて忘れ、ショールの下にピストルを詰めていたことも忘れ、もし夫人がデュボース夫人にいたら、ということも忘れた。

デュボースは逃したが、彼女の娘ジェシーはおそらく逃さないだろう。

デュボース夫人が所有していたすべての樁の木のてっぺんを切り落とし、地面に緑のつぼみと葉が散らばるまで、彼は落ちて着き始めなかった。彼は私の警棒を膝に押し付け、真っ二つに折って投げ捨てました。

その時までには私は悲鳴を上げていました。ジェムは私の髪を引っ張り、気にしない、機会があればもう一度やる、私が黙っていなければ、私の頭の髪の毛を全部抜くと言いました。私が黙っていなかったので、彼は私を蹴りました。バランスを崩して顔から落ちてしまいました。

ジェムは乱暴に私を抱き上げましたが、申し訳なさそうにしていました。何も言うことはありませんでした。

私たちはその夜帰宅するアティカスに会うことにしませんでした。カルプルニアが私たちを追い出すまで、私たちはキッチンの周りをうろろろしていました。何らかのブードゥーシステムによって、カルプルニアはそれについてすべて知っているようでした。彼女は満足のいく緩和策とは言えませんが、ジェムに温かいビスケットとバターを半分に裂いて与えました。

私と共有しました。綿のような味わいでした。

私たちはリビングルームに行きました。私はフットボール雑誌を手に取り、ディクシー・ハウエルの写真を見つけ、それをジェムに見せて、「これはあなたに似ていますね」と言いました。それが私が彼に言える最高の言葉だったが、助けにはならなかった。彼は窓際に座り、ロッキングチェアに腰をかかめ、顔をしかめて待っていました。日の光が薄れていきました。

2 地質時代後、アティカスの靴底が前部をこする音が聞こえました。

ステップ。網戸がボタンと閉まり、沈黙があり、アティカスは廊下の帽子掛けにいた——そして私たちは彼の「ジェム！」と呼ぶのが聞こえた。その声は冬の風のようなだった。

アティカスがリビングルームの天井灯のスイッチを入れると、そこには固まったままの私たちがいた。彼は片手で私の指揮棒を持ちました。その不潔な黄色い房が敷物の上を引きずっていました。

彼はもう一方の手を差し出した。太った樁のつぼみが入っていました。

「ジェム、あなたにこの責任はありますか？」と彼は言った。

"かしこまりました。"

「なぜそれをしたのですか？」

ジェムは穏やかに言った、「彼女はあなたが黒人やゴミのために法律を制定したと言いました。」

「彼女がそう言ったからこんなことをしたの？」

ジェムの唇は動いたが、「はい、先生」という声は聞こえなかった。

「息子よ、あなたが同世代の人々にイライラさせられているのは間違いありません。

あなたが言うように、私は黒人のために法律を作っていますが、病気の老婦人にこのようなことをするのは許しがたいです。下に行って夫人と話し合うことを強くお勧めします。

デュボース」とアティカスは言った。「終わったらまっすぐ家に帰ってね。」

ジェムは動かなかった。

「続けて、私は言いました。」

私はジェムを追ってリビングルームから出ていきました。「ここに戻ってきて」アティカスは私に言った。私戻ってきた。

アティカスはモバイルプレスを手に取り、ジェムが空けたロッキングチェアに座った。私には、彼がどうやって寒い中そこに座ることができるのか、一生わかりませんでした。

彼の一人息子が南軍の遺物で殺害される可能性が極めて高かったとき、血を流して新聞を読んでいた。もちろんジェムは私に敵対しました

時々、私が彼を殺せるまでは、しかし、結局のところ、私には彼だけがすべてでした。

アティカスはそのことに気づいていなかったか、あるいは気づいていても気にしていないようだった。

そんなことで大嫌いだっけど、困ったときは疲れやすいんだよ、すぐに

膝の上に隠れていて、腕は私の周りにありました。

「君は揺さぶられるにはとても大きいよ」と彼は言った。

「彼に何が起ころうとも気にしないよ」と私は言った。「彼があなたのために立っているだけなのに、あなたは彼を撃たれるために送り込むだけです。」

アティカスは私の頭を彼の顎の下に押し込みました。「まだ心配する時期ではない」と彼は言った。「ジェムがこのことで頭を失うとは思っていませんでした。あなたとはもっと面倒なことになると考えていました。」

とにかく、なぜ私たちが頭を悩ませなければならないのかわからない、学校で私の知り合いは何事についても頭を悩ませる必要がない、と私は言いました。

「スカウト」とアティカスは言った、「夏が来たら、もっと悪いことに気を配らなければならないだろう…それはあなたとジェムにとって不公平だ、それはわかっているが、時には物事や道を最善を尽くさなければならない」私たちは、落ち込んでいるときは自分自身を行動します—まあ、私が言えることは、あなたとジェムが成長したとき、おそらくあなたはこのことを思いやりと、私があるあなたを失望させなかったという感情を持って振り返るだろうということです。

この事件、トム・ロビンソンの事件は、人間の本質に迫るものである。

良心—スカウト、助けようとしなければ教会に行き神を崇拝することはできませんでした
あの男。"

「アティカス、君は間違っているはずだ…」

"どのようだ？"

「まあ、ほとんどの人は自分たちが正しくて、あなたが間違っていると思っているようですが…」

「確かに彼らにはそう考える権利があり、彼らの意見を全面的に尊重する権利がある」とアティカスさんは語った。多数決に従わない唯一のものは、人の

良心。"

ジェムが戻ってきたとき、彼は私がまだアティカスの膝の上にいるのに気づき、「それで、息子は？」と言いました。アティカスは言った。

彼は私を立ち上がらせ、私は秘密でジェムを偵察しました。彼はすっかり元気になっているように見えたが、その顔には奇妙な表情がありました。おそらく彼女は彼に与えたのでしょう
カロメル投与量。

「私は彼女のために掃除をして、ごめんなさいと言いましたが、私はそうではありません、そして毎週土曜日に彼らに取り組んで、彼らを再び成長させようと努めると言いました。」

「そうでないなら、申し訳ないと言うのは意味がありません」とアティカスさんは言いました。「ジェム、彼女は年老いて病気の。彼女の言動に責任を負わせることはできません。もちろん、あなたたちのどちらかに言うよりも、彼女が私に言ったほうがよかったですと思いますが、私たちにはいつも「先生」がいるわけではありません。

ジェムはカーペットの上のバラに魅了されたようでした。「アティカス」と彼は言った、「彼女は私を望んでいる」

彼女に本を読んであげるために。」

「彼女に本を読んであげますか？」

"かしこまりました。彼女は私が放課後と土曜日の午後に来て、2時間声を出して本を読んでほしいと言いました。アティカス、そうしなければいけないの？"

"確かに。"

「しかし、彼女は私に1か月間それをするように望んでいます。」

「それでは一ヶ月やってみます。」

ジェムは親指をバラの中心にそっと置き、押し込みました。

最後に彼はこう言いました、「アティカス、歩道は大丈夫だけど中は真っ暗で不気味だ。天井に影とか物があるんですけど…」

アティカスは陰い笑みを浮かべた。「それはあなたの想像力に訴えかけるはずですよ。ラドリーの家の中にいるふりをしてください。」

次の月曜日の午後、ジェムと私は正面の急な階段を登り、夫人のところへ行きました。

デュボースの家に行き、開いた廊下を歩きました。アイヴァンホーで武装したジェム優れた知識に満ちた彼は、左側の2番目のドアをノックしました。

"夫人。デュボース？"彼は電話した。

ジェシーは木のドアを開け、網戸の掛け金を外しました。

「あなたですか、ジェム・フィンチ？」彼女は言いました。「お姉さんも一緒に連れて行ったんですね。わからない」

「二人とも中に入れましょう、ジェシー」とデュボース夫人が言いました。ジェシーは私たちを認めて、台所。

敷居を越えたとき、重苦しい匂いが私たちを襲った、私が出会った匂い

石炭灯、水ひしゃく、未漂白の家庭用シーツなどがあり、雨で腐った灰色の家で何度もそうされました。それはいつも私を怖がらせ、期待させ、用心深い。

部屋の隅に真鍮のベッドがあり、そのベッドにはデュボース夫人がいた。ジェムの活動が彼女をそこに追い込んだのではないかと思い、一瞬彼女を気の毒に思いました。彼女は山積みキルトの下に横たわっていて、ほとんど友好的に見えました。

彼女のベッドのそばには大理石の天板の洗面台がありました。そこにはティースプーンの入ったグラス、赤耳注射器、脱脂綿の箱、そして鋼鉄の目覚まし時計が置かれていました。

3本の小さな足で立っています。

「それで、あの汚い妹を連れてきたんですね？」というのが彼女の挨拶だった。

ジェムは静かに言いました。「私の妹は汚くないし、あなたを怖がっていません。」しかし私は彼の膝が震えていることに気づきました。

私は激しい攻撃を期待していたが、彼女が言ったのは「本を読み始めてもいいよ、ジェレミー」だけだった。

ジェムは杖底の椅子に座り、アイヴァンホーを開いた。もう一つ引き上げました
そして彼の隣に座った。

「もっと近づいて」とデュボース夫人が言った。「ベッドの横に来てください。」

私たちは椅子を前に移動しました。これは私がこれまでに行った中で最も彼女に近かった場所であり、私が最もやりたかったことは椅子を元の位置に戻すことでした。

彼女はひどかった。彼女の顔は汚れた枕カバーの色で、口の端は濡れて光り、顎を囲む深い溝に氷河のように食い込んでいた。彼女の頬には老年による肝斑が点在し、彼女の青白い瞳には黒いピンポイントの瞳孔があった。彼女の手はこぶ状で、爪の上には甘皮が生えていました。彼女の底板は入っておらず、上唇は突き出ていました。時々、彼女は下唇を上皿に引き寄せて、彼女を運びました。

それであごを付けます。これによりウェットの動きが速くなりました。

必要以上に見なかった。ジェムはアイヴァンホーを再び開き、読み始めました。私は彼についていこうと努めたましたが、彼は読むのが速すぎました。ジェムは知らない単語が出てくると飛ばしてしまいましたが、デュボース夫人が捕まえて綴らせました。ジェムはおそらく 20 分ほど本を読み、その間に私は

すすで汚れたマントルピース、窓の外、彼女を見られない場所ならどこでも。

彼が読み進めていくうちに、デュボース夫人の訂正がますます減り、ジェムが一文を宙に浮かせたままにしてしまったことに気づきました。彼女は聞いていませんでした。

私はベッドの方を見た。

彼女に何かが起こったのです。彼女はキルトをかぶせて仰向けに横たわった
顎、頭と肩だけが見えていました。彼女の頭はゆっくりと左右に動きました。時折彼女は口を大きく開け、舌がうねっているのがかすかに見えた。彼女の唇には唾液が溜まっていた。彼女は絵を描くだろう

それらの中に入れてから、再び口を開けます。彼女の口はそれ自体が私的な存在であるかのようでした。それは、干潮時のハマグリ穴のように、外にも内にも、彼女の他の部分から独立して機能しました。時折、粘性のあるもののように「Pt」と言うことがありました。

物質が沸騰すること。

私はジェムの袖を引っ張った。

彼は私を見て、それからベッドを見た。彼女の頭は定期的に私たちに向かってなだれ込み、ジェムはこう言いました。デュボースさん、大丈夫ですか？彼女には彼の声が聞こえなかった。

目覚まし時計が鳴り、私たちは固まって怖がりました。1分後、まだ神経がうずきながらも、ジェムと私は家に向かう歩道にいました。私たちは逃げませんでした、ジェシーが私たちを送ってくれました。時計が鳴り終わる前に、彼女は部屋でジェムと私を押ししていました

それから。

「シュー」と彼女は言った。「皆さんもお帰りなさい。」

ジェムはドアの前でためらいました。

「薬を飲む時間だよ」とジェシーは言った。私たちの後ろでドアが勢いよく閉まると、ジェシーがデュボース夫人のベッドに向かって足早に歩いていくのが見えました。

家に着いたのはまだ3時45分だったので、ジェムと私はドロップキックをしました。

アティカスに会う時間まで裏庭で過ごした。アティカスは私に黄色い鉛筆を2本、ジェムにはフットボール雑誌を持っていました。おそらくそれはデュボース夫人との初日のセッションに対する無言のご褒美だったと思います。ジェムは何が起こったのかを彼に話しました。

「彼女はあなたを怖がらせましたか？」アティカスは尋ねた。

「いいえ、」とジェムは言いました。「でも、彼女はとても意地悪なんです。彼女は発作か何かを患っている。彼女はたくさん唾を吐きます。」

「彼女はそれを助けることができません。病気になると、人は時々見た目が良くなることがあります。」

「彼女は私を怖がらせた」と私は言った。

アティカスは眼鏡越しに私を見た。「ジェムと一緒に行く必要はないよ、君は」
知る。"

デュボース夫人の家での次の午後は、最初の午後と同じでした。

次に、徐々にパターンが現れるまで、すべてが普通に始まります。つまり、デュボース夫人は、ジェムの好きな話題、樁、そして私たちの父親の黒人好きの性癖についてしばらくジェムを追いかけます。彼女はますます沈黙して、私たちの前から去っていきました。目覚まし時計が鳴り、ジェシーが私たちを追い出し、残りの一日は私たちのものでした。

「アティカス、黒人愛好家って一体何なの？」ある晩、私は言った。

アティカスの顔は険しかった。「誰かがあなたをそう呼んだことがありますか？」

「いいえ、デュボース夫人はあなたのことをそう呼んでいます。彼女は毎日午後ウォームアップしてあなたにそう呼んでいます。去年のクリスマスにフランスから電話があって、そこで初めてその電話を聞いたんです。」

「それが彼に飛びついた理由ですか？」アティカスは尋ねた。

"かしこまりました…"

「では、なぜそれが何を意味するのかを私に聞くのですか？」

私はアティカスに、フランスが言ったことよりも重要なことを説明しようとした。

彼の言い方が私を激怒させた。「彼は鼻水とか言っているようだった」
何か'。"

「スカウト」とアティカスは言った、「黒人愛好家というのは、そういう意味ではない用語の一つにすぎない」
鼻水など何でも。説明するのは難しいです。無知でくだらない人々は、誰かが自分よりも黒人を優遇していると考えるときにこの言葉を使います。私たちのような一部の人が、誰かをレッテルを貼るために一般的で醜い言葉を使いたいときに、この言葉が紛れ込んで使われています。」

「では、あなたは本当に黒人好きではないのですね？」

「確かにそうですよ。私はみんなを愛するために最善を尽くします…私は時々、厳しい言い方をしますー
ベイビー、誰かが悪いと思う名前と呼ばれることは決して侮辱ではありません。それはその人がどれほど貧しいかを示すだけであり、あなたを傷つけることはありません。だから、デュボース夫人にがっかりしないでください。彼女は自分なりに十分な悩みを抱えているんだよ。」

1か月後のある日の午後、ジェムは呼びかけに応じてサー・ウォルター・スカウトの間をかき分けて進んでいたが、デュボース夫人がことあるごとに彼を正していた。

ドアをノックする音がしたとき。"お入りください！"彼女は叫んだ。

アティカスが入ってきた。彼はベッドに行き、デュボース夫人の手を取った。「私はオフィスから来ていたので、子供たちには会わなかった」と彼は語った。「彼らはまだいるかもしれないと思った
ここ。"

デュボース夫人は彼に微笑んだ。彼女が彼をひどく嫌っているように見えるときに、どうやって彼に話しかけることができるのか、私には一生わかりませんでした。「今何時か知っていますか、アティカス？」彼女は言いました。「5時ちょうど14分です。目覚まし時計は5時半にセットされています。それを知っておいてほしいのです。」

突然、私たちは毎日少しずつ夫人の家に滞在していたことを思い出しました。

デュボースの話によると、目覚まし時計は毎日数分遅れて鳴り、それが鳴る頃には彼女は発作の状態に陥っていたという。今日、彼女は持っていました

発作を起こすつもりもなかったのに、2時間近くジェムと敵対し、私はこう感じた

絶望的に閉じ込められた。目覚まし時計が私たちの解放の合図でした。ある日、その音が鳴らなくなったら、私たちはどうしますか？

「ジェムが本を読む日も残りわずかだと感じています」とアティカスさんは言う。

「あと一週間だけだと思います」と彼女は言った、「念のため…」

ジェムは立ち上がった。"しかし-"

アティカスが手を差し出すと、ジェムは黙った。帰り道、ジェムは一ヶ月だけやらなくてはならなかったのに、もう一ヶ月が過ぎてしまい、それは不公平だと言いました。

「あと一週間だけだよ、息子よ」アティカスは言った。

「いいえ」ジェムは言った。「はい」とアティカスは言った。

翌週、私たちはデュボース夫人の家に戻りました。目覚まし時計は鳴り止んだが、デュボース夫人が「それでいいよ」と私たちを解放してくれたので、午後遅くに私たちが戻るとアティカスは家にいて新聞を読んでいた。それでも

発作は治まり、彼女はあらゆる点で昔の自分のままだった。ウォルター・スコット卿が堀や城について長々と説明するようになる、デュボース夫人は退屈して私たちがいじめたものだった。

「ジェレミー・フィンチ、私の樁を引き裂いたことを一生後悔すると言いましたね。今になって後悔してるんじゃないの？」

ジェムは確かにそうだと言うだろう。

「私の山の雪を殺せるとでも思ったんですか？そうですね、ジェシーはトップが伸びてきていると言っています。次回
は正しいやり方が分かるでしょう？

根元から引き抜いてあげるね？」

ジェムはきっとそうだと言うだろう。

「私に向かってつぶやくなよ、坊や！」あなたは頭を上げて「はい、奥様」と言います。とはいえ、父親のありのままのこ
とを我慢したいとは思わないでください。」

ジェムは顎を上げ、恨みのない顔でデュボース夫人を見つめた。何週間もかけて、彼は礼儀正しく、冷静な関心の表現を
培い、彼女の最も血の通った態度に応じてそれを彼女に示した。

凝り固まった発明。

ついにその日が来ました。ある日の午後、デュボース夫人が「それでいいでしょう」と言うと、彼女はこう付け加えた。こんにちは。」

おしまい。私たちは心から安堵し、飛び跳ねたり吠えたりしながら歩道を飛び降りた。

その春は良い春でした。日が長くなり、遊ぶ時間が増えました。

ジェムの頭のほとんどは、全米の大学フットボール選手全員のバイタル統計で占められていました。アティカスは毎晩新聞のスポーツ面を読んでくれました。見通しから判断すると、アラバマ州は今年もローズボウルに出場するかもしれないが、我々が発音できる名前は一人もなかった。ある晩、電話が鳴ったとき、アティカスはウィンディ・シートンのコラムの真っ最中だった。

彼はそれに答えて、ホールの帽子置き場に行きました。「私は夫人のところに行きます。

デュボースはしばらくの間だ」と彼は言った。「長くはかからないよ。」

しかし、アティカスは私の就寝時間をずっと過ぎるまで離れていました。戻ってきたとき、彼はキャンディーの箱を持っていた。アティカスはリビングルームに座り、箱をその上に置きました。

彼の椅子の横の床。

「彼女は何かしたかったのですか？」ジェムは尋ねた。

私たちは一ヶ月以上もデュボース夫人に会っていませんでした。私たちが通りかかったとき、彼女はもうポーチにはいませんでした。

「彼女は死んだんだ、息子よ」アティカスが言った。「彼女は数分前に亡くなりました。」

「ああ」とジェムは言いました。「良い。」

「そうですね、その通りです」とアティカスは言った。「彼女はもう苦しんでいません。彼女は長い間病気でした。息子よ、彼女の発作が何であるか知らなかったのですか？」

ジェムは首を振った。

"夫人。デュボースはモルヒネ中毒者でした」とアティカス氏は語った。「彼女は何年も鎮痛剤としてそれを服用していました。医者には彼女にそれを着せた。彼女は残りの人生をそれに費やして、それほど苦痛を感じることなく死ぬはずだったが、彼女はあまりにも反対だった——」

"お客様？"ジェムは言いました。

アティカスは、「あなたの逃亡の直前に、彼女は遺言書を作るために私に電話をかけてきました。博士。

レイノルズさんは彼女に、あと数カ月しか残されていないと告げた。彼女のビジネス事情は

完璧な秩序だったけど、彼女は「まだ一つだけ狂っているところがある」って言ったんだ。」

"何だって？"ジェムは当惑した。

「彼女は、何にも、誰にも負われずにこの世界を去るつもりだと言いました。ジェム、彼女のように病気のときは、楽にするために何でもしていいのですが、彼女にとってはそれがすべてではありませんでした。彼女は死ぬ前にこの問題から決別するつもりだったと言いました。

そしてそれが彼女がやったことなのです。」

ジェムは「それが彼女の発作だったということですか？」と言いました。

「はい、それが彼らでした。ほとんどの時間、あなたは彼女に本を読んでいたのではないかと思います。彼女はあなたの言った言葉を聞きました。彼女の心と体はすべてその目覚まし時計に集中していました。もしあなたが彼女の手落ちしていなかったら、とにかくあなたに本を読みに行かせていたでしょう。何か気が散ったのかもしれない。もう一つ理由があった——」

「彼女は自由に死んだのか？」ジェムは尋ねた。

「山の空気のように」とアティカスは言った。「彼女はほとんど最後まで意識がありました。意識はあります」と彼は微笑んだ。彼女は今でも私の行為に心から反対しており、私はおそらく残りの人生をかけてあなたを刑務所から救い出すことに費やすだろうと言いました。彼女はジェシーにこの箱を修理してもらった——」

アティカスは手を伸ばしてキャンディーの箱を拾い上げた。彼はそれをジェムに手渡した。

ジェムは箱を開けました。中には湿った綿の塊に囲まれていて、白くて蠟のような完璧な椿がありました。それは雪の山でした。

ジェムは目が頭から飛び出そうになった。「昔の地獄の悪魔、古い地獄の悪魔！」彼は叫びながらそれを投げつけた。「なぜ彼女は私を放っておけないのですか？」

あっという間にアティカスが立ち上がり、彼の上に立った。ジェムはアティカスのシャツの前に顔を埋めた。「シー」と彼は言った。

「それが彼女のあなたへの伝え方だったのだと思います。ジェム、もうすべてが順調です、すべてが順調です。ご存知のとおり、彼女は素晴らしい女性でした。」

"女性？"ジェムは頭を上げた。彼の顔は真っ赤でした。「彼女はあなたについてあんなことを言ったのに、女性ですか？」

"彼女はそうだった。彼女は物事について彼女なりの見解を持っていて、私とはかなり異なっていました、おそらく…息子、もしあなたが正気を失っていなかったら、私はあなたに彼女に本を読みに行かせていただろうと言いました。私はあなたに彼女について何かを見てもらいたかったのです。勇気とは銃を手を持った男のことだという考えを持たせるのではなく、本当の勇気とは何なのかを知ってほしかったのです。始める前になめられているとわかっているにもかかわらず、とにかく始めてしまうときです。

そしてあなたは何かがあってもそれを見抜きます。勝つことはめったにありませんが、勝つこともあります。

デュボース夫人が98ポンドすべてを獲得して勝ちました。彼女の見解によれば、彼女は何にも負われず、誰にも負われずに死んだということです。彼女は私がこれまで知った中で最も勇敢な人でした。」

ジェムはキャンディーの箱を拾い上げ、火の中に投げ込みました。彼は椿を拾いました、そして私がベッドに行くと、彼が広い花びらをいじっているのが見えました。アティカスは新聞を読んでいた。

パート2

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第12章

ジェムは12歳でした。彼は一緒に暮らすのが難しく、一貫性がなく、気分屋でした。彼の食欲は恐ろしいもので、せがむのをやめるよう何度も言ったので、私はアティカスに相談しました。「彼はサナダムシに感染していると思いますか？」アティカスは「いいえ、ジェムは成長している」と言いました。私は彼に対して辛抱強く、できるだけ彼の邪魔をしないようにしなければなりません。

ジェムのこの変化は数週間のうちに起こりました。デュボース夫人は墓の中でも冷たくはなかった。ジェムは彼女に本を読みに行ったとき、私と一緒にいてくれたことに十分感謝しているようだった。一夜にして、ジェムは異質な価値観を獲得し、それを私に押し付けようとしていたようでした。彼は何度も私に何をすべきかまで言いました。ある口論の後、ジェムが「女の子らしく正しく行動し始める時期が来たんだよ！」と叫んだ。私は泣き崩れてカルプルニアへ逃げました。

「ミスター・ジェムのことであまり心配しないで——」と彼女は話し始めた。

「ジェムさん？」

「ええ、彼は今ちょうどミスター・ジェムくらいです。」

「彼はそれほど年ではありません」と私は言いました。「彼が必要としているのは彼を殴ってくれる誰かだけだ、そして私はそうではない」
十分大きいよ。」

「ベイビー」カルプルニアは言った、「ミスター・ジェムが成長しているなら、私はそれを仕方がありません。彼は

これからは一人でいたいし、男の子がすることなら何でもするから、寂しいときはすぐにキッチンに来てください。たくさんのことを見つけてます

ここでやってください。」

その夏の始まりは良い前兆だった。ジェムは自分の好きなようにすることができた。ディルが来るまではカルプルニアで十分だろう。私がキッチンに現れたとき、彼女は私に会えて嬉しかったようで、彼女を見ていると、何かスキルが必要だと思うようになりました。

女の子であること。

しかし、夏が来てもディルはいませんでした。私は彼から手紙とスナップショットを受け取りました。手紙には、彼には新しい父親がいて、その写真が同封されていたと書かれていた。

彼らは漁船を建造する計画を立てていたため、メリディアンに留まらなければならなかった。彼の父親はアティカスと同じ弁護士で、ほんの少し年下でした。ディルの新しい父親は楽しそうな顔をしていたので、ディルが彼を捕まえてくれてよかったと思いましたが、私は打ちのめされました。ディルは最後に、彼は私を永遠に愛してくれるし、心配しないで、十分なお金が貯まったらすぐに私を迎えに来て結婚するつもりだから、手紙を書いてください、と締めくくった。

私に永久の婚約者がいたという事実は、彼の不在の埋め合わせにはほとんどならなかった。そんなことは考えたこともなかったが、夏はディルが魚だまりのそばでタバコを吸う日だった。ディルの目はブー・ラドリーを出現させるための複雑な計画で生き生きとしていた。夏は、ジェムが見ていないときにディルがすぐに手を伸ばして私にキスしたことであり、私たちが時々お互いを感じていた憧れでした。彼にとって、人生は日常的でした。彼なしでは人生は耐えられないものだった。私は二日間惨めな気持ちで過ごしました。

それだけでは十分ではなかったかのように、州議会が緊急開会され、アティカスは私たちを2週間放置しました。総督は国船から数匹のフジツボを掻き落とすことに熱心だった。バーミンガムでは座り込みストライキがあった。パン

都市の列は長くなり、田舎の人々は貧しくなった。しかし、これらはジェムと私の世界から遠く離れた出来事。

ある朝、私たちはモンゴメリー広告に載っていた漫画を見て驚きました。

キャプションの上には「メイコムフィンチ」。そこには、裸足にショートパンツをはいたアティカスが机に鎖でつながれている姿が写っていた。軽薄そうな女の子たちが「ヤッホー！」と叫ぶ中、彼は石板に熱心に字を書いていた。彼に。

「それは褒め言葉だよ」とジェムは説明した。「彼は誰もやらなかったら終わらないようなことに時間を費やしています。」

"はあ？"

ジェムは新たに開発された特性に加えて、狂おしいほどの知恵を身につけていた。

「ああ、スカウト、それは郡などの税制を再編成するようなものです。そのようなことは、ほとんどの男性にとってかなりドライです。」

"どうして知っていますか？"

「ああ、もう放っておいてください。私は新聞を読んでいます。」

ジェムは願いを叶えた。私はキッチンへ向かいました。

エンドウ豆の殻を剥いている間、カルプルニアは突然こう言いました。「今週の日曜日、皆さんの教会についてどうするつもりですか？」

「何もないと思います。アティカスは私たちにコレクションを残してくれました。」

カルプルニアの目が細められ、彼女の心の中で何が起きているのかがわかりました。

「カル」と私は言った、「私たちが行儀よくするのはわかっているでしょう。私たちはもう何年も教会で何もしていません。」

カルプルニアは、私たちが父親も教師もいなかったときの雨の日曜日を思い出したようです。クラスは放っておいて、ユーン・アン・シン普森さんを椅子に縛り付け、炉室に置いた。私たちは彼女のことなど忘れて、教会の二階に集まり、静かに説教を聞いていたところ、ラジエターのパイプから恐ろしい衝撃音が鳴り響き、誰かが調べてユーン・アンがもうシャドラックをしたくないと言出すまで鳴り続けた――ジェム・フィンチは語った。

十分な信念があれば火傷はしないだろうが、あそこは暑かった。

「それに、カル、アティカスが私たちの元を去ったのはこれが初めてではありません」と私は抗議しました。

「ええ、でも彼はあなたの先生がそこにいると確信しています。今回は彼の言うことを聞いていませんでした。おそらく彼はそれを忘れていたと思います。」カルプルニアは頭をかいた。突然彼女は微笑んだ。「あなたとジェム先生は、明日私と一緒に教会に来ませんか？」

"本当に？"

「どうですか？」カルプルニアはニヤリと笑った。

カルプルニアがこれまでに私を乱暴に入浴させたことがあったとしても、それは、その土曜日の夜の日課の彼女の監督に比べれば何でもありませんでした。彼女は私に二度石鹸を作り、すぐたびに浴槽に真水を汲みました。彼女は私の頭を洗面器に突っ込んで、オクタゴン石鹸とカスティーリヤで洗った。彼女は何年もジェムを信頼していましたが、

ある夜、彼女は彼のプライバシーを侵害し、「家族全員が見ない限り、誰もこの家でお風呂に入ることができないのですか？」と爆発を引き起こした。

翌朝、彼女はいつもより早く「服を見直し、始めました。カルプルニアが私たちと一緒に一晩滞在したとき、彼女はキッチンにある折りたたみ式ベッドで寝ました。その朝、それは私たちの日曜日の習慣で覆われていました。彼女は私のドレスにでんぷんを大量に塗り込んでいたので、私が座るとテントのように立ち上がっていました。彼女は私にペチコートを着させた

そして彼女はピンクの帯を私の腰にしっかりと巻き付けました。彼女は私の特許を侵害しました。革靴に冷たいビスケットを入れて、その中に自分の顔が見えるまで履き続けた。

「まるでマルディグラに行くような気分だよ」とジェムは言った。「これは一体何のためですか、カル？」

「私が子供の面倒を見ないなんて誰にも言われたくないの」と彼女はつぶやいた。

「ミスター・ジェム、そのスーツにそのネクタイは絶対に着けられません。これは緑です。」

「それでいいの？」

「スーツは青です。言えないの？」

「ひーひー」と私は叫びました、「ジェムは色盲だよ」

彼の顔は怒って赤くなったが、カルプルニアは言った。あなたは笑顔で First Purchase に行くことになるでしょう。」

最初に購入したアフリカン ME 教会は南部郊外の地区にありました

町の境界線、古い製材所の線路を越えたところ。それはペンキが剥がれた古代のフレームの建物で、メイコムで尖塔と鐘のある唯一の教会で、ファーストと呼ばれていました。

解放奴隷の最初の収入から支払われたので購入。黒人は日曜日にそこで礼拝し、白人男性は平日にそこでギャンブルをしました。

教会の墓地とその隣の墓地はレンガのように硬い粘土でした。誰かが

日照りの期間中に死亡し、雨が降って地面が柔らかくなるまで、遺体は氷の塊で覆われていました。墓地内のいくつかの墓には、崩れた墓石が置かれていました。新しいものは、明るい色のガラスと壊れたコカ・コーラのボトルで輪郭が描かれていました。いくつかの墓を守る避雷針は、不安な気持ちで休んでいる死者を示していました。幼児の墓の頭には、燃え尽きたろうそくの切り株が立っていた。幸せなお墓でした。

教会の庭に入ると、清潔な黒人の温かくほろ苦い香りが私たちを出迎えてくれました。ハーツ オブ ラブの美容院には、アサフェティダ、嗅ぎタバコ、ホイツ コロン、ブラウンズ ミュール、ペパーミント、ライラック タルカムが混ざり合っていました。

ジェムと私がカルプルニアと一緒にいるのを見ると、男たちは後ずさりして帽子を脱ぎました。女性たちは腰で腕を組み、平日の敬意の表れだった。彼らは別れて、教会のドアに向かう小さな道を作りました。

私たち。カルプルニアはジェムと私の間を歩き、ジェムの挨拶に応えた。

明るい服装の隣人。

「何をしているの、キャルさん？」後ろから声がした。

カルプルニアの手が私たちの肩に置かれ、私たちは立ち止まって周囲を見回しました。私たちの後ろの道に背の高い黒人女性が立っていました。彼女の体重は片足にかかっていた。彼女は左肘を腰のカーブに置き、上を向いて私たちに指さしました

手のひら。彼女は銃弾のような頭で、奇妙なアーモンド形の目、まっすぐな鼻、そしてインディアン弓のような口を持っていました。彼女の身長は7フィートに見えた。

カルプルニアの手が肩に食い込むのを感じた。「ルーラ、何が欲しいの？」彼女は尋ねた、彼女が使っているのを聞いたことのない音調で。彼女は静かに、軽蔑的に言った。

「なぜあなたが黒人の教会に白いチルンを連れてくるのか知りたいのです。」

「彼らは私の会社です」とカルプルニアは言った。私はまた彼女の声が奇妙だと思った。彼女は他の人たちと同じように話していた。

「そうだね、平日は君の会社がフィンチの家にいると思うよ。」

群衆の間にざわめきが走った。「心配しないで」カルプルニアは私にささやきましたが、彼女の帽子のバラの花は憤慨して震えていました。

ルーラが私たちに向かって小道を上がってくると、カルプルニアは「そこに止まりなさい、黒人」と言いました。

ルーラは立ち止まりましたが、「白いチルンをここに連れてくる用はないよ」と言いました。

—彼らには彼らの教会があり、私たちは私たちの教会を持っています。それは私たちの教会ですよ、ミス・キャル？」

カルプルニアは「同じ神ですよ？」と言いました。

ジェムは言いました、「帰ろうよ、カル、彼らは私たちをここに連れてほしくないんだ——」

私も同意しました。彼らは私たちがここにいることを望んでいませんでした。見たというよりも、私たちが進められているのを感じました。彼らは私たちに近づいているようでしたが、私がカルプルニアを見上げたとき、彼女の目には楽しさがありました。もう一度通路を見てみると、ルーラの姿はなかった。彼女の代わりに有色人種の固まりがいた。

そのうちの一人が群衆から降りました。それはゴミ収集員のジーボだった。「ミスター・ジェム」と彼は言った。「皆さんがここに來られてとてもうれしいです。気にしないでください

ルーラ、サイクス牧師が彼女を教会に連れて行くと言ったので、彼女は論争を起こしています。彼女は昔からトラブルメーカーで、派手なアイデアと傲慢なやり方を持っていました。私たちは皆さんと会えてとても嬉しいです。」

そう言って、カルプルニアは私たちを教会のドアまで導き、そこでサイクス牧師が私たちを出迎え、正面の会席に案内しました。

最初に購入したものは天井も剥がされており、内部も塗装されていませんでした。その壁に沿って、点火していない灯油ランプが真鍮のブラケットにぶら下がっていました。松のベンチが椅子として機能しました。荒いオーク材の説教壇の後ろには、色あせたピンク色の絹の横断幕が「神は愛です」と宣言しており、ハントの『世界の光』のグラビア印刷物を除けば、教会の唯一の装飾である。

ピアノ、オルガン、賛美歌本、教会のプログラムなど、毎週日曜日に見られたよく知られた教会の妨害の兆候はありませんでした。中は薄暗く、じめじめとした冷気が集まった会衆によってゆっくりと払拭されていた。各席には、Tyndal's Hardware Co. (You-Name-It-We-Sell-It) の厚意により、派手なゲツセマネの園が描かれた安っぽいボール紙の扇風機がありました。

カルプルニアはジェムと私に列の最後尾へ行くよう合図し、私たちの間に身を置きました。彼女はハンドバッグを調べ、ハンカチを取り出し、隅にある硬い小銭の束をほどこきました。彼女は私に10セント、ジェムに10セントをくれました。「私たちのものはあるよ」と彼はささやいた。「それを守ってください」とカルプルニアは言った。「あなたは私の仲間です。」ジェムの顔には、自分の10セントを差し控えることの倫理について一瞬迷った様子が見られましたが、生来の礼儀正しさが勝って、彼は10セントをポケットに移しました。私も何の躊躇もなく同じようにしました。

「キャル、賛美歌の本はどこにあるの？」と私はささやきました。

「私たちには何もありません」と彼女は言いました。

「それで、どうやって――？」

「しー」と彼女は言った。サイクス牧師は説教壇の後ろに立って、

会衆は沈黙する。彼は、黒いスーツ、黒いネクタイ、白いシャツを着た、背が低くてがっしりとした男で、曇り空の光でキラキラと輝く金の時計チェーンを身につけていました。

ウィンドウズ。

「兄弟姉妹の皆さん、今朝は私たちと一緒に過ごすことができ特にうれしく思います。ミスター・フィンチとミス・フィンチ。皆さんは彼らの父親を知っています。始める前に私はいくつかのお知らせを読みます。」

サイクス牧師は何枚かの書類をシャッフルし、1枚を選んで腕を伸ばして持った。「

宣教協会は来週の火曜日にアネット・リーブス姉妹の家で会合を開きます。

裁縫物を持ってきてください。」

彼は別の論文を読んだ。「皆さんはトム・ロビンソン兄弟が苦しんでいることを知っています。

彼は子供の頃から First Purchase の忠実なメンバーです。今日と今後の3日曜日に集められたコレクションは、妻のヘレンに贈られ、家の手伝いをしてもらいます。」

私はジェムを殴った。「それはトム・アティカスのデー—」

「しーっ！」

私はカルプルニアの方を向いたが、口を開く前に黙っていた。私は落ち着いて、サイクス牧師に注意を向けました。

彼は私が落ち着くのを待っているようでした。「音楽監督が最初の賛美歌で私たちを導いてくれるでしょうか」と彼は言った。

ジーボは席から立ち上がって中央の通路を歩き、私たちの前で立ち止まって会衆の方を向いた。彼はボロボロの賛美歌本を持っていました。彼はそれを開けて、「2番73番を歌います」と言いました。

これは私にとって多すぎました。「賛美歌がなかったらどうやって歌うの？」
本？」

カルプルニアは微笑んだ。「ちょっと黙ってて」と彼女はささやいた、「すぐにわかるよ」

ジーボは咳払いをして、遠くから響く砲撃のような声でこう読み上げた。

「川の向こうに土地があるよ。」

奇跡的にピッチ上で、百の声がジーボの言葉を歌い上げた。最後の音節はハスキーな鼻歌に抑えられ、

続いてジーボがこう言った。

永遠に甘いよ。」

音楽が再び私たちの周りで盛り上がりました。最後の音が長く残り、ジーボは次の一文でそれに応えた。「そして、我々は信仰の命令によってのみあの岸に到達します。」

会衆はためらったが、ジーボは慎重にその歌詞を繰り返し、歌われた。コーラスでジーボは本を閉じ、会衆が彼の助けなしで進むよう合図した。

「ジュビリー」のダイニングノートでジーボはこう言った、「輝く川の向こうの、遥かに甘い永遠に」。

一行ごとに声がシンプルなハーモニーを奏で、賛美歌が終わるまで続きました。

憂鬱なつぶやき。

私はジェムを見つめました。ジェムはジーボを目尻から見つめていました。私も信じませんでしたが、二人ともそれを聞いていました。

次にサイクス牧師は、病人や苦しんでいる人たちに祝福を与えるよう主に呼びかけました。これは、サイクス牧師が神の注意をいくつかの特定のケースに向けた点を除いて、私たちの教会の実践と何ら変わりません。

彼の説教は罪に対する率直な非難であり、後ろの壁に掲げられたモットーの厳格な宣言であった。つまり、彼は酔っぱらうビール、ギャンブル、見知らぬ女性の悪に対して群れに警告した。密造業者は地区で十分な問題を引き起こしましたが、女性はさらに悪かったです。私もまた、自分の教会でよく遭遇したのですが、すべての聖職者が気になっていると思われる女性の不純物の教義に直面しました。

ジェムと私は、たった一つの例外を除いて、日曜日ごとに同じ説教を聞いていました。サイクス牧師は説教壇をもっと自由に使って、個人の恵みの失墜についての見解を表明した。ジム・ハーディは5年間教会を欠席していた

日曜日、彼は病気ではなかった。コンスタンス・ジャクソンは自分の行動に気を付けたほうがいい——彼女は近所の人たちと口論して重大な危険にさらされていた。彼女は地区の歴史の中で唯一の悪意のあるフェンスを建てました。

サイクス牧師は説教を締めくくった。彼は説教壇の前のテーブルの横に立って、朝の献金を要求しましたが、ジェムと私にとっては奇妙な手続きでした。

会衆は一人ずつ前に出て、黒いホーローのコーヒー缶にニッケルとダイムを落としました。ジェムと私もそれに倣い、「ありがとうございます」と優しい言葉をもらいました。

ありがとうございます」と私たちの小銭がカチャカチャと鳴りました。

私たちが驚いたことに、サイクス牧師は缶を空にしてテーブルの上に置き、コインを手にかき集めました。彼は背筋を伸ばしてこう言いました。「これでは十分ではありません。

10ドル持っています。」

会衆はざわめきました。「皆さんはそれが何のためか知っています。トムが刑務所にいる間、ヘレンは子供たちを残して働かせるわけにはいきません。みんながあと10円寄付してくれれば、それを手に入れられる——」サイクス牧師は手を振り、教会の後ろにいる誰かに呼びかけた。「アレック、ドアを閉めて。10ドルが貯まるまでは誰もここから出ません。」

カルプルニアはハンドバッグを引っ掻き、ボロボロの革製の小銭入れを取り出した。「ナウ・カル」とジェムがささやきながら、彼女は彼にピカピカのクォーターを手渡した。

「私たちのものを入れてください。10セントをちょうだい、スカウト」

教会は息苦しくなり、サイクス牧師は自分の群れから汗を流すつもりではないかと思いつきました。

ファンはパチパチ音を立て、足は引きずり、

タバコを吸う人たちは苦しみました。

サイクス牧師は、「カーロー・リチャードソン、この通路であなたをまだ見たことがありません。」と厳しく言って私を驚かせました。

カーキ色のズボンをはいたやせた男が通路からやって来て、コインを預けた。会衆は承認をささやきました。

それからサイクス牧師はこう言いました。それなら、いただきましょう。」

ゆっくりと、苦しみながら、10ドルが集まりました。ドアが開き、温かい空気が私たちを蘇らせました。ジョーダンの嵐の岸辺に並ぶジーボと教会

終わりました。

私はここに留まって探索したかったのですが、カルプルニアが私を先に通路へと押し上げてくれました。教会の入り口で、彼女がジーボとその家族と話すために立ち止まっている間、ジェムと私はサイクス牧師とおしゃべりしました。私は質問が溢れてきましたが、待ってカルプルニアに答えてもらうことにしました。

「私たちは『皆さんがここに来てくれて特にうれしく思います』とサイクス牧師は言いました。「この教会にはあなたのお父さんほど良い友人はいません。」

私の好奇心が爆発しました：「なぜあなたたちはトム・ロビンソンのコレクションを取り上げているのですか？」妻？」

「理由を聞かなかったの？」サイクス牧師は尋ねた。「ヘレンには3人の小さな子供がいて、彼女は仕事に出かけることができない——」

「なぜ彼女は彼らを連れて行けないのですか、牧師？」私は尋ねた。小さな子供を連れた野原の黒人は、子供たちを日陰のある場所に預けるのが通例でした。

両親は働いており、通常、赤ちゃんは2列の綿の間に日陰に座っていました。座ることができない人々は、母親の背中にパプーススタイルで縛り付けられるか、余分な綿の袋に入れられて暮らしていました。

サイクス牧師はためらった。「実を言うと、ミス・ジャン・レイーズ、ヘレンは最近仕事を見つけるのが難しいと感じています…時間があるときは、ミスター・リンクがいいと思います」

デスが彼女を連れて行きます。」

「なぜそうではないのですか、牧師？」

彼が答える前に、私は肩にカルプルニアの手が置かれたのを感じた。プレッシャーに耐えながら、私は「来させてくれてありがとう」と言いました。ジェムが私に同調し、私たちは道を進みました家路へ。

「カル、トム・ロビンソンが刑務所において、ひどいことをしたのは知っていますが、なぜですか？」
みんなヘレンを雇わないの？」私は尋ねた。

カルプルニアは、ネイビーのボイルドレスと帽子のタブを着て、ジェムと私の間を歩いていました。

「トムは終わったと人々が言っているからです」と彼女は言った。「人々は心配していない——彼の家族の誰とも関わりを持つことはありません。」

「いったい彼は何をしたの、カル？」

カルプルニアはため息をついた。「老ボブ・イーウェル氏は、自分の女の子をレイプしたとして彼を告発し、逮捕され、刑務所に入れられた——」

"氏。イーウェル？」私の記憶が揺さぶられました。「彼は、毎日学校の初日に来て、そして家に帰るあのイーウェルたちと何か関係があるのでしょうか？」なんでだ、アティカスは彼らはまったくのゴミだと言った——アティカスがあんなふうに人々について語るのを聞いたことがない
イーウェルズについて。彼は言った-"

「はい、そちらです。」

「そうだね、もしメイコムみんながイーウェル家がどんな人たちなのか知っていたら、彼らは喜んでヘレンを雇うだろう……レイプって何？」

「それについてはフィンチさんに聞かなければなりません」と彼女は言った。「彼は私よりもうまく説明できる。みんなお腹空いてる？牧師は今朝、長い時間をかけてくつろいでいました、彼は普段はそれほど退屈な人ではありません。」

「彼は私たちの説教者に似ています」とジェムは言いました。「でも、なぜあなたたちは次のような賛美歌を歌うのですか？
方法？」

「リンニン？」彼女は尋ねた。

「そういうことですか？」

「そう、それはライナーと呼ばれるものです。私が覚えている限り、彼らはそのようにしてきました。」

ジェムさんは、1年分の募金を貯めて賛美歌の本を手に入れることができそうだと語った。

カルプルニアは笑った。「何の役にも立ちませんよ」と彼女は言った。「彼らは字が読めません。」

「読めないの？ 私は尋ねた。「あの人たち全員？」

「その通りです」カルプルニアはうなずいた。「初回購入は4人くらいまでしかできない」
読んでください…私もその一人です。」

「キャル、どこの学校に通ってたんですか？」ジェムは尋ねた。

「どこにもない。さあ、誰が私に文字を教えたのでしょうか？それはミス・モーディ・アトキンソンの叔母、年老いたミス・ビューフォードでしたー」

「そんなに歳ですか？」

「私はフィンチ氏よりも年上です。」カルプルニアは笑った。「いくらかは分かりませんがね。私たちはかつてのことを思い出して、私が何歳だったのか調べようとしてましたー私は男性は女性ほど覚えていないという事実を差し引くと、彼はあと数年前のことを思い出せるのに、私はそれほど年をとっていません。」

「カル、あなたの誕生日は何ですか？」

「クリスマスに誕生日を迎えるだけで、その方が覚えやすいんです。私には本当の誕生日はありません。」

「でもカル、あなたはアティカスほど老けていないように見えますよ」とジェムは抗議した。

「有色人種は、年齢がそれほど早く現れないのです」と彼女は言う。

「彼らは字が読めないからかもしれない。カル、ジーボに教えたの？」

「はい、ミスター・ジェム。彼が少年だった頃でさえ学校はなかった。でも、私は彼に勉強させました。」

ジーボはカルプルニアの長男でした。もし私がそれについて考えたことがあるなら、カルプルニアが成熟した年齢であることを知っていただろう - ジーボには半分成長した子供たちがいた - しかし、そのとき私はそれについて考えたこともありませんでした。

「あなたも私たちと同じように、彼に入門書から教えたのですか？ 私は尋ねた。

「いいえ、私は彼に毎日聖書を一ページ読ませました。そしてミス・ビューフォードが私に教えてくれた本もありました。私がどこで手に入れたか知らないでしょう」と彼女は言った。

私たちは知りませんでした。

カルプルニアは「フィンチのおじいちゃんくれたのよ」と言いました。

「ランディングから来たんですか？」ジェムは尋ねた。「あなたは私たちにそんなことは決して言っていませんでした。」

「確かにそうだよ、ミスター・ジェム。ビューフォード・ブレイスとランディングの間のそこで育った。私はフィンチ家やビューフォード家のために一日中働いてきました。」

あなたのお父さんとお母さんが結婚したときに、メイコムに引っ越したのよ。」

「その本は何でしたか、カル？」私は尋ねた。

「ブラックストーンの説明」

ジェムは雷に打たれた。「つまり、あなたがジーボにそれを教えたということですか？」

「そうですか、ミスター・ジェム。」カルプルニアはおずおずと指を口に当てた。「それらは私が持っていた唯一の本でした。君のおじいちゃんは、ブラックストーン氏は上手な英語を書くと言っていた——」

「だから君は他の人たちがみたいに話さないんだよ」とジェムは言った。

「残りは誰？」

「残りの有色人種たち。カル、でもあなたは教会で話していたのと同じように話していました……」

カルプルニアがささやかな二重生活を送っていたとは、私はまったく思いつきませんでした。彼女がそう思うという考えは、彼女が二か国語を操れることは言うまでもなく、私たちの家庭の外に別の存在があったことは斬新でした。「カル、なぜあなたは、正しくないわかっているのに、黒人のような話を、自分の家族に話すのですか？」と私は尋ねました。

「まあ、そもそも私は黒人ですが——」

「それは、自分がよく知っているのにそのように話す必要があるという意味ではありません」とジェムは言いました。

カルプルニアは帽子を傾けて頭をかき、それから帽子を慎重に耳の上に押し下げた。「言うのは難しいですね」と彼女は言った。「もしあなたとスカウトが家で有色人種の話をしたとしたら、それは場違いでしょう？さて、私だったらどうしますか

教会や近所の人たちと白人の話をしましたか？彼らは私がモーセを倒すために気取っていると思うだろう。」

「しかし、カル、あなたはよく知っています」と私は言いました。

「自分が知っていることをすべて話す必要はありません。それは女性らしくありません。第二に、人々は自分よりも詳しい人が近くにいることを好みません。それは彼らをさらに悪化させます。正しく話したところで彼らを変えるつもりはない、彼らはそうしてきた

彼らは自分たちで学びたいと思わなければなりません、彼らが学びたくないときは、口を閉ざすか彼らの言語で話す以外にできることはありません。」

「キャル、時々会いに来てもいいですか？」

彼女は私を見下ろしました。「ほら、ハニー？あなたは毎日私に会います。」

「あなたの家に行ってください」と私は言いました。「たまには仕事終わりに？アティカスなら私を捕まえられるよ。」

「いつでも好きなときに」と彼女は言いました。「よろしくお願ひします。」

私たちはラドリー・プレイスのそばの歩道にいました。

「向こうのポーチを見てください」とジェムが言いました。

私はラドリー・プレイスに目を向け、幽霊の住人がブランコに乗って日光浴をしているのが見えるのではないかと期待した。ブランコは空いていました。

「私たちのポーチのことです」とジェムは言いました。

私は通りを見下ろしました。勇敢で、まっすぐで、妥協のないアレクサンドラおばさん

彼女は、まるで人生の中で毎日そこに座っていたかのように、ロッキングチェアに座っていました。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第13章

「私のバッグは正面の寢室に置いてください、カルブルニア」とアレクサンドラおばさんが第一に言った。「ジャン・ルイズ、頭をかくことはやめて」というのが彼女の二番目の言葉だった。

カルブルニアはおばさんの重いスーツケースを持ち上げてドアを開けました。「私がそれを受け取ります」とジェムは言ってそれを受け取りました。スーツケースが寢室の床にドスンとぶつかった音が聞こえました。その音には鈍い持続性があった。「おばちゃん、遊びに来たの？」私は尋ねた。アレクサンドラおばさんがランディングから訪れることはまれで、彼女は州内を旅行していました。彼女は鮮やかな緑色の四角いビュイックと黒い運転手を所有しており、どちらも不健康な状態で保管されていたが、今日ではどこにも見当たらなかった。

「お父さんが言ったんじゃないの？」彼女は尋ねた。

ジェムと私は首を横に振った。

「おそらく彼は忘れてしまったのだろう。彼はまだ入っていないんですね？」

「ノーム、彼はいつも午後遅くまで帰ってきません。」とジェムは言いました。

「それで、あなたのお父さんと私は、しばらくあなたと一緒に過ごす時期が来たと決めました。」

メイコムにおける「しばらく」とは、3日から30年までを意味しました。ジェムと私は視線を交わした。

「ジェムは今成長している、あなたも成長しているのよ」と彼女は私に言いました。「私たちは、あなたが女性的な影響力を持つことが最善であると判断しました。ジャン・ルイズ、あなたが服や男の子に興味を持つようになるまで、何年もかからないだろうー」

これに対して私はいくつかの答えをすることができました :カルは女の子です、私が男の子に興味を持つまでに何年もかかるでしょう、私は服に決して興味を持ちません...しかし私は黙っていました。

「ジミーおじさんはどうですか？」ジェムは尋ねた。「彼も来るの？」

「ああ、彼はランディングに滞在しているんだ。彼はこの場所を続けてくれるだろう。」

「寂しくないですか？」と私が言った瞬間。これは気の利いた質問ではないことに気づきました。ジミーおじさんがいてもいなくても、大した違いはなく、おじさんは何も言わなかった。アレクサンドラおばさんは私の質問を無視しました。

彼女に言うことは他に何も思いつきませんでした。実際、私は彼女に何を言いたいのかまったく思いつきませんでした。私は座りながら、過去の私たちの間の痛ましい会話を思い出していました。「調子はどうですか、ジャン・ルイズ？」わかりました、ありがとう奥様、お元気ですか？わかりました、ありがとう、

あなたは自分自身に何をしてきましたか？何もない。何もしないんですか？ノーム。

確かに友達はいますか？イエスサム。さて、皆さんは何をしますか？何もない。

おばさんが私のことを極端に鈍く思っているのは明らかでした、なぜなら一度聞いたことがあるからです。

私が鈍かったことをアティカスに伝えてください。

このすべての背後には物語がありましたが、そのとき私は彼女からそれを聞き出す気はありませんでした。

今日は日曜日だったので、アレクサンドラ叔母さんは主のことでイライラしていました。

日。それは彼女の日曜日のコルセットだだと思います。彼女は太っていなかったが、がっしりしており、胸が目くらむような高さまで引き上げられ、腰を締め付け、お尻が広がった防護服を選び、アレクサンドラ叔母がかつては砂時計のような姿であったことをなんとか示唆した。どの角度から見ても迫力がありました。

午後の残りは、親戚が現れると降りてくる穏やかな暗闇の中で過ぎましたが、私道で曲がる音が聞こえたとき、それは払拭されました。それはモンゴメリーから帰ってきたアティカスだった。ジェムは自分の尊厳を忘れて、私と一緒に走って彼に会いに行きました。ジェムがブリーフケースとバッグをつかんだので、私は彼の腕の中に飛び込み、彼の漠然とした乾いたキスを感じて、こう言いました。「本を持ってきてくれませんか？」 「おばちゃんがここにいるの知ってた？」

アティカス氏は両方の質問に肯定的に答えた。「彼女にどうしてほしいですか？」

私たちと一緒に暮らしませんか？」

とても欲しいと言ったのは嘘でしたが、特定の状況下では、また自分ではどうすることもできない場合には常に嘘をつかなければなりません。

「私たちは、あなたたち子供たちに必要な時期が来たと感じました。まあ、今はこんな感じです、スカウト」とアティカスは言った。「あなたの叔母さんは、あなたたちと同じように私にもよくしてくれています。君と一日中ここにいるわけにはいかないし、夏は暑くなるだろう。」

「はい、先生」と私は言いましたが、彼が言った言葉は何も理解できませんでした。しかし、私は、アレクサンドラおばさんの現場への登場は、アティカスの仕業というよりも、彼女の仕業ではないかという考えを持っていました。おばさんは家族にとって何が最善かを宣言する方法を持っていました、そして私たちと一緒に住むこともその範疇にあったのだと思います。

メイコムは彼女を歓迎した。ミス・モーディ・アトキンソンがレーン・ケーキを焼いてくれた。キラキラしたものがたくさん入っていて、私はきつくなった。ステファニー・クロフォードさんはアレクサンドラおばさんと長い間会いに行きましたが、そのほとんどがステファニーさんは首を振って「うーん、うーん、うーん」と言っていたものでした。隣のレイチェルさんは、午後におばさんをコーヒーに招き入れ、ネイサン・ラドリーさんはわざわざ前庭まで来て、おばさんに会えてうれしいと言いました。

アレクサンドラおばさんが私たちと一緒に落ち着き、生活が日常のペースに戻ったとき、アレクサンドラおばさんはまるでいつも私たちと一緒に住んでいたかのように見えました。彼女の宣教協会の軽食は、ホステスとしての彼女の評判をさらに高めた（彼女はカルブルニアにレストランを作ることを許可しなかった）

ライスクリスマンに関する長いレポートを通じて協会を維持するために必要な珍味）。彼女はメイコム・アマヌエンシス・クラブに加わり、幹事になりました。郡の生活に出席し、参加しているすべての関係者にとって、アレクサンドラおばさんは彼女の種類の最後の一人でした。彼女は川船や寄宿学校のマナーを持っていました。いかなる道徳が生じて、彼女はそれを支持するだろう。彼女は客観的なケースで生まれました。彼女は治らないゴシップだった。アレクサンドラおばさんが学校に通っていたとき、自信喪失という言葉はどの教科書にも載っていませんでした、その意味を知りませんでした。彼女は決して退屈することはなかったし、

彼女が王室特権を行使するわずかな可能性があれば、彼女はそうするだろう
手配し、助言し、注意し、警告する。

彼女は他の部族の欠点を指摘する機会を決して逃しませんでした

「おばさんは、彼女の話し方をよく観察したほうがいいわよ。メイコムのほとんどの人を引っ掻きなさい、そうすれば彼らは私たちと同類なのよ。」

アレクサンドラおばさんは、若きサム・メリウェザーの自殺の教訓を強調して、

家族の病的な遺伝が原因だと述べた。16歳の女の子が合唱団でくすくす笑っていると、おばさんはこう言います。「ペンフィールドの女性はみんな気まぐれだということがわかりますね。」メイコムは全員が連続記録を持っているようでした。

連続飲酒、連続ギャンブル、意地悪な連続、おかしい連続。

かつて、おばさんが、ステファニー・クロフォード先生の他人のことを気にする傾向は遺伝によるものだと断言したとき、アティカスはこう言いました。

考えてみてください、私たちの世代は事実上、フィンチ家のいとこたちと結婚しなかった最初の世代です。フィンチには近親相姦の傾向があると思いますか？」

おばちゃんは、「いいえ、そこが私たちの小さな手と足の場所です」と言いました。

私は彼女が遺伝に関心を持っていることをまったく理解できませんでした。私はどこかで、ファイン・フォークスは自分の感性で最善を尽くす人たちだという印象を持っていたが、アレクサンドラおばさんは遠回しに次のような意見を持っていた。

家族が同じ土地に長く不法占拠していればいるほど、その土地はより美しくなった。

「それでは、イーウェル夫妻は立派な人々ですね」とジェムは言った。バリスが所属する部族

イーウェルと彼の兄弟たちは、地球の裏側の同じ区画に住んでいました。

メイコムのゴミ捨て場であり、3世代にわたって郡の福祉資金で繁栄していました。

しかし、アレクサンドラおばさんの理論には裏がありました。メイコムは古代の町でした。それはフィンチズ・ランディングから20マイル東、気まぐれ内陸にあった。

そんな古い町。しかし、シンクフィールドという人物の機敏な機転がなければ、メイコムはもっと川に近かっただろう。シンクフィールドは、歴史の黎明期に、2つの豚の道が交わる場所、領土内で唯一の居酒屋を経営していた。

シンクフィールドは愛国者ではなく、商売が順調である限り、自分がアラバマ準州の一員であるかクリーク・ネイションの一員であるかは知りもせず、インディアンにも入植者にも同様に奉仕し弾薬を供給した。ウィリアム・ワイアット・ビブ知事が、新しく設立された郡の国内の平穏を促進する目的で、正確な位置を特定するために測量士チームを派遣したとき、事業は絶好調でした。

中央に位置し、そこに政府の所在地が設立されます。シンクフィールドの客人である測量士らはホストに、彼がメイコム郡の領土内にいると告げ、郡庁所在地が建設されるであろう場所を示した。シンクフィールドが自分の財産を守るために大胆な行動をとらなかったら、メイコムはウィンストン沼の真ん中、全く興味のない場所に座っていたでしょう。その代わりに、メイコムはその拠点であるシンクフィールドズ・タバーンから成長し、大規模に広がった。

シンクフィールドはある晩、客たちを近視眼的な酩酊状態に陥らせ、地図や海図を前に持ってきて、ここを少し切り落とし、あそこを少し追加し、彼の要求を満たすために郡の中心を調整するよう誘導した。彼は彼らに荷物を詰めて送った翌日、サドルバッグに海図と5クォートの光沢紙を詰め込んで――2つずつ、もう1つは知事用です。

メイコムは主な存在理由は政府だったため、メイコムは免れたアラバマ州のほとんどの町のその規模を特徴づける汚らしさ。当初、その建物は堅固で、裁判所は誇り高く、通りは優雅に広がっていました。メイコムのプロの人々の割合は高く、ある者は歯を抜き、ワゴンを修理し、心の声を聞き、お金を預け、魂を救い、ラバを検査するためにそこを訪れた。しかし、シンクフィールドの作戦の究極の知恵には疑問の余地がある。彼はこの若い町を当時の唯一の公共交通機関である川船から遠ざけすぎたため、郡の北端から来た男性が店で買った商品を求めてメイコムまで行くのに2日かかった。その結果、

街は百年も変わらない大きさ、パッチワークの海に浮かぶ島
コットンフィールドとティンバーランド。

メイコムは州間戦争中無視されていたが、再建統治と経済的荒廃により、町は成長せざるを得ませんでした。それは内側に向かって成長していった。新しい人がそこに定住することはほとんどなく、コミュニティのメンバーがかすかに似ているように見えるまで、同じ家族が同じ家族と結婚しました。時折、モンゴメリーやモビールから部外者を連れて戻ってくる人もいたが、その結果は家族の類似性の静かな流れに波紋を起こすだけだった。私の初期の頃も、状況は多かれ少なかれ同じでした。

メイコムには確かにカースト制度がありましたが、私の考えでは、それは次のように機能していました。高齢者、つまり何年も隣り合って暮らしてきた現代の人々は、お互いに完全に予測可能でした。彼らは当然の態度をとっていました。、キャラクターの陰影、ジェスチャーさえも、それぞれの作品で繰り返されたものとして、

世代を超え、時間とともに洗練されていく。したがって、「クロフォードは自分のことは気にしない」、「メリウェザーは3分の1が病的である」、「真実はデラフィールドズにはない」、「ビューフォードは皆そのように歩いている」という定説は、単なる日常生活の指針に過ぎなかった。銀行;逃す

モーディ・アトキンソンの肩が前かがみになっているのは、彼女がビューフォード出身だったからです。グレース・メリウェザー夫人がリディア・E・ピンカムのボトルからジンを飲んだとしても、それは何も珍しいことではありません。

母も同じことをしました。

アレクサンドラお婆さんは、手袋に手を入れるようにメイコムの世界に溶け込みましたが、ジェムと私の世界には決して入ってはいけません。どうして彼女がそうなるのかとよく思った半分思い出した物語を思い出した、アティカスとジャックおじさんの妹ジェムが昔紡いだ取り替え子とマンドレイクの根。

これらは彼女の滞在の最初の1か月間に関する抽象的な憶測でした。彼女はジェムにも私にもほとんど何も言わず、私たちが彼女に会ったのは食事の時と出発前の夜だけでした。

ベッドに。夏だったので、私たちは屋外にいました。もちろん、午後には私が

水を飲みに家の中へ駆け込むと、リビングルームが水で溢れかえっていることに気づきました。

メイコムの女性たちは、すすりながら、ささやきながら、あおぎながら、「ジャン・ルイズ、この女性たちと話しに来て」と私に呼ばれました。

私が戸口に現れると、お婆ちゃんは後悔したような顔をしていました。

リクエスト;泥がかかったり、砂をかぶったりすることが多かったです。

「いとこのリリーに話してください」ある午後、彼女は私を閉じ込めたときに言いました。ホール。

"誰が?"私は言いました。

「あなたのいとこ、リリー・ブルック」とアレクサンドラお婆さんが言いました。

「彼女は私たちのいとこですか?それは知りませんでした。」

アレクサンドラお婆さんはなんとか笑顔で、優しい謝罪の気持ちを伝えました。

いとこのリリーは私に断固として反対しました。いとこのリリー・ブルックが去ったとき、私は自分がいることを知っていましたそれを望んでいた。

父がフィンチ家のことを私に話してくれなかったのは悲しいことでした。

あるいは子供たちにプライドを植え付けるためです。彼女はジェムを呼びました、ジェムは私の隣のソファに用心深く座っていました。彼女は部屋を出て、紫色の表紙の本を持って戻ってきました。その本には「ジョシュア・S・セント・クレアの瞑想」と金の刻印がされていました。

「あなたのいとこがこれを書いたんです」とアレクサンドラお婆さんが言いました。「彼は美しいキャラクターでした。」

ジェムはその小さな体積を調べた。「これが長い間監禁されていたいとこのジョシュアですか?」

アレクサンドラお婆さんは「どうしてそれがわかったの?」と言いました。

「なぜですか、アティカスは大学の曲がり角を曲がったと言いました。彼はしようとしたと言いました

大統領を撃つ。いとこのジョシュアさんは、自分は下水道検査官以外の何ものでもないと言い、古いフイントロック式拳銃で撃とうとしたが、手の中で爆発しただけだったという。アティカス氏は、家族をそこから救い出すのに500ドルかかったと語った。

1つ-

アレクサンドラおばさんはコウノトリのように固まって立っていた。「それだけです」と彼女は言いました。「見てみましょうこれについて。」

寝る前に私がジェムの部屋で本を借りようとしていたとき、アティカスがノックして入ってきました。彼はジェムのベッドの横に座り、私たちを冷静に見て、そしてニヤリと笑いました。

「

えーっと、そうですね」と彼は言いました。彼は喉のような音で何かを前置きし始めていたので、ついに年をとったに違いないと思ったが、見た目は変わらなかった。

「どう言えばいいのかよくわかりません」と彼は始めた。

「まあ、言ってみろ」とジェムは言った。「私たちは何かをしましたか？」

私たちの父は実際そわそわしていました。「いいえ、説明したいのですが、アレクサンドラおばさんが私に尋ねました…息子よ、あなたは自分がフィンチであることを知っていますよね？」

「そう言われたんです。」ジェムは目尻から顔を出した。彼の声は抑えられずに上がった、「アティカス、どうしたの？」

アティカスは膝を組んで腕を組んだ。「私が伝えようとしているのは事実です人生。」

ジェムの嫌悪感はさらに深まった。「そんなことはすべて知っています」と彼は言った。

アティカスは急に真剣になった。弁護士のような抑揚のない声で、彼はこう言った。「あなたの叔母さんから、あなたとジャン・ルイズに、あなたがいきなり人間ではなく、何人かの人間の子孫であることを印象づけるように頼まれました。」何世代にもわたって穏やかに繁殖してきた——アティカスは立ち止まり、私とその動物を見つけるのを見ていた。

私の足にとらえどころのない赤い虫。

私がそれを見つけて引っ掻いたとき、「穏やかに育ててください」と彼は続けました、「そして、あなたは自分の名前に恥じないように努めるべきです——」私たちにもかかわらず、アティカスは粘り強く言いました。

あなたは小さな淑女であり紳士であるように振る舞うように努めるべきだと私に言いました。彼女は、家族について、そしてメイコム郡が何年にもわたって意味してきたことについて、あなたに話したいと思っています。そうすれば、あなたがどんな人なのか少しでもわかってもらえるはずです。

それに応じて行動したくなるかもしれない」と彼は早口で結論づけた。

ジェムと私は啞然として顔を見合わせ、それからアティカスを見た。

彼を心配させてください。私たちは彼とは話しませんでした。

やがて私はジェムのダンスから櫛を拾い上げ、端に沿って歯をなぞりました。

「その騒音を止めてください」とアティカスは言った。

彼の素っ気なさが私には刺さりました。櫛が途中にあったので、私はそれを叩き落としました。理由もなく泣き始めたのを感じましたが、止まりませんでした。これは。。。でした

私の父ではありません。私の父はそのような考えを決して考えませんでした。父は決してそんなことは言いませんでした。

アレクサンドラおばさんがどういうわけか彼にそうさせたのです。涙を通して、私はジェムが同じような孤独のプールの中に頭を横に傾けて立っているのを見ました。

どこにも行くところがなかったが、私は振り向いてアティカスのベストの前に出会った。私はその中に頭を埋め、水色の布の裏側で起こる小さな内部ノイズに耳を傾けました。彼の時計がチクタクする音、糊付けされたシャツがかすかにパチパチとはじく音、彼の呼吸の柔らかな音。

「お腹が鳴っているよ」と私は言いました。

「それはわかっています」と彼は言った。

「ソーダを飲んだほうがいいよ。」

「そうします」と彼は言った。

「アティカス、これだけの行動で事態は変わるのか？」つまり、あなたですか
――？」

彼の手が私の頭の後ろにあるのを感じました。「何も心配しないでください」と彼は言いました。「心配している場合ではない。」それを聞いたとき、私は彼が私たちのところに戻ってきたことを知りました。

足の血が再び流れ始め、私は頭を上げました。「本当に私たちにそんなこと全部してほしいの？フィンチがやるべきことをすべて思い出せません...」

「思い出したくないんです。忘れて。」

彼はドアのところに行って部屋から出て、後ろ手にドアを閉めた。彼はほとんど

叩きつけたが、土壇場で体を捕まえてそっと閉じた。ジェムと私が見つめていると、ドアが再び開き、アティカスが周囲を覗き込みました。彼の眉はつり上がり、眼鏡はずれた。「日に日にいとこジョシュアに似てきますね？

私が家族に500ドルの負担をかけることになると思いますか？」

今なら彼が何をしようとしていたか分かるが、アティカスはただの男だった。それには
そういう仕事をする女性。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第14章

アレクサンドラおばさんからはフィンチ家のことについてはもう聞いていませんが、町からはたくさん
の話を聞きました。土曜日に、ジェムが私に同行を許可したとき、私たちのニッケルで武装しました（彼
は今、私の存在に対して積極的にアレルギーを持っていました）

公共の場では、私たちは汗だくの歩道の群衆の中をもじもじしながら進んでいきました
そして時々、「彼のチルンがいる」または「向こうにフィンチがいる」という声が聞こえます。告発者の方に
目を向けると、ドラッグストアのメイコのショーウィンドウで浣腸バッグを調べている農民が数人だけ見
えた。あるいは、フーバーカートに座っている麦わら帽子をかぶった2人のずんぐりとした田舎女性。

「この郡のケアを運営している彼ら全員のために、彼らは野放しになって田園地帯を強姦することはできない
だろう」というのは、私たちとすれ違ったときに、瘦せた紳士が正面から聞いた、あいまいな観察の一つでし
た。そこで、アティカスに尋ねたい質問があることを思い出しました。

「レイプって何？」その夜、私は彼に尋ねました。

アティカスは書類の後ろから周囲を見回した。彼は窓際の椅子に座っていた。
成長するにつれ、ジェムと私は、夕食後アティカスに30分だけ一人でいられるのは寛大だと考えました。

彼はため息をつき、レイプとは力づくで女性を肉体的に知るのだと言いました。
同意。

「まあ、それだけなら、なぜカルプルニアにそれが何なのか尋ねたときに私を干からびさせたのか」
だった？”

アティカスは物思いにふけるような顔をした。「またあれは何ですか？」

「あの日、教会から来たカルプルニアにそれは何だったのか聞いたら、聞いてくださいと言われたんで
すが、忘れていたので今聞いています。」

彼の紙は今彼の膝の上にあります。「またお願いします」と彼は言った。

私はカルブルニアと一緒に教会に行ったときのことを詳しく彼に話しました。アティカスは楽しそうだったが、隅に座って静かに裁縫をしていたアレクサンドラおばさんは、刺繍を置いて私たちを見つめた。

「皆さんは日曜日にカルブルニアの教会から帰ってきたんですか？」

ジェムは「はい、彼女が私たちを連れて行ってくれました。」と言いました。

何かを思い出した。「はい、それで彼女は午後には彼女の家に行けると約束してくれました。アティカス。もしよければ次の日曜日に行ってもいいですか？カルは、もしあなたがに乘っていたら迎えに来るって言ってたわ。」

"できません。"

アレクサンドラおばさんが言いました。私は走り回って、驚いて、そしてアティカスのほうに戻りました。

彼の素早い視線を彼女に向ける時が来たが、もう遅かった。私は「頼んでないよ！」と言いました。

アティカスは大男にしては、私がこれまで知っていた誰よりも早く椅子から立ち上がった、立ち上がった、立ち上がった。彼は立ち上がっていました。「叔母さんに謝ってください」と彼は言った。

「私は彼女に聞いたんじゃない、あなたに聞いたのよー」

アティカスは頭を向け、その良い目で私を壁に釘付けにした。彼の声は致命的でした。「まず、叔母さんに謝ってください。」

「ごめんね、おばちゃん」と私はつぶやいた。

「それでは」と彼は言った。「これをはっきりさせましょう。あなたはカルブルニアの言うとおりにし、私の言うとおりにし、そしてあなたの叔母がこの家にいる限り、叔母の言うとおりにするでしょう。」

理解する？"

私は理解し、しばらく考えて、少しでも威厳を持って退職できる唯一の方法はトイレに行くことだと結論付けました。トイレに行く必要があると思わせるほど長居しました。戻ってきた私は、リビングルームで行われている激しい議論を聞くためにホールに留まりました。ドア越しに、ジェムがソファに座り、顔の前にサッカー雑誌を置き、頭をページのように回転させているのが見えました。

生のテニスの試合が含まれていました。

「…彼女を何とかしなければいけないのよ」とおばさんが言っていた。「物事を長引かせすぎた、アティカス、長すぎた。」

「彼女を外出させても何ら害はないと思います。カルもそこで彼女の世話をするだろう

彼女がここでそうしているように。」

彼らが話している「彼女」とは誰でしょうか？私の心は沈みました。私。ピンク色の綿の刑務所のでんぷん壁が迫ってくるのを感じ、人生で二度目に逃げようと思いました。すぐに。

「アティカス、優しい気持ちでいいよ、あなたは気さくな男だけど、あなたには考えるべき娘がいるのよ。成長しつつある娘よ。」

「それが私が考えていることです。」

「そして、それを回避しようとししないでください。遅かれ早かれそれに直面する必要がありますが、それは今夜かもしれません。今は彼女は必要ありません。」

アティカスの声は均一だった。「アレクサンドラ、カルブルニアは望むまでこの家から出ないんだよ。違うと思うかもしれないけど、私は彼女なしでは何年もやっていけなかったでしょう。彼女はこの家族の忠実な一員であり、あなたは物事をありのままに受け入れる必要があります。それに、お姉さん、私たちのために一生懸命働いてほしくないんです——そんなことをする理由はありませんよ。

私たちは今も同じくらいカルを必要としています

今までにやったことがある。」

「でもアティカスは——」

「それに、子供たちは彼女が育てたことで少しも苦しんでいないと思います。むしろ、彼女はある意味で母親よりも彼らに対して厳しかったです...彼女は決して彼らに何かを許したことはありませんし、ほとんどの有色人種の看護師のように彼らを甘やかしたこともありませんでした。彼女は自分のライトに従ってそれらを育てようとしてました、そしてカルはライトはかなり良いです——そしてもう一つ、

子どもたちは彼女を愛しています。」

また息を吹き返した。それは私ではなく、彼らが話していたのはカルブルニアだけでした。

息を吹き返してリビングに入った。アティカスは新聞の後ろに退き、アレクサンドラおばさんは自分の刺繍を心配していた。パンク、パンク、パンク、彼女の針

張り詰めた円環を打ち破った。彼女は立ち止まり、布をきつく引っ張りました。パンク、パンク、パンク。

彼女は激怒した。

ジェムは立ち上がって敷物の上を歩きました。彼は私に従うように合図した。彼は私をこう導いた

彼の部屋を言ってドアを閉めた。彼の顔は険しかった。

「彼らは大騒ぎしています、スカウト。」

ジェムと私は最近よく大騒ぎしましたが、アティカスと口論する人は聞いたことも見たこともありませんでした。それは快適な光景ではありませんでした。

「スカウト、おばさんを敵に回さないようにしてね、ね？」

アティカスの発言は依然としてイライラしていたため、私はジェムの質問の要求を見逃していました。羽がまた立ち上がった。「何をすべきかを私に教えようとしているのですか？」

「いや、それは――私たちが彼を心配させなくても、彼は今たくさんを考えているのです。」

"どのような？"アティカスは特に何も考えていないようだった。

「彼を死ぬほど心配させているのは、このトム・ロビンソンの件だ――」

アティカスは何も心配していないと言いました。それに、この事件は週に1回程度を除いて私たちが悩ませることはありませんでしたが、その後は続きませんでした。

「それは、少しの間しか心に何かを留めておくことができないからです」とジェムは言いました。「大人とは違いますよ、私たちは――」

彼の狂おしいほどの優越感、この頃では耐えられなかった。彼は何もしたくなかったが、ただ本を読んで一人で出かけたかった。それでも、彼が読んだものはすべて私に伝えましたが、次のような違いがあります。以前は、彼が私がそれを気に入ると思ったからでした。さて、私の啓蒙と指導のために。

「ジー、ホバ、這うジーム！あなたは誰だと思いませんか？」

「もう本気で言います、スカウト、あなたがおばさんを敵に回すなら、私はあなたをたたきます。」

それで、私はいなくなりました。「モルフォダイトめ、ぶっ殺してやる！」彼は座っていたベッドの上で、前髪を掴んで口に当てるのは簡単だった。彼は私を平手打ちし、私はもう一度左を打ったが、腹部にパンチを受けて私は床に大の字になった。それは私に息を吹き飛ばしそうになったが、彼が戦っていること、彼が私に反撃していることを知っていたので、それは問題ではなかった。私たちはまだ対等でした。

「今はそんなに高くも強くもないですよ！私に叫びながら再び船に乗り込みました。彼はまだベッドの上だったので、私はしっかりと姿勢を保つことができませんでした。そこで、私は彼に全力で体をぶつけ、叩いたり、引っ張ったり、つねったり、えぐったりしました。殴り合いで始まったものが乱闘になった。アティカスが私たちを引き離したとき、私たちはまだ苦労していました。

「それだけです」と彼は言いました。「二人とももう寝てください。」

「たあ！」私はジェムに言いました。彼は私の就寝時間に合わせてベッドに送られていました。

「誰がそれを始めたのですか？」アティカスは諦めたように尋ねた。

「ジェムはそうしました。彼は私に何をすべきかを教えようとしていた。今は彼のことを気にする必要はないよ私？」

アティカスは微笑んだ。「このままにしておきます。ジェムがあなたを作ることができるときは、いつでもジェムに気を付けてください。

けっこうだ?"

アレクサンドラ叔母さんもその場にはいたものの、沈黙していました。彼女がアティカスと一緒に廊下を下りたとき、私たちは彼女がこう言うのを聞きました。「…私があなたに話してきたことの一つにすぎません。」その一言で私たちは再び団結しました。

私たちの部屋は隣り合った部屋でした。私が彼らの間のドアを閉めると、ジェムは言いました。

スカウト。"

「夜だ」と私は明かりをつけようと部屋を横切りながらつぶやいた。ベッドの前を通り過ぎるとき、私は暖かくて弾力があり、かなり滑らかなものを踏みました。硬いゴムとは思えない、生きているような感触がありました。私も聞きました

動く。

私は電気をつけてベッドの横の床を見た。踏んだものは何もなくなってしまいました。私はジェムの家のドアを叩きました。

"彼が言ったこと。

「へびってどんな感じ？」

「なんだか荒れてるね。寒い。ほこりっぽい。なぜ？」

「ベッドの下に1つあると思います。見に来てもらえますか？」

「おかしいですか？」ジェムがドアを開けた。彼はパジャマの裾を着ていました。私の指の関節の跡がまだ彼の口に残っていることに私は満足せずにはいられませんでした。私が本意で言ったことを理解すると、彼はこう言いました。ちょっと待って。"

彼は台所に行き、ほうきを持ってきました。「ベッドの上に立ったほうがいいよ」彼は言った。

「それは本当に1つだと思いますか？」私は尋ねた。これはチャンスでした。私たちの家には地下室がありませんでした。それらは地面から数フィートの高さの石ブロックの上に建てられており、爬虫類の侵入は未知ではありませんでしたが、一般的ではありませんでした。レイチェル・ハヴァフォードさんの、毎朝きちんとしたウィスキーを一杯飲む言い訳は、寝室のクローゼットや洗濯物の上にガラガラがとぐるを巻いているを見つける恐怖がずっと治らなかったからである。

彼女のネグリジェを掛けに行きました。

ジェムは試しにベッドの下をなぞりました。へびがないか足元を見ってみました。出てくるだろう。誰もしませんでした。ジェムはさらに深くスワイプした。

「ヘビはうなり声をあげますか？」

「ヘビじゃないよ」とジェムは言った。「誰かだよ」

突然、汚い茶色の小包がベッドの下から発射されました。ジェムはほうきを振り上げたが、ディルの頭が現れたとき、ほんの1インチのところを見逃してしまいました。

"全能の神。"ジェムの声は敬虔だった。

私たちはディルが徐々に出現するのを観察しました。彼はぴったりとフィットしていました。彼は立ち上がって肩を楽にし、足首の受け皿に足を入れて首の後ろをさすった。彼の血行が回復したので、彼は「やあ」と言った。

ジェムは再び神に懇願しました。私は言葉を失いました。

「私はもうすぐ死ぬよ」とディルは言った。「何か食べるものはありますか？」

夢の中で私はキッチンに行きました。私は彼に牛乳と夕食の残りのコーンブレッド半分を持って帰りました。ディルは前歯で噛みながらそれをむさぼり食った。それが彼の習慣だった。

やっと自分の声を見つけた。「どうやってここに来たの？」

複雑なルートで、食べ物でリフレッシュしたディルは、次の物語を朗読した。ディルは、彼を嫌っていた新しい父親によって鎖に縛られ、地下室（メリディアンにも地下室があった）で放置され、通りすがりの農夫によって密かに生のエンドウ豆を食べて生き続けていた。助けを求める彼の叫び声を聞いて（善良な男は人工呼吸器を通してポッドごとにポッドを突いた）、ディルは壁から鎖を引っ張って自分自身を解放しました。手首に手枷をしたまま、彼は3マイル離れたところをさまよいました。

彼はメリディアンで小動物ショーを発見し、すぐにラクダを洗うことに従事しました。彼はショーとともにミシシッピ州中を旅し、その後、

間違いのない方向感覚により、彼はメイコムから川を渡ったところにあるアラバマ州アボット郡にいたことがわかりました。彼は残りの道を歩き続けた。

「どうやってここに来たの？」ジェムは尋ねた。

彼は母親の財布から13ドルを取り出し、メリディアン発の9時に間に合い、メイコム・ジャンクションで降りた。彼はメイコムまでの14マイルのうち10マイルか11マイルを、ハイウェイから外れて低木林の中を歩いた。

当局が彼を捜しており、残りの道中は綿のワゴンの後部板にしがみついて走っていた。彼は二時間もベッドの下にいたのだと思った。彼はダイニングルームで私たちの声を聞いていて、皿の上でフォークがカチャカチャという音をほとんど聞いていました。

彼を狂わせた。彼はジェムと私が決して寝ないと思っていました。ジェムはずっと背が伸びていたの、彼は現れて私がジェムを倒すのを手伝ってくれないかと考えていたが、彼はミスター・ジェムのことを知っていた。

フィンチはすぐに関係を壊すだろうから、今の場所に留まるのが最善だと考えた。彼は疲れ果て、信じられないほど汚れていて、家にいた。

「彼らはあなたがここにいないことを知らないはずだ」とジェムは言いました。「彼らがあなたを探しているかどうかはわかりません...」

「彼らはまだメリディアンのすべての映像番組を探していると思います。」ディルはニヤリと笑った。

「お母さんに自分の居場所を知らせたほうがいいよ」とジェムは言いました。「あなたがここにいないことを彼女に知らせるべきです...」

ディルの目はジェムをちらつき、ジェムは床を見た。それから彼は立ち上がり、私たちが子供時代に残っていた暗号を破りました。彼は部屋を出て廊下へ行きました。

「アティカス、」彼の声は遠かった。「ちょっと来てもらえますか？」

汗染みの土の下でディルの顔は真っ白になった。気持ちが悪かったです。アティカスがいた玄関。

彼は部屋の真ん中に来て、ポケットに手を突っ込んで立ちました。

ディルを見下ろしている。

私はついに自分の声を見つけました。「大丈夫、ディル。彼はあなたに何かを知ってもらいたいとき、あなたに教えてくれます。」

ディルは私を見た。「つまり、大丈夫です」と私は言いました。「彼があなたを気にしないことはわかっているでしょうし、あなたがアティカスを怖がっていないこともわかっています。」

「怖くないよ...」ディルはつぶやいた。

「ただお腹が空いているだけだ、きっと。」アティカスの声にはいつもの心地よい乾いた声があった。「スカウト、私たちは冷たいトウモロコシのパンを焼くよりもうまくできるでしょう？あなたはこの男を満たしてください、そして私が戻ったら、何が見えるか見てみましょう。」

"氏。フィンチ、レイチェルおばさんには言わないで、私を戻さないで、お願いします！また逃げるよ——！"

「おい、息子よ」アティカスが言った。「すぐに寝なければ、誰もあなたをどこかに行かせようとはしていません。レイチェル先生のところに行って、あなたがここにいないと伝えて、一晩一緒に過ごしてくれないか聞いてみます。そうしたいですよ？そして念のために郡の一部を本来の場所に戻してください、土壌浸食は十分にひどいのです

そのまま。"

ディルは遠ざかる父の姿を見つめた。

「彼は面白くしようとしているんだ」と私は言った。「彼はお風呂に入るつもりです。ほら、気にしないって言ったじゃないですか。」

ジェムはまるで裏切り者のような表情で部屋の隅に立っていた。「ディル、私は彼に言わなければならなかった」と彼は言った。「あなたの力がなければ、300マイルを走ることはできません。」お母さんは知ってるよ。」

私たちは何も言わずに彼を去りました。

ディルは食べて、食べて、食べました。彼は昨夜から何も食べていませんでした。彼は全財産をはたいて切符を買い、何度もしたように電に乗り、冷静に話しかけた。

ディルにはよく知られた掌だったが、小さな子供が一人で遠くまで旅行するときの規則を持ち出す度胸はなかった。お金をなくしたら掌が夕食代を貸してくれるし、父親がお金を返してくれるだろう。

行の終わり。

ディルが残り物をあさり、パントリーにあるポーク・アンド・ビーンズの缶詰に手を伸ばしていると、ミス・レイチェルのドゥー・ジー・サスがホールに出て行った。彼ウサギのように震えた。

彼は彼女の「Wait Till I Get You Home, Your Folks Are Out of Their Minds Worryin'」を不屈の精神で受け止め、「That's All the Harris in You Comeing Out」の間は非常に冷静で、「一晩泊まってもいいよ」という彼女の言葉に微笑みかけ、ハグを返した。ずっと最後に彼に与えられたもの。

アティカスは眼鏡を押し上げて顔をこすった。

「お父さんは疲れているのよ」とアレクサンドラおばさんが数時間ぶりに言ったように思えた。彼女はそこにいたが、ほとんどの時間、呆然としていたと思う。「子供達はもう寝なさい。」

私たちは彼らをダイニングルームに残し、アティカスはまだ顔を拭いていました。「レイプから暴動、家出まで」と彼が笑うのが聞こえた。「次の2時間はどうなるのだろう。」

物事はかなりうまくいっているように見えたので、ディルと私はジェムに対して礼儀正しくすることに決めました。それに、ディルは彼と一緒に寝なければならなかったもので、私たちは彼と話した方が良いでしょう。

パジャマを着て、しばらく本を読んでいたら、突然読書を続けられなくなってしまったことに気づきました。

目が開きます。ディルとジェムは静かだった。そこで読書灯を消したとき

ジェムの部屋のドアの下には一筋の光もなかった。

私は長い間眠っていたに違いありません。目が覚めたとき、部屋は沈む月の光で薄暗かったからです。

「そっちに行ってください、スカウト。」

「彼はそうしなければならぬと思っています」と私はつぶやいた。「彼に腹を立てたままにしないでください。」

ディルは私の隣のベッドに入りました。「そうではない」と彼は言った。「ただ一緒に寝たかっただけです。起きてる？」

この時までには私はそうになっていましたが、怠惰にそうになっていました。「なぜそれをしたのですか？」

答えはありません。「なぜ逃げたって言った？あなたが言ったように、彼は本当に憎しみを持っていましたか？」

「いやあ…」

「皆さんは、自分が書いたとおりにその船を造ったのではありませんか？」

「彼はただそうするとだけ言った。私たちは決してそんなことはありませんでした。」

私は肘をついて立ち上がって、ディルの輪郭に向かいました。「逃げる理由にはならない。彼らは彼らがやると言うことを半分の時間はやらないでください…」

「そうではありません、彼は、単に私に興味になっただけなのです。」

これは私が今まで聞いた中で最も奇妙な逃亡理由でした。"どうして？"

「まあ、彼らはいつも外出していて、家に帰っても、一人で部屋に降りていました。」

「彼らはそこで何をしていたのですか？」

「何もせず、ただ座って本を読んでいるだけです。でも彼らは私と一緒に連れてほしくなかったのです。」

私は枕をヘッドボードに押し付けて座りました。「あなたは何かを知っている？みんながそこにいたので、今夜逃げ出すつもりだった。ディル、彼らにいつもそばにいてほしくないのよー」

ディルは半分ため息をつきながら、辛抱強く息を吐き出した。

「——おやすみ、アティカスは一日中いないし、ときには半日も議会に出ていないんだけど、何だろう——彼らを四六時中そばに置いておきたくないだろう、ディル、もし彼らがいたら何もできないだろう」

"それではない。"

ディルが説明してくれたように、もしジェムがこんなだったら人生はどうなるだろう、と私は疑問に思いました。

今の彼とは違っていました。アティカスが感じなかったら私はどうするだろうか

私の存在、助け、アドバイスの必要性。だって、彼は私なしでは一日もやっていけなかったのです。カルプルニアだ
って、俺がいないとやっていけないんだよ。彼らは必要とした
自分。

「ディル、あなたの言うことは間違っています。あなたの家族はあなたなしではやっていけないのです。彼らはあなたに対してただ意地悪してい
るだけでしょう。それについてどうすればいいのか教えてください――」

ディルの声は暗闇の中で着実に続いた。「私が言いたいのは、私がいなくても彼らはずっとうまくやっていく、私は彼らを
助けることはできないということです。彼らは意地悪ではありません。

彼らは私が欲しいものはすべて買ってくれますが、それは今です、あなたはそれを手に入れて、それで遊んでください。

部屋いっぱい物を持っています。その本を持ってきたから読んでください。」ディルは声を低くしようとした。「君
は男の子じゃないよ。男の子たちは外に出て他の男の子たちと野球をするし、家族を心配して家をぶらぶらしたりは
しない。」

ディルの声は再び彼のものでした。「ああ、彼らは意地悪じゃないよ。彼らはあなたにキスをし、ハグしておやすみ、おは
よう、そしてさようならを言い、あなたを愛していると言います―スカウト、私たちに赤ちゃんを産みましょう。」

"どこ?"

ディルが聞いたある男は、赤ちゃんたちがいる霧の島までボートを漕いで渡ったという。1つ注文してもいいですか――

"それはうそです。おばちゃんは、神様が彼らを煙突に落とすんだって言いました。少なくとも彼女はそう言ったと思いま
す。」初めて、お婆さんの言葉遣いはあまり明確ではありませんでした。

「まあ、そんなことはないよ。お互いに赤ちゃんを産みます。しかし、この男もいます―彼は目覚めるのを待っているすべて
の赤ちゃんを抱えており、彼らに命を吹き込んでいます...」

ディルはまた休みました。夢見心地の彼の頭の中には、美しいものが浮かんでいた。彼は私に一冊の本を二冊読むこと
もできましたが、自分の発明による魔法のほうが好きでした。彼は稲妻より速く足したり引いたりすることができました
が、彼自身の黄昏の世界、つまり赤ん坊が眠り、朝ユリのように集められるのを待っている世界を好みました。彼は
ゆっくりと眠ろうと自分に言い聞かせ、私を連れて行きましたが、静かな中で

彼の霧の島には、悲しい茶色の灰色の家の色褪せたイメージが浮かび上がっていた
ドア。

「ディル?」

"んん?"

「なぜブー・ラドリーは決して逃げないと思うのですか？」

ディルは長いため息をつき、私から背を向けた。

「もしかしたら、彼には逃げる場所がないのかもしれない…」

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第15章

何度も電話をかけ、被告に代わって多くの嘆願をし、母親からの長い許しの手紙の後、ディルが留まることが決定した。私たちは平和な一週間を一緒に過ごしました。その後は、少しずつのようでした。悪夢が私たちを襲いました。

それはある夜の夕食後に始まりました。ディルは終わりました。アレクサンドラおばさんは隅っこの椅子に座っていて、アティカスは自分の椅子に座っていた。ジェムと私は床で本を読んでいました。それは穏やかな一週間だった。私はおばさんのことを気にしていた。ジェムはツリーハウスを大きくしすぎていましたが、ディルと私がツリーハウス用に新しい縄梯子を作るのを手伝ってくれました。ディルは、ブー・ラドリーを無料で出てくる確実な計画を思いつきました（裏口から前庭にレモンのしずくを垂らすと、彼はアリのようにそれを追いかけます）。ありました

玄関のドアをノックすると、ジェムが応答して、ヘック・テイトさんだと言いました。

「それでは、彼に来てもらってください」とアティカスは言った。

"私はすでにやった。外の庭に男たちがいるから、出てきてほしいと言っているんです。"

メイコムでは、成人男性が外の前庭に立っていたのは、死と政治という2つの理由だけでした。誰が死んだのかと思いました。ジェムと私は玄関へ行きましたが、アティカスが「家に戻って」と呼びました。

ジェムはリビングルームの電気を消し、窓網戸に鼻を押し付けた。

アレクサンドラおばさんは抗議した。「ちょっと、おばちゃん、誰だか見てみましょう」と彼は言いました。

ディルと私は別の窓を取りました。大勢の男たちがアティカスの周りに立っていた。

彼らは皆同時に話し合っているようだった。

「…明日彼を郡刑務所に移送する」とテイト氏は言った、「私は何の問題も起こそうとは思っていないが、何も起こらないとは保証できない…」

「バカなことを言うなよ、ヘック」とアティカスは言った。「こちらはメイコムです。」

「…不安なだけだと言いました。」

「何の不安もないことを確認するため、この件については1回延期してもらいました。今日は土曜日です」とアティカスは言った。「公判はおそらく月曜日になるだろう。一晩だけ彼を留めておけるよね？これほど大変な時期に、メイコムでは私が顧客であることを恨む人はいないと思います。」

リンク・ディース氏がこう言ったとき、歓喜のざわめきが突然消えた。「この辺では誰も何も考えていない。私が心配しているのはあのオールド・セーラムの連中のことだ……理解できない——何だ、一体？」

「会場変更です」と館さん。「それはあまり意味がありませんね？」

アティカスは聞こえないことを言った。私はジェムの方を向くと、ジェムは黙るように手を振った。

「——それに」アティカスは言った。「あの群衆は怖くないでしょう？」

「…彼らが輝いたときの様子を知っておいてください。」

「彼らは通常日曜日には酒を飲まず、一日のほとんどを教会に行っています…」

アティカスは言った。

「せっかくの機会なのに…」と誰かが言った。

叔母がジェムがリビングルームの電気をつけなかったら家族の恥をかかせると言うまで、彼らはぶつぶつ言ったり、ざわめきをしたりしていた。ジェムには彼女の声が聞こえなかった。

「——そもそもなぜ触ったのか分からない」とリンク・ディース氏は言った。

「これで失うものはすべてあるよ、アティカス。私はすべてを意味します。」

"本当にそう思う？"

これはアティカスの危険な質問でした。「本当にそこに移りたいと思っているのですか、スカウト？」バン、バン、バン、チェッカーボードは私の部下たちから一掃されました。

「本当にそう思ってるの、息子？それからこれを読んでください。」ジェムは残りの期間苦勞するだろう

夕方にはヘンリー・W・グレイディのスピーチを聞きました。

「リンク、あの少年は椅子に行くかもしれないが、真実が語られるまでは行かないだろう。」

アティカスの声は均一だった。「そして、あなたは真実が何であるかを知っています。」

男たちのグループの間にざわめきがあり、アティカスが最前段に戻り、男たちが彼に近づくと、さらに不気味なものになった。

突然ジェムが「アティカス、電話が鳴ってるよ！」と叫びました。

男たちは少し飛び跳ねて散り散りになった。彼らは私たちが毎日見かける人々でした。商人であり、町の農民でした。レイノルズ博士がそこにいました。エイブリー氏もそうだった。

「まあ、答えてよ、息子よ」アティカスが呼んだ。

笑いが彼らを打ち砕いた。アティカスがリビングルームの頭上の照明のスイッチを入れたとき、彼は窓際に、鮮やかな痕跡を除いて青ざめたジェムを見つけました。彼の鼻にはスクリーン。

「いったいなぜ皆さんは暗闇の中に座っているのですか？」彼は尋ねた。

ジェムは彼が椅子に行き、夕刊を取りに行くのを見ていた。アティカスは人生のあらゆる危機を、モバイル・レジスター紙、バーミンガム・ニュース紙、モンゴメリー・アドバイザー紙の裏で冷静に評価したのではないかと時々思う。

「彼らはあなたを追っていたんですね？」ジェムは彼のところへ行きました。「彼らはあなたを捕まえたかったのですね？」

アティカスは紙を下ろしてジェムを見つめた。「何を読んでいましたか？」彼は尋ねた。それから彼は優しく言いました、「息子じゃないよ、あれは私たちの友達だよ。」

「それは——ギャングではなかったのですか？」ジェムは目尻からこちらを見つめていた。

アティカスは笑顔を押し殺そうとしたが、できなかった。「いいえ、メイコムには暴徒などのナンセンスはいません。メイコムにギャングがいるなんて聞いたこともありません。」

「クー・クラックスは一度カトリック教徒を追いかけたことがありました。」

「メイコムにカトリック教徒がいるなんて聞いたこともありません」とアティカスは言った。「それを何か他のものと混同しているのですね。ずっと昔の19時20分頃、クランですが、それは何よりも政治組織でした。その上、怖がらせる人も見つかりませんでした。ある夜、彼らはサム・レヴィ氏の家の前をパレードしたが、サムはただ自宅のポーチに立って、事態はかなりの収束に達した、背中の中のシーツそのものを売った、と彼らに告げた。サムは彼らをととても恥ずかしくさせたので、彼らは去っていきました。」

レヴィー家は、ファイン・フォックスであるためのすべての基準を満たしていました。彼らは自分の持っている感覚で最善を尽くし、メイコムの同じ土地に5世代にわたって住んでいたのです。

「クー・クラックスはいなくなりました」とアティカスは言った。「それは決して戻ってこないよ。」

私はディールと一緒に家に帰り、アティカスがおばさんにこう言っているのを耳にしました。

「…誰よりも南部の女性らしさを支持しているが、人命を犠牲にして礼儀正しいフィクションを守ることには反対している」この発言は、彼らがまた大騒ぎしているのではないかと私に疑わせた。

私がジェムを探してみると、彼は自分の部屋でベッドの上で物思いにふけていました。「彼らはいますか？」
「やった？」私は尋ねた。

「まあまあ。彼女はトム・ロビンソンのことで彼を放っておけない。彼女はアティカスって言いそうになった
家族に恥をかかせた。スカウト…怖いよ。」

「怖い、何？」

「アティカスが怖い。誰かが彼を傷つけるかもしれない。」ジェムは謎に包まれたままであることを好みました。私の
質問に対して彼が言うのは、「続けてください、放っておいてください」ということだけでした。

次の日は日曜日でした。日曜学校と教会の合間に会衆が足を伸ばしているとき、私はアティカスが別の男たちとともに庭
に立っているのを見た。ヘック・テイト氏もその場にいたが、彼は光を見たのだろうかと思った。

彼は一度も教会に行きませんでした。アンダーウッド氏もそこにいました。アンダーウッド氏は、
彼が唯一の所有者、編集者、印刷者であったメイコム・トリビューン以外の組織には役に立たない。彼の日々はライノタイ
プで過ごし、常に存在するチェリーワインのガロンジョッキで時々気分をリフレッシュしました。彼はめったにニュースを
集めなかった。人々がそれを彼に持ってきました。すべての版を彼が作成したとされています

メイコム・トリビューン紙の記事を自分の頭から考え出してライノタイプに書き留めた。

これは信じられるものでした。アンダーウッド氏を引きずり出すために何かがあったに違いない。

アティカスがドアに入ってくるのを捕まえると、彼はトム・ロビンソンを移したと言った

メイコム刑務所へ。彼はまた、私に対してというよりも、自分自身に対して、もし最初から彼をそこに留めておけば、大騒ぎ
にはならなかったのに、とも言いました。私は彼が前から3列目の席に着くのを見ていたが、残りの私たちの後ろで彼が「も
っと私の神をあなたの近くに」とゴロゴロ言うのが聞こえた。彼はおばさん、ジェム、そして私と一緒に座ったことはありません
でした。

彼は教会で一人でいるのが好きでした。

日曜日に蔓延していた偽りの平和は、アレクサンドラおばさんの存在によってさらにイライラさせられた。アティカ
スは夕食後すぐにオフィスに逃げ込み、私たちが時々彼の様子をのぞくと、回転椅子に座って本を読んでいるのが見えま
した。アレクサンドラおばさんは二時間の昼寝を覚悟し、近所の人たちが休んでいるとき、庭で騒ぐなど私たちに言い
ました。老年のジェム

彼はフットボール雑誌の束を持って部屋に持ち込んでいた。それでディルと私は過ごしました

ディアの牧草地を忍び寄る日曜日。

日曜日は射撃が禁止されていたので、ディルと私はしばらく牧草地の周りでジェムのサッカーボールを蹴りましたが、それは面白くありませんでした。ディルは私につづいてもいいですかと尋ねました

ブー・ラドリー。私は彼に迷惑をかけるのは良くないと思い、残りの時間を過ごしましたと言いました。

午後は去年の冬の出来事について話し合う。彼はかなり感銘を受けました。

私たちは夕食時に別れ、食事の後、ジェムと私はいつもの夕方に落ち着いていたとき、アティカスは私たちに興味のあることをしました。彼は長い電気延長コードを持ってリビングルームに入ってきました。上に電球がありました

終わり。

「ちょっと出かけるよ」と彼は言った。「私が戻ってきたら皆さんはベッドに入っているでしょうから、今はおやすみを言います。」

そう言って彼は帽子をかぶって裏口から出て行った。

「彼はに乗っているよ」とジェムは言った。

私たちの父にはいくつかの特徴がありました。1つは、デザートをまったく食べなかったことです。もう一つは、彼が歩くのが好きだったことです。私が物心ついた頃から、庫にはいつも素晴らしい状態のシボレーがあり、アティカスは出張の際にシボレーで何キロも走りましたが、メイコムではオフィスへの往復を1日に4回歩いていました。

一日、約2マイルをカバーします。彼は唯一の運動は歩くことだと言いました。メイコムでは、明確な目的を持たずに散歩に出かけた場合、その人の心には明確な目的がないと信じるのが正しかった。

その後、叔母と弟におやすみを告げ、本を読みふけていると、ジェムが部屋でカタカタしているのが聞こえました。

彼の就寝音は私にとって非常に聞き覚えがあったので、私は彼のドアをノックしました。「どうして寝ないの？」

「しばらくダウントウンに行くよ。」彼はズボンを交換していました。

"なぜ？もうすぐ10時です、ジェム。"

彼はそれを知っていましたが、とにかく行くつもりでした。

「それでは、私も一緒にいきます。あなたがノーと言ったら、そうではありません、私はとにかくいきます、聞きますか？

ジェムは、私を家に留めておくためには私と戦わなければならないことを悟っていて、おそらく戦いはアンティを敵に回すだろうと考えたので、ほとんど猶予なく屈服したのだと思います。

急いで着替えました。私たちはおばちゃんの明かりが消えるまで待って、静かに歩きました

裏の階段を下ります。今夜は月がありませんでした。

「ディルも来たいよ」と私はささやいた。

「そうなるだろう」とジェムは暗い表情で言った。

私たちは私道の壁を飛び越え、ミス・レイチェルの家の裏庭を突き抜け、ディルの家の窓に行きました。ジェムはボブホワイ
トで口笛を吹いた。ディルの顔が画面に現れては消え、5分後に画面のフックを外して這い出てきました。年老いた運
動家である彼は、私たちが歩道に立つまで何も話しませんでした。"どうしたの？"

「ジェムには周囲の見方がある」とカルプルニアの少年たちは皆、彼の心に引っかかっていると語った。

年。

「ただ、この気持ちがあるんです。」とジェムは言いました。「ただ、この気持ちだけです。」

私たちはデュボース夫人の家の前を通りましたが、そこには雨戸が閉まり、空き家として立っており、彼女の椿は雑草と
ジョンソングラスの中で成長していました。ポストまであと8軒の家があった
オフィスコーナー。

広場の南側は閑散としていた。猿のパズルのような巨大な茂みが各角に生い茂り、その間にある鉄のヒッチレールが街灯
の下で輝いていました。郡のトイレには明かりが灯っていたが、そうでなければ裁判所のそっち側は暗かった。裁判所の広
場を取り囲むように店舗が立ち並ぶ大きな広場があった。薄暗い光が彼らの奥深くから燃え上がりました。

アティカスが法律実務を始めたとき、彼の事務所は裁判所内にあったが、数年後にメイコム銀行ビルの静かな場所に移
った。

広場の角を曲がると、銀行の前にながまっているのが見えました。「彼はそこにいるよ」とジェムは言った。

しかし、彼はそうではありませんでした。彼のオフィスまでは長い廊下を通ってたどり着いた。廊下を見下ろすと、ドアの後
ろからの光に照らされて、弁護士アティカス・フィンチが小さな地味な文字で書かれているのが見えるはずだった。暗かつ
た。

ジェムは確認するために銀行のドアを覗いた。彼はノブを回した。ドアは施錠されていました。「通りを上げて
みましょう。もしかしたら彼はアンダーウッドさんを訪ねているのかもしれない。」

アンダーウッド氏はメイコム・トリビューン紙のオフィスを経営しただけでなく、そこに住んでいた。つまり、その上です。彼
は二階の窓から外を眺めるだけで裁判所や刑務所のニュースを報道した。オフィスの建物は広場の北西の角にあり、そこ
に行くには刑務所を通らなければなりません。

メイコム刑務所は郡の建物の中で最も由緒正しく、そして恐ろしいものだった。

アティカスは、いとこのジョシュア・セント・クレアがデザインしたようなものだと言った。それは確かに誰かの夢だった。四角い顔の店舗と急な屋根の家々が並ぶ町にまったく場違いなメイコム刑務所は、幅 1 マス、高さ 2 マスのミニチュア ゴシック ジョークで、小さな胸壁と飛行設備が完備されていました。

バットレス。その幻想的な雰囲気は、赤レンガのファサードと教会の窓にある太い鉄筋によって高められていました。それは寂しい丘の上には立っていたのではなく、ティンダルの金物店とメイコム・トリビューンのオフィスの間に挟まれていました。刑務所はメイコムにとって唯一の話題の種だった。刑務所を批判する人たちは、刑務所がビクトリア朝の秘密基地のようだと行った。支持者らは、この街が町にしっかりとした立派な外観を与え、黒人だらけだとは知らない人はいないだろうと言った。

歩道を歩いていると、遠くにぼつんと光が灯っているのが見えました。

「それはおかしいですね」とジェムは言いました。「刑務所には外灯がないんです。」

「ドアの向こうにいるようだ」とディルが言った。

長い延長コードが 2 階の窓の格子の間から建物の側面まで伸びていました。裸電球の光の中で、アティカスは玄関のドアに立てかけて座っていた。彼はオフィスの椅子に座って読書をしていましたが、頭の上で踊る夜虫にも気付かなかったのです。

私は逃げようとしたが、ジェムが私を捕まえた。「彼のところには行かないでください。彼はそれが気に入らないかもしれません。」と彼は言いました。彼は大丈夫です、家に帰りましょう。ただ彼がどこにいるのか見たかったです。」

私たちが広場を横切って近道をしていたとき、砂埃をかぶった4台のが子午線高速道路から隊列を組んでゆっくりと入ってきた。彼らは広場を一周し、銀行の建物を通り過ぎ、刑務所の前で立ち止まった。

誰も出られなかった。アティカスが新聞から顔を上げているのが見えました。彼はそれを閉じ、意図的に折りたたんで、膝の上に落とし、帽子を後頭部に押し付けました。彼は彼らを期待しているようだった。

「さあ」とジェムがささやいた。私たちは広場を横切り、通りを渡って、ジトニー・ジャングルの扉の避難所にたどり着いた。ジェムは歩道を覗いた。「もっと近づくことができる」と彼は言った。私たちはティンダルのハードウェア ドアまで走りました。ほぼ、同時に控えめです。

一斉に男たちがから降りた。影が光となって実体となった

刑務所のドアに向かって動いている立体的な形状が明らかになりました。アティカスはその場所に留まった。男たちは彼を視界から隠した。

「あそこにいるの、フィンチさん？」ある男が言った。

「彼はそうです」とアティカスが答えるのが聞こえました。「そして彼は眠っています。彼を起こさないでください。」

父に従うと、後に気づいたのですが、それはうんざりするほどのことでした。

面白くない状況の滑稽な側面: 男たちはほとんどささやき声で話していた。

「私たちが何を望んでいるのか知っているでしょう」と別の男性が言った。「ドアから離れてください、ミスター・フィンチ。」

「向きを変えて、また家に帰っていいよ、ウォルター」アティカスは楽しそうに言った。「てか、テイトはどこかにいるよ。」

「なんて奴だ」と別の男が言った。「ヘックの群れは森の奥深くにいるので、朝まで出られないでしょう。」

"確かに？なぜそうなのか？"

「シギ狩りに行くよう呼び掛けた」というのが簡潔な答えだった。「そう思いませんか、フィンチさん？」

「考えてみましたが、信じられませんでした。じゃあ、父の声は変わらなかった、「それでは状況が変わりますね？」

「そうですよ」また深い声が言った。その持ち主は影だった。

"本当にそう思う？"

アティカスがその質問をするのをこの2日間で聞いたのはこれが2度目で、それは誰かの男性が飛び降りられることを意味していた。これは見逃せないほど良かった。私はジェムから離れ、アティカスまで全速力で走りました。

ジェムは金切り声を上げて私を捕まえようとしたが、私は彼とディルにリードを与えていた。私は黒く臭い体をかき分けて、光の輪の中に突入しました。

「やあ、アティカス！」

彼は素晴らしいサプライズをしてくれるだろうと思ったが、彼の顔が私の喜びを台無しにした。明らかな恐怖のフラッシュが彼の目から出ていましたが、ディルとジェムが光の中で身をよじったときに戻ってきました。

辺りには古くなったウィスキーと豚小屋の匂いが漂っていたので、辺りを見回すと、この男たちが見知らぬ人であることがわかりました。彼らは私が最後に会った人々ではありませんでした

夜、熱い恥ずかしさが私を貫きました。私はこれまで見たこともない人々の輪の中に意気揚々と飛び込んだのです。

アティカスは椅子から立ち上がったが、その動きは老人のようにゆっくりしていた。彼は指で折り目を整えながら、非常に注意深く新聞紙を置きました。

彼らは少し震えていました。

「家に帰りなさい、ジェム」と彼は言った。「スカウトとディルを家に連れて帰りなさい。」

私たちは、アティカスの指示に対して、必ずしも陽気ではないにしても、すぐに従うことに慣れていましたが、彼の立ち方から見て、ジェムは動こうとは考えていませんでした。

「家に帰りなさい、と私は言いました。」

ジェムは首を振った。アティカスの拳が腰に当たると、ジェムの拳も腰に到達し、彼らも同様に向かい合ってみると、二人の間にはほとんど似ていないことが見えた：ジェムは柔らかい茶色だった

髪と目、楕円形の顔とぴったりとフィットした耳は私たちの母親のもので、アティカスの白髪と黒髪と四角く切られた顔立ちとは奇妙に対照的でしたが、それらは母のものでした。

なんとなく似ている。相互の反抗が彼らを似せた。

「息子よ、家に帰れと言ったんだ。」

ジェムは首を振った。

「家まで送ってやる」と屈強な男がそう言ってジェムの胸ぐらを乱暴に掴んだ。

彼はジェムを足から引きずり落としそうになった。

「彼に触れないでください！」私はその男を素早く蹴った。裸足で、彼が本当に痛みを感じて後ろに倒れるのを見て私は驚きました。彼のすねを蹴るつもりだったが、狙いが高すぎた。

「それでいいよ、スカウト」アティカスは私の肩に手を置いた。「人を蹴るなよ。いいえ——」と私が正当化を訴えながら彼は言った。

「ジェムをそんな風に扱う人はいないだろう」と私は言った。

「わかった、フィンチさん、彼らをここから追い出して、誰かがうなり声を上げた。「彼らをここから追い出すまでに15秒の時間があります。」

この奇妙な集会の真っ只中に、アティカスはジェムに気にさせようとして立っていた。

アティカスの脅しや要求に対する彼の着実な答えは「行かない」、そして最後には「お願い、ジェム、彼らを家に連れて帰って」だった。

私はそれに少しうざりしていましたが、ジェムには彼なりの理由があると感じました

アティカスが彼を家に連れて行った後の将来のことを考えてそうしたのだ。私は周りを見回した

群衆。夏の夜だったが、男性たちは、そのほとんどがオーバーオールを着て、襟までボタンを留めたデニムシャツを着ていた。袖をまくり上げて袖口のボタンを留めているので、きっと寒いのだと思いました。帽子をかぶっている人もいました

耳の上をしっかりと引き下げました。彼らは不機嫌そうな、眠そうな目をした男たちだった。遅い時間には慣れていないようだった。もう一度懐かしい顔を探してみると、半円の中心に一つを見つけました。

「やあ、カニンガムさん」

男には私の声が聞こえていないようだった。

「やあ、カニンガムさん。あなたの関係はどうか？」

ウォルター・カニンガム氏の法務は私にはよく知られていました。アティカスはかつてそれらについて詳しく説明したことがある。大男は瞬きをし、全体のストラップに親指を引っ掛けた。彼は不快そうに見えた。彼は咳払いをして目をそらした。

私の友好的な序曲は失敗に終わりました。

カニンガム氏は帽子をかぶらず、日焼けした顔とは対照的に額の上半分が白く、そのため私は彼が帽子をかぶっていたのではないかと信じた。

日々。彼は重い作業靴を履いて足を動かしました。

「私のことを覚えていませんか、カニンガムさん？ 私はジーン・ルイズ・フィンチです。一度、ヒッコリーナッツを持ってきてくれたんですよね？」私は、偶然の知人に認められなかったときに人が感じる虚しさを感じ始めました。

「私はウォルターと一緒に学校に通っています」と私は再び言い始めました。「彼はあなたの息子ですよね？彼じゃないですか、お客様？」

カニンガム氏は感動してかすかにうなずいた。結局のところ、彼は私のことを知っていました。

「彼は私の学年です」と私は言いました。彼はいい子だよ」と私は付け加えた、「本当にいい子だよ。私たちは一度彼を夕食のために家に連れて帰りました。たぶん彼は私のことをあなたに話したのでしょう、私は一度彼を殴りました、しかし彼はそれについて本当に親切でした。彼に「こんにちは」と言ってくださいね？」

アティカスは、自分が何に興味があるかについて人々に話すのではなく、彼らが何に興味を持っているかについて人々に話すのが礼儀だと言ってました。カニンガム氏は息子に興味を示さなかったので、私は最後の努力として息子の含意にもう一度取り組みました。に彼にくつろいでもらいましょう。

「含意は悪いことだ」と私が彼にアドバイスしていたとき、私はゆっくりと自分が含意しているという事実気づきました。

集合体全体に取り組んでいました。男たちは皆私を見ていましたが、口を半分開けている人もいました。アティカスはジェムをつつくのをやめ、二人はデイルの横に並んで立っていた。彼らの注目は魅了されました。アティカスの口、

さえ、半分オープンであり、彼はかつてその態度を野暮だと表現していました。目が合った

そして彼はそれを閉めた。

「そうですね、アティカス、私はちょうどカニンガム氏に含意は良くないと言っていたところです」

「でも、心配しないで、時には時間がかかることもあるから…みんなで一緒に乗り切るから…」と私は徐々に乾きつつあり、自分がどんな愚かなことをしてしまったのか疑問に思いました。含意はリビングルームでの会話には十分であるように思えました。

髪の毛の端に汗が溜まっているのを感じ始めました。大勢の人が私を見ていること以外は我慢できました。彼らはじっとしていました。

"どうしたの?"私は尋ねた。

アティカスは何も言わなかった。私は周りを見回してカニンガム氏を見上げたが、その顔も同様に無表情だった。それから彼は奇妙なことをしました。彼はしゃがんで私の両肩を抱きました。

「ねえ、お嬢さん、あなたが言ったと伝えておきます」と彼は言いました。

それから彼は背筋を伸ばして大きく前足を振りました。「片付けましょう」と彼は呼びかけた。「さあ、行きましょう、少年たち。」

来たときと同じように、男たちは一対二で足を引きずり、ぼろぼろのに戻った。ドアがバタンと閉まり、エンジンが咳き込み、そして彼らはいなくなった。

私はアティカスの方を向いたが、アティカスは刑務所に行って、顔を壁に向けて刑務所にもたれかかっていた。私は彼のところに行き、彼の袖を引っ張りました。「もう家に帰ってもいいですか？」

彼はうなずき、ハンカチを出し、顔をしかめ、激しく鼻をかんだ。

"氏。フィンチ?"

柔らかなハスキーな声が頭上の暗闇から聞こえた:「彼らはいなくなった?」

アティカスは後ずさりして顔を上げた。「彼らは去ってしまった」と彼は言った。「少し寝てください、トム。彼らはもうあなたを悩ませることはありません。」

別の方向から、別の声が夜をさわやかに切り裂いた。ずっと守ってくれていたら、アティカス。」

アンダーウッド氏と二連散弾銃が窓から身を乗り出していました

メイコム・トリビューンのオフィスの上。

就寝時間をとうに過ぎていて、私はかなり疲れていました。アティカスとアンダーウッド氏は夜通し話し続けるようで、アンダーウッド氏は窓の外にいて、アティカスは彼に向かっていました。ようやくアティカスが戻ってきて、刑務所のドアの上の明かりを消し、椅子を持ち上げた。

「フィンチさん、運んでもいいですか？」ディルは尋ねた。彼はずっと一言も話さなかった時間。

「どうしてだ、ありがとう、息子よ。」

オフィスに向かって歩いていると、ディルと私はアティカスとジェムの後ろに追いつきました。ディルは椅子に邪魔され、ペースが遅くなった。アティカスとジェムは私たちよりはるかに先を行っていたので、アティカスが家に帰らなかったことで彼に地獄を与えているのだと思いましたが、私は間違っていました。彼らが街灯の下を通り過ぎるとき、アティカスは手を差し伸べてジェムの髪をマッサージしたが、これはジェムの愛情表現のひとつだった。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第16章

ジェムが私の話を聞いた。彼は接続ドアに頭を突っ込んだ。彼が私のベッドに来ると、アティカスのライトが点灯しました。私たちはそれが消えるまでその場に留まりました。彼がひっくり返る音が聞こえ、私たちは彼が再び静止するまで待ちました。

ジェムは私を彼の部屋に連れて行き、彼の隣のベッドに寝かせました。「寝てください。明日になったらすべて終わるでしょう。」と彼は言いました。

私たちはおばさんを起こさないように静かに入ってきました。アティカスは私道でエンジンを止め、惰性で庫まで走った。私たちは裏口から何も言わずに部屋に行きました。とても疲れていて眠りに落ちていたとき、次のことを思い出しました。

アティカスは静かに新聞をたたみ、帽子を押し返していたが、アティカスは誰もいない待ちの通りの真ん中に眼鏡を押し上げて立っていた。その夜の出来事の完全な意味が私を襲い、私は泣き始めました。ジェムはとても素敵でした

それについて :彼は、9歳近くの人があるようなことをしないということを私に思い出させませんでした。

今朝は、ジェムを除いて、全員の食欲が微妙でした。ジェムは卵を 3 個平らげて食べました。アティカスは率直に感嘆の目で見ている。アレクサンドラおばさんはコーヒーを飲みながら、不承認の波を放ちました。夜に抜け出した子供たちは家族の恥だった。アティカスは、自分の不名誉が来て本当によかったと語った

しかし、おばさんは「ナンセンス、アンダーウッドさんはいつもそこにいたんです。」と言いました。

「ブラクストンのことは面白いことだよ」とアティカスは言った。「彼は黒人を軽蔑しており、近くに黒人はいないでしょう。」

地元の意見では、アンダーウッド氏は強烈で不敬な小男であると考えられており、その父親はユーモアにふれてブラクストン・ブラッグと名付けられ、アンダーウッド氏は懸命に生き延びてきたのだという。アティカス氏は、南軍の将軍にちなんで人々に名前を付けると述べた
ゆっくりと安定した酒飲みを作りました。

カルブルニアはアレクサンドラおばさんにコーヒーをもっと出していたが、勝ちを懇願しているように私が思った表情を見て彼女は首を横に振った。「あなたはまだ小さすぎるよ」と彼女は言いました。

「そうでないときは言います。」胃の調子を整えるかもしれないと言いました。「わかりました」と彼女は言い、サイドボードからカップを取り出しました。彼女はそれに大きじ1杯のコーヒーを注ぎ、カップの縁までミルクを満たした。私はそれに舌を出して感謝の意を表し、叔母さんが警告して眉をひそめたのを受け止めようと顔を上げた。しかし彼女は顔をしかめていた
アティカスで。

彼女はカルブルニアがキッチンに来るまで待ってから言いました。

彼らの前では。"

「誰の前でどんな話をするの？」彼は尋ねた。

「カルブルニアの前もそうですよ。ブラクストン・アンダーウッドは黒人を軽蔑していると言ったね
彼女の目の前で。」

「そうですね、キャルさんはそれを知っていると思います。メイコムの誰もがそれを知っています。」

私は最近、父の微妙な変化に気づき始めていました。それは父がアレクサンドラおばさんと話したときに現れました。それは静かに掘り下げていくものであり、あからさまにイライラすることはありませんでした。「テーブルで言うべきことは、カルブルニアの前でも言うべきだ。彼女は自分が何を意味するのか知っている

この家族。」

「それは良い習慣とは思えません、アティカス。それは彼らを勇気づけます。彼らが彼らの間でどのように話し合っているかを知っています。この町で起こることはすべて、日没前に地区に伝わります。」

父はナイフを置きました。「彼らが話すことができないという法律を私は知りません。

たぶん、私たちが彼らにあまり話すことを与えなかったら、彼らは静かになるでしょう。コーヒーを飲みませんか、スカウト？」

その中でスプーンを使って遊んでました。「カニンガム氏は私たちの友人だと思っていました。あなたはずっと前に彼がそうだと私に言いました。」

「彼はまだいるよ。」

「でも昨夜、彼はあなたを傷つけようとしたんです。」

アティカスはフォークをナイフの横に置き、皿を脇に押しやった。「氏。

カニンガムは基本的に良い人だ」と彼は言った、「彼には盲点があるだけだ」残りの私たちと一緒に。」

ジェムは話した。「それを盲点と呼ばないでください。彼は昨日の夜、最初にあなたを殺しましたそこに行きました。

「

「彼は私を少し傷つけたかもしれない」とアティカスは認めた。暴徒は、何があっても常に人々で構成されています。カニンガム氏は昨夜暴徒の一員だったが、それでも男だった。

南部の小さな町のすべての暴徒は、常にあなたが知っている人々で構成されています—

彼らにとってはあまり意味がありませんね？」

「そうではないと思います」とジェムは言った。

「それで、彼らを正気に戻すには8歳の子供がかかったのですか？」アティカスは言った。「これは、野生動物の群れを、単に人間であるという理由だけで阻止できるということを証明しています。うーん、もしかしたら警察が必要かもしれない

子供たち…昨夜、子供たちよ、ウォルター・カニンガムが私の立場に立たされました。それで十分でした。」

そうですね、私はジェムが大きくなったら、もう少し人々のことを理解できるようになることを望みました。私

そうはしないだろう。「ウォルターが最初に学校に戻ってくる日が最後だ」と私は断言した。

「彼には触れないよ」とアティカスはきっぱり言った。「何が起こっても、この件についてはどちらにも恨んでほしくないのです。」

「わかるでしょう？」アレクサンドラおばさんは言いました。「このようなことが起こるとどうなるのでしょうか。

言っていなかったとは言わないでください。」

アティカスはそんなことは決して言わないと言い、椅子を押し出して立ち上がった。「もう一日あるので、失礼します。ジェム、今日はあなたとスカウトはダウンタウンに来ないでください。」

アティカスが立ち去ると、ディルが廊下を跳ねてダイニングルームにやって来た。「今朝、町中が騒ぎになっています」と彼は言いました。

「素手でみんな…」アレクサンドラおばさんは彼を黙らせようと思つめた。「それはそうではありませんでした

「何百人もいるのに」と彼女は言った。「そして誰も誰も引き留めなかった。そこは、酔っ払い、無秩序なカニンガム家の単なる巣でした。」

「ああ、おばさん、それがディルのやり方だよ」とジェムが言いました。彼は私たちに自分に従うように合図した。

「今日はみんな庭にいてね、私たちが玄関に向かう途中、彼女は言った。

まるで土曜日のような感じだった。郡の南端から来た人々が、ゆっくりと、しかし着実な流れで私たちの家の前を通り過ぎていきました。

ドルファス・レイモンド氏はサラブレッドに乗ってよろよろと通り過ぎた。「彼がどうやってサドルに留まっているのか分からないよ」とジェムがつぶやいた。「朝の8時前に酔ってどうして我慢できるの？」

女性を乗せた荷馬がガタガタ音を立てて私たちの前を通り過ぎていきました。彼らは綿の日よけ帽と長袖のドレスを着ていました。毛糸の帽子をかぶったひげを生やした男が彼らを運転した。「向こうにメノナイトがいるよ」とジェムはディルに言った。「彼らにはボタンがありません。」彼らは森の奥深くに住んでおり、取引のほとんどは川を渡って行われ、メイコムに来ることはめったにありませんでした。

ディルは興味を持った。「彼らは皆青い目をしています」とジェムは説明した。「そして男性は結婚すると髭を剃ることができない。彼らの妻たちは、彼らをくすぐるのが好きですひげ。」

X・ピラップス氏がラバに乗って通り過ぎ、私たちに手を振った。「彼は面白い人だよ」とジェムは言った。

「Xは彼の名前であり、イニシャルではありません。あるとき彼は法廷に出廷し、彼らは彼の名前を尋ねました。彼はX・ピラップスと言った。店員が彼に綴るように尋ねると、彼はXと言いました。

もう一度言うと、彼はXと言った。彼が紙にXを書いてそれを握るまで、彼らはそれを続けたみんなに見てもらえるように。彼らは彼に名前の由来を尋ねました、そして彼はそれが彼が生まれたときに彼の家族が彼を登録した方法だと言いました。」

郡が私たちのそばを通り過ぎる間、ジェムはディルに郡の歴史と一般的な態度を教えてくださいました。

より著名な人物：テンソー・ジョーンズ氏は禁酒法に真っ向から賛成票を投じた。

エミリー・デイヴィスさんはプライベートで嗅ぎタバコを浸した。パイロン・ウォーラー氏はヴァイオリンを弾くことができた。ジェイク・スレイド氏は3本目の歯を削っていました。

いつになく厳しい表情の市民を乗せたワゴンが現れた。彼らが夏の花で燃え盛るミス・モーディ・アトキンソンの庭を指差すと、ミス・モーディ自身がポーチに出てきた。ミス・モーディには奇妙なところがありました。ポーチにいる彼女は遠すぎて彼女の特徴をはっきりと見ることはできませんでしたが、いつでも捕まえることができました

彼女の立ち方から彼女の気分がわかる。彼女は腕を腰に当てて立ち、肩を少し垂らし、頭を横に傾け、眼鏡を日光に瞬かせていました。私たちは、彼女がこの上なく邪悪な笑みを浮かべていることを知っていました。

馬の運転手がラバの速度を落とすと、甲高い声の女性が「虚栄心で来る者は暗闇の中で去っていく！」と叫びました。

ミス・モーディはこう答えました。「陽気な心は陽気な表情を作ります！」

足洗い人たちは、運転手がラバのスピードを上げたとき、悪魔が自分の目的のために聖書を引用していると考えたのでしょう。なぜ彼らがミス・モーディの庭に反対したのか、私の心の中ではさらに謎が深まりました。

日中ずっと外で過ごしていたモーディさんの聖書の命令は、恐るべき。

「今朝法廷に行くんですか？」ジェムは尋ねた。私たちはそこを散歩していました。

「私は違います」と彼女は言いました。「今朝は裁判所と用事はありません。」

「見に行きませんか？」ディルは尋ねた。

「そうではありません。哀れな悪魔が命をかけて裁判を受けているのを見るのは病的だ。あの人たちを見てください、まるでローマのカーニバルのようです。」

「公の場で彼を裁判にかけるべきだ、ミス・モーディ」と私は言った。「もし彼らがそうなら、それは正しくないでしょう」
そうしなかった。」

「それはよくわかっています」と彼女は言った。「公的なものだから行かなくてもいいのですが、
そうしますか？」

ステファニー・クロフォード先生がやって来ました。彼女は帽子と手袋をしていました。「ええと、ええと、ええと」と彼女は言いました。「あの人たちを見てください、ウィリアム・ジェニングス・ブライアンがそうだと思うでしょう。
話してますよ。」

「それで、ステファニー、どこへ行くの？」ミス・モーディが尋ねた。

「ジットニー・ジャングルへ。」

ミス・モーディは、ミス・ステファニーが帽子をかぶってジトニー・ジャングルに行くのを見たことがないと言った

彼女の人生の中で。

「そうですね」とステファニー嬢は言いました。「アティカスが何をしているのかを見るために、裁判所を覗いてみようかと思いました。」

「彼があなたに召喚状を渡さないように注意したほうがいいです。」

私たちはミス・モーディに説明を求めました。彼女は、ミス・ステファニーはこの事件について多くのことを知っているようで、証言を求められるかもしれないと言いました。

私たちは正午まで我慢したが、そのときアティカスが夕食のために帰宅し、陪審員選びに午前中を費やしたと言った。夕食後、ディルに立ち寄って、
町。

それは祝賀行事でした。公共のヒッチレールには別の動物を乗せる余地はなく、利用可能な木の下にはラバやワゴンが駐されていました。裁判所の広場は新聞紙の上に座って洗濯物をしたりピクニックパーティーで埋め尽くされていた

ビスケットとシロップをフルーツ瓶から温かいミルクで和えます。冷たいチキンや冷たい揚げたポークチョップをかじっている人もいました。より裕福な人は、電球の形をしたソーダグラスに入ったドラッグストアのコカ・コーラで食べ物を追いかけました。脂っこい顔の子供たちが群衆の中で鞭を打ち、赤ん坊は母親のところで昼食をとった
胸。

広場の片隅で、黒人たちは太陽の下で静かに座り、イワシやクラッカー、そしてより鮮やかな味のネヒコーラを食べていた。ドルファス・レイモンド氏も彼らと一緒に座っていた。

「ジェム、彼は袋から飲んでいるよ」とディルが言った。

ドルファス・レイモンド氏もそうしているようで、ドラッグストアの黄色いストロー2本が彼の口から茶色の紙袋の奥まで流れていました。

「そんなことをする人を見たことがありません」とディルがつぶやいた。

「彼はどうやってその中にあるものを保管しているのですか？」

ジェムはくすくすと笑った。「彼はそこにウィスキーの入ったコ・コーラのボトルを持っています。それは女性を怒らせないためです。彼が午後中それを飲み続けるのを見るでしょう、そして彼はしばらく外に出てそれを再び満たします。」

「なぜ彼は有色人種と一緒に座っているのですか？」

「いつもそうなんです。彼は私たちよりも彼らのほうが好きだと思います。郡境近くのかなり下の方に一人で住んでいます。彼には有色人種の女性とあらゆる種類の混合チルンがいます。見かけたらいくつか見せてください。」

「彼はゴミのように見えません」とディルは言いました。

「彼はそうではありません、彼はそこの川岸の片側すべてを所有しています、そして彼は本物の出身です」
おまけに古い家族だ。」

「では、なぜ彼はそんなことをするのでしょうか？」

「それが彼のやり方なんだ」とジェムは言った。「彼らは彼が結婚から決して立ち直れなかったと言います。彼がいた
スペンサー夫人の誰かと結婚することになっていたと思う。彼らは盛大な結婚式を挙げるつもりだったが、そうではなかった。リハーサル
の後、花嫁は二階に上がって頭を吹き飛ばした。ショットガン。彼女はつま先で引き金を引いた。」

「彼らはその理由を知っていましたか？」

「いいえ」とジェムは言った。「ドルファスさん以外、誰もその理由を正確に知りませんでした。彼らはそう言った
彼女が彼の有色人種の女性のことを知ったので、彼は彼女を引き留めて結婚することもできると考えた。それ以来、彼はかなり酔っぱら
っています。でもね、彼はあのチルンたちには本当に優しいんだよー」

「ジェム、混血児って何？」と私は尋ねた。

「半分は白で、半分は色がある。あなたは彼らを見たことがあるでしょう、スカウト。ドラッグストアに配達するあの赤くて変態な
頭の人を知っていますよね。彼は半分白人です。彼らは本当に悲しんでいます。」

「悲しいね、どうして？」

「彼らはどこにも属していない。有色人種は半分が白人なので、それらを持たないでしょう。白人は有色人種なのでそれらを持たないだろ
う、だから彼らはちょうど中間であり、どこにも属していない。しかし、ドルファスさん、今、彼らは自分の2台を北に輸送したと
言います。北の方では彼らは気にしていません。向こうもそのうちの一人よ。」

黒人女性の手を握った小さな男の子が私たちに向かって歩いてきました。私には彼は完全に黒人に見えました。彼は豊かなチョコレート
ト色で、広がった鼻孔と美しい歯を持っていました。

時々彼は楽しそうにスキップしており、黒人女性は彼の手を引っ張って止めさせた。

ジェムは彼らが私たちを追い越すまで待っていました。「あれは小さなうちの一人だよ」と彼は言った。

「どうしてわかりますか？」ディルは尋ねた。「私には彼は黒人に見えました。」

「彼らが誰であるかを知らない限り、それができないこともあります。でも彼はレイモンドの半分です、大丈夫です。」

「でも、どうやってそれがわかるの？」私は尋ねた。

「スカウト、言ったじゃないですか、彼らが何者なのかは半分くらい知っておいてください。」

「それで、どうして私たちが黒人ではないことがわかるのですか？」

「ジャック・フィンチおじさんは、私たちには本当にわからないと言っています。彼は、遡ることができる限りフィンチ族ではないが、彼が知っている限りでは、我々はエチオピアから直接来たかもしれないと言っています。旧約聖書の時代には。」

「まあ、もし私たちが旧約聖書の時代に登場したとしても、それは問題にならないほど昔のことです。」

「そう思ったんです」とジェムは言った。「でもこの辺では黒人の血が一滴でも入ったら真っ黒になるんだよ。ねえ、見て——」

何か目に見えない信号が広場で昼食をとった人たちを立ち上がらせ、新聞紙、セロハン、包装紙の破片をまき散らしたのだ。子どもたちは母親のところにやって来て、赤ん坊は腰に抱きかかえられ、汗で汚れた帽子をかぶった男たちが家族を集めて裁判所のドアに押し寄せた。広場の隅で黒人たちとドルファス・レイモンド氏は立ち上がり、ズボンの埃を払った。そこには

中には女性や子供も少なく、休日のムードを払拭するようだった。彼らは白人家族の後ろのドアで辛抱強く待っていました。

「入りましょう」ディルが言いました。

「いや、彼らが入るまで待ったほうがいいよ。アティカスが私たちを見たら嫌がるかもしれないよ」と彼は言った。

ジェム。

メイコム郡裁判所は、ある点でアーリントンをかすかに思い出させた。南の屋根を支えるコンクリートの柱は、その軽い負担に対して重すぎた。1856年に元の裁判所が火災に遭ったとき、柱だけが残っていました。別の裁判所がその周囲に建てられました。こう言ったほうが良いでしょう。

にもかかわらず建てられました。しかし、南ポーチの場合、メイコム郡裁判所は初期のビクトリア朝様式で、北から見ると不快感のない眺めを示していました。

しかし、反対側から見ると、ギリシャ復興記念柱が、錆びて信頼性の低い計器を備えた19世紀の大きな時計塔と衝突しており、この光景は、人々が過去のあらゆる物理的なスクラップを保存しようと決意していることを示しています。

2階の法廷に行くには、日の当たらない郡を通り過ぎた

小部屋：税務査定官、徴税人、郡書記官、郡弁護士、巡回裁判所書記官、検認判事は、古く湿ったセメントと古くなった尿が混じった朽ち果てた帳簿の匂いがする涼しい薄暗い小屋に住んでいた。

日中は電気をつける必要がありました。いつも映画がありました
ざらざらした床板に埃が積もっている。これらのオフィスの住民は環境の生き物でした。小さな灰色の顔の男たちで、風や太陽の影響を受けていないようでした。

群衆がいることはわかっていたましたが、1階の廊下に大勢の人がいるのを交渉することはありませんでした。私はジェムとディルとはぐれてしまいましたが、ジェムがいつか迎えに来るだろうと確信しながら、階段の吹き抜けの壁に向かって進みました。私は自分がアイドルズ・クラブの真ん中にいることに気づき、できるだけ目立たないようにした。それは、白いシャツを着て、カーキ色のズボンを着て、サスペンダーを付けた老人たちのグループで、生涯何れもせずに過ごし、広場の生い茂る榎の木の下の松のベンチで同じことをして黄昏の日々を過ごしていた。裁判所の業務を注意深く批判するアティカス氏は、自分たちは首席判事と同じくらい多くの法律を昔から知っていると言った。

長年の観察。いつもなら法廷の傍聴人は彼らだけだったが、今日は快適な日常が妨げられたことに憤慨しているようだった。彼らが話すとき、彼らの声はさりげなく重要なものに聞こえました。会話は私のことについてでした

父親。

「…彼は自分が何をしているのか分かっていると思っている」と一人が言った。

「ああ、今ならそんなことは言わないよ」と別の人が言った。「アティカス・フィンチは深い読書家で、強力な深い読書家。」

「彼はちゃんと本を読むんです、それだけでいいんです。」クラブは笑い出した。

「ビリー、今から何か言ってよ」と三人目の男が言った。「法廷が彼をこの黒人の弁護人に任命したのは知ってるでしょう。」

「そうだけど、アティカスは彼を守るつもりだよ。それが私が気に入らない点です。」

これはニュースであり、物事に別の光を当てたニュースだった。アティカスは望むと望まざるにかかわらず、そうせざるを得なかった。彼がそれについて私たちに何も言わなかったのは奇妙だと思いました—
彼と私たちを守るために何度でも使えたでしょう。彼はそうしなければならなかった、それが彼がそうしなければならなかった、それは喧嘩や騒ぎを減らすことに等しい。しかし、それで町の態度が説明できたでしょうか？
裁判所はアティカスを弁護人に任命した。アティカスは彼を守ることを目指した。それが彼らの気に入らなかった点だった。混乱しました。

白人たちが二階に上がるのを待っていた黒人たちが入ってき始めた。

「おいおい、ちょっと待ってくれ」クラブ会員が杖をつきながら言った。

「ただ、しばらくはその階段で始動しないでください。」

クラブは固い登りを始め、私を探して下る途中でディルとジェムに遭遇しました。彼らがすり抜けて通り過ぎると、ジェムは「スカウト、さあ、席が残っていない。そろそろ立ち上がるよ。」

「ほら、そこだよ」黒人たちが二階になだれ込んでくる中、彼はイライラして言った。彼らの前にいる老人たちは立ち見席のほとんどを占領するだろう。運が悪かった、私のせいだ、とジェムは教えてくれました。私たちは惨めに壁のそばに立っていました。

「みんなも入れないの？」

サイクス牧師は黒い帽子を手に私たちを見下ろしていました。

「やあ、牧師」とジェムは言いました。「いやあ、このスカウトが私たちをめちゃくちゃにしました。」

「それでは、何ができるか見てみましょう。」

サイクス牧師はそそくさと二階へ上がっていった。しばらくすると彼は戻ってきました。「下の階には席がありません。私と一緒にベランダに来ても大丈夫だと思いますか？」

「そうですね」とジェムは言いました。幸いなことに、私たちはサイクス牧師よりも先に法廷の床に急ぎました。そこで私たちは屋根付きの階段を上り、ドアのところまで待ちました。

サイクス牧師が私たちの後ろから息を吹き返してやって来て、バルコニーにいる黒人たちの間を優しく案内してくれました。4人の黒人が立ち上がり、私たちに最前列の席を譲った。

カラーバルコニーは法廷の三面の壁に沿って二階のベランダのように伸びており、そこからはすべてが見渡せた。

陪審員は左側の長い窓の下に座った。日焼けしてひよろひよろした彼らはみな農民のようだったが、それは当然のことだった。町民が陪審員になることはめったになく、打たれるか免除されるかのどちらかだった。陪審員の一人か二人は、どこことなくドレスアップしたカニンガムのように見えた。この段階では、彼らは背筋を伸ばして座って警戒していました。

巡回弁護士ともう一人の男性、アティカスとトム・ロビンソンはテーブルに座っていた

私たちに背を向けて。弁護士のテーブルには茶色の本といくつかの黄色いタブレットがありました。アティカスのものは裸だった。区画を区切る手すりのすぐ内側

法廷から傍聴人が来ると、証人たちは底が牛皮の椅子に座った。彼らの

背中が私たちに向けられていました。

テイラー判事はベンチにいて、まるで眠そうな老人サメのような表情をしていた。

彼の前で下に急いで書いている。テイラー判事は私が持っていたほとんどの裁判官に似ていた。愛想がよく、白髪で、やや血色の良い顔で、彼は驚くほど非公式な態度で法廷を運営していた。時々足を上げ、ポケットナイフで爪をよく拭いていた。長時間にわたる株式公聴会、特に夕食後、彼は居眠りしているような印象を与えたが、かつて弁護士が彼を起こそうと必死の努力で本の山を意図的に床に押し付けたとき、その印象は永久に払拭された。テイラー判事は目も開かずにこうつぶやいた。

ホイットリー、もう一度やると100ドルかかるよ。」

彼は法律を学んだ人物で、気楽に仕事に取り組んでいるように見えたが、実際には、目の前のあらゆる訴訟をしっかりと把握していました。テイラー判事が公開法廷で行き詰まった姿を目撃されたのは一度だけだった。

カニンガムが彼を止めた。彼らの踏み台であるオールド・サルムには、当初は別々に離れて暮らしていた2つの家族が住んでいたが、残念なことに同じ名前が付けられていた。カニンガム家は、名前の綴りが学術的になるまで、つまりカニンガムが土地所有権をめぐるコニンガムと争い、法律に訴えるまでは学術的に結婚した。このキャラクターに関する論争の中で、ジームズ・カニンガムは、母親が証書などでカニンガムと綴ったと証言したが、彼女は実際にはコニンガムであり、綴りは不確かで、めったに本を読まず、椅子に座っているときは時々遠くを見ていたと証言した。フロントギャラリーの

夜。オールド・セラムの住民たちの奇行を9時間にわたって聞き続けた後、テイラー判事はこの訴訟を法廷から破棄した。どのような根拠があるのかと尋ねられたとき、テイラー判事は「厚かましい黙認だ」と述べ、訴訟当事者たちがそれぞれ国民の意見を述べたことで満足することを神に願うと宣言した。彼らはいた。

彼らが最初に望んでいたのはそれだけだった。

テイラー判事には興味深い習慣があった。彼は法廷内での喫煙を許可していましたが、自分自身は喫煙しませんでした。運が良ければ、彼が長く乾いた葉巻を口に入れ、ゆっくりとむしゃむしゃ食べるのを見る特権に恵まれることもありました。死んだ葉巻は少しずつ消え、数時間後には平らで滑らかな混乱として再び現れ、そのエッセンスが抽出され、テイラー判事の消化液と混ざりました。私

かつてテイラー夫人がどのようにして彼にキスするのかとアティカスに尋ねたが、アティカスはこう答えたという。

キスはあまりしませんでした。

証言台はテイラー判事の右側にあり、私たちが席に着いたとき

ヘック・テイト氏はすでにそれに参加していました。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第17章

「ジェム、あそこに座っているのはイーウェル夫妻ですか？」と私は言った。

「静かに」とジェムが言った。てか、テイトが証言してるんだよ。」

テイト氏はその日のために着飾っていた。彼は普通のビジネススーツを着ており、そのためどこか他の男性と同じように見えました。長靴、ランバージャケット、銃弾の散りばめられたベルトはありませんでした。その瞬間から、彼は私を怖がらなくなりました。彼は証人席に前に座り、両手を膝の間に組み、巡回弁護士の話を注意深く聞いていた。

弁護士のギルマー氏は私たちにはあまり知られていませんでした。彼はアボッツビル出身でした。

私たちが彼に会ったのは法廷が開かれたときだけで、ジェムと私にとって法廷は特別な興味ではなかったため、それはめったにありませんでした。禿げていて滑らかな顔の男で、年齢は40歳から60歳の間くらいだったかもしれない。彼は私たちに背を向けていたが、私たちは彼がそうしていることを知っていた

片方の目がわずかに傾いており、それを彼は有利に利用した。実際には何もしていないのに人を見ているように見えたので、陪審や証人にとっては地獄だった。陪審は、自分たちが厳しい監視下にあると考え、注意を払った。証人たちも同様に考えた。

「…あなた自身の言葉で言います、テイトさん」とギルマー氏は言った。

「そうですね」とテイト氏はメガネを触りながら膝に向かって言いました。

呼ばれる——」

「陪審員に言っていただけますか、テイトさん。ありがとう。誰があなたに電話したの？」

テイト氏は、「ある夜、私はボブに——向こうのボブ・イーウェル氏に——連れて行かれました」と言いました。

「先生、何の夜ですか？」

館さんはこう語った。私がちょうど家に帰ろうとオフィスを出ていたところ、B——ミスター・イーウェルが入ってきて、とても興奮していて、「もらって」と言いました。

急いで彼の家に行くと、黒人が彼の女の子をレイプしたのです。」

"行ったの？"

"確かに。に乗って、できるだけ早く出て行きました。」

「で、何を見つけたの？」

「彼女が正面の部屋の真ん中、入って右側の床に横たわっているを見つけました。彼女はかなり殴られていたが、私が彼女を立ち上がらせ、隅にあるバケツで顔を洗って、彼女は大丈夫だと言いました。私は彼女に尋ねました
彼女を傷つけたのは誰で、彼女はそれがトム・ロビンソンだと言った——」

爪に集中していたテイラー判事は異議を予想していたかのように顔を上げたが、アティカス判事は沈黙していた。

「——彼が彼女をそのように殴ったのかと彼女に尋ねると、彼女はそうだと答えた。彼が彼女を利用したのかと彼女に尋ねると、彼女はそうだと答えた。それで私はロビンソンの家に行き、彼を連れ戻しました。彼女は彼がその人だとわかったので、私は彼を引き取りました。それだけです。
それはそれでした。」

「ありがとう」とギルマー氏は言った。

テイラー判事は「何か質問はありますか、アティカス？」と言いました。

「そうだね」と父は言いました。彼はテーブルの後ろに座っていました。彼の椅子は傾いていた片側で足を組んで、片腕を椅子の背もたれに置いていました。

「医者呼びましたか、保安官？誰か医者呼びましたか？」アティカスは尋ねた。

「いいえ、」とテイラー氏は言った。

「医者呼ばなかったのですか？」

「いいえ、先生」テイラー氏は繰り返した。

"なぜだめですか？"アティカスの声にはエッジがあった。

「そうですね、なぜそうしなかったのかは言えます。その必要はありませんでした、フィンチさん。彼女はひどく打ちのめされていた。何かが起こったのは明らかだった。」

「でも医者は呼ばなかったの？あなたがそこにいた間に、誰かが誰かを送り、1つを取りに行き、彼女を1つまで運んだのですか？」

"いいえ-"

テイラー判事が乱入した。「彼は質問に3回答えています、アティカス。彼

医者を呼ばなかった。」

アティカス氏は「判事、確認したかっただけです」と言うと判事は微笑んだ。

バルコニーの柵の上に置いてあったジェムの手が、その柵を強く締めた。彼は突然息を吸い込んだ。視線を下に向けても、それに相当する反応は見られず、ジェムはドラマティックに表現しようとしているのだろうかど疑問に思った。ディルは静かに見守っており、サイクス牧師もその横で静かに見守っていた。

"それは何ですか？"私がささやくと、「しっ！」と簡潔な言葉が返ってきた。

「保安官、」とアティカスは言った、「あなたは彼女がひどく殴られたと言いましたね。どのような方法で？」

"良い-"

「彼女の怪我について説明してください、ヘック。」

「そうですね、彼女は頭を殴られました。彼女の腕にはすでにあざができていて、それは約30分前の出来事でした——」

"どうして知っていますか？"

テイト氏はニヤリと笑った。「申し訳ありませんが、彼らはそう言いました。とにかくかなり傷だらけだった私がそこに着いたとき、彼女は目の前が真っ黒になっていました。」

「どっちの目？」

テイト氏は瞬きをし、髪に手を通した。「見てみましょう」と彼は優しく言い、それからその質問が子供っぽいと思ったかのようにアティカスを見た。「できないの？」
覚えて？"アティカスは尋ねた。

テイト氏は5インチ前にいた見えない人を指さしてこう言いました。

左。"

「ちょっと待ってください、保安官」アティカスが言った。「彼女はあなたに向かって左を向いていましたか、それともあなたと同じように左を向いていましたか？」

テイト氏は言いました。「ああ、そうだね、それは彼女の判断が正しいでしょう。それは彼女の右目でした、フィンチさん。今思い出したら、彼女は顔のそっち側をぶつけられたんです…」

テイト氏は、何かが突然明らかになったかのように、再び瞬きました。

それから彼は頭を向けてトム・ロビンソンを見回した。まるで本能のように、トム・ロビンソンは頭を上げた。

アティカスにも何かが明らかになり、それが彼を立ち上がらせた。

「保安官、あなたの言ったことを繰り返してください。」

「それは彼女の右目だった、と私は言いました。」

「いや…」アティカスは法廷記者席に歩み寄り、激しく落書きする手にかがみ込んだ。それが止まり、速記パッドを裏返すと、法廷記者はこう言った。フィンチ。彼女が顔のその側を強打されたのを今思い出します。」

アティカスはテイト氏を見上げた。「またどっち側ですか、一体？」

「右側です、フィンチさん、でも彼女にはもっと打撲傷があったんです。それについて聞きたいですか？」

アティカスは別の質問をしようとしていたようだったが、よく考えて「そう、彼女の他の怪我は何だった？」と答えた。テイト氏が答えると、アティカスは振り返ってトム・ロビンソンを見つめ、まるでこれは交渉していないことだと言わんばかりだった。

「…彼女の腕には打撲傷があり、首を見せてくれました。明確なものがありました

彼女の食道には指の跡が――」

「喉の周り？首の後ろに？」

「彼らは周りにいたと思います、フィンチさん。」

"するでしょう？"

「はい、先生、彼女は喉が小さいので、誰もその周りに手を伸ばすことができませんでした…」

「質問にイエスかノーで答えてください、保安官」とアティカスは乾いた口調で言った。

テイトは黙ってしまった。

アティカスさんは座って巡回弁護士にうなずき、弁護士は裁判官に首を振り、テイト氏は裁判官にうなずき、彼は硬直して立ち上がって法廷から降りた。

証言台。

私たちの下では、頭が振り向き、足が床をこすり、赤ん坊が肩にずらされ、数人の子供たちが法廷から駆け出していきました。私たちの後ろにいる黒人たちはお互いに静かにささやきました。ディルはサイクス牧師にそれが何なのか尋ねていたが、サイクス牧師は知らないと答えた。これまでのところ、物事はまったく退屈だった。誰も雷鳴を上げず、対立する弁護士の間には議論もなく、ドラマもなかった。出席者全員が重大な失望を感じたようだった。アティカスはまるでタイトル争いに巻き込まれているかのように、友好的に話を進めていた。彼の無限とともに

荒れ狂う海を静める能力があれば、彼はレイプ事件を説教のように無味乾燥に語ることができた。

私の心の中にあった、古くなったウイスキーやヒエの匂い、眠そうな目をした不機嫌そうな男たち、そして夜に「ミスター・ミスター」と呼ぶハスキーな声に対する恐怖は消え去った。フィンチ？彼らは去ってしまったのですか？

私たちの悪夢は日の光とともに消え去り、すべてがうまくいくでしょう。

ジェムを除いて、観客は皆テイラー判事と同じようにリラックスしていた。彼の口は故意に半笑いに歪んでおり、目は幸せそうで、裏付けとなる証拠について何かを言ったので、私は彼が誇示していると確信しました。

「…ロバート・E・リー・イーウェル！」

店員の弾むような声に応じて、男の小さなチャボチンポが立ち上がり、スタンドに闊歩し、名前を聞くと首の後ろが赤くなった。

彼が宣誓をしようと振り返ったとき、私たちは彼の顔が首と同じくらい赤くなっているのを見ました。また、彼の同名人物との類似点も見つかりませんでした。うっすらと洗ったばかりの髪が額から立ち上がった。彼の鼻は細くて尖っていて、輝いていました。彼には言うべき顎がなかった。それは彼のちりめん状の首の一部のようだった。

「—だから神様、助けてください」と彼は叫びました。

メイコムほどの規模の町には、イーウェル家のような家族がいた。経済変動によって彼らの地位が変わることはなかった。イーウェル家のような人々は、繁栄しているときも不況のどん底にあるときも、郡の客人として暮らしていた。不登校の警察官は、自分たちの多数の子孫を学校に通わせることができなかった。公衆衛生職員は、彼らを先天的欠陥、さまざまな寄生虫、不潔な環境に特有の病気から解放することはできません。

メイコムのイーウェル夫妻は、町のゴミ捨て場裏の、かつては黒人の小屋だった場所に住んでいた。船室の板壁は波形鉄のシートで補われ、屋根はブリキ缶を平らに叩いてこけら板で葺かれていたため、その全体的な形状だけが元の設計を示唆していました。正方形で、散弾銃ホールに向かって開いた4つの小さな部屋があり、船室は不規則な4つの部屋の上に不安そうに置かれていました。石灰岩の塊。その

窓は単に壁の空きスペースにすぎず、夏の間はメイコムの排泄物を食べる害虫を防ぐために油っぽい寒冷紗で覆われていた。

イーウェル家は毎日ゴミ捨て場の落ち穂拾いを徹底的に行い、彼らの産業で得た果物（食べられなかったもの）が小屋の周りの地面を狂った子供の遊び場のように見せたため、害虫たちは無駄な時間を過ごした。：フェンスを通過したのは、木の枝、ほうきの柄、工具の柄の破片で、先端には錆びたハンマーヘッド、絡み合った歯の熊手、シャベル、斧、掘削用の鍬が付いており、有刺鉄線で留められていました。このバリケードに囲まれて

そこは、T型フォードの残骸（ブロックの上に）、捨てられた歯医者椅子、古いアイスボックス、さらには古い靴、使い古されたものなど、それほどでもない物が置かれていた汚い庭だった。

卓上ラジオ、額縁、フルーツ瓶、その下には痩せたオレンジ色の鶏が願わくばつついた。

しかし、庭の一角がメイコムを当惑させた。フェンスに向かって、その列には、鮮やかな赤いゼラニウムが入った6つの欠けたホーローのスロップ瓶があり、あたかもミス・モーディ・アトキンソンのものであるかのように優しく手入れされていた。人々は自分たちをメイエラだと言いました

イーウェルさん。

その場所に何人の子供たちがいたのか誰も正確には知りませんでした。6と答えた人もいれば、9と答えた人もいます。誰かが通り過ぎると、窓にはいつも数人の汚い顔の者たちがいた。クリスマスとき、教会がバスケットを届けるとき、そしてメイコム市長が私たちに自分たちの木やゴミを捨てるゴミ収集業者を手伝ってほしいと頼んだときを除いて、誰も前を通る機会はありませんでした。

アティカスは昨年のクリスマスに市長の要請に従い、私たちを連れて行きました。未舗装の道路が高速道路からゴミ捨て場を通り過ぎて、イーウェル家の500ヤードほど先にある小さな黒人居住地まで続いていた。高速道路に後退するか、道路をずっと進んで引き返すかのどちらかが必要でした。ほとんどの人は黒人の前庭で向きを変えた。凍てつく12月の夕暮れの中で、

彼らの小屋は、煙突から立ち上る淡い青色の煙と、中の火で琥珀色に輝く出入口で、きちんとして居心地が良さそうだった。夕暮れの空気のように、鶏肉やベーコンをカリカリに揚げるおいしい匂いが漂っていました。ジェムと私はリスが調理されていることに気づきましたが、ポッサムとウサギを識別するにはアティカスのような年老いた田舎者が必要でしたが、私たちが馬でイーウェル邸の前を通り過ぎたときに消えた香りでした。

証言台に立った小男が最も近くの隣人よりも優れていたのは、熱湯でアルカリ性石鹼でこすると肌が傷つくことだけだった。

白かった。

"氏。ロバート・イーウェル？"ギルマー氏は尋ねた。

「それが名前です、船長」と目撃者が言った。

ギルマーさんの背中が少し硬くなり、私は彼が残念な気持ちになりました。おそらく私はその方が良いでしょう

今何か説明してください。弁護士の子供たちは、法廷で議論が激化している両親を見て、間違った考えを抱くと聞いた。

彼らは両親の個人的な敵であることに苦しみ、最初の休み時間にしばしば拷問者と腕を組んで外出するのを見て驚きます。

これはジェムと私には当てはまりませんでした。私たちは父の勝ち負けを見てもトラウマになりませんでした。この点に関してドラマを提供できないのが残念です。もしそうなら、それは真実ではありません。しかし、議論がさらに深まったとき、私たちはそれを知ることができました。

専門家というより辛辣ですが、これは父以外の弁護士を観察した結果です。私はこれまで、耳の聞こえない証人を除いて、アティカスが声を上げるのを聞いたことがありませんでした。

アティカスが仕事をしているように、ギルマー氏も自分の仕事をしている。その上、イーウェル氏はギルマー氏の証人であり、誰に対しても失礼なことをする必要はなかった。

「あなたはメイエラ・イーウェルの父親ですか？」が次の質問だった。

「そうですね、もし私がそうでないなら、もうどうすることもできません。彼女のお母さんは死んでしまったのです。」が答えでした。

テイラー判事はかき混ぜた。彼は回転椅子の上でゆっくりと向きを変え、証人を優しく見つめた。「あなたはメイエラ・イーウェルの父親ですか？」眼下の笑い声がピタリと止むような言い方で彼は尋ねた。

「はい、先生」イーウェル氏はおとなしく言った。

テイラー判事は好意的な口調でこう続けた。ここであなたに会った覚えはありません。』証人の肯定的なうなずきに、彼は続けた。私がここに座っている限り、この法廷の誰からも、いかなる主題についても、これ以上卑劣な憶測が聞こえることはありません。わかりますか？”

イーウェル氏はうなずいたが、うなずいたとは思えない。テイラー判事はため息をつき、「大丈夫ですか、ギルマーさん？」と言いました。

”ありがとうございます。イーウェルさん、11月21日の夜に何が起こったのか、あなた自身の言葉で教えていただけますか？”

ジェムはにっこりと笑い、髪を後ろに押しやった。まさにギルマー氏の言葉です。商標。私たちは、ギルマー氏が他の誰の言葉を恐れていたのか疑問に思いました。

証人を雇うかもしれない。

「そう、11月21日の夜、私は焚き付けの荷物を持って森から入ってきて、ちょうど柵に着いたとき、家の中で立ち往生した豚のようにメイエラが叫んでいるのを聞いた――」

ここでテイラー判事は証人を鋭い目で見つめ、彼の判断を下したに違いない

邪悪な意図のない憶測は、彼が眠そうに静まっていたからである。

「今何時でしたか、イーウェルさん？」

「ちょうど日没前です。まあ、私はマイエラがイエスを倒すのにふさわしいと叫んでいたと言っていた
——」ベンチからもう一度視線を向けると、イーウェル氏は沈黙した。

"はい？彼女は叫んでいましたか？とギルマー氏は語った。

イーウェル氏は困惑した表情で裁判官を見た。「まあ、マイエラがこの神聖なラケットを上げていたので、私は荷物を下ろして
できるだけ速く走ったが、フェンスにぶつかった、しかし

混乱したとき、窓に駆け寄ると、見えました——」イーウェル氏の顔が大きくなった。

スカレット。彼は立ち上がり、トム・ロビンソンを指差した。「——あの黒い黒人が向こうで私のマイエラを食べているのを見た
わ！」

テイラー判事の法廷はとても穏やかだったので、小槌を使う機会はほとんどなかったが、彼はたっぷり5分間を叩き続けた。アティ
カス氏はベンチで立ち上がり、彼に何かを言っており、郡の副官であるヘック・テイト氏は中央の通路に立って満員の法廷を鎮め
ていた。私たちの後ろで、有色人種の怒ったくぐもったうめき声が聞こえました。

サイクス牧師はディルと私の上に寄りかかり、ジェムの肘を引っ張りました。「氏。ジェム」と彼は言った、「ミス・ジャン・ルイズを家
に連れて帰ったほうがいいよ。ジェムさん、聞こえますか？」

ジェムは頭を向けた。「スカウトさん、お帰りなさい。ディル、スカウトは家に帰ってください。」

「あなたが私を一番にしないといけないのよ、私はアティカスのありがたい言葉を思い出しながら言った。

ジェムは私に激怒して顔をしかめた後、サイクス牧師にこう言いました。「大丈夫だと思います、牧師、彼女はそれを理解して
いません。」

私は致命的に腹を立てました。「確かにそう思いますが、あなたが理解できることは何も理解できません。」

「ああ、静かに。彼女はそれを理解していません、牧師、彼女はまだ9歳ではありません。」

サイクス牧師の黒い瞳は不安げだった。「氏。フィンチ、みんなここにいるの知ってる？

これはミス・ジャン・ルイズにも君たちにもふさわしくないよ。」

ジェムは首を振った。「彼はこんなに遠くにいと私たちを見ることはできません。大丈夫です、牧師さん。」

ジェムが勝つだろうとは思っていませんでした。なぜなら、彼をここから去らせるものは何もないとわかっていたからです。ディルと私はし
ばらくの間は安全でした。アティカスが見れば、彼のいる場所から私たちの姿が見えました。

テイラー判事が小槌を打ち鳴らしている間、イーウェル氏は証人席にドヤ顔で座り、裁判官の作品を眺めていた。たった一言で彼
は幸せなピクニックになった

不機嫌で緊張した、つぶやく群衆の中に、小槌でたたき音の強さが徐々に弱まり、法廷にかすかなピンクがかかったピンクの音だけになるまでゆっくりと催眠術をかけられました。裁判官は鉛筆で法廷をたたいていたのかもしれませんが。

テイラー判事は再び法廷を掌握し、椅子にもたれかかった。彼は突然疲れ果てたように見えた。彼の年齢は明らかだったので、私はアティカスが言ったことを考えました—彼とテイラー夫人はあまりキスをしませんでした—彼はもうすぐキスするところだったに違いありません七十。

テイラー判事は、「この法廷から傍聴人、少なくとも女性と子供を排除するよう要請があったが、この要請は法廷で拒否されるだろう」と述べた。

当分の間。人々は一般に、自分が探しているものを見、自分が聞いているものを聞きます。また、自分の子供たちをそれにさらす権利があります。しかし、私が一つだけ保証できるのは、あなたは黙って見聞きしたものを受け取ることになるか、そうでなければ立ち去ることになるということです。この法廷にいるが、君のすべてが沸騰した状態で侮辱罪で私の前に出てくるまではここを離れることはないだろう。イーウェルさん、可能であれば、キリスト教英語の使用範囲内で証言をしてください。続けてください、ギルマーさん。」

イーウェル氏を聞くと、聾啞者のことを思い出した。彼はその言葉を一度も聞いたことがないに違いなかった

テイラー判事は彼に向けた—彼の口は彼らと無言で格闘していた—しかし、彼らの印象が彼の顔に現れた。そこからは傲慢さは消え、テイラー裁判官をまったく騙さない粘り強い真剣さにとって代わられた。イーウェル氏が証言台にいる限り、裁判官はまるで彼に誤った行動を起こさせようとしているかのように、彼から目を離さなかった。

ギルマー氏とアティカスは視線を交わした。アティカスは再び座っていた。拳が彼の頬に当てられ、彼の顔は見えませんでした。ギルマー氏はむしろそう見えた絶望的な。テイラー判事からの質問で彼はリラックスした。えーっと、見ましたか？被告はあなたの娘と性的関係を持ったのですか？」

「はい、そうしました。」

傍聴人は静かだったが、被告は何かを言った。アティカスが彼にささやきましたが、トム・ロビンソンは黙っていました。

「窓際にいたって言ってたっけ？」ギルマー氏は尋ねた。

"かしくまりました。"

「地面からどれくらい離れていますか？」

「約3フィートです。」

「部屋の中はよく見えましたか？」

"かしこまりました。"

「部屋の様子はどうでしたか？」

「そうですね、まるで喧嘩でもしているかのように、いろいろなことが飛び交っていました。」

「被告を見てどうしましたか？」

「そうですね、私は家に入ろうと家の周りを走り回りましたが、彼は私のすぐ先に玄関から飛び出していきました。彼が誰であるかはわかりました。私はマイエラのことに気を取られすぎて、追いかける気にはなれなかった。私が家の中に駆け込むと、彼女は床に横たわってゴロゴロしていました――」

「それで、何をしたの？」

「ええ、私はできるだけ早くテートのために走ります。私はそれが誰であるか知っていました、分かった、あの黒人の巣に住んでいて、毎日家の前を通っていたのです。ジェッジ、私はこの郡に、あそこの巣を一掃するよう15年も頼んできた、彼らは私の財産を『価値を下げる』側の近くに住むのは危険だから――」

「ありがとう、イーウェルさん」とギルマー氏は急いで言った。

証人は急いでスタンドから下り、尋問しようと立ち上がったアティカスにぶつかった。テイラー判事は法廷の笑いを許した。

「ちょっと待ってください、先生」アティカスは気さくに言った。「一つ二つ質問してもいいですか？」

イーウェル氏は証人席に後ずさりして落ち着き、アティカス氏を傲慢な疑惑の目で見ていたが、これはメイコム郡の証人が反対側の弁護士に対峙した際によく見られる表情だった。

"氏。そうですね」とアティカスが始めた。「その夜、人々はたくさんランニングをしていました。ほら、あなたは家に走った、窓に走った、中に走った、マイエラのところに走った、テートさんのところに走ったと言いますね。この走っている間、あなたは何かのために走りましたか？

医者？"

「その必要はないよ。何が起こったのか見ました。」

「しかし、理解できないことが1つあります」とアティカス氏は言った。「マイエラの状態は心配しなかったのですか？」

「私は最も肯定的にそう思いました」とイーウェル氏は語った。「誰がやったか見たよ。」

「いえ、彼女の体調のことです。彼女の怪我の性質を考えなかったのか直ちに医師の診察を受ける必要がありますか？」

"何？"

「彼女はすぐに医者に診てもらわなければならないと思いませんか？」

証人は、そんなことは考えたこともなかった、人生で一度も医者を呼んだことがない、もし呼んでいたら5ドルかっただろうと語った。「それだけ？」彼と尋ねた。

「全然違うよ」アティカスは何気なく言った。「氏。ええと、保安官の証言を聞きましたね？」

"どのようだ？"

「ヘック・テイト氏が証言台に立っているとき、あなたは法廷にいましたよね？」

彼の言ったことは全部聞いたんですよ？」

イーウェル氏はその問題を慎重に検討し、その質問は次のとおりであると判断したようだった安全でした。

「はい」と彼は言いました。

「マイエラの怪我についての彼の説明に同意しますか？」

"どのようだ？"

アティカスさんはギルマー氏を見回して微笑んだ。イーウェル氏は決意を固めているようだった守備側に時間を与えないこと。

"氏。テイトさんは右目が真っ黒になり、殴られたと証言した
その――"

「ああ、そうだね」と目撃者は言った。「私はテートが言ったことすべてを支持します。」

"あなたがやる？"アティカスは穏やかに尋ねた。「ただ確認したいだけなんです。』彼は法廷記者のところにいき、何かを言いました、そして記者はテート氏の証言をあたかも株式市場の相場であるかのよう
に読み上げて数分間私たちを楽しませました。

彼女の左、そうそう、それは彼女の右になります、それは彼女の右目でした、ミスター・フィンチ、今、彼女がぶつけられたことを覚えています。』彼はページをめくりました。「顔のそっち側で保安官、あなたが言ったことを繰り返してください、私が言ったのは彼女の右目でした――」

「ありがとう、バート」とアティカスは言った。「また聞きましたね、イーウェルさん。何か付け加えることはありますか？保安官の意見に同意しますか？」

「私はテイトの意見を支持します。彼女の目は真っ黒になり、ひどく殴られました。」

小男はベンチから前回の屈辱を忘れていたようだった。

彼がアティカスを簡単に相手にできると考えていることが明らかになってきた。彼はまた赤くなったようだった。彼の胸は膨らみ、再び赤い小さな雄鶏になった。アティカスの次の質問で彼はシャツを破裂させるだろうと思った。

「氏。えっと、読み書きはできますか？」

ギルマー氏がさえぎった。「異議あり」と彼は言った。「証人の読み書き能力がこの事件と何の関係があるのか分からない。無関係で重要ではない。」

テイラー判事が発言しようとしたが、アティカスは「判事、この質問と別の質問を許可していただければ、すぐにわかるでしょう。」と言いました。

「わかった、見てみましょう」とテイラー判事は言った。「でも、必ず見てください、アティカス。却下されました。」

ギルマー氏も私たちと同じように、ギルマー氏の状態がどうなっているのかに興味を持っているようだった。イーウェルの教育はこの事件について知っていた。

「質問を繰り返します」とアティカス氏は言った。「読み書きはできますか？」

「私は間違いなくそうすることができます。」

「名前を書いて見せてくれませんか？」

「私は積極的にそうするつもりです。私が救済小切手にどうやって署名すると思いますか？」

イーウェル氏は同胞たちから慕われていた。ささやきと

私たちの下でくすくすと笑っているのは、おそらく彼がどんなカードだったかに関係があるのでしょう。

緊張してきました。アティカスは自分が何をしているのか分かっているようだった——しかし、私には彼がライトなしでカエルに刺されそうになったように思えた。決して、決して、決して、

反対尋問 答えがまだ分からない質問を証人に尋ねる、これが私が離乳食で吸収した教義でした。そうすれば、望まない答え、つまり訴訟を台無しにする可能性のある答えが得られることがよくあります。

アティカスはコートの内ポケットに手を伸ばしていた。彼は封筒を取り出し、ベストのポケットに手を入れ、万年筆のクリップを外した。彼はゆっくりと動き、陪審員の丸見えになるように向きを変えた。彼は万年筆のキャップを外し、そっとテーブルの上に置きました。彼はペンを少し振ってから、封筒と一緒に証人に手渡した。「あなたの名前を書いてくれませんか？」彼は尋ねた。「もう明らかに、そうすれば陪審はあなたがそれをするのを見ることができます。」

イーウェル氏は封筒の裏にこう書き、満足そうに顔を上げたところ、テイラー判事がまるで香りのよいクチナンが満開になったかのように彼を見つめていた。

証言台に行くと、ギルマー氏がテーブルに半分座り、半分立っているのが見えた。陪審員は彼を監視しており、一人の男が手すりに手をかざして前かがみになっていた。

「何がそんなに面白いの？」彼は尋ねた。

「あなたは左利きです、イーウェルさん」とテイラー判事は言った。イーウェル氏は怒って裁判官に向き直り、自分が左利きであることが何の関係があるのか分からない、自分はキリストを恐れる男であり、アティカス・フィンチが彼を利用して、と語った。

アティカス・フィンチのような騙し弁護士たちは、その騙し方でいつも彼を利用していました。彼は何が起こったのかを彼らに話しました、そして彼はそれを何度も何度も言いました—

それは彼がやったことだ。その後、アティカスが彼の話の揺るがすような質問は何もなかった。彼が窓から覗いて黒人を追い払い、保安官のところに行ったということだ。

アティカスは最終的に彼を解雇した。

ギルマー氏は彼にもう一つ質問した。「左手で字を書くことについてですが、イーウェルさんは両利きですか？」

「私は絶対にそうではありません、私は片手をもう一方の腕としてうまく使うことができます。片手でも大丈夫、もう一つは」と彼は弁護台を睨みながら付け加えた。

ジェムは静かに発作を起こしているようだった。彼はバルコニーの柵をそっと叩き、あるとき「捕まえた」とささやきました。

私はそうは思いませんでした。アティカスは、イーウェル氏ならメイエラを倒すことができるということを示そうとしているように私には思えました。それくらいはフォローできました。彼女の右目が真っ黒になり、主に顔の右側を殴られた場合、次のような傾向があります。

左利きの人がやったことを示します。シャーロック・ホームズもジェム・フィンチも同意するだろう。しかし、トム・ロビンソンも左利きである可能性は十分にあります。ヘック・テイット氏と同じように、私は自分に向き合っている人を想像し、頭の中で素早くパントマイムを繰り返し、右手で彼女を抱き、左手で彼女を殴ったのではないかと結論付けました。

私は彼を見下ろした。彼の背中中は私たちに向いていましたが、私には彼の広い姿が見えました

肩と雄牛のように太い首。彼なら簡単にそれができただろう。ジェムは鶏を数えているのだと思いました。

第18章

しかし、誰かが再びブームを起こしました。

「メイエラ・ヴァイオレット・イーウェル——！」

若い女の子が証言台に歩いて行きました。彼女が手を挙げて、自分が提出する証拠は真実です、すべての真実です、そして真実以外の何ものでもありません、だから彼女の神を助けてくださいと誓ったとき、彼女はどこか弱々しいように見えたが、証人席で私たちに向かって座ったとき、彼女は次のようになりました。彼女は何だったのか、体の太い女の子でした。激しい労働に慣れている。

メイコム郡では、毎年トイレに行くのではなく、誰かが定期的に入浴しているかどうかは簡単にわかりました。イーウェル氏は火傷したような表情をしていました。まるで一晩水に浸かったことで保護層の汚れが剥がれてしまったかのように、彼の肌は雨や風に敏感に見えた。マイエラは清潔を保とうとしているように見えたが、私はイーウェルの庭に並んだ赤いゼラニウムの列を思い出しました。

ギルマー氏はマイエラさんに、昨年の11月21日の夜に何が起こったのかを陪審員に自分の言葉で話してほしいと頼んだ。

マイエラは黙って座っていた。

「その日の夕暮れ時、あなたはどこにいましたか？」ギルマー氏は辛抱強く語り始めた。

「ベランダで」

「どのベランダですか？」

「一つだけです、玄関ポーチですよ。」

「ベランダで何をしていたんですか？」

「何もないよ」

テイラー判事は「何が起こったのか教えてください。それはできますよね？」

マイエラは彼を見つめて泣き出しました。彼女は手で口を覆い、すすり泣きました。テイラー判事はしばらく彼女を泣かせた後、こう言いました。「もう十分です。真実を話す限り、ここでは誰も「恐れる」ことはありません。あなたにとってこれらすべてが奇妙であることはわかっていますが、恥ずかしいことも恐れることもありません。」

何が怖いの？」

マイエラは手の陰で何か言った。"何だって？"裁判官は尋ねた。

「あの人」と彼女はアティカスを指差しながらすすり泣いた。

"氏。フィンチ？"

彼女は力強くうなずき、「彼がパパにしたように、彼を左利きにしようとして、私を私にするのは望ましくない…」
と言いました。

テイラー判事は彼の濃い白髪を掻いた。彼がこの種の問題に直面したことがないことは明らかだった。"何歳ですか？"彼は尋ねた。

「19歳半です」とマイエラさんは言った。

テイラー判事は咳払いをし、なだめるような口調で話そうとしたが失敗した。"氏。フィンチはあなたを怖がらせるなんて考えもありません」と彼はうなり声を上げた。「もし怖がらせたら、私が彼を止めるためにここにいます。それが私がここに座っている目的の1つです。もうあなたは大きな女の子ですから、背筋を伸ばして座って、自分に何が起こったのか話してください。それはできますよね？」

私はジェムにささやきました。「彼女は良識を持っているの？」

ジェムは証言台で目を細めていた。「まだ言えません」と彼は言った。「彼女は裁判官に同情してもらうのに十分な分別を持っているが、もしかしただただそうかもしれない——ああ、私はそうは思わない」
知る。"

なだめられたマイエラは、アティカスに最後の恐ろしい一瞥を送り、ギルマー氏に言った。焚き付けのために切り刻んで——パパが森に行っている間にやるように言ったんだけど、その時は体力が足りなかったので、パパが来てくれたの——」

"彼は誰ですか？"

マイエラさんはトム・ロビンソンを指さした。「もっと具体的にお願ひします」とギルマー氏は言った。「記者はジェスチャーをうまく抑えることができない。」

「あそこだよ」と彼女は言った。「ロビンソン」

"それで、どうなった？"

「私はここに来て、黒人、そしてこのシファローブを私のために破いてください、私はあなたのためにニッケルを払わなければならないと言いました。彼はそれを十分に簡単に行うことができました、彼はそれができました。それで彼は庭に来て、私は行きました

彼にニッケルを取りに家に行ったとき、私は彼が私に迫っていることがわかったので振り向いた。私の後ろに駆け寄ってください、彼はそうしました。彼は私を首に巻きつけ、悪口を言い、汚いことを言いました—私は怒鳴りつけましたが、彼は私を首に巻き付けました。彼はまた私を殴った
またまた—」

ギルマー氏はマイエラが気を取り直すのを待った。彼女はハンカチを汗まみれのローブにねじっていた。彼女が顔を拭こうとしてそれを開けたとき、それは彼女の熱い手からできたしわの塊。彼女はギルマー氏が別の質問をするのを待ったと質問しましたが、彼がしなかったので、彼女は言いました、「彼は私を床に押し倒し、首を絞め、私を利用しました。」

「叫びましたか？」ギルマー氏は尋ねた。「叫んで反撃したの？」

「私はやったと思います、自分の価値をすべて大声で叫び、蹴ったり、できる限り大声で叫びました。」

"それで、どうなった？"

「あまりよく覚えていないんですが、次に気づいたときにはパパが部屋にいて、『誰がやったんだ、誰がやったんだ？』と叫びながら私の上に立っていました」それから私はちょっと気を失いました、そして次に気づいたときには、ミスター・テイトが私を床から引き上げて、私をそこに導いてくれました
水バケツ。」

どうやらマイエラのリサイタルは彼女に自信を与えたようだが、それは彼女の父親の生意気なタイプではなかった。彼女には、ぴくぴくしっぽを持ったしっかりとした目をした猫のような、何かこっそりとあった。

「全力で彼を撃退したって？彼と徹底的に戦ったのか？」

ギルマー氏は尋ねた。

「私は積極的にそうしました」とマイエラさんも父親と同じ意見だった。

「彼があなたを最大限に利用したと確信していますか？」

マイエラの顔はゆがみ、また泣くのではないかと心配した。その代わりに、「彼は望んでいた通りのことをした」と彼女は言った。

ギルマー氏は手で頭を拭いて暑い日への注意を呼び掛けた。

「当分の間はこれですべてです」と彼は快く言いました。悪党フィンチ氏があなたにいくつか質問があると思います。」

「国は弁護人に対して証人に不利益を与えることはありません。少なくとも現時点ではそうではありません。」とテイラー判事はきっぱりとつぶやいた。

アティカスにはにやにや笑いながら立ち上がったが、証言台に向かう代わりに、口を開いた。

コートを着て親指をベストに引っ掛け、それからゆっくりと部屋を横切って窓の方へ歩いていった。彼は外を見回したが、自分が見たものには特に興味がないようで、それから向きを変えて証言台に歩いて戻った。長年にわたる

経験上、彼が何かについて決断を下そうとしているのがわかりました。

「メイエラさん」彼は微笑みながら言った。「しばらくは怖がらせたりしないよ、まだね。知り合いになりましょう。何歳ですか？」

「私は19歳だと言いました、それを向こうの判事に言いました。」マイエラはベンチで憤慨して首をかしげた。

「そうしました、そうしました、奥様。ご辛抱ください、マイエラさん、私は順調に進んでいますが、以前ほどよく覚えていません。すでに言ったことを質問するかもしれませんが、答えてもらえますよね？良い。」

マイエラの表情には、彼が彼女の心からの協力を確保したというアティカスの思い込みを正当化するものは何も見えなかった。彼女は彼を猛烈な目で見ていた。

「あなたが私を嘲笑し続ける限り、あなたが言った言葉には答えないでしょう」と彼女は言いました。

「奥様？」アティカスは驚いて尋ねた。

「いつまでも私を楽しませ続けてね。」

テイラー判事はこう言った。フィンチはあなたをからかっているわけではありません。どうしたの？」

マイエラさんは下がったまぶたの下からアティカスを見つめたが、裁判官にこう言った。私は彼の生意気なことを受け入れる必要はありませんし、それを受け入れるように求められているわけでもありません。」

アティカスは窓への散歩を再開し、テイラー判事にこの件を任せた。

テイラー判事は決して同情を呼び起こすような人物ではなかったが、彼が説明しようとしたとき、私は彼に対して憤りを感じた。「それがまさにフィンチ氏のやり方だ」と彼はメイエラに語った。

「私たちはこの法廷で何年も何年も取引をしてきました、そしてフィンチ氏は誰に対しても常に礼儀正しい。彼はあなたをからかおうとしているのではなく、礼儀正しくしようとしているのです。それが彼のやり方なのよ。」

裁判官はのけぞった。「アティカス、この手続きを進めましょう。」

記録は証人が暗殺されていないことを示しているが、彼女の見解は反対である。」

私は、彼女の人生で誰かが彼女を「奥様」または「ミス・マイエラ」と呼んだことがあっただろうかと思いました。彼女は日常的な礼儀を不快にしているので、おそらくそうではありません。彼女はいったい何だったのか

みたいな人生？すぐに分かりました。

「あなたは19歳だと言いましたね」アティカスは続けた。「あなたには何人の姉妹と兄弟がいますか？」彼は窓からスタンドまで歩いて戻った。

「セブム」と彼女は言いました、そして私は彼ら全員が私が学校に通い始めた最初の日に見た標本に似ているのではないかと思いました。

「あなたが長男ですか？最も古い？」

"はい。"

「あなたのお母さんは亡くなってどのくらい経ちますか？」

「分からない、長いことね。」

「学校に行ったことはありますか？」

「パパみたいに読み書きも上手だよ。」

マイエラは、私が読んでいた本に出てくるミスター・ジングルのように聞こえました。

「どれくらい学校に行きましたか？」

「2年か、3年か、わかりません。」

ゆっくりと、しかし確実に、私はアティカスの質問のパターンが見え始めた。ギルマー氏が反対するほど無関係または重要ではないとみなした質問から、アティカスは陪審の前で静かにイーウェル家の家庭生活の全体像を作り上げていた。

陪審は次のことを学んだ。彼らの救済小切手は家族を養うのに十分ではなく、とにかくパパがそれを飲み干したという強い疑いがあった。パパは時々何日も沼地に出かけ、体調を崩して帰ってくることもあった。天気は

靴が必要なほど寒いことはめったにありませんが、靴が必要なときは、古いタイヤの細片からおしゃれな靴を作ることができました。家族はゴミ捨て場の一端から湧き出る泉からバケツに水を汲み、周囲にゴミを置かないようにしていた

—そして、清潔を保つことに関しては、誰もが自分自身でした。洗いたければ、自分で水を汲みました。年少の子供たちは絶えず風邪をひいていて、慢性的な地面のかゆみに悩まされていました。時々やって来て、マイエラになぜ学校に残らないのかと尋ねる女性がいました。彼女は答えを書き留めました。家族の2人が読み書きをするので、

残りは勉強するためのものです。パパは家でそれらを必要としていたのです。

「マイエラさん、」とアティカスは思わず言った。

あなたには友達がいるはずですよ。あなたの友達是谁ですか？

証人は当惑したように顔をしかめた。"友達？"

「はい、あなたと同じくらいの年齢、あるいは年上、あるいは年下の知り合いはいませんか？」少年少女？普通の友達だよ？」

しぶしぶ中立を保つまで沈静化していたマイエラの敵意が再び燃え上がった。"あなた

また冗談を言っているのですか、フィンチさん？」

アティカスは彼女の質問に彼の答えを聞かせた

。

「マイエラさん、あなたはお父さんを愛していますか？」彼の次だった。

「彼を愛しています、どういう意味ですか？」

「つまり、彼はあなたにとって良い人ですか、付き合いやすい人ですか？」

「彼はひどいことをする、『それがいつになるかは――』」

「いつ以外に？」

マイエラさんは、手すりに椅子を傾けて座っている父親を見た。彼は背筋を伸ばして座り、彼女が答えるのを待ちました。

「何もないとき以外はね」とマイエラは言った。「彼は有料だと言いました。」

イーウェル氏は再び後ろにもたれかかった。

「お酒を飲んでいるとき以外は？」アティカスがとても優しく尋ねたので、マイエラはうなずいた。

「彼はあなたを追いかけることはありますか？」

「どういう意味ですか？」

「彼が――激怒したとき、あなたを殴ったことがありますか？」

マイエラさんは法廷記者を見下ろし、裁判官を見上げて周囲を見回した。「質問に教えてください、マイエラさん」とテイラー判事は言った。

「私の足は人生で髪の毛一本触れたこともありません」と彼女はきっぱりと言い切った。「彼決して私に触れたことはありません。」

アティカスの眼鏡は少しずれていたの、鼻の上に押し上げた。「とても良い訪問でした、マイエラさん、今度は事件に取り掛かった方が
良いと思います。トム・ロビンソンに、切り刻んで来るように頼んだと言うけど、それは何だった？」

「シファローブ、片側に引き出しがたくさんある古いダンス。」

「トム・ロビンソンはあなたにとってよく知られていましたか？」

「どういう意味ですか？」

「つまり、彼が誰で、どこに住んでいたか知っていましたか？」

マイエラはうなずいた。「私は彼が誰であるかを知っていました、彼は毎日家の前を通っていました。」

「彼に柵の中に入るように頼んだのは初めてですか？」

マイエラはその質問にわずかに飛びついた。アティカスは、これまでそうしてきたように、ゆっくりと窓へ巡礼していた。質問をしてから外を眺め、答えを待つというものだった。彼は彼女が無意識に飛び上がったのを見ていなかったが、私にはそう見えた

彼は彼女が引っ越したことを知っていたと。彼は振り返って眉を上げた。「そうだった——」彼は再び話し始めた。

"そうでした。"

「以前に彼に柵の中に入ってくるように頼んだことはありませんか？」

彼女はもう準備ができていました。「しませんでした、もちろんしませんでした。」

「1つでは十分ではありませんでした」とアティカスは穏やかに言った。「これまで彼に雑務を頼んだことはなかったのですか？」

「そうかもしれない」とマイエラは認めた。「周りには何人かの黒人がいました。」

「他に何かあったことを覚えていますか？」

"いいえ。"

「さて、何が起こったかを話しましょう。あなたが部屋で振り向いたとき、トム・ロビンソンがあなたの後ろにいたと言ったよね？」

"はい。"

「あなたは彼が『悪口や汚いことを言って首を絞めた』と言いましたが、そうですか？」

「そうですよ。」

アティカスの記憶は突然正確になった。「あなたは『彼は私を捕まえて首を絞め、利用した』と言いますが、そうですか？」

"それは私が言ったことです。"

「彼があなたの顔について殴ったのを覚えていますか？」

証人はためらった。

「あなたは彼があなたの首を絞めたと確信しているようですね。この間ずっとあなたは反撃していましたが、

覚えて？あなたは「蹴ったり、できるだけ大声で叫びました」。彼があなたの顔について殴ったのを覚えていますか？」

マイエラは黙っていた。彼女は自分自身の中で何かを明確にしようとしているようでした。私は一瞬、彼女がヘック・テイト氏のやり方と、目の前に人がいるふりをするという私のトリックをやっているのではないかと思いました。彼女はギルマー氏をちらりと見た。

「簡単な質問です、マイエラさん、もう一度質問します。彼があなたの顔について殴ったのを覚えていますか？」アティカスの声は快適さを失っていた。彼は乾いた、淡々としたプロフェッショナルな声で話していました。「彼があなたの顔について殴ったのを覚えていますか？」

「いいえ、彼が私を殴ったかどうかは覚えていません。つまり、そうです、彼は私を殴りました。」

「あなたの最後の一言は答えでしたか？」

"はあ？はい、彼は打ったのです——覚えていない、覚えていないだけです...すべてがとても早く起こりました。」

テイラー判事はマイエラを厳しい目で見た。「泣かないでください、お嬢さん——」と彼は話し始めたが、アティカスは言った、「泣きたければ泣かせてください、判事。時間はいくらでもある世界で。」

マイエラは憤慨して鼻を鳴らしてアティカスを見た。「どんな質問でも答えますよ、私をここに連れて行って、私を嘲笑してくださいね？」質問があれば何でもお答えします——」

「それでいいよ」アティカスは言った。「あと数人しかいないよ。マイエラさん、そうではありません。退屈だね、あなたは被告があなたを殴り、首を掴み、首を絞め、利用したと証言しました。あなたにふさわしい男性がいるかどうかを確認してほしいのです。あなたをレイプした男を特定してもらえますか？」

「そうします、すぐそこにいる彼です。」

アティカスは被告の方を向いた。「トム、立ちなさい。マイエラ先生に長い間あなたを見てもらいましょう。この人はマイエラさんですか？」

トム・ロビンソンの力強い肩が、薄いシャツの下で波打っていた。彼は立ち上がり、右手を椅子の背もたれに置いて立ちました。彼は奇妙にバランスを崩しているように見えたが、それは彼の立ち方からではなかった。左腕は完全に埋まっていた

彼の右よりも12インチ短く、彼の側にぶら下がって死んでいた。それは小さく縮こまった手で終わった、そしてバルコニーの遠くからでもそれが無駄であることがわかった彼に。

「スカウト」とジェムが息を吐いた。「スカウト、見てください！牧師、彼は足が不自由です！」

サイクス牧師は私に寄りかかり、ジェムにささやきました。「彼はそれを綿繰り機に引っ掛け、少年の頃ドルフ・レイモンド氏の綿繰り機に引っ掛けました…
血を流して死にそうでした…彼の骨からすべての筋肉が剥がれてしまいました—」

アティカスは「この人があなたをレイプした男ですか？」と言いました。

「間違いなくそうですよ。」

アティカスの次の質問は1語の長さでした。"どうやって？"

マイエラは激怒した。「彼がどうやってそれをやったのかは分からないが、彼はやった—私はすべてを言った」

あまりにも早く起こったので、私は—」

「さあ、冷静に考えてみましょう—」とアティカスが始めたが、ギルマー氏がさえぎった。

彼は無関係でも重要でもないわけではなかったが、アティカスは証人を眉で殴っていた。

テイラー判事はあからさまに笑った。「ああ、座ってください、ホレス、彼は何もしていません」

選別。どちらかといえば、証人のアティカスの眉をひそめるようなものだ。」

法廷で笑ったのはテイラー判事だけだった。赤ん坊たちもじっとして、ふと、母親の声で窒息させられたのではないかと思った。

胸。

「それでは」とアティカスが言った、「マイエラさん、あなたは被告があなたの首を絞めて殴ったと証言しましたが、被告があなたの後ろに忍び寄ってあなたを殴ったとは言っていないね」

「寒かったけど、振り向くと彼がいた—」アティカスはテーブルの後ろに戻り、指の関節を軽く叩いて言葉を強調した。「—自分の証言を再考したいことはありますか？」

「起こっていないことを言ってほしいのですか？」

「いいえ、奥さん、実際に起こったことを言ってほしいのです。もう一度教えてください、何が起こったのですか？」

「何が起こったのか話しました。」

「振り向くとそこに彼がいたとあなたは証言しました。それで彼はあなたの首を絞めたのですか？」

"はい。"

「それで彼はあなたの喉を解放してあなたを殴ったのですか？」

「彼はそうだと言いました。」

「彼は右拳であなたの左目を黒くしたのですか？」

「私が身をかがめると、それは——ちらっと見た、それがそれだった。私が身をかがめたら、それはちらりと見えなくなった。」

マイエラはついに光を見た。

「あなたはこの点について突然明確になりました。少し前まではできなかった
よく覚えていますね？」

「彼が私を殴ったと言った。」

"よし。彼はあなたの首を絞め、殴り、そしてレイプした、そうですね？"

「間違いなくそうですよ。」

「あなたは強い子ですね、ずっとそこに立って何をしていたのですか？」

「私は大声で叫んだり蹴ったり戦ったりしたと言った——」

アティカスは手を伸ばして眼鏡を外し、良い右目を証人に向け、彼女に質問を浴びせた。テイラー判事は「一度に一つの
質問を、

アティカス。証人に答える機会を与えてください。」

「わかった、なぜ逃げなかったの？」

"私は試した…"

"しようとした？何があなたをそれから遠ざけましたか？

「私は——彼は私を押し倒しました。それが彼がやったことだ、彼は私を押し倒し、その上に乗った
自分。"

「ずっと叫んでたんですか？」

「確かにそうでした。」

「では、なぜ他の子供たちはあなたの言うことを聞かなかったのですか？彼らはどこにいたのですか？ゴミ捨て場で？」

「彼らはどこにいたの？」

答えはありません。

「どうしてあなたの叫び声で彼らは走って行かなかったのですか？森よりもゴミ捨て場が近いですよね？」

答えはありません。

「それとも、窓に父親の姿が見えるまで叫ばなかったのですか？」それまで叫ぶとは思わなかったんじゃないですか？」

答えはありません。

「トム・ロビンソンではなく、父親に向かって最初に叫びましたか？あれだったのか？」

答えはありません。

「誰があなたを殴ったのですか？トム・ロビンソン、それともあなたのお父さん？」

答えはありません。

「あなたのお父さんは窓から何を見たのですか？レイプという犯罪、あるいはそれに対する最善の防御策は何ですか？」なぜ真実を話さないのですか、坊や、ボブ・イーウェルがあなたを殴ったのではありませんか？」

アティカスがメイエラから背を向けたとき、彼はお腹が痛かったように見えたが、メイエラの顔には恐怖と怒りが入り混じっていた。アティカスは疲れて座り、ハンカチで眼鏡を磨いた。

突然、メイエラははっきりと言葉を発するようになった。「言いたいことがあるの」と彼女は言った。

アティカスは頭を上げた。「何が起こったのか話したいですか？」

しかし、彼女は彼の招待に同情心を聞き入れませんでした。「言いたいことがあるから、それ以上は言わない。あそここの黒人は私を利用したんだ、そしてもしあなた達立派な気の利いた紳士たちがそれについて何もしたくないのなら、あなた達は皆黄色くさい卑怯者、悪臭を放つ卑怯者、多くの人たちだ。あなたの派手な雰囲気は無駄にはなりません—あなたの奥様とメイラーリンさんも無駄にはなりません、ミスター・フィンチ

—」

それから彼女は本気で泣き出しました。彼女の肩は怒りのすすり泣きで震えた。彼女は言葉どおりでした。ギルマー氏が彼女をトラックに戻そうとしたときでさえ、彼女はそれ以上の質問には答えなかった。もし彼女がそれほど貧しく無知でなかったら、テイラー判事は彼女が示した軽蔑の罪で彼女を刑務所に入れたらう。

法廷にいる全員。どういわけか、アティカスは私には理解できない方法で彼女を強く殴ったのですが、それは彼にそうすることに喜びを与えませんでした。彼は頭を下げたまま座っていましたが、メイエラがスタンドを出てアティカスのテーブルの横を歩いたときに見せた憎しみの感情で誰かを睨みつける人を私は見たことはありませんでした。

ギルマー氏がテイラー判事に州の休息を告げると、テイラー判事はこう言った。

「私たち全員がやった時間。10分ほどお時間をいただきます。」

アティカス氏とギルマー氏は法廷の前で会ってささやき、証人台の後ろのドアから法廷を出た。それが私たち全員のストレッチの合図だった。気がつくとい私は長いベンチの端に座っていて、なんだかしびれを感じていました。ジェムは立ち上がってあくびをし、ディルも同じようにし、牧師も

サイクスは帽子で顔を拭いた。気温は軽く90度だった、と彼は言った。

報道陣専用の椅子に静かに座り、脳のスポンジで証言を吸収していたブラクストン・アンダーウッド氏は、色づいたバルコニーを苦い目で見つめていたが、彼らは私の目と合った。彼は鼻を鳴らして見ました

離れて。

「ジェム」と私は言いました。アンダーウッドが私たちを見たんだ。」

"大丈夫。彼はアティカスには言わず、トリビューン紙の社交面に載せるだけだろう。」ジェムはディル
に向き直り、裁判の細かい点を説明したと思うが、私はそれが何だったのだろうと思った。アティカス氏とギ
ルマー氏の間には、いかなる点についても長い議論はなかった。ギルマー氏はほとんどしぶしぶ起訴してい
るようだった。証人たちは口バのように鼻で誘導されたが、ほとんど異論はなかった。しかし、アティ
カスはかつて私たちに、テイラー判事の法廷では、

証拠に関して厳格な構築主義者だった弁護士は、最終的には法廷から厳しい指示を受けることになることが
多かった。彼はこれを、テイラー判事が怠け者に見えて寝ながら仕事をしているかもしれないという意味
で私に抽出しましたが、彼の判断が覆されることはめったになく、それがプリンの証拠でした。アティカスは自
分は良い裁判官だったと語った。

やがてテイラー判事が戻ってきて回転椅子に乗った。彼はベストのポケットから葉巻を取り出し、それを注意深く
調べました。ディルを殴りました。裁判官の検査に合格した葉巻は、ひどい噛みつきを受けました。「私たちは
時々彼の様子を見に降りてきます」と私は説明した。「彼には午後の残り時間がかかるだろう。見
てるね。」テイラー判事は上からの世間の監視に気づかず、切断された端を巧みに唇に押し当てて「フ
ラッ！」と言って処理した。彼は唾を吐き出す音を私たちに聞こえるほど真正面から打ちました。「き
っと彼は地獄だった

と、ディルがつぶやいた。

原則として、休暇は一般的な人の移動を意味しますが、今日は人々の移動はありませんでした。

若い男たちに恥をかかせることに失敗した怠け者たちさえも、席から降りた。

壁に沿って立ったままだった。ヘック・テイト氏がこの郡を予約していたのだと思います
裁判所職員用のトイレ。

アティカスとギルマー氏が戻ってきたので、テイラー判事は時計を見た。「もう4時だ」と彼は言ったが、
裁判所の時計がそうであるように、これは興味深いものだった。

少なくとも2回正時を打ったことがある。私はそれを聞いたことも、その振動を感じたこともありませんでした。

「今日の午後は終わりにしましょうか？」テイラー判事は尋ねた。「どうですか、

アティカス？」

「できると思います」とアティカスは言った。

「何人の証人を得たんですか？」

"1つ。"

「それでは、彼に電話してみましょう。」

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第19章

トーマス・ロビンソンは周囲に手を伸ばし、左腕の下に指を這わせて持ち上げた。彼は腕を聖書に導き、ゴムのような左手で黒い装丁との接触を試みた。彼が右手を上げると、役立たずの方が聖書から滑り落ち、事務員のテーブルに当たりました。テイラー判事がうなり声を上げたとき、彼はもう一度試みた、「それでいいでしょう、トム」。トムは宣誓をして証人席に足を踏み入れた。アティカスはすぐに彼に次のように言わせました。

トムは25歳でした。彼は結婚しており、3人の子供がいた。彼は以前にも法律で問題を起こしていた。

行為。

「無秩序だったに違いない」とアティカスさんは語った。「それは何で構成されていましたか？」

「他の男と喧嘩になって、彼が私を切ろうとしたんです。」

「彼は成功しましたか？」

「はい、まあ、少し、傷つけるには十分ではありません。ほら、私は――」トムは左肩を動かした。

「はい」とアティカスは言った。「二人とも有罪判決を受けたんですか？」

「そうだね、罰金を払えなかったから服役しなければならなかったんだ。他の仲間が給料を払ったんだ。」

ディルは私に寄りかかり、ジェムにアティカスが何をしているのかと尋ねました。ジェム氏は、アティカス氏は陪審に対し、トムには隠すことは何もないことを示していたと語った。

「メイエラ・ヴァイオレット・イーウェルをご存知ですか？」アティカスは尋ねた。

「そうだね、私は毎日畑に行ったり来たりする彼女の前を通らなければならなかったんだ。」

「誰の畑？」

「私はリンク・ディース氏を選びます。」

「11月に綿を摘みましたか？」

「いいえ、そうです、私は秋と冬の間、彼の庭で働いています。私は一年中彼のためはかなり安定して働いています、彼はピーカンの木のものをたくさん持っています。」

「あなたは、仕事に往復するのにイーウェルの店を通らなければならなかったと言いました。他に方法はありますか？」

「いいえ、そうですね、私が知っているものはありません。」

「トム、彼女はあなたと話したことがありますか？」

「そうそう、通りかかるときはチップをあげていたのですが、ある日彼女が私に来るように頼んだのです」
柵の中にいて、彼女のためにシファローブを着せてあげてください。」

「彼女はいつあなたに、シファローブを切り刻んでくれるように頼んだのですか？」

"氏。フィンチ、それは去年の春のことだった。ちょうどその時で、鋏を持っていたので覚えています。私はこの鋏しか持っていないと言ったが、彼女は手斧を持っていると言いました。彼女は私に手斧をくれた、そして私はシファローブを壊した。彼女は、「ニッケルを半分あげようと思いますね?」と言いました。そして私は言いました、「いいえ、奥様、そんなことはありません」

無償。'それから家に帰りました。フィンチさん、あれは去年の春のことでした。

一年前。"

「またその場所に行ったことはありますか？」

「はい、そうです」

"いつ?"

「そうですね、何回も行きましたよ。」

テイラー判事は思わず小槌に手を伸ばしたが、手を落とした。ささやき

私たちは彼の助けなしに死んでしまいました。

「どういう状況で？」

「お願いします、そうですか？」

「なぜ何度も柵の中に入ったのですか？」

トム・ロビンソンの額は緩んだ。「彼女は私を呼んでくれるでしょうね。毎回のように見えた

私が通り過ぎたとき、彼女は私に何かちょっとしたことをしてくれそうだ――焚き火を割ったり、水を汲んだりしてあげた。彼女は毎日赤い花に水をあげました――」

「サービスの対価は支払われましたか？」

「いえ、それは彼女が最初に私にニッケルを提供した後ではありません。やってよかったです、先生。イーウェルは彼女を何も助けてくれなかったようだし、チルンも助けてくれなかったし、彼女には一銭も余裕がないのは分かっていたんだ。」

「他の子供たちはどこにいたの？」

「彼らはいつも周りにいて、どこにでもいました。彼らは私の仕事を観察していました。それらのうちのいくつかは窓に設置されていました。」

「メイエラ先生がお話してくれませんか？」

「はい、先生、彼女は私に話しかけました。」

トム・ロビンソンが証言したとき、メイエラ・イーウェルは世界で最も孤独な人だったに違いないと私は思いました。彼女は、25年間も家から出ていなかったブー・ラドリーよりもさらに孤独でした。アティカスが友達がいるかと尋ねたとき、彼女は彼が何を言っているのか分からなかったようで、彼が彼女をからかっているのだと思いました。彼女はジェムの言うところの悲しみと同じくらい悲しんでいたと私は思いました。

混合児: 彼女は豚の中で暮らしていたので、白人は彼女とは何の関係も持たないだろう。彼女は白人だったので、黒人は彼女とは何の関係もありませんでした。彼女は川岸を所有していなかったし、立派な古い家族の出身でもなかったため、黒人たちとの付き合いを好んだドルファス・レイモンド氏のように生きることはできなかった。イーウェル夫妻について「それが彼らのやり方だ」とは誰も言わなかった。メイコムは彼らにクリスマスバスケット、生活保護費、そして手の甲を与えた。おそらくトム・ロビンソンは、これまで彼女にまともな態度をとった唯一の人だったでしょう。しかし、彼女は、彼が彼女を利用したと言い、立ち上がったとき、彼女はまるで彼がそうであるかのように彼を見たと言った

彼女の足の下汚れ。

「やったことはありますか」アティカスが私の瞑想を遮った。

そのうちの一人からの誘い？」

「いえ、そうですか、フィンチさん、私はそんなことはありませんでした。私ならそんなことはしません、ね。」

アティカスは時々、証人が嘘をついているのか真実を語っているのかを見分ける方法の1つは、見るのではなく聞くことだ、と言っていた。私は彼のテストを適用したが、トムはそれを3つ否定した

一気に何度も、しかし静かに、彼の声には泣き言のようなものはまったくなく、彼の抗議が多すぎるにもかかわらず、私は彼を信じている自分に気づきました。彼は立派な黒人であるように見えました、そして立派な黒人は決して他人の家の中に入るつもりはありません
自分の意志で庭を作る。

「トム、昨年の11月21日の夜に何が起こりましたか？」

私たちの下では、観客たちが息を合わせて身を乗り出していました。私たちの後ろにいる黒人たちも同じことをしました。

トムは黒いベルベットのような黒人で、光沢はありませんが、柔らかい黒いベルベットのように見えました。彼の顔の白目は輝き、彼が話すとき、私たちは彼の歯が光るのが見えました。もし彼が完全であったなら、彼は立派な人間の見本になっただろう。

"氏。フィンチ"と彼は言った、「その夜、私はいつものように家に帰ろうとしていました、そしてイーウェルの家を通りかかったとき、彼女が言ったように、メイエラ先生がポーチにいました。本当に静かだったみたいで、なぜだかよくわかりませんでした。私はただ通り過ぎただけで、なぜそこに来て手伝うように彼女が言ったのかを勉強していました。さて、中に入ってみました

フェンスと作業用の焚き付けがないか周りを見回しましたが、何も見つかりませんでした。そして彼女は「家の中で何かやってほしいことがあるよ」と言った。古いドアは蝶番が外れて、すぐに落ちてきます。」ドライバーを持っていると言いました、メイエラさん？彼女はそう言った。さて、私は階段を上がり、彼女が中に入るように合図し、私は正面の部屋に入り、ドアを見ました。ミスって言いました

マイエラ、このドアは大丈夫ですね。前後に引っ張ってみたら、ヒンジは大丈夫でした。それから彼女は私の顔にドアを叩きつけました。ミスター・フィンチ、どうしてこんなに静かなのかと思っていたら、その場所にはチリもなかった、チリもいなかったのだと思いついた。

それで私はミス・マイエラ、チルンはどこにあるの？と言いました。

トムの黒いベルベットの肌が輝き始めたので、彼は顔に手をかざした。

「チルンはどこにあるの？」彼は続けた、「そして彼女は言った——彼女は笑っていた、みたいな感じだった」
—彼女は、みんなでアイスクリームを買いに町へ行っただけと言いました。彼女は、「セブのニッケルを節約するのに1年かかりましたが、やり遂げました。」彼らは皆町へ行っただけだ。

トムの不快感は湿気によるものではありませんでした。「トム、それで何と言った？」

アティカスは尋ねた。

「私は、なぜミス・マイエラ、彼らを扱うのは賢明なことだと私は言いました。

「そう思いますか？」と彼女は言いました。彼女は私が考えていることを理解していないと思います—私

つまり、あのように救ったのは彼女の賢明なことであり、彼らを治療したのは彼女の親切だったということです。」

「分かりましたよ、トム。続けてください」とアティカスは言いました。

「まあ、私は行くのが一番だと言いました、私は彼女のために何もすることができませんでした、そして彼女はああ、できると言いました、そして私は彼女に何を尋ねます、そして彼女はそこの椅子に足を踏み入れるだけだと言いました、そして、その箱をシファローブの上から下ろしました。」

「あなたが壊したのと同じシファローブではないのですか？」アティカスは尋ねた。

証人は微笑んだ。「ああ、もう一つ。ほとんどが部屋と同じくらいの高さです。それで私はやった
彼女が私に言ったこと、そして私が次に知ったとき、私はちょうど手を差し伸べたところでした—彼女は
私の足を掴んで、足を掴んで、ミスター・フィンチ。彼女は私をひどく怖がらせたので、私は飛び降りて椅子をひっくり返しました。私
が部屋を出たとき、その部屋にあったのは家具だけでした、それが唯一のものでした、フィンチさん。私は「神の前に」誓います。

「椅子をひっくり返した後はどうになりましたか？」

トム・ロビンソンは行き止まりになった。彼はアティカスをちらりと見て、それから陪審員を見た。

それから部屋の向かい側に座っているアンダーウッド氏に。

「トム、あなたは真実をすべて話すと誓っています。言ってみますか？」

トムは緊張した面持ちで手を口に当てた。

「その後何が起こったのですか？」

「質問に答えてください」とテイラー判事は言った。彼の葉巻の3分の1が消えていた。

"氏。フィンチ、椅子から降りて振り向いたら、彼女が飛び乗ったみたいだった
自分。"

「飛びついた？激しく？」

「いいえ、彼女は—彼女は私を抱きしめました。彼女は私の腰を抱き締めてくれました。」

今度はテイラー判事の小槌が音を立てて落ち、そのと同時に法廷の頭上の照明が点灯した。暗闇は来ていませんでしたが、午後の太陽が窓から出ていました。テイラー判事はすぐに秩序を回復した。

「それで彼女は何をしたの？」

証人は激しく唾を飲み込んだ。「彼女は手を伸ばして私の顔の横にキスをしました。彼女
彼女はこれまで大人の男性とキスしたことがなく、黒人にキスするのと同じくらいかもしれないと言いました。彼女は、パパが自分に
したことは重要ではないと言います。彼女は言う、「キスしなおしてよ、黒人」。ミス・マイエラ、ここから出て行かせて、逃げようと
したけど彼女が彼女をドアに戻したと言います

そして私は彼女を押さなければならなかった。彼女に危害を加えたくなかったのよ、フィンチさん、許してくれって言ったんですが、ちょうどそう言った瞬間、向こうからミスター・イーウェルが窓から大声で叫びました。」

"彼が何を言ったの？"

トム・ロビンソンは再び唾を飲み込み、目を大きく見開いた。「何かが合わない」

言うのは——この人たちが聞くにはふさわしくない——」

「トム、彼は何と言った？彼が言ったことを陪審に話さなければなりません。」

トム・ロビンソンは目をしっかりと閉じた。「彼は、このクソ野郎、殺してやると言っています。」

"それで、どうなった？"

"氏。フィンチ、あまりにも早く走ってたので何が起こったのか分かりませんでした。」

「トム、あなたはメイエラ・イーウェルをレイプしましたか？」

「そうしなかったわね。」

「何か彼女に危害を加えましたか？」

「そうしなかったわね。」

「彼女の誘いに抵抗しましたか？」

"氏。フィンチ、やってみました。私は彼女に対して「醜いこと」をしようとした。私は醜くなりたくなかったし、彼女を押し付けたくなかったのです。」

トム・ロビンソンのマナーは、彼らなりの意味で、アティカスのマナーと同じくらい優れていたのではないかと思います。後で父が説明するまで、私はトムの苦境の機微を理解できませんでした。彼はどんな状況でも白人女性を殴る勇気はなかったし、長生きすることも期待していなかったので、最初の機会を利用しました。

逃げることは確かな罪悪感の表れだ。

「トム、もう一度イーウェルさんのところに戻ってください」とアティカスが言った。「彼はあなたに何か言いましたか？」

「何もないよ、ね。彼は何か言ったかもしれないが、私はそこにいなかった——」

「それでいいよ」アティカスが鋭く切り込んだ。「何を聞いたのですか？彼は誰と話していましたか？」

"氏。フィンチ、彼はミス・メイエラを見ながら話していました。」

「それで、走ったんですか？」

「やったよ、そうだね」

「なぜ走ったのか？」

「怖かったです、そうですね」

「なぜ怖かったのですか？」

"氏。フィンチ、もしあなたが私のような黒人だったら、あなたも怖がるでしょう。」

アティカスは座った。ギルマー氏は証言台に向かっていたが、そこに着く前にリンク・ディース氏が聴衆から立ち上がり、こう告げた。

「今、皆さんに一つだけ知っておいていただきたいことがあります。あの少年は私のために8年間働いてくれたし、私は彼に少しも迷惑をかけたことはない。斑点じゃないよ。」

「口を閉じてください、先生！」テイラー判事はすっかり目が覚めて咆哮を上げていた。顔もピンク色になっていました。彼のスピーチは奇跡的に葉巻によって損なわれることはなかった。「リンク・ディース」と彼は叫んだ、「言いたいことがあれば宣誓して言えばいい」

そして適切なタイミングで、でもそれまではこの部屋から出てください、聞こえますか？この部屋から出てください、先生、聞こえますか？もう一度この事件を聞いたら大変なことになるよ！」

テイラー判事はアティカスに短剣を突きつけ、まるで話しかけようとしているかのようにしたが、アティカスは頭を下げて膝の上で笑っていました。私は、テイラー判事の元大聖堂での発言が時折職務を超えていたが、それに対して何もした弁護士はほとんどいなかった、という彼が言っていた言葉を思い出した。私はジェムを見たが、ジェムは首を振った。「陪審員の一人が立ち上がって話し始めたわけではない」と彼は言った。「そのときは違うと思うよ。ミスター・リンクは平和か何かを乱してただけだ。」

テイラー判事は記者に対し、フィンチ氏の後にたまたま書き留めたものをすべて消去するよう言い、もしあなたが私のような黒人ならあなたも怖いだろう、と陪審員に中断を無視するよう命じた。彼は疑わしい様子で真ん中の通路を眺め、おそらくリンク・ディース氏が完全に出発するのを待っていたのだろう。それから彼は「どうぞ、ギルマーさん」と言いました。

「秩序を乱す行為をしたとして、一度だけ30日間の猶予を与えられたことがある、ロビンソン？」氏は尋ねた。
ギルマー。

「はい、そうです」

「あなたが彼とやり遂げたとき、黒人はどんな顔をしていましたか？」

「彼は私を倒しました、ギルマーさん。」

「はい、でもあなたは有罪判決を受けましたね？」

アティカスは頭を上げた。「それは軽犯罪であり、記録に残っています、判事。」彼は疲れているように聞こえたと思いました。

「しかし、証人は答えるだろう」とテイラー判事は同じように疲れた様子で言った。

「はい、そうですね、30日あります。」

私は、ギルマー氏が陪審に対し、治安暴行行為で有罪判決を受けた者なら誰でも心の中ではメイエラ・イーウェルを利用することを簡単に考えていたであろう、それが彼が関心を持った唯一の理由であると陪審に誠実に語るだろうと私は知っていた。そのような理由

助けてくれた。

「ロビンソン、君はシファローブを潰して火をつけるのが得意だよ」

手ですよ？」

「はい、そうですね、そうだと思います。」

「女性の息を詰まらせて床に投げつけるほど強いのか？」

「そんなことしたことないよ、ね」

「しかし、あなたはそれができるほど強いですか？」

「そうだと思います、そうですね」

「ずっと前から彼女に注目してたんだよね、坊や？」

「いえ、そうですね、私は彼女を一度も見たことはありません。」

「それでは、あなたは彼女のために切り刻んだり運んだりするすべてのことを非常に礼儀正しく行いましたね、坊や？」

「私はただ彼女を助けようとしただけなんです、そうですね。」

「それはとても寛大ですね、あなたは通常の仕事の後、家で家事をしていたでしょう？」

「はい、そうです」

「なぜミス・イーウェルの代わりにそれらをしなかったのですか？」

「両方ともやりましたね。」

「かなり忙しかったでしょうね。なぜ？」

「なんで、何で、ね？」

「なぜあなたはその女性の家事をやりがったのですか？」

トム・ロビンソンは答えを探してためらいました。「私が言ったように、彼女には助けてくれる人が誰もいなかったようです—」

「そこにはイーウェル氏と7人の子供たちがいたの？」

「そうですね、彼らは彼女を何も助けられないように見えたと言いました—」

「あなたは本当に善意からこのすべての切り刻みと仕事をしました、少年？」

「彼女を助けようとした、と私は言う。」

ギルマー氏は陪審員に陰い笑みを浮かべた。「あなたはとても良い人のようですね、どうやら—」

これはすべて一銭もかからなかったのですか？」

「はい、そうですね。私は彼女を本当に残念に思いました、彼女は他の人たちよりも努力しているように見えました—」

「あなたは彼女に同情しましたか、彼にも同情しましたか？」ギルマー氏は天井まで昇り詰める準備ができているようだった。

目撃者は自分の間違いに気づき、椅子の上で不快そうに体を動かしました。しかし、被害は出てしまいました。私たちの下では、トム・ロビンソンの答えを気に入った人は誰もいませんでした。ギルマー氏は、それを理解するために長い間立ち止まった。

「今年の11月21日に、あなたはいつものように家の前を通ったところ、彼女はあなたに、家に入ってきてシファローブを着るように頼んだんですか？」と彼は言った。

「いえ、そうですよ。」

「家の前を通ったということを否定しますか？」

「いえ、そうです—彼女は家の中で私にやるべきことがあると言ったのです—」

「彼女はあなたにシファローブをバストアップするように頼んだと言っていますが、そうですか？」

「いえ、そうではありません。」

「それでは彼女が嘘をついていると言うのですか？」

アティカスは立ち上がったが、トム・ロビンソンは彼を必要としていなかった。「私は彼女が嘘をついているとは言いません、ギルマーさん、私は彼女が心の中で間違っているとっています。」

次の10の質問に対して、ギルマー氏がマイエラさんの証言を再検討しながら、証人の一貫した答えは、彼女は心の中で間違っていたというものだった。

「イーウェルさんがあなたをその場から追い出したんじゃないの？」

「いいえ、そうです、彼はそうしなかったと思います。」

「考えないでください、どういう意味ですか？」

「つまり、彼が私を追い出すほど長く滞在しなかったんです。」

「あなたはとても率直に話していますが、なぜそんなに速く走ったのでしょうか？」

「怖かったって言うんですけどね」

「もしあなたに明確な良心があったとしたら、なぜ怖がったのですか？」

「前にも言ったけど、あのような状況に陥るのは黒人にとって安全ではなかった。」

「しかし、あなたは問題を解決していませんでした。あなたはミス・イーウェルに抵抗していると証言しました。彼女があなたを傷つけるのがとても怖かったのですか、あなたのような大金が逃げたのですか？」

「いや、そうだね、今みたいに法廷に立つのが怖いんだよ。」

「逮捕が怖い、自分のしたことを正さなければならないのが怖い？」

「いや、そうだね、自分がしなかったことを直視しなければならなくなるのが怖いよ。」

「私に対して生意気なことを言うのですか、少年？」

「いいえ、そうはなりませんでした。」

ギルマー氏の反対尋問について聞いたのはこれくらいだった、ジェムが私にディールを連れ出させたからである。何らかの理由でディールは泣き始めて止まりませんでした。最初は静かに、その後彼のすすり泣きがバルコニーにいる数人に聞こえました。ジェムは、私が一緒に行かないなら私を作ると言ったので、サイクス牧師は私も行ったほうが良いと言ったので、行きました。その日のディールは元気そうで、何の問題もなかったが、逃走から完全には回復していなかったのだろう。

「気分が良くないですか？」階段を下りたところで私は尋ねた。

私たちが南側の階段を駆け降りるとき、ディールは気を取り直そうとした。最上段にはリンク・デイス氏が孤独に佇んでいた。

「何か起こったんですか、スカウト？」私たちが通り過ぎると彼は尋ねた。「いいえ、先生、私は肩越しに答えた。「ディールはここにいるよ、彼は病気だよ。」

「さあ、木の下へ出てください」と私は言いました。「熱にやられたと思いますよ。」私たちが選んだのは、一番太った生きた樫の木で、私たちはその下に座っていました。

「私が我慢できなかったのは彼だけだった」とディールさんは語った。

「トム、誰？」

「あの年老いたギルマー氏は、あんなことをして、彼にとっても憎しみのこもった話をして――」

「ディール、それが彼の仕事だよ。検察官がいなかったら、弁護人もいなかったと思います。」

ディールは辛抱強く息を吐き出した。「それはすべて知っています、スカウト。それは彼の言い方で、私は気分が悪くなりました、明らかに病気でした。」

「彼はそのように振る舞うべきだった、ディール、彼は腹立たしかった――」

「彼はそのような行動をしなかったのですが――」

「ディル、あれは彼自身の証人でした。」

「そうですね、フィンチ氏はメイエラとイーウェル老人を反対尋問したときに、彼らに対してそのような態度はとりませんでした。あの男がいつも自分のことを『坊主』と呼び、嘲笑し、答えるたびに陪審員を見回した様子は――」

「まあ、ディル、結局のところ、彼はただの黒人です。」

「微塵も気にしません。それは正しくない、どういうわけか彼らをそのようにするのは正しくありません。そんなに仕事の話をする人はいないのですか？それは気分が悪くなるだけです。」

「それがギルマー氏のやり方だよ、ディル、彼はいつもそのようにやっているんだ。彼が何かでうまくいくのをまだ見たことがありません。なぜ、いつ、今日、ギルマー氏はそう思ったのか。彼は半分も努力していなかったようです。彼らは、ほとんどの弁護士がそうやってやっているのです。」

"氏。フィンチはそうではない。」

「彼は例ではありません、ディル、彼は――」私はミス・モーディ・アトキンソンの鋭いフレーズを記憶の中で探そうとしていました。「彼は法廷でも公道でも同じだ」と私は思いました。

「それは私が言いたいことではありません」とディルは言いました。

「言いたいことはわかるよ、坊や」私たちの後ろから声がした。私たちはそれが木の幹から出てきたものだと思っていましたが、それはドルファス・レイモンド氏のものでした。彼はトランクの周りを覗き込んで私たちを見た。「あなたは薄っぺらく隠しているわけではありません。ただ気分が悪くなるだけですよ？」

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第20章

「さあ、こちらへ来てください、息子よ、お腹を落ち着かせるものを持ってきました。」

ドルファス・レイモンド氏は悪人だったので、しづしづ彼の誘いに応じましたが、でも私はディルを追った。どういうわけか、私たちがレイモンド氏と友好的になったら、アティカスは気に入らないだろうと思いましたし、アレクサンドラおばさんもそう思わないことはわかっていました。

「ほら」と彼は言って、ストローの入った紙袋をディルに差し出した。「よく飲んでください、

そうすれば静かになるよ。」

ディルはストローを吸い、微笑んで、長々と引っ張りました。

「ひーひー」とレイモンド氏は言い、どうやら子供を墮落させることに喜びを感じているようだった。

「ディル、気をつけろよ」と私は警告した。

ディルはストローを放して笑いました。「スカウト、それはコカ・コーラにほかなりません。」

レイモンド氏は木の幹にもたれて座った。彼は草の上に横たわっていた。「あなたたち小さな人たちは、今は私については言わないでしょうね？そんなことをしたら私の評判が地に落ちてしまいますよ。」

「あの袋に入ったコカ・コーラを全部飲むということですか？ただのコカコーラ？」

「はい、奥様」レイモンド氏はうなずいた。私は彼の匂いが好きでした。それは革の匂い、馬の匂い、綿実。彼は私が今まで見た中で唯一の英国製乗馬ブーツを履いていました。「ほとんどの場合、私が飲むのはこれだけです。」

「じゃあ、ハーフのフリをすれば――？」申し訳ございません、先生」と私は気づきました。「私そんなつもりはなかった――」

レイモンド氏は少しも腹を立てずにくすくすと笑ったので、私は目立たないように構図を決めようとした。

質問：「なぜあなたはそのようなことをするのですか？」

「ああ、そうそう、なぜ私がふりをするのかということですか？まあ、それは非常に簡単です」と彼は言いました。

「私の生き方が気に入らない人もいます。今なら彼らに対してひどいことを言うことができるが、私はそうではない彼らがそれを嫌っても気にしないでください。もちろん、彼らが気に入らなくても気にしないとは言いますが、でも、私は彼らに対してひどいことは言いません、わかりますか？」

ディルと私は「いいえ、先生」と言った。

「私は彼らに理由を与えようとしています。理由をつかむことができれば、人々は助けになります。

めったにない街に来るとき、少し織ってこれを飲んだら

サック、人々はドルファス・レイモンドがウイスキーを握っていると言える、それが理由だ

彼は自分のやり方を変えるつもりはありません。彼は自分自身を助けることができない、だから彼は自分らしく生きるのだそうです。」

「それは正直じゃないよ、ミスター・レイモンド、もう自分を悪く言うんだよ」
ー」

「これは正直ではありませんが、人々にとっては非常に役立ちます。密かに、ミス・フィンチ、私はあまり酒飲みではありませんが、彼らは私が私と同じように生きていることを決して、決して理解できないでしょう。

それが私が生きたい方法だからそうするのです。」

混血の子供がいて、誰に知られても気にしないこの罪深い男の話をここで聞いてはいけないような気がしましたが、彼は魅力的でした。私は自分自身に対して意図的に詐欺を行う存在に出会ったことはありませんでした。しかし、なぜ

彼は私たちに彼の最も深い秘密を託したのでしょうか？私は彼にその理由を尋ねました。

「あなたたちは子供だから、それを理解できるからです」と彼は言いました。
それを聞いたのは――」

彼はディールに首をひねってこう言いました。

もう少し大きくなったら、病気になったり泣いたりしなくなりますよ。もしかしたら、彼は物事が正しくないと感じるかもしれない、たとえば、でも彼は泣かないでしょう、数年経つとそうではありません。彼。"

「何で泣くの、レイモンドさん？」ディールの男らしさが主張し始めていた。

「人々が他人に与える単純な地獄について、何も考えずに泣きましょう。白人が有色人種に対して、自分たちも人間であるということを考えることもせずに与えている地獄について叫びましょう。」

「アティカスは、有色人種の男を騙すのは白人を騙すよりも10倍悪いと言っている」と私はつぶやいた。「それはあなたができる最悪のことだと言います。」

レイモンド氏はこう言った、「それは違うと思いますが――ジャン・ルイズさん、あなたはあなたのお父さんが平凡な人間ではないことをご存じないのですね。それが理解できるまでには数年かかるでしょう――あなたはそう思いました」
まだ世界を十分に見ていない。あなたはこの町さえ見たことはありませんが、あなたがしなければならないのは裁判所の中に一歩戻るだけです。」

そこで思い出したのは、ギルマー氏の反対尋問のほぼすべてを私たちが見逃していたということです。太陽を見ると、広場の西側にある店の屋根の後ろに急速に沈んでいました。2つの火災の間で、私はレイモンド氏と第5司法巡回裁判所のどちらに飛び込みたいかを定めることができなかった。「さあ、ディール」私

言った。「もう大丈夫ですか？」

"うん。よかったです、レイモンドさん、飲み物をありがとう、とてもおいしかったです。落ち着くよ。」

私たちは急いで裁判所に戻り、階段を二階分登り、バルコニーの柵に沿って小刻みに進みました。サイクス牧師が私たちの席を確保してくれました。

法廷は静まり返っていましたが、私は再び赤ちゃんたちはどこにいるのだろうと思いました。テイラー判事の葉巻の口の中央には茶色の斑点があった。ギルマー氏は、

彼はテーブルの上の黄色いパッドの一つに書きながら、手が急速にけいれんしていた法廷記者を出し抜こうとした。「撃て」と私はつぶやいた、「見逃した」。

アティカス氏は陪審員に対する演説の途中だった。彼は明らかに椅子の横に置いてあったブリーフケースから書類を何枚か取り出した。書類がテーブルの上にあったからだ。トム・ロビンソンは彼らをもてあそんでいた。

「…裏付けとなる証拠がなかったため、この男は死刑の罪で起訴され、現在終身裁判を受けている…」

私はジェムを殴った。「彼はどのくらいの期間それをやっているのですか？」

「彼は証拠を精査したところだ」とジェムはささやいた。「そして我々は勝つだろう、スカウト。どうしてできないのかわかりません。彼は5分ほどそれを続けている。彼はそれを、私があなたに説明したのと同じくらい明白かつ簡単に説明しました。あなたもそれを理解できたでしょう。」

「ギルマーさんは――？」

「し、し。新しいものは何もなく、いつも通りです。黙りなさい。」

私たちは再び下を見下ろしました。アティカスは、手紙を口述筆記するときと同じような淡々とした態度で、気楽に話していた。彼は陪審員の前をゆっくりと上下に歩きました、そして陪審員たちは注意を払っているようでした。陪審員たちは頭を上げて従いました

感謝のようなものを持ったアティカスのルート。だったからだと思います

アティカスは雷鳴の持ち主ではなかった。

アティカスは立ち止まり、それから普段はやらないことをした。彼は彼の留め具を外した時計と鎖をかけてテーブルの上に置き、「裁判所の許可を得て――」と言いました。

テイラー判事がうなずくと、アティカスはこれまで見たことのない行動をとった。

それ以来、公の場でも私的な場でも、彼はベストのボタンを外し、襟のボタンを外し、ネクタイを緩め、コートを脱ぎました。彼は就寝時に服を脱ぐまで一度も服を緩めなかった。ジェムと私にとって、これは彼が全裸で私たちの前に立っているのと同じだった。私たちは恐る恐る視線を交わした。

アティカスはポケットに手を入れ、陪審員のところに戻ったとき、彼の金色の襟のボタンとペンと鉛筆の先が光の中で瞬いているのが見えました。

「紳士諸君」と彼は言った。ジェムと私は再び顔を見合わせた。アティカスは「スカウト」と言ったかもしれない。彼の声には乾いた感じや淡々としたところが失われ、あたかも郵便局の隅にいる人々であるかのようには陪審員に話していた。

「紳士諸君、」彼は言った。

残りの時間を思い出していただきたいのは、この事件は難しい事件ではなく、複雑な事実を細かく精査する必要はないが、被告の有罪についてはあらゆる合理的な疑いを超えて確信する必要があるということです。そもそも、この事件は裁判にかけられるべきではなかった。このケースは白黒と同じくらいシンプルです。

「州は、トム・ロビンソンが起訴されている犯罪が実際に起こったという医学的証拠を一片も提出していない。代わりに、この訴訟は二人の証人の証言に頼ったが、その証拠は反対尋問で重大な疑問を呈されただけでなく、被告によってきっぱりと否定された。被告は無罪ですが、この法廷にいる誰かが有罪です。

「私はこの国の主任証人に対して心の中で同情しかありませんが、彼女が自らの罪を免れるために男性の命を危険にさらしたことには同情の念は及びません。

「皆さん、私が罪悪感と言ったのは、彼女を動機づけたのは罪悪感だったからです。彼女は犯罪を犯したわけではなく、単に私たちの社会の厳格で由緒ある規範を破っただけです。その規範は非常に厳しいものであり、それを破った者は一緒に暮らすのにふさわしくないと私たちの中から追われます。彼女は残酷な貧困と無知の犠牲者ですが、私にはそれができません。彼女は残念だ。彼女は白人だ。彼女は自分の犯罪の重大さをよく知っていましたが、自分が解読しようとしている暗号よりも彼女の欲求が強かったため、彼女はそれを解読することに固執しました。彼女は粘り強く言い続け、その後の彼女の反応は、私たち全員が一度は知っていることです。彼女は子供なら誰もがやっているようなことをしました。自分の犯罪の証拠を彼女から遠ざけようとしたのです。しかし、この場合、彼女は盗まれた密輸品を隠している子供ではなかった。彼女は被害者に殴りかかった——必然的に彼女は彼を彼女から遠ざけなければならない——彼は彼女の前から、この世界から排除されなければならない。

世界。彼女は自分の犯罪の証拠を隠滅しなければなりません。

「彼女の犯罪の証拠は何でしたか？トム・ロビンソン、人間です。彼女はトム・ロビンソンを自分から遠ざけなければなりません。トム・ロビンソンは、彼女にとって毎日思い出させてくれるものでした。

彼女がやった。彼女は何をしましたか？彼女は黒人を誘惑した。

「彼女は白人で、黒人を誘惑しました。彼女は私たちの社会では口にできないことをしました：黒人男性にキスしました。年老いた叔父ではなく、力強い若い黒人

男。彼女が壊すまではコードは何の問題もありませんでしたが、ある日、コードがクラッシュしてしまいました。

その後の彼女。

「彼女の父親はそれを見ており、被告は父親の発言について証言した。彼女は何をしましたかお父さんはそうしますか？分かりませんが、それを示す状況証拠はあります。

メイエラ・イーウェルは、ほぼ独占的に主導していた人物によって激しく殴打されました。

彼の左。私たちはイーウェル氏が何をしたか、部分的には知っています。彼は神を畏れる者なら誰でもしたことをしたのです。

この状況下では、忍耐強く立派な白人ならそうするだろう——彼は令状を宣誓し、間違いなく左手でそれに署名しており、トム・ロビンソンは今あなたの前に座っており、彼が持っている唯一の善良な手、つまり右手で宣誓を行った手。

「そして、白人女性に対して『同情する』という容赦のない度胸を持った、物静かで立派で謙虚な黒人が、二人の白人の言葉に反抗しなけりばならなかつたのだ。スタンド上での彼らの姿や振る舞いを思い出す必要はありませんが、

あなたは自分の目でそれらを見ました。メイコム郡の保安官を除く州の証人たちは、彼らの証言が疑われることはないだろうという冷笑的な自信を持って、紳士諸君、この法廷に出廷した。

紳士諸君は、すべての黒人は嘘をつき、すべての黒人は基本的に不道徳な存在であり、すべての黒人男性は私たちの女性に対して信頼されるべきではないという仮定、邪悪な仮定、この仮定に基づいて彼らに同調すると確信しています。

人は自分の才能に見合った心を持ちます。

「紳士諸君、それ自体がトム・ロビンソンの肌のように真っ黒な嘘であり、私が指摘するまでもない嘘であることは承知しています。あなたは真実を知っています、そして真実はこれです：一部の黒人は嘘をつき、一部の黒人は不道徳で、一部の黒人男性は黒人であろうと白人であろうと女性の前では信頼できません。しかし、これは人類に当てはまる真実であり、特定の人種に当てはまるものではありません。この法廷には、一度も嘘をついたことがない人、不道徳なことをしたことがない人は一人もいません。

今生きている男性で、欲望なしに女性を見たことがない人はいないでしょう。」

アティカスは立ち止まり、ハンカチを取り出した。それから彼は眼鏡を外して拭きました、そして私たちはまた別の

「初めて」を見ました。私たちは彼が汗をかいているのを見たことがありませんでした。

顔に汗をかくことは一度もなかったが、今や顔は日焼けして輝いていた。

「皆さん、辞める前にもう一つ。トーマス・ジェファーソンはかつて、「すべての人間は生まれながらに平等である」と言いましたが、これはヤンキースと球団スタッフ側の言い分です。

ワシントンの行政政府は我々に投げつけるのが好きだ。この恵みの年、1935年には、特定の人々が文脈を無視してこのフレーズを使用する傾向があります。

すべての条件を満たします。私が思いつく最もばかばかしい例は、公教育を運営する人々が、勤勉な人々と一緒に愚かで怠惰な人々を奨励しているということです。すべての人間は平等に生まれているのですから、教育者たちは重々しくこう言うでしょう。

残された子供たちはひどい劣等感に苦しんでいます。私たちはすべての男性がそうであることを知っています。一部の人が私たちに信じ込ませるような意味で、平等に作られたわけではありません。ある人は他の人より賢い、ある人は生まれ持った才能のせいでより多くの機会に恵まれている、ある男性は他の人よりもお金を稼ぐ、ある女性は他の人より美味しいケーキを作る、ある人は人々は、ほとんどの男性の通常の範囲を超えた才能を持って生まれます。

「しかし、この国には、すべての人間が平等に生まれる方法がひとつだけある。貧乏人をロックフェラーと同等にし、愚かな人間をアインシュタインと同等にし、無知な人間をどの大学と同等にする人間制度がひとつあるのだ。社長。皆さん、その機関は裁判所です。それは合衆国最高裁判所であったり、国内で最も質素なJP裁判所であったり、あるいはこの名誉ある裁判所であったりします。

あなたが仕えるもの。人間の組織と同様に、私たちの裁判所にも欠点がありますが、この国では、私たちの法廷が偉大な平等者であり、私たちの法廷ではすべての人間は平等に作られています。

「私は法廷や陪審の誠実さを固く信じられるような理想主義者ではありません」
システム—それは私にとって理想ではなく、生きて機能している現実です。皆さん、法廷は、この陪審員として私の前に座っている皆さん一人ひとりよりも優れたものではありません。法廷の健全性は陪審員の数によって決まり、陪審の健全性は陪審を構成する人々の数によって決まります。私は、紳士諸君が、これまで聞いた証拠を情熱を持って検討し、決定を下し、この被告を家族の元に戻してくれると確信しています。神の名において、義務を果たしなさい。」

アティカスの声は小さくなり、陪審員から背を向けながら、私には聞き取れなかった何かを言った。彼は法廷でそう言ったというよりも、自分自身に対してそう言った。私はジェムを殴った。「彼は何と言った？」

「『神の名において、彼を信じなさい』、それが彼が言ったことだと思います。」

ディルは突然私の上に手を伸ばし、ジェムを引っ張りました。「向こうを見てください！」

私たちは沈みゆく心で彼の指を追った。カルプルニアは中央の通路を上り、アティカスに向かってまっすぐに歩いていた。

第21章

彼女は恥ずかしそうに手すりのところで立ち止まり、テイラー判事の注意を引くのを待った。彼女は新しいエプロンを着て、手に封筒を持っていました。

テイラー判事は彼女を見て、「ここはカルプルニアですね」と言いました。

「はい、先生」と彼女は言いました。「このメモをフィンチさんに渡してもいいですか？」それは裁判とは何の関係もありません。」

テイラー判事がうなずくと、アティカスはカルプルニアから封筒を受け取った。彼はそれを開いて内容を読み、こう言いました。「裁判官、私、このメモは私の妹からのものです。彼女は私のことを言います子供たちが行方不明で、正午から現れません…私は…してもらえませんか」

「彼らがどこにいるか知っています、アティカス」アンダーウッド氏が声を上げた。「彼らはすぐ向こうのカラフルなバルコニーにいます。ちょうど午後 18 時からそこにいます。」

私たちの父は振り返って顔を上げました。「ジェム、そこから降りてきて」と彼は言った。

それから彼は裁判官に私たちが聞いていないことを言いました。私たちはサイクス牧師の横をよじ登り、階段に向かった。

アティカスとカルプルニアが階下で私たちに会った。カルプルニアはイライラしたように見えたが、アティカスは疲れ果てているように見えた。

ジェムは興奮して飛び跳ねていました。「私たちは勝ったんですよね？」

「分かりません」アティカスは間もなく言った。「午後からずっとここにいたの？カルプルニアと一緒に家に帰って、夕食を食べて、家にいてください。」

「ああ、アティカス、また来ましょう」とジェムが懇願した。「判決を聞かせてください、お願いします。」

「陪審はすぐに出たり戻ったりするかもしれないが、それは分からない——」しかし、アティカスが折れているのはわかった。「まあ、もう全部聞いたから、残りも聞いたほうがいいよ。いいですか、皆さん、夕食を食べたら戻ってきてください——ゆっくり食べてください、大事なことは何も見逃さないでしょう——そして陪審員がまだ出ていないなら、一緒に待っていてもいいでしょう。でも、あなたが戻ってくるまでには終わると思いますよ。」

「そんなに早く無罪判決が下されると思いますか？」ジェムは尋ねた。

アティカスは答えようと口を開いたが、口を閉じて私たちのもとを去った。

私はサイクス牧師が私たちのために席を確保してくれるように祈ったが、陪審員がいないときに人々が一斉に立ち上がって去っていったことを思い出して祈るのをやめた。

今夜、彼らはドラッグストア、OKカフェ、そしてホテルを押しつぶすことになるだろう、つまり、夕食も持ってきていなかったら。

カルプルニアは私たちを家に向かって行進させた。ミスター・ジェム、妹をその裁判に連れて行ったほうが良いと思いませんか？ミス・アレクサンドラは間違いなく麻痺を起こすだろう

彼女がそれを知ったら！子供に聞くにはふさわしくない…」

街灯が灯っていて、その下を通り過ぎるとき、私たちはカルプルニアの憤慨した横顔を垣間見た。「ミスター・ジェム、ちょっと頭がおかしくなっているのではないかと思ったのですが、その考えそのものが、彼女はあなたの妹なのです！まさにそのアイデアです、先生！あなたは自分自身を完全に恥じるべきです—あなたにはまったく分別がありませんか？」

私は興奮しました。あまりにも多くのことがあまりに早く起こったので、それらを整理するには何年もかかりそうだと感じました、そして今ここでカルプルニアは彼女の貴重なジェムを国中に贈っています—その夜はどんな新しい驚異をもたらすでしょうか？

ジェムはくすくす笑っていました。「それについて聞きたくないですか、カル？」

「口を黙ってください、先生！恥ずかしくて頭を下げるべきときは、笑いながらやっていくんだ—」カルプルニアは一連の錆びついた脅迫を復活させ、ジェムにほとんど反省の余地を与えず、彼女は名曲「フィンチ氏がしなれば」を歌いながら正面の階段を駆け上がった。あなたを疲れさせます、私はその家に入ります、先生！」

ジェムは笑いながら部屋に入ると、カルプルニアはディルを夕食に同席させることに暗黙の同意を示した。「皆さんは今すぐレイチェル先生に電話して、どこにいるかを伝えてください」と彼女は彼に言いました。「彼女はあなたを探して気が散って走っています。朝一番にあなたをメリディアンに送り返さないように気をつけてください。」

アレクサンドラおばさんが私たちを出迎え、カルプルニアが私たちの居場所を告げたとき、気を失いそうになった。アティカスが夕食中に何も言わなかったので、戻ってもいいと言ったのを私たちが彼女に伝えたとき、彼女は傷ついたと思います。カルプルニアがジェム、ディル、そして私に復讐心を込めて料理を提供している間、彼女はただ皿に食べ物を並べ替えて悲しそうにそれを眺めていた。

カルプルニアは牛乳を注ぎ、ポテトサラダとハムを皿に並べ、「恥ずかしい」とつぶやいた。

さまざまな程度の強さで。「さあ、みんなゆっくり食べてね」が彼女の最後の言葉だった指示。

サイクス牧師が私たちの場所を守ってくれました。私たちは、一時間近くも経っていたことに驚きましたが、法廷を出たときとまったく同じ、わずかな変化があったことにも同様に驚きました。陪審員席は空で、被告はいなくなっていました。テイラー判事は去っていましたが、私たちが着席しているときに再び現れました。

私たち自身。

「誰も動かなかったですね、ほとんど」とジェムは言った。

サイクス牧師は「陪審員が出ていくと、彼らは少し動き回った」と語った。「その男性たちは女性たちに夕食を食べさせ、自分たちの赤ちゃんに食事を与えました。」

「彼らはどれくらい外出していたのですか？」ジェムは尋ねた。

「30分くらいかな。フィンチ氏とギルマー氏はさらに話し合いをし、テイラー判事が陪審員を起訴した。」

「彼はどうでしたか？」ジェムは尋ねた。

"何を言います？ああ、彼は本当によくやったよ。私は少しも文句を言っているつもりはありません—彼は非常に公平な心を持っています。彼は、もしあなたがこれを信じるなら、一つの評決を返さなければならないだろうと言いました。

しかし、これを信じる場合は、別のものを返さなければなりません。彼は少し私たちの側に傾いているのではないかと思ったのですが——」サイクス牧師は頭をかいた。

ジェムは微笑んだ。「牧師、彼は傾いてはなりません、心配しないでください、私たちは勝ちました。」

彼は賢明に言った。「私たちが聞いた内容で陪審がどのようにして有罪判決を下すことができるのかわかりません—」

「さて、そんなに自信を持つてはいけません、ジェムさん、陪審員が白人より有色人種のほうに有利な判決を下したのを見たことはありません…」しかし、ジェムは牧師に対して例外を認めた。

サイクスと私たちは、レイプに関する法律に関するジェムの考えに基づいて、証拠の長時間の調査を受けました。彼女があなたを許したらそれはレイプではありませんでしたが、彼女は18歳でなければなりませんでした—つまりアラバマでは—そしてメイエラは19歳でした。明らかに、蹴ったり大声で叫んだり、圧倒されたり踏みつけられたり、できれば凍りつくようなことが必要だったようだ。あなたが18歳未満であれば、このようなことをすべて経験する必要はありませんでした。

"氏。ジェム」とサイクス牧師は口論した、「これは小さな女性にとって礼儀正しいことではありません」
聞く…"

「ああ、彼女は私たちが何について話しているのかわかりません」とジェムは言いました。「スカウトさん、これもですよ」

あなたにとっては古いでしょう？

「間違いなくそうではありません、私はあなたの言っている言葉をすべて知っています。」おそらく私もそうだったでしょう

ジェムは黙ってその件について二度と話し合わなかったので、説得力がある。

「今何時ですか、牧師？」彼は尋ねた。

「8時方向に進んでください。」

私が下を見ると、アティカスがポケットに手を突っ込んだまま歩き回っているのが見えました。彼は窓を一周してから、手すりを伝って陪審員席まで歩きました。彼はそれを覗き込み、玉座に座るテイラー判事の様子を調べてから、元の場所に戻った。私は彼の目に留まり手を振りました。彼は私の敬礼に頷き、ツアーを再開した。

ギルマー氏は窓際に立ってアンダーウッド氏と話していた。法廷記者のバートはチェンスモーカーで、テーブルに足を乗せて後ろに座っていた。

しかし、法廷の職員たち、つまり出席していたアティカス、ギルマー氏、ぐっすり眠っているテイラー判事、そしてバートだけが、その行動が正常であるように見えた。こんなに静かな満員の法廷を見たことがなかった。時々、赤ん坊が慌てて叫び、子供が慌てて外へ飛び出すこともあったが、大人たちはまるで教会にいるかのように座っていた。

バルコニーでは、黒人たちが聖書に従って忍耐強く私たちの周りに座ったり立ったりしていました。

裁判所の古い時計が初期の緊張に耐え、正時を告げた。8回の耳をつんざくような鐘の音が私たちの骨を揺るがすほどだった。

それが11回鳴ったとき、私はもう気分を通り越していました：睡眠との戦いに疲れていたもので、サイクス牧師の快適な腕と肩に寄りかかって短い昼寝を自分自身に許可しました。私はガクツと目を覚まして、下を向いてそのままいようと正直に努力した

そして下の頭に注目すると、16人のハゲ、14人の赤毛と見分けられる男性、40人の頭が茶色と黒の間で変化していた、そして――

私はかつて、ジェムが短期間の心霊研究をしていたときに私に説明してくれた言葉を思い出した。彼は、もし十分な数の人々が――おそらくスタジアムは満員だった――森の中で木に火をつけるなど、一つのことに集中すれば、木は自然に発火するでしょう。私は以下の全員にトム・ロビンソンを釈放することに集中するよう頼むというアイデアを考えましたが、もし彼らが

私と同じように疲れていたもので、うまくいきませんでした。

ディルはジェムの肩に頭を乗せてぐっすり眠っていて、ジェムは静かでした。

「久しぶりじゃないですか？」彼に聞いた。

「そうですよ、スカウト」と彼は嬉しそうに言った。

「まあ、あなたの言い方からすると、5分しかかからないでしょう。」

ジェムは眉を上げた。「あなたには理解できないことがあるのよ」と彼は言いました、そして私は議論するにはあまりにも疲れていた。

しかし、私は十分に目覚めていたに違いありません、そうでなければ私はそのようなメッセージを受け取ることはできなかっただろう

私の中に忍び込んできた印象。去年の冬と何ら変わりなく、夜は暑かったのに震えました。その感情は、法廷内の雰囲気や2月の寒い朝とまったく同じになるまで高まった。当時はマネシツグミも静かで、大工たちはミス・モーディの新居を叩くのをやめ、近所の木のドアはすべて、家のドアと同じくらいしっかりと閉まっていた。ラドリー・プレイスのドア。誰もいない人気のない通りで、法廷は人でいっぱいでした。蒸し暑い夏の夜も変わりませんでした

冬の朝から。法廷に入ってきてアティカスと話していたヘック・テイト氏は、ロングブーツとランバージャケットを着ていたかもしれない。

アティカスは静かな旅をやめ、椅子の一番下の段に足を置いた。テイト氏の言うことを聞きながら、彼は手を太ももの上下にゆっくりと動かしました。私はテイトさんが今にもこう言うだろうと思っていました。

フィンチ……」

しかし、テイト氏が権威ある声で「この法廷は命令を下すだろう」と言うと、私たちの下の頭がガクガクと震えた。テイト氏は部屋を出て、トム・ロビンソンとともに戻ってきた。彼はトムをアティカスの隣の自分の場所に誘導し、そこに立った。

テイラー判事は突然覚醒し、背筋を伸ばして座り、空の陪審員席を眺めていた。

その後起こったことは夢のような性質を持っていました。夢の中で私は陪審員が水中水泳選手のように動きながら戻ってくるのを見ました、そしてテイラー判事の声は遠くから聞こえてきましたが、小さかったです。弁護士の子ならではのものを見た

それは、アティカスが通りに出てライフルを肩に上げて引き金を引くのを見ているようなものでしたが、銃が空であることを知りながらずっと見ていたようでした。

陪審は有罪判決を下した被告には決して目を向けない。そしてこの陪審が到着したとき、陪審員の誰もトム・ロビンソンを見なかった。職長はテイト氏に紙を手渡し、テイト氏はそれを書記官に渡し、テイト氏はそれを裁判官に手渡した。

私は目を閉じた。テイラー判事は陪審員に「有罪…有罪…有罪…」と投票していた。

私はジェムを覗き込んだ。彼の手はバルコニーの手すりを握っていて真っ白で、肩はまるでそれぞれの「有罪」が二人の間に別々に刺さっているかのように震えていた。

テイラー判事が何か言っていた。彼の小槌は拳にありましたが、彼は使っていませんでした。それ。ぼんやりと、アティカスがテーブルから書類をブリーフケースに押し込んでいるのが見えました。彼はそれをパチンと閉め、法廷記者のところに行って何か言い、ミスター・ジョンにうなずいた。

ギルマーは、それからトム・ロビンソンのところに行き、彼に何かをささやきました。アティカスはトムの肩に手を置いてささやきました。アティカスは椅子の背もたれからコートを脱いで肩にかけた。それから彼は法廷を出たが、いつもの出口ではなかった。真ん中の通路を南口に向かって足早に歩いていたので、近道で帰りたかったのだろう。のトップを追いかけました

彼がドアに向かうときの彼の頭。彼は顔を上げなかった。

誰かが私を殴っていましたが、私は下の人々や、通路を孤独に歩いているアティカスの姿から目を離すことに抵抗がありました。

「ジャン・ルイズさん？」

私は周りを見回した。彼らは立っていた。私たちの周りでも、反対側の壁のバルコニーでも、黒人たちが立ち上がっていました。サイクス牧師の声はテイラー判事の声と同じくらい遠かった。

「ジャン・ルイズさん、立ってください。あなたのお父さんが亡くなりました。」

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第22章

ジェムが泣く番だった。私たちが陽気な群衆の中を進んでいくとき、彼の顔には怒りの涙が浮かんでいました。「それは正しくない」と彼は広場の隅までつぶやき、そこで私たちはアティカスが待っていたのを見つけた。アティカスは下に立っていた

街灯は何事もなかったかのように見えた、彼のベストのボタンは留められていた、

彼の首輪とネクタイはきちんと定位置にあり、時計のチェーンは輝いていて、彼は彼のものでした。

また無表情な自分。

「それは違うよ、アティカス」とジェムは言った。

「いや、息子よ、それは正しくありません。」

私たちは歩いて家に帰りました。

アレクサンドラおばさんが起きて待っていました。彼女はドレッシングガウンを着ていて、その下にコルセットを着けていたと断言できたでしょう。「ごめんなさい、お兄さん」と彼女はつぶやいた。

彼女がアティカスを「兄弟」と呼ぶのをこれまで聞いたことがなかったので、私はジェムをちらりと見ましたが、

彼は聞いていませんでした。彼はアティカスを見上げ、それから床を見下ろし、そして私は

トム・ロビンソンの事件に何らかの責任があるのはアティカスだと考えているのだろうか？と疑問に思った信念。

「彼は大丈夫ですか？」おばさんはジェムを指して尋ねました。

「彼はもうすぐそうなるだろう」とアティカスは言った。「彼には少し強すぎました。私たちの父はため息をつきました。「もう寝ます」と彼は言いました。「朝起きないと、

私に電話しないでください。」

「そもそも彼らを許すことが賢明だとは思わなかった——」

「ここが彼らの家です、お姉さん」とアティカスは言った。「私たちは彼らのためにこのようにしたのですから、彼らもそれに対処する方法を学んだ方が良いでしょう。」

「しかし、彼らは法廷に行ってその中でうろろろする必要はありません——」

「宣教師のお茶と同じくらいメイコム郡らしいです。」

「アティカス——」アレクサンドラおばさんの目は不安そうに見えた。「あなたは私にとって最後の人ですこれについては考えが苦しむだろう。」

「苦ではない、ただ疲れているだけだ。私はベッドに行くよ。」

「アティカス——」ジェムは暗い声で言った。

彼は戸口で向きを変えた。「どうしたの？」

「どうしてそんなことができるのでしょうか、どうやってできるのでしょうか？」

「分からないけど、彼らはやったんだ。以前にもやったことがあり、今夜もやった、そしてまたやる、そしてやるときは、泣くのは子供たちだけのようです。良い

夜。」

しかし、朝の方が物事はいつも良くなります。アティカスはいつものような不敬な時間に起床し、私たちがよろよろと入ったとき、モバイルレジスターの後ろのリビングルームにいました。

ジエムの朝の顔は、眠い唇でなかなか尋ねられなかった質問を投げかけた。

「まだ心配する時期ではないよ」私たちがダイニングルームに行きながら、アティカスは彼を安心させた。

「まだ終わっていない。控訴はあるでしょう、それを期待してもいいでしょう。グレイシャスは生きてた、カル、これは一体何なんだ？」

彼は朝食の皿を見つめていました。

カルブルニアさんは「今朝、トム・ロビンソンのパパがこのニワトリを送ってくれたんだ。

それを私が直した。"

「あなたは彼に、私がそれを手に入れたことを誇りに思うと言いました。きっと、彼らは朝食に鶏肉を持っていないでしょう」

ホワイトハウス。これらは何ですか？"

「ロールだよ」カルブルニアが言った。「エステルがホテルに送ってくれたんです」

アティカスは当惑しながら彼女を見上げると、「ここから出てキッチンに何かがあるか見たほうがいいよ、フィンチさん」と言いました。

私たちは彼の後を追った。台所のテーブルには、塩豚の塊、トマト、豆、さらにはスカッパノンなど、家族が埋もれるのに十分な食べ物物が積み重ねられていました。アティカスは豚の関節のピクルスが入った瓶を見つけてニヤリと笑った。「おばさんがこれをダイニングルームで食べさせてくれると思いますか？」

カルブルニアさんは、「今朝ここに着いたとき、これはすべて裏階段の周りにありました。

彼らは——「フィンチさん、あなたのしたことを高く評価しています。」彼らは——彼らはやりすぎではないですよね？」

アティカスの目には涙があふれた。彼は一瞬も言葉を発しなかった。「とても感謝していると伝えてください」と彼は言った。「彼らに、二度とこのようなことをしてはいけなくと伝えてください。

大変な時代ですよ…」

彼はキッチンを出てダイニングルームに入り、アレクサンドラおばさんに失礼し、帽子をかぶって町へ行きました。

ホールでディルの足音が聞こえたので、カルブルニアはアティカスの食べ残した朝食をテーブルの上に残した。ウサギに噛まれた合間に、ディルは昨夜のレイチェル先生の反応について語った。それは、「アティカス・フィンチのような男が石の壁に頭を突きつけたのなら」というものだった。

それは彼の頭です。

「彼女に話してもらったんだよ」とディルは鶏の足をかじりながらうなり声を上げた。「しかし、今朝の彼女はあまり言う様子ではなかった。彼女は私がどこにいるのか疑問に思って夜中まで起きていたと言い、保安官が私を追ってきたが、彼は公聴会にいたと言いました。」

「ディル、彼女に何も言わずに出かけるのはやめなきゃ」とジエムが言った。「それだけ

彼女を悪化させます。」

ディルは辛抱強いため息をついた。「私は顔が青くなるまで彼女にどこへ行くのかを話しました。

彼女はクローゼットの中にヘビが多すぎるのを見ているだけです。その女性は毎朝朝食に1パイントを飲むでしょう。彼女はグラス2杯をいっぱい飲んでいることがわかります。彼女を見たよ。」

「そんなこと言わないで、ディル」とアレクサンドラおばさんが言いました。「それは子供向けではありません。そのシニカル。」

「私は冷笑的ではありません、アレクサンドラさん。真実を語ることは皮肉なことではありませんね？」

「あなたの言う通り、その通りです。」

ジェムの目は彼女に向けられました、ディルにこう言いました。そのランナーを連れて行ってもいいよ。」

私たちが玄関に行くと、ステファニー・クロフォード先生がモーディ・アトキンソン先生とエイブリー先生にそのことを話すのに忙しかった。彼らは私たちを見回して話を続けました。ジェムは喉で野性的な音を立てた。武器が欲しかった。

「大人があなたを見ているのは嫌いです」とディルは言いました。「何かをやり遂げたような気分させてくれる。」

ミス・モーディはジェム・フィンチにそこに来るように叫んだ。

ジェムはうめき声を上げてブランコから立ち上がった。ディル「私たちも一緒に行きます」
言った。

ステファニー先生は好奇心から鼻を震わせました。彼女は誰が寄付したのか知りたかった

私たちに法廷に行く許可を与えた——彼女は私たちを見ていなかったが、今朝、私たちがカラードのバルコニーにいること

が町中に広まった。アティカスは私たちをある種の——としてそこに置いたのでしょうか？すぐそこにそれらすべてがあったのではあり
ませんか？スカウトはすべてを理解しましたか？

—？お父さんが殴るのを見て私たちは腹が立ちませんでしたか？

「黙って、ステファニー。」ミス・モーディの言葉遣いは致命的だった。「午前中ずっとポーチで過ごす時間はありませ
ん。ジェム・フィンチ、あなたとあなたの同僚がケーキを食べられるかどうか尋ねるために電話しました。間に合わせるために5
時に起きたんだから、「はい」って言ったほうがいいよ。

すみません、ステファニー。おはようございます、エイブリーさん。」

ミス・モーディの台所のテーブルには大きなケーキと小さなケーキが2つありました。小さい子が3人いたはずですが。ミス・モーディ
のようにディルを忘れることはできませんでした、そして私たちはそれを示したに違いありません。しかし、彼女が大きなケーキを切
り分けてジェムに渡したとき、私たちは理解しました。

私たちは食事をしながら、これがミス・モーディの、自分に関しては何も変わっていないということの表現なのだと感じました。彼

女は静かに台所の椅子に座って、それを見ていた

私たち。

突然彼女はこう言いました。「心配しないでください、ジェム。物事は見た目ほど悪くはありません。」

室内では、ミス・モーディが何か長々と言いたいとき、膝の上で指を広げて橋渡しをした。彼女はそうしました、そして私たちは待ちました。

「私が言いたいのは、この世界には、私たちのために不快な仕事をするために生まれてきた人たちがいるということです。あなたのお父さんもその一人です。」

「ああ」とジェムは言いました。"良い。"

「まあまあですよ、先生」とミス・モーディはジェムの運命論的な声に気づきながら答えた。「あなたは私の言ったことを理解できるほど年をとっていませんよ。」

ジェムは食べかけのケーキを見つめていました。「繭の中の毛虫になっているようなものです。それがそういうものです」と彼は言った。「何かが暖かい場所に包まれて眠っているような。私はいつもメイコムの人々が世界で最も優れた人々だと思っていたが、少なくとも彼らはそうは見えなかった。」

「私たちは世界で一番安全です」とミス・モーディは言いました。「私たちがクリスチャンになるように求められることはめったにありませんが、そのときは、アティカスのような人たちが私たちの代わりに働いてくれます。」

ジェムは残念そうに笑った。「郡の他の地域の人たちもそう思ってくれればいいのに。」

「私たちの多くがそうしていることに驚かれるでしょう。」

"誰が?"ジェムの声が上がった。「この町でトム・ロビンソンを助けるために何かをした人は誰ですか?」

「一つには、彼の有色人種の友人たち、そして私たちのような人々です。テイラー判事のような人たち。ヘック・テイト氏のような人たち。食べるのをやめて考え始めましょう、ジェム。テイラー判事があの少年を弁護するためにアティカスを指名したのは偶然ではないと思ったことはありますか?テイラー判事には彼を指名した理由があったのではないか?」

これは考えでした。法廷が任命した弁護人は通常、経験を必要としてメイコムが弁護士に新しく加わったマクスウェル・グリーンに与えられた。

マクスウェル・グリーンはトム・ロビンソンの事件を担当すべきだった。

「それについて考えてみてください」とミス・モーディが言った。「それは偶然ではありませんでした。昨夜、私はポーチに座って待っていました。皆さんが来るのを待って待っていました」

歩道を下りながら、待っている間、アティカス・フィンチは勝てないだろう、彼には勝てない、しかし、この地域でこのような事件で陪審員をこれほど長く拘束できる唯一の男は彼だけだ、と思った。そして私は心の中で思った、そうだ、私たちは一歩を踏み出している、それはただの赤ちゃんだ
一歩、されど一歩です。」

「そんなことを言っても大丈夫だ。キリスト教徒の裁判官や弁護士が異教徒の陪審員を補うことはできないだろう」とジェムはつぶやいた。「もうすぐ大人になるよー」

「それはお父さんと一緒に考えなければいけないことだよ」とミス・モーディは言った。

私たちはミス・モーディのクールな新しい一歩を太陽の光の中へ下り、ミスター・モーディを見つけました。
エイブリーとステファニー・クロフォード嬢はまだそれを続けています。彼らは歩道を進み、ステファニー先生
の家の前に立っていました。ミス・レイチェルが彼らに向かって歩いていました。

「大きくなったらピエロになると思う」とディルは言った。

ジェムと私は足を止めました。

「はい、ピエロです」と彼は言った。「この世界で私が高々に対してできることは笑うこと以外に何もないので、サ
ーカスに参加して頭から笑い飛ばすつもりです。」

「ディル、それは逆だったね」とジェムは言った。「ピエロは悲しい、それを笑うのは人々だ」
彼ら。"

「さて、私は新しい種類のピエロになるつもりだ。私はリングの真ん中に立って、みんなを笑い飛ばすつもりだ。ちよ
と向こうを見てください」と彼は指さした。「彼ら全員が
ほうぎに乗るべきだ。レイチェルおばさんはもうそうなのよ。」

ステファニー先生とレイチェル先生は、ディルの観察に嘘をつかないような態度で、私たちに向かって激しく手を振って
いました。

「ああ、なんてことだ」とジェムは息を呑んだ。「彼らに会わないのは醜いことだと思います。」

何か間違っていました。エイブリー氏はくしゃみで顔を真っ赤にし、私たちがやって来たとき歩道から吹き飛ばされ
そうになった。ステファニー先生は興奮で震えていましたが、レイチェル先生はディルの肩をつかみました。「裏庭に乗
って、そこに留まってください」と彼女は言いました。「危険が迫っています。」

「問題は？」私は尋ねた。

「まだ聞いてないの？街中に溢れてるよー」

その瞬間、アレクサンドラおばさんが玄関に来て私たちに電話をかけてきましたが、彼女もそうでした。

遅い。ステファニー先生が喜んで私たちに教えてくれました。今朝、ボブ・イーウェル氏が郵便局の角でアティカスを呼び止め、彼の顔に唾を吐き、すぐに受け取ると言ったそうです。もしそれが彼の残りの人生にかかったとしても。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第23章

「ボブ・イーウェルがタバコを嗜まなかったらいいのに」とアティカスがそれについて言ったのはそれだけだった。

しかし、ステファニー・クロフォード嬢によると、アティカス氏は郵便局から出ようとしたところ、イーウェル氏が近づき、悪態をつき、唾を吐きかけ、脅迫したという。

彼を殺すために。ミス・ステファニー（二度話したときまでに、彼女はそこにいて、すべてを見ていた——ジトニー・ジャングルから通りかかってきたのだ）——ミス・ステファニーによると、アティカスは目もくれず、ハンカチを取り出して拭いただけだったという。彼の顔とそこに立って、イーウェル氏に彼の名前を呼んでもらいました、野生の馬は彼女に繰り返すことができませんでした。イーウェル氏は、あいまいな戦争の退役軍人でした。それに加えて、アティカスの平和的な反応がおそらく彼に尋ねさせたのだろう、「戦うには誇りが高すぎる、この黒人大好き野郎？」ステファニーさんは、アティカスが「いや、年をとりすぎている」と言って、自分の手に手を入れた、と語った。

ポケットに入れて散歩します。ステファニーさんは、それをアティカス・フィンチに渡さなければならない、彼は時々乾いているかもしれないと言いました。

ジェムも私もそれが面白いとは思わなかった。

「でも結局のところ、彼はかつて郡内で最も致命傷を負った人物だったんだ。彼できた-」

「彼が銃を持たないことは知っているでしょう、スカウト。彼は一個も持っていない——」とジェムは言った。

「ご存知の通り、その夜、彼は刑務所に一件もありませんでした。彼は私に、銃を持ち歩くことは誰かがあなたを撃つよう誘っていると仰いました。」

「これは違います」と私は言いました。「彼に貸してもらうことができます。」

私たちがそうしたら、彼は「ナンセンス」と言った。

ディルは、アティカスの優れた性質に訴えることが効果があるかもしれないという意見を持っていた。

アレクサンドラ叔母さんだけで育てられた上に、イーウェル氏が彼を殺したら、私たちは餓死するだろうし、アティカスが地下に潜る前に彼女が最初にやることはカルブルニアを解雇することだろうということは誰もが知っていた。ジェムは、私がやればうまくいくかもしれないと言った

若くて女の子だったので、泣いて発作を起こしました。それもうまくいきませんでした。しかし、彼が私たちが近所を引きずりながら、何も食わず、普段のことにほとんど興味を示さないことに気づいたアティカスは、私たちがどれほどひどく怯えているかに気づきました。ある夜、彼は新しいサッカー雑誌でジェムを誘惑した。ジェムがページをめくって脇に放り投げるのを見て、「何が気になるの？」と言いました。

ジェムは要点を言いました。イーウェル。」

"何が起きたの？"

「何も起こらなかった。私たちはあなたのことを心配しています、そしてあなたは彼について何かをするべきだと思います。」

アティカスは苦笑した。"何を？彼を平和の絆の下に置きますか？"

「男性があなたを捕まえると言ったら、それは本気で言っているように見えます。」

「彼は本気で言ったんだ」とアティカスは語った。「ジェム、ちょっとボブ・イーウェルの立場に立つことができるかどうか試してみてください。そもそもあの裁判で、彼に信頼性があったとしても、私はその最後の一片を打ち砕いたのです。男は何らかの復活を遂げなければならなかった、彼の類はいつもそうなのだ。ですから、もし私の顔に唾を吐きかけて脅迫したことで、メイエラ・イーウェルがさらに殴られるのを防げるのであれば、それは私が喜んで受け入れるつもりです。彼は誰かにそれをぶつけなければならなかったが、私はそこにいる子供たちよりもむしろ私であったほうが良かった。あなた

理解する？"

ジェムはうなずいた。

アティカスが「ボブ・イーウェルを恐れることは何もありません。彼はその朝、自分のシステムからすべてを取り出したのです。」と言っていると、アレクサンドラおばさんが部屋に入ってきました。

「私はそれについては確信が持てません、アティカス」と彼女は言った。「彼の種族は、恨みを晴らすためなら何でもするだろう。あの人たちがどんな気持ちか知ってるでしょ。」

「一体、イーウェルが私に何をしてくれるのでしょうか、お姉さん？」

「何かこっそりしたものよ」アレクサンドラおばさんが言った。「それは頼りにしてもいいよ。」

「メイコムでは誰もこっそりする機会はほとんどありません」とアティカスは答えた。

その後、私たちは恐れなくなりました。夏は溶けていきましたが、私たちはそれを最大限に楽しみました。アティカスは、事件が起こるまでトム・ロビンソンには何も起こらないと我々に保証した。

高等法院はトムの事件を再審理し、トムには釈放されるか、少なくとも再裁判を受ける可能性が十分にあると判断した。彼は110マイル離れたチェスター郡のエンフィールド刑務所農場にいました。私はアティカスに、トムの妻と子供たちが許可されるかどうか尋ねました。

彼を訪ねたが、アティカスはノーと答えた。

「もし彼が控訴に負けたら、彼はどうなるの？」と私はある晩尋ねた。

「知事が減刑しない限り、彼は議長に行くだろう」とアティカスは言った。

まだ心配する時期ではありません、スカウト。我々には良いチャンスがある。」

ジェムはソファに大の字になって『ポピュラー・メカニクス』を読んでいました。彼は顔を上げた。「それは正しくありません。たとえ有罪だったとしても、彼は誰も殺しませんでした。彼は人の命を奪っていませんでした。」

「アラバマ州ではレイブは死刑に値する犯罪だということをご存知でしょう」とアティカスさんは語った。

「そうです、しかし陪審は彼に死刑を与える必要はありませんでした。彼らが望むなら、彼に20年の刑を与えることもできたのです。」

「与えられた」アティカスは言った。「トム・ロビンソンは有色人種だよ、ジェム。この部分には陪審員はいません。このような罪状に対して、世界中の人々は「あなたは有罪だと思うが、それほどではない」と言うだろう。それは完全無罪か無罪かのどちらかだった。」

ジェムは首を振っていた。「それが正しくないことはわかっているが、何が間違っているのか理解できない」

それは間違いです。レイブは死刑に値するべきではないのかもしれませんが…」

アティカスは新聞を椅子の横に落とした。彼は、レイブ法には何の異論もなかったが、深い不安はあったと語った。

国家が要求し、陪審が純粋に状況証拠に基づいて死刑を宣告したとき。彼は私をちらっと見て、私が聞いているのを見て、話を楽にしてくれました。「一つつまり、殺人罪で死刑判決を受ける前に、たとえば目撃者が一人か二人いるはずだ。「はい、私はそこにいて、彼が引き金を引くのを見ました」と言える人がいるはずです。」

「しかし、状況証拠によって多くの人が絞首刑に処せられている」と述べた。

ジェム。

「私は知っています、そして彼らの多くもおそらく当然のことだと思いますが、目撃者がいない場合には常に疑いがあり、場合によっては疑いの影だけであることもあります。法律には「合理的な疑い」と書かれていますが、被告には疑いの影を感じる権利があると私は思います。どんなにありそうもないことであっても、彼がそうなる可能性は常にあります。

無実の。"

「それでは、すべては陪審に委ねられることになる。陪審員を廃止すべきだ。」ジェムは断固たる。

アティカスは笑わないように努めたが、どうすることもできなかった。「君は我々に対してかなり厳しいんだ、息子よ。もしかしたらもっと良い方法があるかもしれないと思います。法律を変えてください。裁判官だけが死刑事件で刑罰を確定する権限を持つように変更してください。」

「それならモンゴメリーに行って法律を変えなさい。」

「それがどれほど難しいかに驚かれるでしょう。法律が変わるまで生きてはいけなし、生きてそれを見ると老人になってしまうよ。」

これはジェムにとって十分ではありませんでした。「いいえ、陪審員を廃止すべきです。彼そもそも彼は有罪ではなかったし、彼らは彼が有罪だと主張した。」

「もしあなたがあの息子、そしてあなたのような少年たち11人が陪審員になっていたら、トムは自由の身になっていたでしょう」とアティカスさんは語った。「これまでのところ、あなたの人生に支障をきたすものは何もありません。推論のプロセス。トムの陪審員、これらは日常生活での12人の理性的な男性ですが、あなたは彼らと理性の間に何かが存在することに気づきました。あなたはその夜、刑務所の前で同じものを見ました。その乗組員が去ったとき、彼らはまともな人間として去ったのではなく、私たちがそこにいたから去ったのです。私たちの世界には、男性を頭がくらくらさせる何かがあります。公平になろうとしたとしても、彼らは不可能です。私たちの法廷では、黒人に対して白人が言った場合、常に白人が勝ちます。醜いけど、それが人生の事実なのよ。」

「それは正しくありません」とジェムは無遠慮に言いました。彼は膝を拳でそっと打ちました。

「そのような証拠で人を有罪にすることはできません。それはできません。」

「あなたにはできなかったが、彼らにはできたし、実際にそうしたのです。成長すればするほど、それが見えてきます。虹の色に関わらず、人間が真つ当な取引をすべき唯一の場所は法廷であるが、人は自分の恨みを陪審員席に直接ぶつける方法を持っている。大人になるにつれて、白人男性が黒人男性を騙すのを毎日のように目にすることになるでしょう。でも、一つだけ言わせてください、忘れないでください。」

白人が黒人に同じことをするとき、彼が誰であろうと、どれほど金持ちであろうと、どれほど立派な家庭の出身であろうと、その白人はゴミだ。」

アティカスはとても静かに話していたので、彼の最後の言葉は私たちの耳に響きました。私は見上げた、そして彼の顔は陰しかった。「私にとって、黒人の無知につけ込む下級白人男性ほどうんざりするものはありません。騙されないでください。すべてが積み重なって、いつか私たちが請求額を支払う日が来るでしょう

そのための。あなたたちの子供の時代に起こらないことを願っています。」

ジェムは頭をかいてました。突然彼の目が見開かれました。「アティカス、なぜ私たちやミス・モーディのような人たちが陪審員に選ばれないのですか？」と彼は言った。メイコム出身者が陪審員に選ばれたことは一度もありません。彼らは皆、森の外から来たのです。」

アティカスはロッキングチェアにもたれかかった。どういうわけか彼はジェムに満足しているようでした。「いつそのようなことが起こるだろうと思っていました」と彼は言った。「理由はたくさんあります。まず、ミス・モーディは女性なので陪審員を務めることができない——」

「アラバマ州の女性はできないということですか？」私は憤慨しました。

"私はします。トムのような卑劣な事件から弱い女性たちを守るためだと思います。

それに、」とアティカスは笑いながら言った、「事件を完全に審理できるかどうかは疑わしい。女性たちが質問をするために中断するだろう。」

ジェムと私は笑いました。ミス・モーディが陪審員になったら印象的だろう。私は椅子に乗った老デュボース夫人のことを思い出しました。「ラップをやめて、ジョン・テイラー、この人に聞きたいことがあります。」おそらく私たちの先祖は賢かったのでしょう。

アティカスはこう言っていた。「私たちのような人間にとって、それが私たちの負担だ。私たちは通常、ふさわしい陪審員を獲得しています。我が国の屈強なメイコム住民は、そもそも興味がありません。第二に、彼らは恐れています。では、彼らは——」

「怖い、なぜ？」ジェムは尋ねた。

「そうですね、たとえばレイチェル先生がモーディ先生をで轢いたとき、リンク・ディース氏が損害賠償額を決めなければならなかったとしたらどうでしょうか。リンク

どちらかの女性の店のビジネスが失われるなんて考えたくないですよ？

そこで彼は、テイラー判事に、自分がいない間、自分を守ってくれる人がいないので陪審員を務めることはできないと告げる。それでテイラー判事は許します。

時々彼は激怒して言い訳します。」

「何が彼に、彼らのどちらかが彼との取引をやめるだろうと思わせたのでしょうか？」私は尋ねた。

ジェムは、「レイチェル先生はそうするでしょうが、モーディ先生はそうしません。しかし、陪審員の投票の秘密は、アティカス。」

私たちの父は笑いました。「息子よ、あなたにはまだたくさんのマイルが残っています。陪審員の投票は秘密であるはずだ。陪審員を務めるということは、人に決断を迫り、何かについて自分自身を宣言します。男性はそういうことを好みません。時々それは

不快。"

「トムの陪審員は急いで決断したんだよ」とジェムがつぶやいた。

アティカスの指は時計のポケットに向かった。「いいえ、そうではありませんでした」と彼は、私たちに対してではなく、自分自身に対して言いました。「それが私に、これは始まりの影かもしれないと思わせた一つのことだった。その陪審には数時間かかった。避けられない判決かもしれない、しかし、通常はほんの数分しかかかりません。今度は――」と彼は話を切り上げて見た。私たちに。「知っておいてほしいかもしれないが、かなり消耗した男が一人いた――最初は完全無罪を切望していた。」

"誰が?"ジェムは驚いた。

アティカスの目は輝いた。「私が言うことではありませんが、これだけはお話しておきます。彼はあなたのオールド・サルムの友人の一人でした…」

「カニングム家の誰か?」ジェムは叫んだ。「そのうちの一つは、私はどれも見覚えがありませんでした…冗談ですよ。」彼は目尻からアティカスを見つめた。

「彼らのつながりの一つ。直感では、私は彼を殴らなかった。ただの勤です。

できただろうが、しなかった。」

「ゴリー・モーゼス」とジェムはうやうやしく言った。「ある瞬間には彼らは彼を殺そうとし、次の瞬間には彼らは彼を解放しようとしている…私は生きている限りあの人たちのことを決して理解することはできないだろう。」

アティカスは、彼らのことを知ればいだけだと言いました。同氏は、カニングム一家は新世界に移住して以来、誰からも何も奪っていないと述べた。彼らのもう一つの特徴は、一度彼らの尊敬を勝ち得れば、彼らは徹底的に味方してくれるということだ、と彼は語った。アティカスは、彼らがその夜、フィンチ家に多大な敬意を持って刑務所を出て行ったのではないかと、疑惑以外の何ものでもなかったと述べた。それからまた、彼は彼らの一人の考えを変えるには、落雷ともう一人のカニングムが必要だった、と語った。「あの群衆が2人だったら、陪審は絞首刑になっていただろう。」

ジェムはゆっくりと言いました。

前の晩に殺したの? どうしてそんな危険を冒すことができたんだ、アティカス、どうしてそんなことができたんだらう

あなた?"

「分析してみると、リスクはほとんどありませんでした。どちらにも違いはありません有罪判決を受ける男と、有罪判決を受けるもう一人の男がいるのだろうか? 有罪判決を受ける男と有罪判決を受ける男の間には、わずかな違いがある

彼の心は少し動揺していますね。彼は、この試合における唯一の不確かな人物だった

リスト全体。」

「あの男はウォルター・カニンガム氏とどんな血縁関係にあったのですか？」私は尋ねた。

アティカスは立ち上がり、伸びをして、あくびをした。まだ就寝時間でもありませんでしたが、彼が新聞を読む機会を望んでいることはわかりまし

た。彼はそれを拾い上げ、折り畳んで、私の頭を軽く叩きました。「さあ、見てみましょう」と彼は独り言を言った。「私はそれを持っている。ダ

ブルのいここです。」

「どうしてそんなことがあり得るのですか？」

「二人の姉妹は二人の兄弟と結婚した。私があなたに言うのはそれだけです、あなたはそれを理解します。」

私は自分自身を苦しめ、もし私がジェムと結婚し、ディルに妹がいて、彼と結婚した場合、私たちの子供たちは二重のいここになるだろうと決心し

ました。「やあ、ミネッティ、ジェム」と私は言いました。

アティカスが去ったとき、「彼らは面白い人たちだ。「聞こえましたか、おばちゃん？」

アレクサンドラおばさんは敷物を引っ掛けていて、私たちを見ていませんでしたが、聞いていました。

彼女は椅子に座り、その横に仕事かごを置いて、膝の上に敷物を広げました。

なぜ女性たちが沸騰した夜にウールの敷物に夢中になるのか、私には決して分かりませんでした。

「聞いたよ」と彼女は言った。

私は若きウォルター・カニンガムの弁護士に駆けつけたときの、遠い悲惨な出来事を思い出した。今では、やってよかったなと思いまし

た。「もうすぐ学校が始まるから、ウォルターを家に夕食に誘ってやろう」と私は計画し、次に彼に会ったら彼を殴るという個人的な決意

を忘れていた。「彼は時々放課後に泊まってもいいのですが、

あまりにも。アティカスなら彼をオールド・サルムまで連れ戻すことができるだろう。たぶん彼はいつか私たちと一緒に夜を過ごすことができ

るでしょう、分かった、ジェム？」

「それについては見てみましょう」とアレクサンドラおばさんは言い、彼女との関係はこうであると宣言した。

常に脅してあり、決して約束ではありません。驚いて私は彼女の方を向きました。「どうしてだめなの、おばちゃん？」

彼らは良い人たちだよ。」

彼女は裁縫用の眼鏡越しに私を見た。「ジャン・ルイズ、私の考えには何の疑いもありません」

彼らは良い人たちだということを中心に留めておいてください。しかし、彼らは私たちのような人種ではありません。」

ジェムは、「スカウト、彼らは陽気だということです。」と言いました。

「ヤップって何？」

「ああ、ダサイ。彼らはいじくりまわしたりするのが好きなんです。」

「まあ、私もそうだけどー」

「ふざけるなよ、ジャン・ルイズ」とアレクサンドラおばさんが言った。「問題は、ウォルター・カニンガムがピカピカになるまでゴシゴシ磨いてもいいし、靴を履かせて新しいスーツを着せてもいい、でも彼はジェムのようににはならないということだ。それに、その家族は何回も酒を飲んでいる
広い。フィンチ族の女性はそのような人には興味がありません。」

「おばさん、まだ9歳じゃないよ」とジェムが言いました。

「彼女は今それを学んだほうがいいのかもかもしれません。」

アレクサンドラおばさんが話していました。私は彼女が最後に足を下ろしたときのことを鮮明に思い出しました。理由は分かりませんでした。それは私がカルブルニアの家を訪問する計画に夢中になっていたときでした。私は好奇心と興味を持っていました。私は彼女の「仲間」になり、彼女がどのように暮らしているのか、彼女の友達が誰なのかを知りたかったのです。月の裏側も見なかったかも知れません。今回は戦術が異なりましたが、アレクサンドラおばさんの

目的は同じでした。おそらくこれが、彼女が私たちと一緒に住むようになった理由、つまり私たちを助けるためでした。私たちの友達を選んでください。私はできる限り彼女を遠ざけます。「もし彼らが良い人たちなら、なぜ私はウォルターに優しくできないのですか？」

「私は彼に優しくしないようにとは言いませんでした。あなたは彼に対して友好的かつ礼儀正しくあるべきです、あなたは誰に対しても親切でなければなりません、親愛なる。でも、家に招く必要はないよ。」

「もし彼が私たちと親戚だったらどうしますか、おばさん？」

「実際のところ、彼は私たちと血縁関係にないのですが、もし血縁関係にあったとしても、私の答えは同じでしょう。」

「おばさん」とジェムが声を上げた。「アティカスは、友達を選べるって言うけど、家族は選べない、そして、あなたが認めるか認めないかに関係なく、彼らはあなたと親戚であることに変わりはありません、そしてそれはあなたをそうさせます」そうしないとバカに見えるよ。」

「またしてもあなたのお父さんですね」とアレクサンドラ叔母さんは言いました。もし彼が彼女の替え玉だったら

一度連れ去られたいとは、彼がいない限りこの家に迎え入れられません。

仕事でアティカスに会いに来る。もうそれはそれです。」

以前は「絶対に違う」と言っていたのに、今度は「でも、ウォルターと遊びたいのに、おばさん、どうしてできないの？」と理由を述べた。

彼女は眼鏡を外して私を見つめました。「その理由をお話します」と彼女は言った。「なぜなら-

彼は――ゴミだ、だからあなたは彼と一緒に遊ぶことができないのです。私はあなたが彼のそばにいて、彼の習慣を身につけたり、主が知っていることを学んだりするつもりはありません。あなたはこのままでもお父さんにとって十分な問題なのよ。」

私だったらどうしたのか分かりませんが、ジェムが私を止めてくれました。彼は私の肩を掴み、腕を回し、激怒して泣き叫ぶ私を寝室に連れて行きました。

アティカスは私たちの声を聞いて、ドアの周りに頭を突き出しました。「大丈夫ですよ、先生」とジェムは言った。不機嫌そうに、「何でもないよ」アティカスは立ち去った。

「一口食べてください、スカウト。」ジェムはポケットを探り、トッツィーロールを取り出しました。キャンディーを顎の中で快適な塊にするのに数分かかりました。

ジェムはダンスの上の物を並べ替えていました。彼の髪は後ろに伸びていて、前に下がっていて、男性の髪のように見えることはあるのだろうかと思いました。もしかしたら、剃ってやり直したら、髪はきれいに元の位置に戻るかもしれません。彼の

眉毛はより重くなり、私は彼の体が新たに細くなったことに気づきました。

彼の身長はどんどん伸びていった。彼は周りを見回したとき、私がまた泣き始めると思ったに違いありません。なぜなら彼は「誰にも言わないなら何か見せなさい」と言ったからです。なんて言いました。彼はシャツのボタンを外し、恥ずかしそうに笑いました。

「それで、何？」

「え、見えないの？」

"うーん、ダメ。"

「まあ、髪の毛ですからね」

"どこ？"

"そこには。すぐそこに。"

彼は私を慰めてくれたので、素敵だと言いましたが、何も見えませんでした。

「本当によかったです、ジェム。」

「私の脇の下にもね」と彼は言った。「来年はフットボールをしに行くよ。スカウト、おばさんを怒らせないでね。」

彼が私におばちゃんを怒らせるなど言っていたのがつい昨日のことに思えた。

「彼女が女の子に慣れていないのは知っているでしょう」とジェムは言いました。「少なくとも、あなたのような女の子には慣れていません。彼女はあなたを女性にしようとしているのです。裁縫か何かを始められませんか？

「とんでもない。彼女は私のことを好きではありません、それがすべてです、そして私は気にしません。ジェム、私をやる気にさせたのは、彼女がウォルター・カニンガムをゴミだと呼んだことであり、アティカスにとって問題であると彼女が言ったことではありません。一度すべてを正したので、私が問題があるのかと彼に尋ねると、彼は、問題はそれほど多くなく、せいぜいいつでも理解できること、そして彼を煩わせることについて少しも心配する必要はないと言いました。いや、ウォルターだった――

あの子はゴミじゃないよ、ジェム。彼はイーウェルズとは違うよ。」

ジェムは靴を脱ぎ、ベッドに向かって足を振りました。彼は枕にもたれかかり、読書灯のスイッチを入れた。「何か知っていますか、スカウト？」

もうすべてわかりました。最近よく考えたんですが、やっとわかりました。世の中には4種類の人があります。私たちや近所の人たちのような普通の人々もいますし、森の中に住むカニンガム家のような人々もいます。

ゴミ捨て場のイーウェル族や黒人のような種類だ。」

「中国人や、その向こうのポールドウィン郡のケイジャン人はどうですか？」

「メイコム郡のことを言います。問題は、我々のような民族はカニンガム家が好きではなく、カニンガム家もイーウェル家を好きではなく、イーウェル家は有色人種を憎み軽蔑しているということだ。」

私はジェムに、もしそうなら、なぜカニンガム家のような人々で構成されたトムの陪審が、イーウェル夫妻を苦しめたトムを無罪にしなかったのかと言いました。」

ジェムは私の質問を幼児的だと言って無視した。

「ご存知のように、アティカスがラジオをいじっているときに足を叩いているのを見たことがあります。彼は私がこれまで見たどの男性よりもポット酒が大好きです—」と彼は言いました。

「それなら私たちもカニンガム家に似てるよ」と私は言った。「おばちゃん、どうしてそうなるのか分からない——」

「いいえ、最後まで言わせてください。それはそうですが、それでも私たちはどういうわけか違います。アティカスはこう言った

おばさんが家族をそんなにもてはやしているのは、私たちが持っているものはすべてだからだ

私たちの名前には一銭も関係ありません。」

「そうですね、ジェム、わかりません。アティカスは一度私に、このオールド・ファミリーに関するものほとんどは愚かなことだと言いました。なぜなら、どの人の家族も他の家族と同じくらい古いからです。私

その中には有色人種やイギリス人も含まれているのかと尋ねると、彼はそうだと答えた。」

「背景というのはオールド・ファミリーを意味するものではありません」とジェムは言った。「それはあなたの家族がどれだけ長く読んだり書いたりしてきたかだと思います。スカウト、私はこれを一生懸命勉強しました、そしてそれは

私が思いつく唯一の理由。フィンチ家がエジプトにいた頃、そのうちの一人が象形文字を一つか二つ覚えたに違いなく、息子に教えた。」ジェムは笑った。「叔母さんが、曾祖父が読み書きできることを誇りに思っているところを想像してみてください。

女性は自慢できる面白いものを選ぶのです。」

「そうですね、彼ができてよかったです、あるいは誰がアティカスと彼らに教えたのでしょうか、そしてもしアティカスが読めなかったら、あなたも私も困っていたでしょう。そういう背景があるとは思えないのですが、

ジェム。」

「それでは、カニンガム家が違う理由をどう説明しますか？ウォルター氏は自分の名前に署名することがほとんどできない、私は彼を見たことがある。彼らがそうしているよりも、私たちはただ長く読んだり書いたりしてきただけなので。」

「いいえ、誰もが学ばなければなりません、誰も何も知らずに生まれてきたわけではありません。ウォルターはできる限り賢いのですが、外に出てパパを手伝わなければならないので、時々足を引っ張られるだけです。彼には何の問題もありません。いや、ジェム、一種類しかないと思うよ
皆さん。皆さん。」

ジェムは振り返って枕を殴りました。彼が戻ってきたとき、彼の顔は曇っていました。彼は衰退の一途をたどっていたので、私は警戒を強めた。彼の眉は集まった。彼の口は細い線になった。彼はしばらく黙っていた。

「私もあなたの年齢のときはそう思っていました」と彼は最後に言いました。もし人間の種類が1つしかないとしたら、なぜお互いに仲良くできないのでしょうか？もし彼らが皆同じなら、なぜ彼らはわざわざお互いを軽蔑するのでしょうか？スカウト、私は何かを理解し始めているようだ。ブー・ラドリーがなぜずっと家に閉じこもっていたのか、少しずつわかってきた気がする…それは彼がここにいたいからだよ
内部。"

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第24章

カルプルニアは一番硬いでんぷん質のエプロンを着ていました。彼女はシャーロットの入ったトレイを運んでいた。彼女は開き戸まで後ずさりして、そっと押した。私は、彼女が重たい荷物を軽々と扱い、優雅に扱う姿に感心しました。アレクサンドラおばさんもそうだったと思います。なぜなら、彼女は今日カルプルニアに奉仕させていたからです。

8月も9月になろうとしていました。ディルは明日メリディアンに向けて出発する予定です。今日、彼はジェムと一緒にバーカーズ・エディに行っていました。ジェムは、誰もディルに泳ぎ方をわざわざ教えようとはしなかったことに怒りの驚きを持って気づいた。

ジェムが歩行として必要と考えたスキル。彼らは小川で午後二時間を過ごしましたが、裸で入ると言ったので私は来られませんでした。それで私は孤独な時間をカルプルニアとミス・モーディで分けました。

今日、アレクサンドラお婆さんと宣教サークルは家中で善戦していました。キッチンからは、グレース・メリウエザ一夫人が居間でムルナ家の惨めな生活について報告しているのが聞こえた。私にはそう聞こえた。

時間が来たら、それが何であれ、彼らは女性たちを小屋に入れました。彼らには家族という意識がなかった——それが叔母さんを悲しませるだろうと私は知っていた——彼らは13歳のときに子供たちをひどい試練にさらした。彼らはイチジクと耳虫を鳴らしながら這い、木の皮を噛み砕いて共同ポットに吐き出し、それに酔った。

その後、婦人たちは軽食をとるために休憩した。

食堂に入るべきか、外に出るべきか分かりませんでした。アレクサンドラお婆さんは私に、軽食を食べるために一緒に行くように言いました。私が会議のビジネス部分に出席する必要はない、退屈するだろう、と彼女は言いました。私はピンクのサンデードレス、靴、ペチコートを着ていましたが、もし何かをこぼしたら、カルプルニアは明日のためにもう一度私のドレスを洗わなければならないだろうと考えていました。この日は彼女にとって忙しい一日だった。私は外に出ることにした。

「手伝ってもいいですか、カル？」何か役に立ちたいと思い、私は尋ねました。

カルプルニアは戸口で立ち止まった。「あなたはその隅でネズミのようにじっとして、私が戻ってきたらトレイに積み込むのを手伝ってください。」と彼女は言いました。

ドアを開けると、女性たちの優しいざわめきの声がさらに大きくなった。「どうして、アレクサンドラ、あんなシャーロットは見たことがなかった…本当に素敵だった…こんなふうに胸を張ることは絶対にできない、絶対にできない…小さなデューベリーのことを誰が考えただろう？」タルト…カルプルニア?…誰が考えたんだろう…説教者の妻の…いや、そうだね、そしてもう一人のあの人はまだ歩いていない…と誰かが言ったね…」

彼らは静かになり、すべての料理が提供されたことがわかりました。カルプルニアが戻ってきて、母の重い銀の水差しをトレイに置きました。「このコーヒーピッチャー、ちょっと興味あるの」と彼女はつぶやいた。「最近作らないんだよ」

「持ち込みしてもいいですか？」

「気をつけて落とさないようにすれば。お嬢様がテーブルの端に置いてください」

アレクサンドラ。そのカップのもののそばに。彼女は注ぐつもりだ。」

カルプルニアがしたように、ドアに背中を押しつけようとしたが、ドアはびくともしなかった。彼女はニヤリと笑いながら、それを私に向けて開けてくれた。「重いから気をつけてね。見ないでください、こぼさないでください。」

私の旅は成功でした。アレクサンドラおばさんはにこやかに微笑みました。「一緒にいてください、ジャン・ルイーズ」と彼女は言いました。これは私に女性としての在り方を教えてくれる彼女のキャンペーンの一環でした。

すべてのサークルのホステスは、バプテストであろうと長老派であろうと、近所の人たちを軽食のために招待するのが通例であり、そのためにミス・レイチェル（裁判官としては素面だった）、ミス・モーディ、ミス・ステファニー・クロフォードの存在が説明された。

どちらかというと緊張して、私はミス・モーディの隣に座り、なぜ女性は帽子をかぶって通りを渡るのかと疑問に思いました。束縛された女性たちはいつも私を漠然とした不安と他の場所に行きたいという強い願望で満たしましたが、この感情こそが叔母の感情でした

アレクサンドラさんは自分のことを「甘やかされてる」と呼んだ。

女性たちは繊細なパステル プリントを着ていてクールでした。彼女たちのほとんどはたつぷりとパウダーを塗っていましたが、ルージングはしていませんでした。部屋にあった唯一の口紅はTangee Naturalでした。キューテックス ナチュラル 爪にはキラキラ輝いていましたが、若い女性の中にはローズをつけている人もいました。天国のような香りがしました。私は静かに座り、椅子の肘掛けをしっかりと握って手を征服し、誰かが私に話しかけるのを待ちました。

ミス・モーディの金の橋がきらめきました。「ジャン・ルイーズさん、とても着飾っていますね」と彼女は言いました。「あなたの花嫁は今日どこにいるのですか？」

「ドレスの下にね。」

冗談を言うつもりはなかったのですが、女性たちは笑ってしまいました。自分の間違いに気づいて頬が熱くなったが、ミス・モーディは重々しい表情で私を見つめた。私が冗談を言うつもりがない限り、彼女は決して私を笑わなかった。

突然の沈黙の中で、ステファニー・クロフォード先生が部屋の向こうから呼びかけました。「大きくなったら何になるの、ジャン・ルイーズ？」弁護士？

「いいえ、それについては考えていませんでした…」私は、ステファニー先生が話題を変えてくれたことに感謝しながら答えました。私は急いで自分の職業を選び始めました。

看護師？飛行士？"良い…"

「なぜ撃つのだ、弁護士になりたいと思っていたのに、すでに法廷に出廷し始めているのに。」

女性たちはまた笑った。「ステファニーはカードだよ」と誰かが言った。ステファニー先生は、「大人になって弁護士になりたくないですか?」とこのテーマを追求するよう勧められました。

ミス・モーディの手が私の手に触れたので、私は「いいえ、ただの女性です」と穏やかに答えました。

ミス・ステファニーは私を怪訝そうに見つめ、私が生意気なつもりはないと判断し、こう言いました。

もっと頻繁にドレスを着るようにしましょう。」

ミス・モーディの手は私の手にしっかりと握られ、私は何も言いませんでした。その暖かさは十分でした。

グレース・メリウェザー夫人が私の左側に座っていたので、彼女と話すのが礼儀だと感じました。

脅迫を受けている忠実なメソジストであるメリウェザー氏は、「アメージング・グレース、なんて優しい音だろう、私のような惨めな人間を救ってくれた…」と歌うことに個人的なことは何も考えていなかったようだが、それがメイコム夫人の一般的な意見だった。

メリウェザーは彼の酔いを覚まして、それなりに有益な市民にしてくれた。

というのは、確かにメリウェザー夫人はメイコムで最も敬虔な女性だったからである。私は彼女が興味のあるトピックを探しました。「今日の午後、みんなは何を勉強しましたか?」私と尋ねた。

「ああ、かわいそうなムルナスさんたち」と彼女は言い、立ち去った。他に必要な質問はいくつかあります。

メリウェザー夫人の大きな茶色の目は、彼女がいるときはいつも涙でいっぱいでした。

抑圧された者とみなされる。「J・グライムス・エヴェレット以外には誰もいないあのジャングルで暮らしています」と彼女は語った。「あの聖人J・グライムス以外の白人は彼らに近づかない」エベレット。」

メリウェザー夫人はオルガンのように声を奏でた。彼女が言ったすべての言葉は十分に受け止められました。

グライムス・エヴェレットは知っている。ご存知のように、教会が私にキャンプ場への旅行を与えてくれたとき、J・グライムズ・エヴェレットは私にこう言いました――

「彼はそこにいましたか、奥様? 私は思った――」

「休暇中で帰宅。J・グライムズ・エヴェレットは私にこう言いました。メリウェザー、あなた私たちがあそこで何と戦っているのか、何の概念もありません。」それは

彼が私に言ったこと。」

"はい奥様。"

「私は彼にこう言いました。「ミスター。「エベレット、」と私は言いました。「メイコム・アラバマ・メソジスト聖公会南教会の女性たちは、あなたを100パーセント支持しています。」それが私が彼に言ったことです。そしてご存知のとおり、私はその場で心に誓いました。私は自分にこう言いました、家に帰ったらムルーナスについての講座を開き、J・グライムズ・エヴェレットのメッセージをメイコムに届けようと、それが私がやっている事なのです。」

"はい奥様。"

メリウェザー夫人が首を振ると、彼女の黒いカールが揺れた。「ジャン・ルイズ、あなたは幸運な女の子ですね。あなたは、クリスチャンの町でクリスチャンの人々と一緒にクリスチャンホームに住んでいます。J・グライムズ・エヴェレットの土地には、罪と卑劣以外何もない。」

"はい奥様。"

「罪と汚らわしさ、それは何だったんだ、ガートルード？」メリウェザー夫人は隣に座っている女性のためにチャイムを鳴らした。"それか。まあ、私はいつも、許して忘れて、許して忘れてと言っています。教会がやるべきことは、彼女がこれからもその子供たちのためにクリスチャン生活を送れるよう手助けすることだ。男の何人かはそこに出て行って、その説教者に彼女を励ますように伝えるべきだ。」

「すみません、メリウェザー夫人」と私はさえぎりました。「皆さんはメイエラのことを話しているのですか？」
イーウェル？」

"5月- ?いや、子供よ。あのダーキーの妻。トム妻、トムー」

「ロビンソン、奥様。」

メリウェザー夫人は隣人のほうへ振り返った。「ガートルード、私が心から信じていることが一つあります」と彼女は続けた。そのままにしまえば

彼らは私たちが許していることを知っている、私たちがそれを忘れていることを知っている、そうすればすべてが吹き飛ぶでしょう以上。"

「ああ——夫人。メリウェザー」と私はもう一度さえぎった、「何が吹き飛ぶの？」

再び彼女は私の方を向いた。メリウェザー夫人は、子どものいない大人の一人で、子どもと話すときはいつもとは違う声のトーンを想定する必要があると感じていました。

「何もありません、ジャン・ルイズ」と彼女は堂々とした大広間で言った。

ただ不満だったが、今は落ち着いている。次の日もずっと不平不満を言っていた。

その裁判。」

メリウェザー夫人はファロー夫人に向かってこう言いました。彼らの口はここまで下がっています。一日が台無しになるだけ

そのうちの1つをキッチンに置くことです。私がソフィーに何と言ったか知っていますか、ガートルード？私は言いました、「ソフィー、あなたは今日では単にクリスチャンではありません。」イエス・キリストは決して不平や不平を言いながら歩き回ることはありませんでした』そしてそれが彼女にとって良いことだったのです。

彼女はその床から目を離して、「ノーム、ミズ・メリウェザー、イエス様は決して不平を言い回ったりはしませんでした」と言いました。ガートルード、あなたに言いますが、主の証しをする機会を決して逃してはなりません。」

私はフィンチズ ランディングの礼拝堂にあった古代の小さなオルガンを思い出しました。私がまだ小さかった頃、そして私が日中とても元気だったら、アティカスは指一本で曲を選ぶ間、私にふいごを鳴らせてくれました。最後の音は、それを維持するための空気がある限り長く残ります。メリウェザー夫人は空気がなくなりました、私は

ファロー夫人が落ち着いて話す間、彼女は判断し、補給していた。

ファロー夫人は、青白い目と細い足を持つ、立派な体格の女性でした。彼女

彼女はパーマをかけたウェーブをかけており、髪はきつめの灰色の巻き毛の塊だった。彼女はメイコムで2番目に敬虔な女性でした。彼女には、自分の言うことすべての前に柔らかい歯擦音を発するという奇妙な癖があった。

「グレースさん、私が先日ハトソン兄弟に言ったのと同じです。

「ハトソン兄弟、我々は負け戦、負け戦を戦っているようだ」と私は言った。私は言いました、「まあ、彼らには少しも関係ありません。」私たちは彼らを教育することができます

私たちは顔が青い、彼らからクリスチャンを排除するために倒れるまで努力することはできますが、この夜ベッドに安全な女性はいません。彼は私にこう言いました。ファロー、ここで何をしに来たのか分かりません。」ああ、それは確かに事実だと彼に言いました。」

メリウェザー夫人は賢明にうなずいた。彼女の声は、コーヒーカップのカチャカチャ音や、ごちそうをむしゃむしゃ食べる女性たちの柔らかな牛のような音の上で高く響きました。「ガートルード」と彼女は言った、「この町には善良だが間違った方向に導かれた人たちがいるといいます。それは良いが、見当違いだ。自分たちが正しいことをしていると思っているこの町の人々、つまり。今はまだ遠い

誰とは言いませんが、この町の彼らの中には、少し前まで自分たちが正しいことをしていると思っていた人たちがいたのですが、彼らがやったことは彼らを煽るだけでした。彼らがやったのはそれだけだ。

当時はそうするのが正しいことのように見えたかもしれない、きっと分からない、私はその分野に詳しくないが、不機嫌で…
不満で…私のソフィーがもっと頑張ってくれていたら教えてあげる私が彼女を手放したかった日。彼女の羊毛にはそれしか入
っていない

私が彼女を引き留める理由は、この不況が続いていて、彼女がお金とお金を必要としているからです。

彼女は毎週それを手に入れることができます。」

「彼の食べ物は喉に落ちないんですね？」

ミス・モーディがそう言いました。彼女の口の端には二本の細い線が現れていました。

彼女はコーヒークップを片膝の上に置き、私の隣に静かに座っていました。彼らがトムについて話すのをやめたとき、私は
ずっと前に会話の糸を失っていた。

ロビンソンの妻であり、フィンチズ・ランディングと川のことを考えることに満足していた。アレクサンドラおばさんはそれを
逆手に取りました。会議のビジネス部分は血が凍るようなもので、社交の時間は退屈なものでした。

「モーディ、あなたが何を言っているのか分からないと思います」とメリウェザー夫人は言いました。

「きっとそうだと思いますよ」とミス・モーディはすぐに言った。

彼女はそれ以上何も言わなかった。ミス・モーディが怒ったときの彼女の簡潔さは冷たかった。何かが彼女を深く怒らせ、灰
色の目は声と同じくらい冷たかった。夫人

メリウェザーは顔を赤らめ、私をちらっと見て、目をそらした。夫人の姿は見えなかった。

ファロー。

アレクサンドラおばさんはテーブルから立ち上がって、素早くさらに軽食を渡し、メリウェザー夫人とゲイツ夫人をき
ちんと活発な会話に引き込みました。パーキンス夫人とうまく道を進んでいると、アレクサンドラおばさんは後ずさりした。

彼女はミス・モーディに純粋な感謝の表情を向け、私は女性の世界に驚きました。ミス・モーディとアレクサンドラ叔母さん
は特別に親しかったわけではなかったが、ここで叔母さんが何かに対して無言で礼を言っていた。何のために、私は知りま
せんでした。アレクサンドラおばさんが、与えられた助けに感謝の気持ちを抱くほど十分に刺し貫かれる可能性があること
を知り、私は満足しました。それには何の疑いもありませんでした。私はすぐにこの世界に入らなければなりません。そこでは、
香りのよい女性たちが表面でゆっくりと揺れ、優しく扇ぎ、冷たい水を飲んでいました。

しかし、私は父の世界のほうがかつろげました。ヘック・テイト氏のような人は、あなたをからかうために無邪気な質問であな
たを罵にかけたわけではありません。あなたが何か愚かなことを言わない限り、ジェムでさえそれほど批判的ではありま
せんでした。女性たちは男性に対してかすかな恐怖を抱いているようで、彼らを心から承認するつもりはないようでした。で
も、私は彼らが好きでした。

どんなに悪口を言い、酒を飲んでも、彼らには何かがあった。

ギャンブルをしたり噛んだりした。どんなに選ばれなかったとしても、何かがあった

私が本能的に好きだった彼らについて…彼らはそうではなかった—

「偽善者たち、パーキンス夫人、生まれつきの偽善者よ」とメリウェザー夫人は言った。「少なくとも、ここでは私たちはそのような罪を背負っていません。そこにいる人々がそれらを設定しました

無料ですが、テーブルに「彼らがいる」という設定はありません。少なくとも私たちには、彼らに「はい、あなたは私たちと同じくらい優れていますが、私たちから離れてください」と言う欺瞞はありません。ここでは、あなたはあなたのやり方で生きてください、そして私たちは私たちのやり方で生きるだけ言います。私は、あの女性、ルーズベルト夫人は正気を失ったのだと思います—バーミンガムに来て彼らと一緒に座ろうとただけで、単純に正気を失ったのだと思います。もし私がバーミンガム市長だったら、そうするだろう—」

ええと、私たちはどちらもバーミンガム市長ではありませんでしたが、私は一日だけアラバマ州知事になりたかったと思いました。トム・ロビンソンをあまりにも早く去らせて、宣教師協会が息つく暇がないようにしていたのです。先日、カルブルニアはミス・レイチェルの料理人にトムの態度がいかにかにひどいかを話していたのですが、私がキッチンに入ってきたとき彼女は話しを止めませんでした。彼女は何もないと言いました、アティカス

彼にとって閉じ込められるのを楽にするためにできることは、捕虜収容所に連れて行かれる前に彼がアティカスに言った最後の言葉が「さようなら、ミスター」だったということだった。

フィンチ、今できることは何もないんだから、頑張っても無駄だよ。」カルブルニアさんによると、アティカスさんはトムを刑務所に連れて行った日、希望を捨てただけだと話していたという。

彼女は、アティカスが彼に物事を説明しようとした、そしてアティカスが彼を自由にするために最善を尽くしているので、希望を失わないように最善を尽くさなければならないと述べた。ミス・レイチェルの料理人はカルブルニアに、なぜアティカスは「はい、あなたは自由になります」と言ってそのままにできなかったのかと尋ねた。

—それはトムにとって大きな慰めになるようだった。カルブルニアは言った、「あなたは違うから」

法律に詳しい。家族と一緒にいると最初にわかるのは、何事にも明確な答えはないということです。フィンチさんは何も言えなかった

彼がそれがそうだということを確信していないとき。」

玄関のドアがバタンと閉まり、ホールでアティカスの足音が聞こえた。自動的に今何時だろうと思った。彼は家に帰る時間がほとんどなく、宣教師協会の日には暗くなるまでダウンタウンに留まることが多かった。

彼は戸口で立ち止まった。彼の手には帽子があり、顔は真っ白でした。

「すみません、皆さん」彼は言った。「会議をすぐに進めてください、私にさせないでください」

お邪魔。アレクサンドラ、ちょっとキッチンに来てもらえますか？カルブルニアを少し借りたいのですが」

彼は食堂を通らず、裏の廊下を通して、
裏口からキッチンに入りました。アレクサンドラおばさんと私は彼に会いました。の

ダイニングルームのドアが再び開き、ミス・モーディが私たちに加わりました。カルプルニアは半分だった
彼女の椅子から立ち上がった。

「カル」アティカスは言った、「ヘレン・ロビンソンの家に一緒に行ってほしいのですが――」

"どうしたの?"アレクサンドラおばさんは、父の表情を見て驚いて尋ねました。

顔。

「トムは死んだ。」

アレクサンドラおばさんは口に手を当てた。

「彼らは彼を撃った」とアティカスさんは語った。「彼は走っていました。それは彼らの練習中のことでした
期間。警察によれば、彼はただ盲目的にフェンスに突進し、よじ登り始めたという。彼らの目の前で――」

「彼らは彼を止めようとしなかったのですか?彼らは彼に何も警告しなかったのですか?」叔母
アレクサンドラの声は震えた。

「ああ、そうだ、警備員が彼に止めるように呼びかけた。彼らは空中に数発発砲し、その後殺害した。彼が柵を越えた瞬間に
彼らは彼を捕まえた。彼らは、もし彼に良いものが2つあればと言いました

腕さえあればなんとかなっただろう、彼はあんなに速く動いていたのだ。彼には17の弾痕があった。

彼らは彼をそれほど撃つ必要はなかった。カル、一緒に出てきてヘレンに伝えるのを手伝ってほしいの。」

「はい、先生」彼女はエプロンをいじりながらつぶやいた。ミス・モーディはカルプルニアへ行きました
そしてそれを解きました。

「これが最後の藁だよ、アティカス」とアレクサンドラおばさんが言った。

「それをどう見るかによって決まります」と彼は言った。「200人のうちの1人の黒人は、多かれ少なかれ何だったので
しょうか?彼らにとって彼はトムではなく、逃亡中の囚人だったのです。」

アティカスは冷蔵庫にもたれかかり、眼鏡を押し上げて目をこすった。

「我々にはとても良いチャンスがあった」と彼は言った。「私は彼に自分の考えを伝えましたが、正直に言うと、良いチャ
ンス以上のものがあるとは言えませんでした。トムは白に飽きたようだ

男性のチャンスを見逃さず、自分自身のチャンスを探ることを好みました。準備はいいですか、カル?」

「はい、フィンチさん。」

「それでは、行きましょう。」

アレクサンドラおばさんはカルプルニアの椅子に座り、顔に手を当てた。彼女はじっと座っていた。彼女はとても静かだったので、気を失ってしまうのではないかと思った。まるで階段を登ったばかりのようなミス・モーディの息遣いが聞こえ、ダイニングルームでは女性たちが楽しそうにおしゃべりをしていました。

アレクサンドラおばさんは泣いているのかと思ったが、顔から手を離すと泣いていなかった。彼女は疲れた様子だった。彼女は話しましたが、その声は平坦でした。

「モーディ、彼のやることすべてを肯定するとは言えませんが、彼は私の兄弟です。私はただこの状況がいつ終わるのか知りたいのです。」彼女の声は上がりました。「それは彼を引き裂きます。彼はそれをあまり表には出さないが、それは彼をズタズタに引き裂く。私が彼に会ったのは――
彼らは彼に他に何を望んでいますか、モーディ、他に何がありますか？

「誰が何を望んでいますか、アレクサンドラ？」ミス・モーディが尋ねた。

「つまり、この町のことです。自分たちでは怖くてできないことを、彼らは喜んで彼にやらせてくれる――そうすれば一銭も損するかもしれない。彼らは、自分たちが恐れていることをして彼が健康を害するのを喜んで許しているのです、彼らは――」

「静かにしてください、彼らに聞こえるでしょう」とミス・モーディは言いました。「このように考えたことはありますか、アレクサンドラ？メイコムがそれを知っているかどうかに関係なく、私たちは男性に支払うことができる最高の敬意を払っています。私たちは彼が正しいことをすると信じています。それはとても簡単です。」

"誰が？"アレクサンドラ叔母さんは、自分が12歳の甥と同じことをしているとは思いませんでした。

「フェアプレーは白人だけのものではないと主張するこの町の少数の人々。公正な裁判は私たちだけでなくすべての人のためであると主張する少数の人々。黒人を見て、そこにいるのは主の優しさだけだと考えるほどの謙虚さを持った一握りの人々だ。」ミス・モーディの昔のさわやかさが戻ってきていました。「背景を持つこの町の少数の人々、それが彼らなのです。」

もし私が注意していれば、ジェムの背景の定義にさらにスクラップを追加できたでしょうが、私は自分が震えていることに気づき、止めることができませんでした。私はエンフィールド刑務所農場を見たことがあり、アティカスは私に運動場を教えてくださいました。サイズでした
サッカー場の様子。

「その揺れを止めてください」とミス・モーディが命令したので、私は止まりました。「起きてください、アレクサンドラ、もう十分長い間彼らを放っておきました。」

アレクサンドラおばさんは立ち上がって、腰に沿ったさまざまな鯨の骨の隆起を滑らかにしました。

彼女はベルトからハンカチを外し、鼻を拭きました。彼女は髪をなでて、「見せてもいいですか？」と言いました。

「兆候ではありません」とミス・モーディは言いました。「また一緒にいるの、ジャン・ルイズ？」

"はい奥様。"

「それなら、女性たちに加わりましょう」と彼女は陰い表情で言った。

ミス・モーディがダイニングルームのドアを開けると、彼らの声は大きくなった。アレクサンドラおばさんが私の前にいて、道を通り抜けていくときに彼女の頭が上がるのが見えました。

ドア。

「ああ、パーキンスさん、もう少しコーヒーが必要です。」と彼女は言いました。受け取らせてください。」

「カルプルニアは数分間用事があるんだ、グレース」とミス・モーディが言った。「あのデューベリータルトをもう少しお届けしましょう。「釣りに行くのが好きな私のいとこが先日何をしたか聞いた？…」

そして彼らは、まるでカルプルニアを失った一時的な家庭内災害だけが唯一の後悔であるかのよう
に、食堂を周り、コーヒーカップを補充し、お菓子を配りながら、笑い合う女性たちの列を下って行っ
た。優しいハム音が再び始まりました。

「はい、パーキンス夫人、J・グライムズ・エヴェレットは殉教した聖人です。彼は…結婚する必要があった
ので、毎週土曜日の午後に…日が沈むとすぐに…美容院に走りました。彼は…鶏、病人でいっぱい箱と一
緒に寝ます。

ニワトリ、それがすべての始まりだったとフレッドは言います。フレッドが言うには…」

アレクサンドラおばさんは部屋の向こう側で私を見て微笑みました。彼女はテーブルの上に置かれたクッ
キーのトレイを見てうなずいた。慎重にトレイを持ち上げると、

私がメリウェザー夫人のところへ歩いていくのを眺めていました。私は最高の社内マナーを持って、
彼女に何か食べられるか尋ねた。

結局のところ、こんな時におばちゃんが女性になれるなら、私も女性になれるはずだ。

「そんなことはしないでください、スカウト。彼を後ろの階段に立たせてください。」

「ジェム、あなたはおかしいですか？...」

「私は彼を裏の階段に出すように言いました。」

ため息をつきながら、私はその小さな生き物をすくって一番下の段に置き、簡易ベッドに戻りました。9月になったが、涼しい気候は微塵もなく、私たちはまだバックスクリーンのポーチで寝ていた。稲妻虫はまだ存在し、夏の間ずっとスクリーンを打ち付けていた夜這いや飛んでいる昆虫は、秋になってもどこへも消えていませんでした。

ローリーポリが家の中に侵入してきました。私は、小さな害虫が階段やドアの下を這ったのではないかと推論しました。彼を見たとき、私は簡易ベッドの横の床に本を置いていました。生き物の体長は1インチ以下で、

触ると、丸まってきつい灰色のボールになります。

私はうつ伏せになって、手を伸ばして彼をつつきました。彼は丸まった。それから、安心したのか、彼はゆっくりと体を広げました。彼は百本の足で数インチ移動した

そして私は再び彼に触れました。彼は丸まった。眠くなってきたので、もう終わらせることにしました。ジェムが話したとき、私の手は彼の上に降りていました。

ジェムは顔をしかめた。おそらくそれは彼が経験していた段階の一部だったでしょう、そして私は急いで乗り越えてほしいと願った。確かに彼は動物に対して決して残酷ではありませんでしたが、昆虫の世界を受け入れるという彼の慈善活動を私は知りませんでした。

「なぜ彼を潰せなかったのか？」私は尋ねた。

「だって、気にならないから」とジェムは暗闇の中で答えた。彼は読書灯を消していた。

「あなたは今、ハエや蚊を殺さない段階にいると思いますよ」と私は言いました。「気が変わったら教えてください。ただし、一つだけ言っておきますが、私は座って赤い虫を傷つけないつもりはありません。」

「ああ、乾いてしまったよ」と彼は眠そうに答えた。

日に日に女の子らしくなっていったのは、私ではなくジェムでした。快適だったので、私は仰向けになって眠るのを待ちました。待っている間、ディルのことを思い出しました。彼は持っていた月の初めに、議事録を返すとの確約を残して私たちに残した

学校はお休みだったので、彼が夏をメイコムで過ごすのが好きだということは周囲の人たちに広く知られているのではないかと彼は推測した。レイチェル先生は私たちをタクシーで連れて行ってくれました

メイコム・ジャンクションでディルが見えなくなるまで窓から手を振ってくれた。彼は気を失っていたわけではありませんでした。

私は彼がいなくて寂しかったです。彼と過ごした最後の2日間は、

私たち、ジェムは彼に水泳を教えていました—

彼に水泳を教えた。私はすっかり目が覚めて、ディルが私に言ったことを思い出しました。

バーカーズ エディは、町から約1マイル離れたメリディアン ハイウェイから外れた未舗装の道路の終点にあります。幹線道路をコットンワゴンに乗せたり、通りすがりの自動運転手に乗るのは簡単です。小川までは歩いてすぐです。

交通量の少ない夕暮れ時にずっと歩いて家に帰るのは疲れるので、泳ぐ人はあまり遅くならないように注意します。

ディルによると、彼とジェムが見たとき、ちょうど高速道路に来たところだったという。

アティカスが彼らに向かってを走らせている。彼は彼らを見ていなかったように見えたので、二人は手を振りました。アティカスはついに速度を落とした。彼らが彼に追いついたとき、彼はこう言いました。しばらく家には帰らないよ。」カルプルニアは後部座席にいた。ジェムが抗議して懇願すると、アティカスは「わかった、に残っているなら一緒に来てもいいよ」と言った。

トム・ロビンソンの家に行く途中、アティカスは何が起こったのかを彼らに話した。

彼らは高速道路から外れ、ゴミ捨て場の脇をゆっくりと走り、イーウェル邸を通り過ぎ、狭い道を黒人の小屋まで下った。ディルさんによると、黒人の子供たちの群衆がトムの家の前庭でビー玉遊びをしていたという。アティカスはを停めてから降りた。カルプルニアは正門を通して彼の後を追った。

ディルは彼が子供の一人に「サム、お母さんはどこ？」と尋ねているのを聞いた。そしてサムが「彼女はシス・スティーブンスのところにいるんだよ、フィンチさん。」と言うのを聞いた。走って彼女を迎えに行こうか？」

ディルはアティカスが不安そうな顔をしていると言うと、彼はそうだと答え、サムは走り去った。「少年たち、ゲームを続けてください」とアティカスは子供たちに言いました。

小さな女の子が小屋のドアのところに来て、立ってアティカスを見つめていました。ディルは彼女の髪を言いましたそれは小さな硬いおさげの束で、それぞれが明るいリボンで終わっていました。彼女は満面の笑みを浮かべて私たちの父に向かって歩きましたが、彼女は小さすぎて階段をうまく進むことができませんでした。

ディルさんによると、アティカスさんは彼女のところに行き、帽子を脱いで指を差し出したという。彼女がそれを掴むと、彼は彼女を楽に階段から降ろした。それから彼は彼女をカルプルニアに与えました。

彼らがやって来たとき、サムは母親の後ろを小走りで追いかけていました。ディルさんによると、ヘレンさんは「『夕方』、フィンチさん、席はありませんか？」と言いました。しかし彼女はそれ以上何も言わなかった。

アティカスもそうではなかった。

「スカウト」とディルが言いました。「彼女は土の中に倒れてしまったのです。まるで大きな足を持った巨人がやって来て彼女を踏みしめたかのように、土の中に倒れ込んだ。「うん、ちょっと——」ディルの太い足が地面にぶつかった。「アリを踏むようなものだ。」

ディルさんによると、カルプルニアさんとアティカスさんはヘレンを抱き上げ、半分抱え、半分歩いて船室まで送ったという。彼らは長い間屋内に留まっていたが、アティカスは一人で出てきた。彼らがゴミ捨て場のそばをで戻ってきたとき、イーウェル家の何人かが彼らに向かって大声で叫んだが、ディルには彼らの言葉が聞き取れなかった。

メイコムはおそらく2日間、トムの死のニュースに興味を持っていました。情報が郡内に広がるには2日で十分でした。「聞いた？…違う？まあ、彼らは彼が稲妻を倒すのに適した状態で走っていたと言います…」メイコムにとって、トムの死は典型的でした。切って逃げる黒人の典型。黒人の典型

何の計画も持たず、将来のことも何も考えず、ただ目にした最初のチャンスに目をつぶって逃げるだけの精神だった。面白いことに、アティカス・フィンチが彼をスコットランドから自由に連れて行ってくれたかもしれないが、ちょっと待って——？いやいや。彼らがどのような状況かご存知でしょう。悪銭身に付かず。ロビンソン少年は合法的に結婚していて、自分を清潔に保ち、教会に通い、その他すべてのことを行っていたと言われていますが、結局のところ、その境界線は非常に薄いです。ニガーはいつもそれらの中に出てきます。

もう少し詳細を説明し、リスナーが自分のバージョンを順番に繰り返すことができれば、次の木曜日にメイコム・トリビューンが登場するまで話すことは何もありません。カラード・ニュースには短い訃報が載ったが、また、編集者。

BB アンダーウッド氏は最も苦しい時期にあり、誰が誰であるかを気にすることはできませんでした。

広告と購読をキャンセルしました。（しかし、メイコムはそうにはプレーしませんでした :Mr.

アンダーウッドは汗だくになるまで大声で叫び、書きたいことを何でも書くことができた。

今でも彼の広告と定期購読を獲得しています。もし彼が自分を馬鹿にしたかったのなら

アンダーウッド氏は裁判上の誤判については語らず、子供たちにも理解できるように書いていた。アンダーウッド氏は、立っていても、座っていても、逃げていても、障害者を殺すことは罪であると単純に考えた。彼はトムの死を猟師や子供たちによる無分別な鳴き鳥の虐殺に例え、メイコムはモンゴメリー・アドバタイザー紙に再掲載されるほど詩的な社説を書こうとしているのだと考えた。

アンダーウッド氏の社説を読みながら、どうしてこんなことになるのだろうかと思いました。センスレス
殺害—トムは死ぬまで正当な法的手続きを受けていた。彼は公然と裁判を受け、12人の善良な人々によ
って有罪判決を受けたが、それは真実だった。私の父が持っていた
彼のためにずっと戦った。するとアンダーウッド氏の意味が明らかになった。

アティカスはトム・ロビンソンを救うために人々を解放するために利用できるあらゆる手段を使ったが、
人々の心の秘密法廷では、アティカスには訴訟はなかった。トムは死んだ男だった
その瞬間、メイエラ・イーウェルが口を開いて叫びました。

イーウェルという名前を聞くと吐き気がした。メイコム氏は、トムの死に関するイーウェル氏の見解をすぐ
に聞き出し、それをイギリスのゴシップチャンネルであるステファニー・クロフォード嬢に伝えた。ステファ
ニー先生は、ジェムの前でアレクサンドラおばさんに、「ああ、彼は話を聞くのに十分な年
齢だよ。」と話しました。

イーウェル氏によれば、これで1件ダウン、あと2件ほどだという。ジェムは私に、怖がらないで、イーウェル氏は何よ
りも熱いガスだと言いました。ジェムはまた、私がアティカスに一言でも言ったら、何らかの方法で私が知ってい
ることをアティカスに知らせたら、ジェムはそうするだろうとも言いました。

個人的には二度と私に話しかけないでください。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第26章

学校が始まり、ラドリー・プレイスを通り過ぎる毎日の旅行も始まりました。ジェムは7年生で、グラマ
ースクールの建物を越えた高校に通っていました。私は現在3年生で、私たちの日課は大きく異なり、
朝ジェムと一緒に学校に行き、食事の時に会うだけでした。彼はフットボールをしに行ったが、痩せす
ぎて若すぎて、チームの水のバケツを運ぶことしかできなかった。彼はこれを熱心に行いました。ほ
とんど午後、彼はめったに家にいなかった

暗くなる前に。

ラドリー・プレイスはもう私を怖がらせることはなくなっていたが、それでも薄暗く、大きな檜の木の
下で寒く、そして魅力的ではなかった。ネイサン・ラドリー氏はまだできる
晴れた日に街へ行き帰りに歩いている姿が見られます。私たちはブーがそこにいるのを知っていました。

昔と同じ理由——まだ誰も彼が処刑されるのを見たことがなかった。私は、アーサー・ラドリーにとっては全くの苦痛であつたに違いない、分別ある世捨て人が望むような行為に加担したことに、古い場所を通り過ぎるとき、時々後悔の念を感じた。

雨戸から覗いて釣り終わりの挨拶をする子供たち

ポールは、夜に首輪の中でさまよっていますか？それでも私は思い出した。インディアンヘッドのペニー 2 枚、チューインガム、石鹼人形、錆びたメダル、壊れた時計とチェーン。ジェムはそれらをどこかにしまったに違いありません。ある午後、私は立ち止まってその木を見てみました。セメントパッチの周りで幹が膨らんでいました。パッチ自体が黄色くなってきました。

私たちは彼を何度か見たところでしたが、誰にとっても十分なスコアでした。

しかし、私は今でも前を通るたびに彼を探しました。いつか彼に会えるかもしれない。

私はそれがどうなるかを想像しました。それが起こったとき、私が来たとき、彼はただブランコに座っていたでしょう。「どうぞ、アーサーさん」私はまるで人生の午後、毎日そう言っているかのように言いました。「こんばんは、ジャン・レイズ」まるで私の人生の午後、いつもそう言っているかのように、彼はこう言いました。「とてもいい時期ですね、そうでしょう？」「はい、そうです、とても素敵ですね」と私は言い、続けました。

それはただの幻想でした。私たちは彼に会うことは決してないだろう。おそらく彼は月が沈む頃に外に出て、ステファニー・クロフォード嬢を見つめたのだろう。他の人を選んだつもりだったが、それは彼の仕事だった。彼は決して私たちを見つめることはありませんでした。

「またそれを始めるわけじゃないですよ？」ある夜、私が死ぬ前に一度ブー・ラドリーをよく見てみたいという漠然とした願望を表明したとき、アティカスは言った。「もしそうなら、今すぐ言います、やめてください。あなたをラドリーの敷地から追い出すには私は年をとりすぎています。それに、危険ですよ。撃たれるかもしれない。ネイサンさんは知っていますね

彼は目にしたすべての影を撃ちます。サイズ4の裸の足跡を残す影さえもです。

あなたが殺されなかったのは幸運でした。」

私はその場で黙りました。同時に私はアティカスに驚嘆した。これが最初でした

彼は、私たちが知っていると思っていたよりも、何かについてもっと多くのことを知っている私たちに知らせてくれました。

そしてそれは何年も前に起こりました。いや、去年の夏だけ、いや—昨年夏、その時は…時間が私に悪戯してきたんです。忘れずにジェムに尋ねなければなりません。

あまりにも多くのことが私たちに起こったが、ブー・ラドリーは私たちの恐れの中で最も小さかった。

アティカスさんは、他に何が起こるのか全く分からず、事態は沈静化する方法があり、十分な時間が経てば人々はトムのことを忘れるだろうと語った。

ロビンソンの存在は彼らの注目を集めるようになった。

おそらくアティカスの言うことは正しかったが、夏の出来事は密室の煙のように私たちに襲い掛かった。メイコムの大人は、ジェムや私とこの事件について決して話しませんでした。彼らはそのことについて子供たちと話し合ったようで、私たち二人ともアティカスを親にしないわけにはいかないという態度だったので、だから彼らの子供たちはアティカスにもかわからず私たちに親切にしてくれるに違いありません。子供たちは決してそうではなかったでしょう

もしクラスメイトたちが放っておかれていたら、ジェムと私はそれぞれ素早い、満足のいく殴り合いを数回繰り返して、問題を永久に終わらせていただろう。実際のところ、私たちは頭を高く上げて、それぞれ紳士と淑女であることを強いられました。ある意味、それはヘンリー・ラファイエット・デュボース夫人の時代に似ていましたが、彼女は叫びませんでした。しかし、私には決して理解できなかった奇妙なことが1つありました。アティカスには親としての欠点があるにもかかわらず、人々はいつものように、反対することなく、その年の州議会議員に彼を再選することに満足していたのです。人間はただ異常なだけだという結論に達し、撤退しました

と彼らから言われましたが、強制されるまでは考えたこともありませんでした。

ある日学校で強制されました。週に一度、時事問題の期間がありました。

各子供たちは新聞から項目を切り抜き、その内容を吸収することになっていました。

そしてそれをクラスの人々に発表します。この習慣はさまざまな悪を克服したと言われていました。仲間の前に立つことで良い姿勢が奨励され、子供に落ち着きを与えられました。短い話をすることで彼は言葉を意識するようになった。現在の出来事を知ることで彼の記憶力が強化されました。選ばれたことで、彼はグループに戻ることをこれまで以上に切望するようになった。

このアイデアは奥深いものでしたが、いつものようにメイコムではうまく機能しませんでした。そもそも、田舎の子供たちは新聞を読める人がほとんどいなかったので、時事問題の負担は町の子供たちが負うことになり、とにかく町の子供たちが注目を集めているのだとバスの子供たちにさらに深く納得させた。できる田舎の子供たちは、たいてい、「ザ・グリット・ペーパー」と呼ばれる出版物の切り抜きを持ってきました。

私たちの教師であるゲイツ先生の目には偽りのように映りました。子どもが『ザ・グリット・ペーパー』を暗唱したとき、なぜ彼女が眉をひそめたのかは私にはわかりませんでした。ある意味、それは手遊びが好きであること、昼食にシロップのようなビスケットを食べること、聖なるローラーであること、ロバを甘く歌うことを歌うこと、それをダンキーと発音すること、すべてに関連していました。国は教師に金を払ってやる気をなくさせた。

それでも、時事イベントが何であるかを知っている子供たちはほとんどいませんでした。牛とその習性について百歳を超えたチャック・リトル君は、ナチエルおじさんの物語の途中でミス・ゲイツに呼び止められた。

現在の出来事ではありません。それは広告です。」

しかし、セシル・ジェイコブスはそれが何であるかを知っていました。自分の番が来ると、彼は部屋の前に行き、「昔のヒトラー——」と言い始めた。

「アドルフ・ヒトラー、セシル」とミス・ゲイツが言った。「人は老人から始まることはありません。」

「はい、奥様」と彼は言いました。「老アドルフ・ヒトラーが起訴したのは——」

「セシルを迫害する……」

「いいえ、ゲイツさん、ここに書いてあります——まあとにかく、老いたアドルフ・ヒトラーが追いかけてきたのです」

ユダヤ人たちを刑務所に入れて全財産を取り上げ、誰一人国外には出させず、弱い者たちをすべて洗い流している

る
気を付けて、そして——」

「心の弱い人を洗う？」

「はい、奥様、ゲイツさん、彼らには体を洗うほどの分別がないと思います。愚か者が体を清潔に保つことができないとは思いません。まあとにかく、

ヒトラーもユダヤ人とのハーブを全員一斉検挙する計画を始めており、彼らが迷惑を掛けた場合に備えて登録したいと考えているが、私はこれは悪いことだと思っており、それが私の現在の出来事だ。」

「とてもよかった、セシル」とミス・ゲイツが言った。セシルは息を吐きながら席に戻った。

部屋の後ろから手が上がった。「彼はどうしてそんなことができるのでしょうか？」

「誰が何をやるの？」ゲイツさんは辛抱強く尋ねた。

「つまり、ヒトラーはどうやって大勢の人たちをあの檻の中に入れることができるのでしょうか。政府が彼を止めるようです」と手の持ち主は言った。

「ヒトラーは政府です」とゲイツ先生は言い、教育をダイナミックにする機会を捉えて黒板に向かった。彼女は「民主主義」を大きな文字で印刷しました。「民主主義です」と彼女は言った。「定義を持っている人はいますか？」

「私たちよ、誰かが言った。」

私は手を挙げ、かつてアティカスが私に言った古い選挙スローガンを思い出しました
について。

「それはどういう意味だと思いますか、ジャン・ルイーズ？」

「『すべての人に平等の権利、誰にも特別な特権はない』」と私は引用した。

「とてもよかったです、ジャン・ルイーズ、とてもよかったです」とミス・ゲイツは微笑んだ。「民主主義」の前に、彼女は「WE ARE A」と印刷しました。「さあ、クラスみんな、みんな『私たちは民主主義だ』と言ってください。」

私たちはそう言いました。するとゲイツ先生はこう言いました。「それがアメリカとドイツの違いです。私たちは民主主義国家ですが、ドイツは独裁国家です。独裁国家だ」と彼女は言った。「ここでは私たちは誰も迫害することを信じていません。迫害は偏見を持つ人々から起こります。偏見です」と彼女は注意深く言いました。「世界中にユダヤ人より優れた人間はいない。なぜヒトラーがそう考えないのか、私には謎だ。」

部屋の真ん中で、探究心のある人が言いました、「なぜ彼らはユダヤ人を好まないのでしょうか、ミス・ゲイツ？」

「分からないよ、ヘンリー。彼らは住んでいるあらゆる社会に貢献しており、そして何よりも彼らは信仰心が篤い人々です。ヒトラーは宗教を廃止しようとしているので、おそらくその理由で宗教を好まないのでしょうか。」

セシルが声を上げた。「そうですね、確かなことはわかりませんが」と彼は言いました。「彼らは両替か何かをすることになっていますが、それは彼らを迫害する理由にはなりません。彼らは白いですよ？」

ゲイツ先生は、「セシル、高校に行けば、ユダヤ人は歴史の初めから迫害され、さらには祖国を追われてきたことを学ぶでしょう。それは歴史上最も恐ろしい物語の一つです。算数の時間、

子供たち。"

私は算数があまり好きではなかったので、その期間は窓の外を眺めて過ごしました。私がアティカスのしかめっ面を見たのは、エルマー・デイビスがヒトラーに関する最新情報を話してくれた時だけだった。アティカスはラジオを切って「ふん！」と言ったものです。一度、なぜヒトラーに対してイライラしているのかと尋ねると、アティカスは「彼は狂人だからだ」と答えた。

これではダメだろう、と授業が合計を進めながら私は考えました。一人のマニアと何百万ものドイツ国民。私には、彼らがヒトラーを黙らせるのではなく、檻の中に閉じ込めたように見えました。他に何か問題があったので、私に聞いてみます。

それについて父。

私はそうしました、そして彼は私の質問には答えられないかもしれないと言いました。

答えを知っています。

「でも、ヒトラーを憎んでも大丈夫ですか？」

「そうではありません」と彼は言いました。「誰かを憎むのは良くないよ。」

「アティカス、」私は言った、「理解できないことがあります。ミス・ゲイツはそう言った

ひどい、ヒトラーが自分と同じことをしている、彼女はそのことで顔を真っ赤にしていた——」

「彼女ならそうしてくれると思うはずだ。」

"しかし-"

"はい?"

「何ともありません、先生。」私はその場を去りましたが、自分の頭の中で考えていることをアティカスに説明できるかどうかはわかりませんし、ただの感情であることを明確にできるかどうかはわかりませんでした。おそらくジェムが答えを提供してくれるでしょう。ジェムはアティカスよりも学校のことをよく理解していました。

ジェムは一日水運びをして疲れきっていた。彼のベッドのそばの床には、空の牛乳瓶を囲むように少なくとも12個のバナナの皮があった。「なんてことだ」

のために?"私は尋ねた。

「コーチは、再来年までに25ポンド増量できればプレーできると言っている」と彼は語った。「これが一番早い方法です。」

「全部捨てないと。ジェム、」と私は言いました。「何か聞きたいことがあります。」

"シュート。"彼は本を置き、足を伸ばした。

「ゲイツさんは素敵な女性ですよ？」

「確かに」とジェムは言った。「彼女の部屋にいるとき、私は彼女が好きでした。」

「彼女はヒトラーを大嫌いだ…」

"それのどこが悪いんだい?"

「そうですね、彼女は今日、彼がユダヤ人をそのように扱ったのがどれほどひどいことだったかについて続けました。

ジェム、誰かを迫害するのは正しくないですよ？つまり、誰かに対して意地悪な考えを持っているということですよ？」

「いいえ、スカウトさん。何があなたを食べているのですか？」

「ええと、その夜、ゲイツ先生が法廷から出てきて——彼女は私たちの目の前の階段を下りていました、あなたには彼女が見えていないはずですよ——彼女はステファニー・クロフォード先生と話していました。彼女が誰かが彼らに教訓を教える時期が来たと言っているのを聞いた、彼らは

彼らは自分自身をはるかに超えていて、次に彼らができることは私たちと結婚することだと考えています。ジェム、どうしてそんなにヒトラーを憎んでいるのに、ひっくり返って家の人たちに対して醜い態度を取ることができるのですか——」

ジェムは突然激怒した。彼はベッドから飛び降り、私の胸ぐらを掴んで揺さぶりました。「あの裁判所のことは二度と聞きたくありません、聞いていますか？聞こえますか？そのことについてはもう私に一言も言わないでくださいね？」

さあ、続けてください！

びっくりしすぎて泣いてしまいました。私はジェムの部屋から這い出て、過度の騒音で再び彼を怒らせないようにそっとドアを閉めました。突然疲れたので、アティカスが欲しかった。彼はその中にいた私はリビングルームに行き、彼の膝に乗ろうとしました。

アティカスは微笑んだ。「あなたはもうとても大きくなったので、私はあなたの一部を抱きしめるしかありません。」

彼は私を抱きしめてくれました。「スカウト」と彼は優しく言いました。「ジェムに落ち込まないでください。彼は最近は大変な時間を過ごしています。あそこであなたの声を聞きました。」

アティカスさんは、ジェムは何かを忘れようと懸命に努力していたが、実際にやっていたのは、十分な時間が経過するまで、それをしばらく保管していたことだったと語った。そうすれば彼はそうするだろう。それについて考えて物事を整理できるようになります。それについて考えることができたとき、ジェムは再び自分自身に戻るでしょう。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第27章

アティカスが言ったように、事態は一時的に落ち着いた。10月中旬までに、メイコムに住む2人に、日常とは異なる小さな出来事が2つだけ起こった。いいえ、3つのことがあり、それらは私たち、フィンチ家に直接関係していませんでしたが、ある意味で関係していました。

まず第一に、ボブ・イーウェル氏は数日で職を得たり失ったりしたため、おそらく1930年代の歴史の中でユニークな人物となったでしょう。彼は、怠惰のためにWPAから解雇されたと私が聞いた唯一の人物でした。 。たぶん

彼の短期間の名声の爆発は、より短期間の産業の爆発をもたらしましたが、彼の仕事は悪名が上がるまでしか続きませんでした。イーウェル氏は、自分自身がトム・ロビンソンと同じように忘れ去られていることに気づきました。その後、彼は毎週の定期的な福祉施設への出席を再開しました。

と言う曖昧なつぶやきの中で、小切手を受け取ったが、何の猶予もなく受け取った。

自分たちがこの町を管理していると思っている野郎どもが、正直な男が生計を立てることを許さないだろう。福祉婦人のルース・ジョーンズさんは、イーウェルさんがアティカスさんに仕事を奪われたことを公然と非難したと語った。彼女は動揺していたので、アティカスのオフィスまで歩いて行き、そのことを彼に話しました。アティカスはミス・ルースに、ボブ・イーウェルが望むなら心配しないでと言いました。

アティカスの仕事の「獲得」について話し合うために、彼はオフィスへの道を知っていました。

2番目の事はテイラー判事に起こった。テイラー判事は日曜日の夜に教会に通う人ではなく、テイラー夫人はそうでした。テイラー判事は大きな家で日曜日の夜の時間を一人で満喫し、教会の時間になると書斎にこもってボブ・テイラー（親戚ではないが、判事は誇りを持ってそう主張しただろう）の著作を読んでいたのを発見した。

ある日曜日の夜、フルーティーな比喩と華やかな言葉遣いに夢中になっていた、ジャッジ・テイラーの刺激的な引っ掻き音によってページから注意が奪われてしまった。「静かにして」と彼は、太った何の変哲もない犬、アン・テイラーに言った。それから彼は、自分が空の部屋に向かって話していることに気づきました。引っ掻く音が家の後ろから聞こえてきました。

テイラー判事はアンを外に出そうと裏玄関にしがみつき、網戸が勢いよく開いているのを発見した。家の隅にある影が彼の目に留まり、それが彼が訪問者について見たすべてでした。テイラー夫人が教会から帰宅すると、夫が椅子に座ってボブ・テイラーの著作に夢中になっており、膝の上に散弾銃を突きつけられていた。

3番目の出来事は、トムの未亡人であるヘレン・ロビンソンに起こりました。イーウェル氏がトム・ロビンソンと同じように忘れ去られたとすれば、トム・ロビンソンもブー・ラドリーと同じように忘れ去られた。しかし、雇用主であるリンク・ディース氏はトムを忘れていませんでした。リンク・ディース氏が作ったのは、

ヘレンの仕事。彼は本当に彼女を必要としていなかったが、事態の結末については本当に残念だと感じたと言った。ヘレンがいない間、誰が彼女の子供たちの世話をしていたのか、私は知りませんでした。カルプルニアさんは、ヘレンさんにとっては大変だったと語った。なぜなら、初めて公道を使おうとしたとき、ヘレンさんによれば、イーウェルさん夫妻は「彼女に向かってぶつかった」という。リンク・ディース氏は最終的に、ヘレンが毎朝間違った方向から仕事に来ているという印象を受け、その理由を彼女から引きずり出しました。「放っておいてください、リンクさん、お願いします」ヘレンは懇願した。「絶対にそうするよ」とリンク氏は言った。彼は彼女に来るように言いました

その日の午後、彼女が出かける前に彼の店で。彼女はそうし、リンク氏は店を閉めました。

帽子を頭にしっかりかぶって、ヘレンを家まで歩いて帰りました。彼は彼女に短い距離を歩いたちなみに、イーウェル家による。帰り道、リンクさんはクレイジーゲートに立ち寄りしました。

「ええと？」彼は電話した。「イーウェルと言います！」

いつもは子供たちでいっぱい窓は空いていた。

「あなた方全員がそこにいる、床に横たわっているのは知っています！さあ、聞いてください、ボブ・イーウェル。娘のヘレンがこの道を歩けなくなったことをもう一回聞いたら、日没までにあなたを刑務所に入れてやるわ！」リンクさんは埃の中に唾を吐き、歩いて家に帰りました。

ヘレンは翌朝仕事に行き、公道を使用しました。誰も彼女に襲いかかることはなかったが、イーウェルの家から数ヤード離れたところにいたとき、彼女は周りを見回すと、イーウェル氏が彼女の後ろを歩いているのが見えた。彼女は向きを変えて歩き続け、イーウェル氏はリンク・ディース氏の家に着くまで彼女の後ろで同じ距離を保った。全て

ヘレンは、家に向かう途中、後ろから汚い言葉をささやくような柔らかい声が聞こえたと言いました。すっかり怖くなった彼女は、店にいるリンク氏に電話をかけた。

彼の家からそれほど遠くないところにあります。リンク氏が店から出てくると、イーウェル氏が見えた

フェンスにもたれかかっている。イーウェル氏はこう言った。「リンク・ディース、私を泥のように見ないでください。私はあなたを飛び越えたわけではありません—」

「まず君にできることは、君の臭い死骸を私の敷地から追い出すことだ。

あなたはそれに寄りかかっています、そして私にはそれに新しいペンキを塗る余裕がありません。次にできることは、私の料理人に近づかないことだ、さもなければ襲撃にさらすぞ—」

「私は彼女に触れていません、リンク・ディース、そして黒人と一緒に行くつもりはありません！」

「彼女に触れる必要はありません、あなたがしなければならないのは彼女を怖がらせることだけです、そして、暴行があなたをしばらく閉じ込めておくのに十分でないなら、婦人法に参加させるから出て行きなさい」私の視力！私が本気で言っていないと思うなら、またあの娘を困らせてください！」

ヘレンがそれ以上の問題を報告していなかったので、イーウェル氏は明らかにそれが本気で言ったと思った。

「好きじゃない、アティカス、全然好きじゃない」というのがアレクサンドラおばさんの評価だった。

これらの出来事。「あの男は永遠の恨みを抱いているようだ」

誰もがその事件に関係していました。そういうのが恨みを晴らすということはわかるけど、なぜ彼が恨みを抱く必要があるのか理解できない——彼は法廷で自分の思いどおりにやったんだよね？」

「理解できた気がする」とアティカスは言った。「それは心の中で分かっているからかもしれない」

メイコムでは彼とメイエラの話を実際に信じている人はほとんどいなかった。彼は自分が英雄になれると思っていたが、その痛みに対して得られたのは…分かった、この黒人には有罪判決を下すが、あなたのゴミ捨て場に戻るとのことだけだった。彼は誰とでも付き合ったことがある
今、彼は満足しているはずだ。天気が変われば落ち着くだろう。」

「しかし、なぜ彼はジョン・テイラーの家に強盗をしようとするのでしょうか？彼は明らかにジョンが家にいることを知らなかったし、そうでなければ知らうともしなかつたろう。ジョンが日曜日の夜に見せるのはライトのみ
彼らは玄関にいて、巣穴に戻っています…」

「ボブ・イーウェルがああ画面をカットしたかどうかは分からないし、誰がやったのかも分からない」とアティカス氏は語った。「でも、推測はできるよ。私は彼が嘘つきであることを証明したが、ジョンは彼を愚か者に見せた。
イーウェルがスタンドにいる間ずっと、私はジョンを見て真顔を保つ勇気がなかった。ジョンは彼をまるで三本足の鶏か四角い卵であるかのように見ました。裁判官が陪審員に偏見を持たせようとしていないとは言わないでください」とアティカスは笑った。

10月末までに、私たちの生活は学校、遊び、勉強というおなじみの日課になりました。ジェムは忘れたいことを頭から消してしまったようで、クラスメートたちは慈悲深く父の奇行を忘れさせてくれました。セシル・ジェイコブスは一度、アティカスは急進主義者なのかと私に尋ねました。アティカスに聞いたら、アティカス

あまりにも面白かったので、むしろイライラしていましたが、彼は私を笑っているわけではないと言いました。彼は言った、「セシルに、私はコットン・トム・ヘフリンと同じくらい過激だと言いましたね。」

アレクサンドラおばさんは元気でした。モーディさんは一撃で宣教協会全体を沈黙させたに違いないありません。おばさんが再びそのねぐらを支配したからです。彼女の飲み物はさらに美味しくなりました。私はメリウェザー夫人の話聞いて、貧しいムルナス族の社会生活についてさらに詳しく学びました。彼らには家族意識がほとんどなく、部族全体が一つの大家族だったということです。子供には男性の数と同じだけの父親がいた

コミュニティには、女性の数と同じくらい多くの母親がいます。J・グライムス・エヴェレットはこの状況を変えるために全力を尽くしており、私たちの祈りを切実に必要としていました。

メイコムは再びそのものだった。去年も一昨年も全く同じ
わずか2つの小さな変更を加えただけです。まず、人々がストアから削除されました
窓や自動には、「NRA—WE DO OUR PART」と書かれたステッカーが貼られていました。私
アティカスにその理由を尋ねると、国家復興法が制定されているからだと言った。
死んだ。誰が殺したのかと尋ねると、9人の老人だと答えた。

メイコムにおける昨年以來2度目の交代は、国家的に重要なものではなかった。それまで、メイコムのハロウィーンはまったく組織化されていなかった

事件、出来事。子どもたちはそれぞれ自分のやりたいことをやり、必要に応じて他の子どもたちの助けを借りました。

軽量バギーを馬小屋の上に置くなど、移動するものは何でもありました。しかし、両親は昨年、ミスが平和になったとき、事態は行き過ぎだと考えた。

トゥッティとミス・フルッティは打ち砕かれた。

ミス・トゥッティとフルッティ・バーバーは乙女の姉妹であり、地下室を誇る唯一のメイコム邸と一緒に住んでいた。理容師の女性たちは次のように噂していた

彼らは共和党员で、1911年にアラバマ州クラントンから移住してきた。私たちには彼らのやり方が奇妙で、なぜ彼らが地下室を欲しがったのか誰も知らなかったが、彼らは地下室を欲しがって掘り、そして残りの人生を何世代もの地下室を追って過ごした。

そこから出た子供たち。

ミス・トゥッティとフルッティ（彼らの名前はサラとフランシス）は、ヤンキーとしての性格を除けば、二人とも聴覚障害者でした。ミス・トゥッティはそれを否定し、沈黙の世界に住んでいましたが、ミス・フルッティは何も見逃すつもりはなく、非常に巨大な耳のトランペットを使用したため、ジェムはそれがそれらの犬のビクトロラの拡声器であると宣言しました。

これらの事実を念頭に置き、ハロウィーンを目前に控えた一部の邪悪な子供たちは、

彼女は理髪師夫人たちが完全に眠りにつくのを待って、リビングルームに忍び込み（夜はラドリー夫妻以外誰も閉じ込められていた）、そこにある家具をすべてこっそり持ち去り、地下室に隠した。私はそのようなことに参加したことを否定します。

「聞こえたよ！」翌朝の明け方、その叫び声が理髪師さんの近所の人たちを目覚めさせた。「彼らがトラックをドアまで運転する音が聞こえました！馬のように踏み鳴らした。彼らは今頃ニューオーリンズにいるよ！」

ミス・トゥッティは、二日前に町を歩いて来た旅行中の毛皮売りたちが家具を盗んだと確信していた。「彼らは暗かったのです」と彼女は言った。「シリア人です。」

ヘック・テイト氏が呼び出された。彼はその地域を調査し、これは地元の仕事だと言うと述べた。ミス・フルッティはどこにでもいるメイコムの声を知っていると言いましたが、昨晚のその応接室にはメイコムの声はありませんでした。彼女の敷地中に彼らのRが転がっていたのです。位置を特定するにはブラッドハウンド以外の何ものを使用する必要はありません

トゥッティさんは、家具を持っていない、と主張したので、テートさんは道路から10マイル離れたところまで行き、郡の猟犬たちを捕まえて、道に並べなければならなかった。

テイト氏はミス・バーバーの正面玄関で彼らを始めさせたが、彼らがやったことはただそれだけだった。家の裏手に走り回り、地下室のドアに向かって吠える。テイトさんが

それらを三度動かし、ついに彼は真実を言い当てた。その日の昼前までに、メイコムでは裸足の子供は一人も見られず、誰も靴を脱ぐ者はいなかった。猟犬が戻ってくるまで靴を履いていました。

そこでメイコムの女性たちは、今年は状況が変わるだろうと言いました。高校講堂は開いていて、大人のためのページェントが開かれるだろう。リンゴを揺らしたり、タフィーを引っ張ったり、子供たちのために口バの尻尾をピンで留めたりしました。また、着用者が作成した最高のハロウィーン衣装には 25 セントの賞金も与えられます。

ジェムも私もうめきました。私たちが何かをしたというわけではなく、それが物事の原則でした。ジェムはとにかく自分はハロウィーンには年をとりすぎていると考えていた。彼は、高校の近くでそんなことをしても捕まるはずはないと言いました。ああ、アティカスなら連れて行ってくれるだろうと思った。

しかしすぐに、その夜のステージで私の奉仕が必要になることが分かりました。グレース・メリウェザー夫人は「メイコム郡 : アド・アストラ・ペル・アスペラ」というタイトルのオリジナル・コンテストを作曲しており、私はハムになることになっていました。彼女は、子供たちの何人かが郡の農産物を表す衣装を着たらかわいいだろうと考えました。セシル・ジェイコブスは、

牛; アグネス・ブーンは素敵なバタービーンを作り、別の子供はピーナッツを作り、メリウェザー夫人の想像力と子供たちの供給が尽きるまで、その作業は続きました。

2回のリハーサルから得た限り、私たちの唯一の義務は、メリウェザー夫人（作者だけでなくナレーターも）が私たちを識別したときにステージ左から入場することでした。彼女が「ポーク」と叫んだとき、それが私の合図でした。それから集まった一団はグランドフィナーレとして「メイコム郡、メイコム郡、私たちはあなたに忠実です」と歌い、メリウェザー夫人が州旗を持ってステージに上がりました。

私の衣装はあまり問題ありませんでした。地元の裁縫師であるクレンショー夫人は、メリウェザー夫人と同じくらい想像力を持っていました。クレンショー夫人は金網を取り出し、生ハムの形に曲げました。彼女はこれを茶色の布で覆い、オリジナルに似せてペイントしました。下に身を潜めることもできたし、

誰かがその装置を私の頭上に降ろすだろう。ほぼ膝のあたりまで来ました。クレンショー夫人は思慮深く私のためにのぞき穴を 2 つ残してくれました。彼女は良い仕事をしました。

ジェムは私のことを足の生えたハムにそっくりだと言いました。ただし、いくつか不快な点がありました。暑かったり、体にぴったりとフィットしていました。鼻がかゆくても搔くことができず、一度鼻の中に入ると一人では抜け出すことができませんでした。

ハロウィンが来たら、家族全員が私のパフォーマンスを観に来るだろうと思っていましたが、残念でした。アティカスは、できる限り機転を利かせて、今夜のミスコンに出場できるとは思っていなかった、全力で取り組んでいた、と言った。

モンゴメリーに1週間滞在していて、その日の午後遅くに帰宅していました。彼は、私が頼めばジェムが私をエスコートしてくれるかもしれないと思ったのです。

アレクサンドラおばさんは、部屋の飾り付けをしていたので、早く寝なければいけないと言いました。午後中ずっとステージを歩き続けて疲れきっていたので、彼女は言葉の途中で立ち止まった。彼女は口を閉じ、何か言おうと口を開いたが、言葉が出なかった。

来た。

「どうしたの、おばちゃん？」私は尋ねた。

「ああ、何でもない、何でもない、誰かが私の墓の上を歩いてきただけよ」と彼女は言った。彼女は、彼女に不安を与えたものをすべて自分から遠ざけました。

リビングルームで家族に下見をするよう提案しました。そこでジェムは私を衣装に押し込み、リビングルームのドアに立って、メリウェザー夫人がするのとまったく同じように「ポーク」と叫び、私は中へ行進しました。

アレクサンドラは喜んでいました。

私はキッチンでカルブルニアのために自分の役割を繰り返しました、そして彼女は私が素晴らしいと言った。私はミス・モーディに案内するために通りの向かい側に行きたかったが、ジェムはどうせミス・コンテストに行くだろうと言った。

その後、彼らが行くか行かないかは問題ではありませんでした。ジェムは私を連れて行ってくれると言った。

こうして私たちの最長の旅が始まりました。

10月最終日には異常に暖かな天気でした。ジャケットも必要ありませんでした。風はますます強くなり、ジェムは私たちが家に着く前に雨が降るかもしれないと言いました。月はありませんでした。角の街灯が鋭く映る

ラドリー家に影が。ジェムが静かに笑うのが聞こえました。「きっと誰も気にしないよ今夜は彼らだ」と彼は言った。ジェムは私のハムのコスチュームを持ち、持ちづらかったのでかなりぎこちなく運んでいました。私は彼がそうするのは勇敢だと思った。

「でも、怖い場所ですよ？」私は言いました。「ブーは誰かを傷つけるつもりはありませんが、あなたが一緒にいてくれて本当にうれしいです。」「アティカスが君を一人で校舎に行かせてくれなかったことは知っているだろう」とジェムは言った。

「理由はわかりませんが、角を曲がったところ、庭を渡ったところにあります。」

「あの庭は、小さな女の子たちが夜に横切るにはとても長い場所だよ」とジェムはからかった。

「ヘイトは怖くないの？」

私たちは笑いました。ヘイント、熱い蒸気、呪文、秘密の兆候は、私たちの年月とともに日の出とともに霧のように消えていきました。「あの古いものは何だったんだろう」とジェムは言った。道路から離れて、息を吸わないでください。」

「もうやめなさい」と私は言いました。私たちはRadley Placeの前にいました。

ジェムは「ブーは家にいてはいけません。聞く。」

私たちの頭上の暗闇の中で、孤独な嘲笑者が、自分が誰の木に座しているのかさえも知らずに、ヒマワリ鳥の甲高いキー、キーという鳴き声から、ルリカケスの怒りっぽい鳴き声、そして貧しい人の悲しい嘆きまで、至福に自分のレパートリーを注ぎ出しました。意志、意志が貧しい、意志が貧しい。

角を曲がったとき、道路に生えている根につまずいてしまいました。ジェムは私を助けようとしたが、彼がしたのは私のコスチュームを埃の中に落とすだけだった。それでも私は転ばなかったので、すぐにまた出発しました。

私たちは道を外れて校庭に入った。真っ暗でした。

「ジェム、どうして私たちがどこにいるのかわかるの？」数歩進んだところで私は尋ねた。

「涼しい場所を通っているのです、大きな榎の木の下にいます。」

今は気をつけて、二度と転ばないようにね。」

私たちは慎重な足取りに減速し、木にぶつからないように手探りで進みました。その木は一本の古い榎の木でした。二人の子供は幹の周りに手を伸ばして手に触れることはできませんでした。そこは教師や彼らのスパイからは遠く離れていました。

そして好奇心旺盛な隣人たち :そこはラドリーの敷地の近くだったが、ラドリー家はそうではなかった
好奇心旺盛。その枝の下の小さな土の部分は、多くの戦いとこっそりのくだらないゲームで固く詰まっていた。

高校の講堂の明かりが遠くで輝いていたが、
どちらかといえば、私たちが盲目にしました。「前を見ないでください、スカウト」とジェムは言った。「地面を見ていれば
転ばないよ。」

「懐中電灯を持って来るべきだったね、ジェム。」

「こんなに暗いとは知りませんでした。最初はこんなに暗くなるとは思わなかった
夕方。曇りだからね。ただし、しばらくは続きます。」

誰かが私たちに飛びかかってきました。

"全能の神！"ジェムは叫んだ。

光の輪が私たちの顔に現れ、セシル・ジェイコブスはその後ろで大喜びで飛び跳ねた。「はあ、ガッチャ！」彼は金
切り声を上げた。「こっちに来ると思ってたよ！」

「ここで一人で何をしているんだい？」ブー・ラドリーは怖くないの？」

セシルは両親と一緒に安全に講堂まで乗って、私たちには会わなかったのですが、
彼がここまで冒険したのは、私たちが必ず来ることをよく知っていたからだ。しかし、彼はフィンチ氏が私たち
と一緒にいるだろうと思っていました。

「くそ、角を曲がったところにあるけど、大したことはないよ」とジェムが言った。「行くのが怖い人はいない
角を曲がったところにある？」しかし、セシルがかなり優れていたことは認めざるを得ませんでした。彼は持っていた
私たちに恐怖を与えたとき、彼はそれを校舎中に伝えることができました、それは彼の特権でした。

「ねえ、今夜は牛じゃないの？」と私は言った。衣装はどこですか？」

「ステージの後ろにあります」と彼は言いました。"夫人。メリウェザーは、コンテストはしばらく開催されないと
言う。あなたは私、スカウト、そして私によってステージの後ろに置くことができます

私たちは残りの者たちと一緒に行くことができます。」

これは素晴らしいアイデアだとジェムは思いました。彼はまた、セシルと私が一緒にいるのは良いことだと思っていま
した。そうすれば、ジェムは自分の人々と一緒に行動することになる
年。

私たちが講堂に着くと、アティカスとアティカスを除いて町全体がそこにいた。
飾りつけで疲れ果てた女性たち、いつものはぐれ者や引きこもりの人々。たいていの

郡はそこにあるようだった:ホールは洗練された田舎でいっぱいだった人々。高校の校舎には広い階下廊下がありました。人々は両側に設置されたブースの周りをうろうろしていました。

「ああ、ジェム。お金を忘れたんです」と彼らを見てため息をつきました。

「アティカスはそうしなかった」とジェムは言った。「これは30セントです。6つのことができます。またね後でね。」

「わかりました」と私は言い、30セントとセシルにとても満足した。私はセシルと一緒に講堂の前まで行き、片側のドアを通して舞台裏へ行きました。メリウエザー夫人が立っていたので、私はハムの着ぐるみを脱いで急いで出発しました。

席の最前列前の演台で、直前になって狂ったように台本を変更した。

「お金はいくらもらったんですか？」セシルに聞いてみた。セシルも30セント持っていました。私たちが平等にしました。私たちはハウス・オブ・ホラーズで最初のニッケルを無駄にしましたが、まったく怖くありませんでした。私たちは黒い7年生の部屋に入り、一時的に住んでいたグールに案内され、人間の構成部品であるとされるいくつかの物体に触れさせられました。受け皿の上の皮をむいたブドウ2粒に触れたとき、「これが彼の目だ」と言われました。「これが彼の心臓だ」生のレバーのような感触だった。「これが彼の内臓です」と言われて、私たちの手は冷たいスパゲッティの皿に突っ込まれました。

セシルと私はいくつかのブースを訪れました。私たちはそれぞれ、テイラー判事夫人の手作りの神酒を一袋買いました。私はリンゴを買いに行きたかったが、セシルはそれは不衛生だと言いました。

彼の母親は、同じ浴槽に入っているのに、全員の頭から何かを受け取るかもしれないと言った。「今、町の周りには捕まえられるものは何もないよ」私は抗議した。でもセシル

彼の母親は、人の後に食べるのは不衛生だと言いました。後でアレクサンドラおばさんにこのことについて尋ねると、そのような考えを持つ人は通常、登山者。

私たちがタフィーの塊を買おうとしていたとき、メリウエザー夫人のランナーが現れて、準備をする時間だ、舞台裏に行くように私たちに言いました。講堂は人でいっぱいだった。メイコム郡高校のバンドがステージの下の前に集まっていた。ステージのフットライトが点灯し、赤いベルベットのカーテンがその後ろで走り回る音で波打ち、波打った。

舞台裏で、セシルと私は、狭い廊下が人でいっぱいであることに気づきました。

手作りの三角帽子、南軍の帽子、スペイン系アメリカ人の戦争帽子、第二次世界大戦のヘルメットなど。さまざまな農業企業に扮した子どもたちが賑わう一つの小さな窓の周り。

「誰かが私の衣装を壊したんだ」私は狼狽して叫びました。メリウェザー夫人は私に駆け寄り、金網の形を変えて私を中に押し込みました。

「大丈夫ですか、スカウト？」セシルは尋ねた。「あなたはとても遠いように聞こえます、まるであなたがそうであったように丘の向こう側にある。」

「もう近くに聞こえませんね」と私は言いました。

バンドが国歌を演奏すると、聴衆が立ち上がるのが聞こえました。そうしてバスドラが鳴った。メリウェザー夫人は楽団の横の演台の後ろに陣取り、「メイコム郡アド・アストラ・ペル・アスペラ」と言いました。バスドラムが再び鳴り響いた。「つまり、泥から星までという意味です」とメリウェザー夫人は素朴な要素を通訳しながら言った。彼女は、私にはそれが「コンテストだ」と不必要に思えたと言った。

「彼女が言わなかったら、彼らはそれが何なのか分からなかったでしょうね」とセシルがささやいたが、すぐに黙った。

「町全体がそれを知っています」と私は息を呑んだ。

「でも、田舎の人たちがやって来たんだ」とセシルは言った。

「あそこでは静かにしていなさい」と男の声が命令し、私たちは沈黙した。

メリウェザー夫人が言葉を発するたびにバスドラがドーンと鳴り響いた。彼女は、メイコム郡が州よりも古いこと、この郡がミシシッピ州とアラバマ準州の一部であること、原生林に足を踏み入れた最初の白人は検認判事の曾祖父であり、5回も罷免されなかったが、一度も罷免されなかったことなどについて、悲しそうに唱えた。またまた聞いた。そこへ恐れ知らずの大佐がやって来た

郡名はメイコムにちなんで名付けられた。

アンドリュー・ジャクソンは彼を権威ある地位に任命し、大佐に任命した。

メイコムの見当違いの自信と鈍い方向感覚がもたらした

クリーク・インディアン戦争で彼と一緒に乗ったすべての人にとっては災難でした。メイコム大佐はこの地域を民主主義にとって安全なものにするための努力を粘り強く続けたが、彼の最初の作戦が最後の作戦となった。友好的なインド人ランナーから伝えられた彼の命令は、南へ移動することであった。木を見て地衣類からどちらの方向に進むかを確認した後、

彼は南向きで、あえて彼を正そうとした部下たちの口を一切聞かなかった。

メイコム大佐は敵を敗走させるための目的を持った旅に出発し、北西の原始林で軍隊を巻き込んだ。

最終的には内陸に移動してきた入植者によって救出された。

メリウェザー夫人はメイコム大佐の功績を30分間説明した。膝を曲げれば衣装の下に押し込めることに気づきました

そして多かれ少なかれ座ります。私は座って、メリウェザー夫人のドローンとバスドラムのドーンと響く音を聞いていると、すぐにぐっすり眠ってしまいました。

後に彼らは、メリウェザー夫人がグランドフィナーレに全力を尽くしていたと語った。

彼女は、松の木とバタービーンズが合図とともに入ってくることから生まれた自信をもって、「ポーク」と鳴いたのです。彼女は数秒待ってから、「ポーク？」と呼びました。

何も実現しなかったとき、彼女は「豚肉！」と叫びました。

寝言で彼女の声を聞いたか、ディキシーを演奏するバンドの音が私を目覚めさせたに違いありませんが、私が入場を決めたのは、メリウェザー夫人が州旗を掲げて意気揚々とステージに上がったときでした。選択は間違っています: 追いついたほうが良いと思いました

残りは。

後で彼らが私に語ったところによると、テイラー判事は講堂の裏に出て、そこに立って膝を激しく叩きながら、テイラー夫人がコップ一杯の水と錠剤を持ってきたという。

メリウェザー夫人はヒット作を出したようで、みんなが大歓声を上げていましたが、舞台裏で私を捕まえて、私が彼女のコンテストを台無しにしてしまったと言いました。彼女は私をひどい気分にはさせましたが、ジェムが私を迎えに来たとき、彼は同情的でした。彼は、座っている場所からは私の衣装があまり見えなかったと言いました。私が衣装の下で気分が悪いとどうやって彼が判断したのか分かりませんが、彼は私が大丈夫だった、少し遅れて到着しただけ、それだけだと言いました。ジェムは、物事がうまくいかないときに正しい気分にはさせるという点では、アティカスとほぼ同じくらい上手になってきました。ほとんど、ジェムですら私を行かせることはできなかった

その群衆の中を通り抜けて、彼は開演まで私と一緒に舞台裏で待つことに同意した。

聴衆は去った。

「それを脱ぎたいのですか、スカウト？」彼は尋ねた。

「まあ、このままにしておきます」と私は言いました。悔しさをその下に隠すことができました。

「みんな、で家まで帰りたい？」誰かが尋ねた。

「いえ、ありがとうございます」とジェムが言うのが聞こえました。「ちょっと歩いただけだよ。」

「雨に気をつけてね」と声がした。「さらに良いのは、ヘイトたちに気をつけるようにしておくことだ」
スカウト。

「もう人はほとんど残っていないよ」とジェムは私に語った。「さあ行こう。」

私たちは講堂を通過して廊下に出て、階段を下りました。まだだった

黒暗い。残りののは建物の反対側に駐していましたが、ヘッドライトはほとんど役に立ちませんでした。「彼らの何人かが私たちの方向に向かって行っていたら、私たちはもっとよく見えるのに」とジェムは言いました。「スカウトよ、あなたの飛節をつかんでおこう。バランスを崩す可能性があります。」

「ちゃんと見えてますよ。」

「そうですね、でもバランスを崩すかもしれませんよ」私は頭に軽い圧力を感じたので、ジェムがハムの端を掴んだのだと思いました。「まいったよ？」

"うん。"

私たちは足元を確認しようと努めながら、真っ暗な校庭を横切り始めた。「ジェム、靴を忘れました、ステージの後ろに戻ってきました。」と私は言いました。

「それでは、取りに行きましょう。」しかし、私たちが振り返ると、講堂の照明が消えました。

「明日には手に入るよ」と彼は言った。

「でも、明日は日曜日だよ」ジェムが私を家に帰そうとしたとき、私は抗議した。

「用務員さんに入れてもらえますか…スカウト？」

「ん？」

"何もない。"

ジェムは長い間それを始めていませんでした。彼は何を考えているのだろうかと思いました。彼は言いたいときに、おそらく私たちが家に帰ったときに私に言うでしょう。彼の指が私の衣装の上部を強く押しているのを感じました、どうやら強すぎるようでした。私は首を振った。「ジェム、そんなことはしないよ」

一」

「ちょっと待って、スカウト」彼は私をつねりながら言った。

私たちは黙って歩いて行きました。「もう時間だよ」と私は言った。「何を考えているの？」振り向いて彼を見ましたが、輪郭はほとんど見えませんでした。

「何か聞こえた気がした」と彼は言った。「ちょっと止めてください。」

私たちはやめました。

「何か聞こえますか？」彼は尋ねた。

"いいえ。"

5歩も進んでいないうちに、彼は再び私を止めさせました。

「ジェム、私を怖がらせようとしているの？私が年をとりすぎていることは知っていますよね——」

「静かにしてください」と彼は言いました、そして私は彼が冗談ではないことを知っていました。

夜はまだ静まっていた。私の隣で彼の息づかいが簡単に聞こえました。時折、素足を突く風が吹いていたが、約束された風の強い夜が残っているだけだった。それは雷雨の前の静けさでした。私達は聞きました。

「ちょうどそのとき、老犬の音が聞こえました」と私は言いました。

「そんなことはないよ」とジェムは答えた。「歩いているときは聞こえますが、立ち止まると聞こえません。」

「私の衣装がかさかさ音を立てるのが聞こえますね。ああ、ちょうどハロウィンだったので……」

ジェムというよりは、私が自分を納得させるためにそう言ったのですが、確かに、歩き始めたとき、彼が何を言っているのかが聞こえました。

それは私の衣装ではありませんでした。

「ただのセシルじいさんだよ」とジェムが今言った。「彼は二度と私たちを捕まえることはないだろう。彼に私たちが急いでいると思わせないようにしましょう。」

私たちは速度をかなり遅くしました。私はジェムに、セシルがこの暗闇の中でどうやって私たちを追いかけることができるのか尋ねました。

まるで後ろからぶつかるような感じで私に。

「見えますよ、スカウト」とジェムは言った。

"どうやって？あなたが見えない。"

「あなたの脂肪の縞模様が現れています。クレンシヨ—夫人はその一部を絵に描いた

フットライトの下で目立つように光沢のあるもの。私にはあなたのことがよく見えます、そしてセシルも距離を保つのに十分なほどよく見えると思います。」

私はセシルに、彼が私たちの後ろにいることを知っていて、彼を迎える準備ができていることを示したいと思います。

「セシル・ジェイコブスはすごい濡れたヘエンだ！」私は振り返って突然叫びました。

私たちはやめました。遠くから跳ね返る彼以外の認識はなかった

校舎の壁。

「私が彼を捕まえるよ」とジェムは言った。"おい！"

ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、と校舎の壁に答えた。セシルが抱くのとは違った

とても長い間外出していた。彼は一度ジョークを言うと、それを何度も繰り返しました。私たちはすでに飛びかかって
いるはずですが。ジェムは私に再び停止するよう合図した。

彼は静かに言いました、「スカウト、それを脱いでもらえますか？」

「そうと思いますが、その下には何も着ていません。」

「あなたのドレスをここに持ってきました。」

「暗いところでは履けない。」

「分かった、気にしないで」と彼は言った。

「ジェム、怖い？」

"いいえ。もうすぐ木に近づいていると思います。そこから数ヤードで、我々はそこに着くだろう
道。そうすれば街灯が見えますよ。」ジェムは、ゆっくりとした、平坦なトーンのない声で話していました。彼はいつ
までセシル神話を続けようとするのだろうかと思った。

「ジェム、私たちは歌うべきだと思いますか？」

"いいえ。もう一度本当に静かにしてください、スカウト。」

私たちはペースを上げていませんでした。ジェムも私と同じように、つま先をつまずいたり、石につまずいたり、その他の不
便をせずに速く歩くのは難しく、私は裸足だったということを知っていました。もしかしたら、風が木々をそよぐのかもしれ
ません。しかし、風はなく、大きな榎の木以外には木もありませんでした。

私たちの仲間は、まるで重い靴を履いているかのように足を引きずって足を引きずりました。誰が着ても分厚い綿のズボン
を履いていた。木々がざわめいているのだと思ったのは、歩かたびに綿と綿がふわふわと揺れる音だった。

足の下が冷たくなるのを感じ、大きな榎の木の近くにいることがわかりました。ジェムが私の頭を押さえた。私たち
は立ち止まって耳を傾けました。

今回もシャッフルフットは止まりませんでした。彼のズボンが静かに、そして着実に揺れた。それから彼らは立ち止ま
りました。彼は子供を持たずに走って私たちに向かって走っていました
ステップ。

「走れ、スカウト！走る！走る！」ジェムは叫びました。

大きな一歩を踏み出すと、自分がよろめいていることに気づきました。腕は役に立たず、暗闇の中でバランスを保つこ
とができませんでした。

「ジェム、ジェム、助けてジェム！」

何かが私の周りの金網を押つぶしました。金属が金属で裂けて転んでしまいました

地面に倒れ込み、できるかぎり転がりながら、もがきながら鉄条網の牢獄から逃げ出した。

近くのどこかから、もみ合う音、蹴る音、靴と肉が土や根をこする音が聞こえてきた。誰かが私に向かって転がり、私はジェムを感じました。彼は稲妻のように起き上がって私を引っ張ってくれましたが、私の頭と肩は自由でしたが、私はあまりにも絡まってしまい、あまり遠くに行くことができませんでした。

もうすぐ道路に差し掛かるというところで、ジェムの手が私から離れるのを感じ、ジェムが後ろ向きに地面に倒れ込むのを感じた。さらにもみ合うと、鈍いバリバリという音が聞こえた。そしてジェムは叫びました。

私はジェムの叫び声の方向に走り、たるんだ男性のお腹に沈み込みました。飼い主は「うわー！」と言いました。そして私の腕を掴もうとしましたが、腕はしっかりと固定されていました。お腹は柔らかかったですが、腕は鋼のようでした。彼はゆっくりと私から息を絞り出しました。動けなくなってしまいました。突然、彼は後ろに引きずり出され、地面に投げ飛ばされ、ほとんど私を連れて行きました。ジェムが起きたと思った。

人の心の動きは時々非常に遅くなります。私は啞然として、呆然とそこに立っていました。喧嘩の騒音は消えつつあった。誰かが喘ぎ声を上げ、夜はまた静かになった。

それでも、男は荒い息をし、息を荒くしてよめいている。彼は木に行って木にもたれかかったのだと思いました。彼は激しく咳き込み、すすり泣き、骨を揺るがすような咳をした。

「ジェム？」

返事はなかったが、男の荒い息があった。

「ジェム？」

ジェムは答えなかった。

男は何かを探すかのように動き回った。彼がうめき声を上げ、地面に沿って重いものを引っ張るのが聞こえました。だんだんと木の下に4人がいることがわかってきた。

「アティカス……？」

男はふらふらとふらつきながら道路に向かって歩いていた。

私は彼がいたと思われる場所に行き、地面を必死に探しました。

足の指を伸ばして。今、私は誰かに触れました。

「ジェム？」

私のつま先は、ズボン、ベルトのバックル、ボタン、私が識別できないもの、襟、顔に触れました。顔のとげのある無精ひげから、それがジェムのものではないことがわかりました。古いウイスキーの匂いがした。

私は道路と思われる方向に進んでいきました。何度も振り返られたのでよくわかりませんでした。しかし、私はそれを見つけ、街灯に目を落としました。その下を男が通り過ぎていった。その男は一緒に歩いていた

自分には重すぎる荷物を運ぶ人のスタッカートな足音。彼は角を曲がろうとしていました。彼はジェムを運んでいた。ジェムの腕は前で狂ったようにぶら下がっていた彼の。

私が角に着く頃には、その男は私たちの前庭を横切っていました。玄関ドアからの光が一瞬アティカスを映した。彼は階段を駆け下りて、一緒に、彼とその男はジェムを家の中に連れて行きました。

彼らが廊下を下りていくとき、私は玄関にいました。アレクサンドラおばさんが私に会いに走ってきました。「レイノルズ博士に電話してください！」アティカスの声が鋭く聞こえたジェムの部屋。「スカウトはどこですか？」

「ここにいるよ」とアレクサンドラおばさんが電話をかけ、私も一緒に電話のところまで引っ張って行きました。

彼女は心配そうに私を引っ張った。「大丈夫ですよ、おばちゃん、電話したほうがいいよ」と私は言いました。

彼女は受話器をフックから引き抜き、「ユーラ・メイ、レイノルズ博士を呼んで、素早い！」

「アグネス、お父さんは家にいるの？ああ、神様、彼はどこにいるのですか？「彼が入ってきたらすぐにここに来るように伝えてください。お願いします、緊急です！」

メイコムの人々よ、アレクサンドラおばさんが身元を明かす必要はなかったお互いの声を知っていた。

アティカスがジェムの部屋から出てきた。アレクサンドラおばさんが壊れた瞬間

接続すると、アティカスは彼女から受話器を受け取りました。彼はフックをガタガタ鳴らしてから言いました。

「ユーラ・メイ、保安官を呼んでください。」

「えっ？アティカス・フィンチ。誰かが私の子供たちを追ってきました。ジェムは怪我をしている。ここと校舎の間です。息子と離れることができない。私のためにそこに走ってください、そして彼がまだそこにいるかどうか見てください。今彼を見つけられるかどうかは疑わしいが、もし見つけたら会いたい。もう行かなきゃ。ありがとう、ヘック」

「アティカス、ジェムは死んだの？」

「いいえ、スカウト。彼女の世話をしてください、お姉さん」と彼は廊下を下りながら呼びました。

アレクサンドラおばさんの指は震えながら、私の周りに巻かれていた砕けた布地とワイヤーをほどきました。「大丈夫ですか、ダーリン？」彼女は何度も何度も尋ねました。

私を自由に働かせてくれました。

出られてホッとした。私の腕はチクチクし始め、小さな六角形の跡が赤くなっていました。こすってみたら気持ち良くなりました。

「おばさん、ジェムは死んだの？」

「いいえ、いいえ、最愛の人、彼は意識を失っています。彼がどれほどひどく傷ついているかはその時まで分からない

レイノルズ博士が到着しました。ジャン・ルイズ、どうしたの？」

"わからない。"

彼女はそれをそのままにしておきました。おばさんは私に着る物を持ってきてくれました。もし私がある時考えていたら、絶対に忘れさせなかったでしょう。気を紛らわせて、おばさんが私のオーバーオールを持ってきてくれたのです。「これを着て、ダーリン」と彼女は言い、一番着ていた服を私に手渡した

軽蔑されている。

彼女は急いでジェムの部屋に戻り、それから廊下にいる私のところにやって来ました。彼女は漠然と私を撫でて、ジェムの部屋に戻りました。

家の前かが止まった。私はレイノルズ博士の歩みを父の歩みとほぼ同じように知っていました。彼はジェムと私をこの世界に連れてきてくれて、ジェムがツリーハウスから落ちたときも含めて、人間が知っているあらゆる子供時代の病気を乗り越えさせてくれました。

そして彼は私たちの友情を決して失わなかった。レイノルズ博士は、もし私たちがおできになりやすかったなら、状況は違っていただろうと言いましたが、私たちはそれを疑っていました。

彼はドアに入ってきて、「主よ」と言いました。彼は私に向かって歩いてきて、こう言いました。

まだ立っている」と方針を変えた。彼は家のすべての部屋を知っていました。彼はまた、私の体調が悪ければ、ジェムの調子も悪いということを知っていました。

永遠の10年後、レイノルズ博士が戻ってきた。「ジェムは死んだのか？」私は尋ねた。

「そんなのは程遠いよ」と彼は私にしゃがみ込みながら言った。「彼はあなたと同じように頭にこぶがあり、腕を骨折しています。

スカウト、そっちを見てください——いいえ、頭を向けなくて、目を丸くしてください。さあ、向こうを見てください。私が今知る限り、彼はひどい休みを取っている

それは肘の中にあります。誰かが彼の腕をもぎ取ろうとしたように…さあ、私を見てください。」

「では、彼は死んでいないのですか？」

「だめだ！」レイノルズ博士は立ち上がった。「今夜はあまり何もできません」と彼は言った。

「できる限り彼を快適にさせるように努めること以外はね。彼の腕のレントゲン検査をしなければなりません—
しばらくは腕をそばに置いておくことになりそうだ。でも、心配しないでください、彼は新品同様になります。同年齢の男の子は元気ですよ。」

話している間、レイノルズ博士は私の額にできた隆起を軽く指でつつきながら、私をじっと見つめていました。「どこにも壊れた感じはありませんね？」

レイノルズ博士のちょっとしたジョークに私は笑顔になりました。「それでは、彼が死んだとは思わないでしょう。
それから？」

彼は帽子をかぶった。「もちろん、私は間違っているかもしれないが、彼はとても生きていると思う。
そのすべての症状を示します。様子を見に行き、戻ってきたら集まって決めるよ。」

レイノルズ博士の足取りは若くてキビキビしていた。ヘック・テイト氏のものとはそうではなかった。彼の重いブーツはポーチを罰し、彼はぎこちなくドアを開けましたが、彼は入ってきたときにレイノルズ博士が言ったのと同じことを言いました。「大丈夫ですか、スカウト？」
彼が追加した。

「はい、ジェムに会いに行きます。アティカスじゃない、彼らはそこにいるんだよ。」

「私も一緒に行きます」とテイトさんは言いました。

アレクサンドラおばさんがジェムの読書灯をタオルで遮っていたため、彼の部屋は薄暗くなっていました。ジェムは仰向けに横たわっていた。彼の顔の片側には醜い跡がありました。彼の左腕は体から伸びていた。彼の肘はわずかに曲がっていましたが、間違った方向に曲がっていました。ジェムは顔をしかめた。

「ジェム…？」

アティカスが話した。「彼にはあなたの声が聞こえません、スカウト、彼は光のように外に出ています。彼は来ていた
しかし、レイノルズ博士が彼を再び追い出しました。」

"かしこまりました。"私は撤退しました。ジェムの部屋は広くて四角かった。アレクサンドラおばさんは暖炉のそばのロッキング
チェアに座っていました。ジェムを連れてきた男は
隅に立って、壁にもたれかかっている。彼は私の知らない田舎の人でした。彼はおそらくコンテストに参加していて、それが起こったとき
近くにいました。彼は私たちの叫び声を聞いて走って来たに違いありません。

アティカスはジェムのベッドのそばに立っていた。

ヘック・テイト氏は戸口に立っていました。彼の手には帽子があり、ズボンのポケットからは懐中電灯が飛び出していました。彼は
作業着を着ていた。

「入って、ヘック」アティカスが言った。「何か見つかりましたか？このようなことをするほど下劣な人は思いつきませんが、あなたが彼を見つけてくれることを願っています。」

テイト氏は鼻を鳴らした。彼は隅にいる男を鋭い目で見て、うなずき、それから部屋を見回した——ジェム、アレクサンドラおばさん、そしてアティカスを見た。

「座ってください、フィンチさん」彼は楽しそうに言った。

アティカスは言った、「みんな座りましょう。その椅子を持ってください、ヘック。リビングからもう一つ持ってきます。」

テイト氏はジェムの机の椅子に座った。彼はアティカスが戻って落ち着くまで待った

彼自身。私はなぜアティカスが隅この男のために椅子を持って来なかったのか疑問に思ったが、アティカスは私よりも田舎者のやり方をよく知っていた。彼の田舎の顧客の中には、裏庭のセンダンの木の下に耳の長い馬を駐する人もいた。そしてアティカスは裏階段で約束を守ることが多かった。おそらく、こちらのほうが居心地がよかったのだろう。

"氏。フィンチ"とテイト氏は言った、「私が見つけたことを教えてください。小さな女の子のドレスを見つけた——

それは私の中にあります。それはあなたのドレスですか、スカウト？」

「はい、スモッキンの付いたピンク色でしたら」と私は言いました。テイト氏はあたかも証言台にいるかのように振る舞っていた。彼は国家や国防に束縛されず、自分のやり方で物事を語るのが好きだったが、時には時間がかかることもあった。

「おかしな泥色の布切れを見つけました——」

「それは衣装ですよ、テイトさん」

テイト氏は太ももに手を這わせた。彼は左腕をさすり、ジェムのマントルピースを調べた後、暖炉に興味があるようでした。

彼の指

彼の長い鼻を探しました。

「何だよ、ヘック？」アティカスは言った。

テイトさんは彼の首を見つけてさすった。「ボブ・イーウェルは、肋骨の下に包丁を突き立てたまま、あそこの木の下で地面に横たわっています。彼は死んだよ、ミスター。

フィンチ。」

第29章

アレクサンドラおばさんは立ち上がってマントルピースに手を伸ばしました。テイトさんは立ち上がったが、彼女は援助を断った。アティカスの本能的な礼儀正しさが人生で一度だけ失敗した。彼はそこに座っていた。

どういうわけか、ボブ・イーウェル氏が、もし残りの人生がかかるならアティカスを捕まえると言っていることしか思いつきませんでした。イーウェル氏は彼を捕まえそうになったが、それが彼にとって最後のことだった。

"本気ですか？"アティカスは暗い声で言った。

「彼はもう死んでいるよ」とテイト氏は言った。「彼は元気だが死んでいる。彼は再びこの子供たちを傷つけることはないだろう。」

"そんなつもりじゃなかった。"アティカスは寝言を言っているようだった。彼の年齢が見え始め、内なる動揺の唯一の兆候、彼の力強い顎の線が少し溶け、ある人は彼の耳の下に形成されている明らかなしわに気づき、ある人は彼の漆黒の髪ではなく、彼の頭に灰色の斑点が生えていることに気づきました寺院。

「リビングに行ったほうがいいんじゃない？」アレクサンドラおばさんは最後に言いました。

「よろしければ」とテイト氏が言った。スカウトが私たちにそれについて話してくれるので、彼の怪我の状況を見てみたいと思います。」

「行っても大丈夫ですか？」彼女は尋ねた。「ここでは私は一人だけ多すぎるのです。あなたが望むなら、私は部屋にいます、アティカス。」アレクサンドラおばさんはドアの方へ行きましたが、立ち止まって向きを変えました。「アティカス、今夜このようなことを感じたのですが、私、これは私のせいです」と彼女は話し始めた。"私が持っている必要がありません-"

テイト氏は手を上げた。「どうぞ、アレクサンドラさん、ショックだったと思います。そして、何も心配しないでください。もし私たちが常に自分の感情に従っていたら、私たちは自分の尻尾を追う猫のようになりますでしょう。スカウトさん、記憶に新しいうちに何が起こったのか教えてください。できると思いますか？彼があなたを追いかけているのを見ましたか？

私はアティカスのところへ行き、彼の腕が私を包み込むのを感じました。私は彼の膝に頭を埋めました。「私たちは家に帰り始めました。私はジェム、靴を忘れてしまったと言いました。すぐに私たちは彼らのために戻り始めます

ライトが出かけました。ジェムは明日手に入れることができましたと言いました…」

「スカウト、テイトさんに聞こえるように声を上げてください」とアティカスが言った。私は彼の膝に這いました。

「それからジェムはちょっと黙っててと言った。私は彼が考えているのだと思った——彼はいつも考えることができるようにあなたに静かにしてほしいと思っている——それから彼は何か聞こえたと言いました。私たちはセシルだと思っていました。」

「セシル？」

「セシル・ジェイコブス。今夜一度彼は私たちを怖がらせた、そして私たちはまた彼だと思った。彼はシーツの上にあった。彼らは最高の衣装に4分の1を与えた、誰がそれを獲得したかは知らない——」

「セシルだと思った時、どこにいたの？」

「校舎からほんの少しだけ。私は彼に向かって何か叫んだ——」

「叫びました、何ですか？」

「セシル・ジェイコブスは大きく太った雌鳥だと思います。何も聞こえなかったのですが、ジェムが叫びました。こんにち、あるいは死者を目覚めさせるほど大きな音で——」

「ちょっと待ってください、スカウト」とテイト氏は言った。"氏。フィンチ、聞こえた？"

アティカス氏はそうではないと答えた。彼はラジオをつけていました。アレクサンドラお婆さんは彼女の中に彼女を入れていました。寝室。彼女が彼に少し断るように言ったので、彼は思い出しました。

彼女の声が聞こえた。アティカスは微笑んだ。「私はいつもラジオを大音量でかけます。」

「近所の人に何か聞こえたのだろうか…」と館さんは言った。

「それは疑わしいよ、ヘック。彼らのほとんどはラジオを聴くか、鶏と一緒に寝ます。モーディ・アトキンソンは起きていたかもしれないが、私はそれを疑わしい。」

「どうぞ、スカウト」とテイト氏は言った。

「まあ、ジェムが叫んだ後、私たちは歩き続けました。テイトさん、私は衣装の中に閉じ込められていましたが、そのとき私自身にも聞こえました。足音、つまり。私たちが歩くときは彼らも歩き、私たちが立ち止まるときは立ち止まりました。ジェムは、クレンショー夫人が私の衣装に光沢のある絵の具を塗ったから私が見えると言いました。私はハムでした。」

"どのようだ？"テイト氏は驚いて尋ねた。

アティカスはテイト氏に私の役割と衣服の構造について説明しました。"あなた彼女が入ってきたときに彼女を見るべきだった"と彼は言った、「それは粉々に砕かれていました。」

館さんは顎をさすった。「なぜ彼にそんな跡がついたのか疑問に思いました。彼の袖には小さな穴が開いていました。小さな穴が1~2箇所ありました

穴に合わせて腕にマークを付けます。もしよろしければ、それを見せてください、先生。」

アティカスは私の衣装の残骸を持ってきてくれた。館さんはそれをひっくり返したり、曲げたりして、元の形を把握しました。「これがおそらく彼女の命を救ったのだでしょう」と彼は言った
言った。"見て。"

彼は長い人差し指で指をさした。くすんだワイヤーに、輝くようなきれいなラインが浮かび上がりました。

「ボブ・イーウェルはビジネスのつもりだったんだ」とテイト氏はつぶやいた。

「彼は正気を失っていた」とアティカスさんは語った。

「反論するのは好きじゃないよ、フィンチさん——狂っていたんじゃないよ、とんでもなく意地悪だったんだ。子供を殺すのに十分な勇気を与えるのに十分な酒を持った低姿勢のスキャンク。彼はあなたに直接会うことは決してなかっただろう。」

アティカスは首を振った。「そんなことをする男なんて思いつかないよ——」

"氏。フィンチ、隠れて言う前に撃たなければいけない男たちがいるんだ。それでも、彼らは彼らを撃つために必要な弾丸の価値はありません。イーウェルとして
それらのうちの1つです。」

アティカスさんは「彼が私を脅した日、彼はすべてを悟ったと思った。たとえそうでなかったとしても、彼は私を追いかけにくるだろうと思いました。」

「彼には、貧しい肌の色の女性をせがむほどの度胸があったし、家が空いていると思ったティラー判事にせがむほどの度胸もあった。それでは、昼間にあなたと面と向かって会ったと思いますか？」テイト氏はため息をついた。「乗ったほうがいいよ。スカウト、後ろから彼の声が聞こえた——」

"かしくまりました。木の下に入ったとき——」

「木の下にいるのに、雷は見えなかったのに、どうやって分かったの？」

「私は裸足でした。ジェムによれば、木の下はいつも地面が涼しいそうです。」

「彼を副官に任命しなければなりません、どうぞ。」

「それから突然、何かが私を掴んで、私の衣装を押しつぶしました…私が地面に身をかがめたと思います…木の下で喧嘩しているような音が聞こえました…彼らが幹を叩いているような音でした。ジェムは私を見つけて、道路の方へ引っ張り始めました。一部—ミスター。イーウェルは彼を引き倒した、と私は思う。彼らはさらに喧嘩をし、それから奇妙な音がした——ジェムが大声で叫んだ……」私は立ち止まった。それ

それはジェムの腕だった。

「とにかく、ジェムが大声で叫びましたが、もう聞こえませんでした。そして次のことは、ミスター・ジェムでした。」

イーウェルは私を絞め殺そうとしたのだと思います…そのとき誰かがミスターを引っ張りました。

イーウェルダウン。ジェムは起きたに違いない、たぶん。それが私の知る全てだ…"

"その後？" 館さんは鋭い目で私を見つめていました。

「誰かがよろめきながら息を切らし、そして死にそうな咳をしていました。最初はジェムだと思ったけど、違うように聞こえたので、電話でジェムを探しました

地面。アティカスが私たちを助けに来て、疲れ果てたのだと思ったのですが――」

「誰だったの？」

「どうして彼がそこにいるの、テイトさん、彼は自分の名前を教えてくれるのよ。」

そう言いながら、半ば隅にいる男を指差しながら腕を下ろした

アティカスが私を指差して叱責しないように、急いで。指摘するのは失礼だった。

彼はまだ壁にもたれかかっていた。私が部屋に入ってきたとき、彼は腕を胸の前で組んで壁にもたれかかっていた。私が指さすと、彼は自分のものを持ってきました

腕を下げて手のひらを壁に押し付けた。それらは白い手で、一度も太陽を見たことのない病的なほど白い手で、ジェムの部屋の薄明かりの中でくすんだクリーム色の壁に派手に目立っていた。

私は彼の手から砂で汚れたカーキ色のズボンを眺めました。私の目は彼の細い体格を通して、彼の破れたデニムシャツに向かいました。彼の顔は手と同じくらい白かったが、突き出た顎には影があった。彼の頬は薄くなり、虚ろになった。彼の口は大きく開いていた。彼のこめかみには浅く、ほとんど繊細なへこみがあり、彼の灰色の目はとても無色で、盲目なのではないかと思ったほどでした。彼の髪は枯れて薄くなり、頭の上はほとんど羽毛のようでした。

私が彼を指さすと、彼の手のひらがわずかに滑り、壁に脂汗の筋が残り、親指をベルトに引っ掛けました。まるで爪が石板をこする音を聞いたかのように、奇妙な小さなけいれんが彼を震わせたが、私が不思議そうに彼を見つめると、彼の顔から緊張がゆっくりと消えていった。彼の唇は開き、気弱な笑みを浮かべ、突然の涙で隣人の姿がぼやけました。

「やあ、ブー」と私は言った。

第30章

"氏。アーサー、ハニー"とアティカスが優しく私を正しながら言った。「ジャン・ルイズ、こちらはミスター・ルイズ」

アーサー・ラドリー。彼はすでにあなたのことを知っていると思います。」

こんな時にアティカスが当たり障りなく私にブー・ラドリーを紹介してくれたら、そうだねアティカスだった。

ブーは私が本能的にジェムが寝ているベッドに駆け寄るのを見て、彼の顔にも同じはにかんだ笑みが浮かんだ。恥ずかしくて熱くなって、私はジェムを覆ってごまかそうとしました。

「ああ、ああ、彼には触らないでください」とアティカスは言った。

ヘック・テイト氏は座って、角縁の眼鏡を通してブーをじっと見つめていた。彼が話そうとしたとき、レイノルズ博士が廊下からやって来た。

「みんな出て行って」と彼は玄関に入って言った。「アーサー、私が初めてここに来たときはあなたに気づかなかったわ。」

レイノルズ博士の声は足取りと同じくらいさわやかで、あたかも生涯毎晩言っていたかのようで、その発表はブー・ラドリーと同じ部屋にいるときよりも私を驚かせた。もちろん…ブー・ラドリーだって時々体調を崩すことはあると思いました。しかし一方で、私には確信が持てませんでした。

レイノルズ博士は新聞紙に包まれた大きな荷物を運んでいました。彼はそれをジェムの机の上に置き、コートを脱ぎました。「あなたは彼が活着ていることにとても満足していますね？私がどうやって知ったか教えてください。私が彼を調べようとしたとき、彼は私を蹴りました。彼に触れるためには、適切かつ適切に彼を外に出さなければならなかった。だからスキャットだよ」と彼は私に言いました。

「えーっと——」アティカスはブーをちらりと見ながら言った。「ねえ、玄関に出ようよ。椅子はたくさんありますが、それでも十分暖かいです。」

なぜアティカスが私たちをリビングルームではなく玄関ポーチに招待したのかと不思議に思いましたが、理解しました。リビングルームの照明がとても強かったです。

私たちは列を作り、まずテイト氏が、アティカス氏が先に行くのをドアのところで待っていました。それから彼は考えを変え、テイト氏に従いました。

人々は、たとえ最も奇妙な状況下であっても、日常のこゝろを行う習慣を持っています。私

それは例外ではありませんでした。「アーサーさん、ついて来てください」と自分自身が言っているのが聞こえました。

家のことをよく知っています。玄関まで連れて行きますよ、先生。」

彼は私を見下ろしてうなずいた。

私は彼を廊下に通してリビングルームを通過して案内しました。

「お座りいただけませんか、アーサーさん？このロッキングチェアは素敵で快適です。」

彼についての私の小さな空想が再び甦りました。彼はポーチに座っているでしょう…まさに素敵な魔法ですね、アーサーさん。

はい、まさに素敵な呪文です。ちょっと現実離れた感じで一番奥の椅子に案内した

アティカスとテイト氏から、深い影の中だった。ブーならもっと感じるだろう

暗闇でも快適。

アティカスさんはブランコに座り、テイトさんはその隣の椅子に座っていた。リビングルームの窓からの光が彼らを強く照らしていました。私はブーの隣に座りました。

「まあ、まあ」とアティカスは言った。

記憶を失ってしまった…」アティカスは眼鏡を押し上げ、指を目に押し当てた。「ジェムはまだ13歳じゃない…いいえ、彼はもう13歳です。思い出せません。

とにかく、郡裁判所に持ち込まれることになるだろう——」

「どうですか、フィンチさん？」テイト氏は足をほどいて前かがみになった。

「もちろん、それは明らかな自己防衛だったけど、オフィスに行って追い詰める必要があるだろう——」

"氏。フィンチ、ジェムがボブ・イーウェルを殺したと思いますか？そう思いますか？

「スカウトの言うことは聞いたでしょう、間違いありません。彼女は、ジェムが立ち上がって彼を彼女から引き離したと言いました。彼はおそらく、何らかの方法でイーウェルのナイフを手に入れたでしょう。

暗い…明日わかるだろう。」

「ミスター・フィンチ、ちょっと待ってください」とテイト氏が言った。「ジェムは決してボブ・イーウェルを刺したことはありません。」

アティカスはしばらく沈黙した。彼はまるで感謝しているかのようにテイト氏を見つめた

彼は言った。しかしアティカスは首を横に振った。

「まあ、あなたはとても親切だし、あなたがその善意からそうしているのはわかっていますが、そんなことを始めないでください。」

テイトさんは立ち上がって、ベランダの端に行きました。彼は植え込みに唾を吐きました、

それから腰のポケットに手を突っ込んでアティカスに向かいました。「どのような？」彼は言った。

「きついことを言ってごめんなさい、ヘック」アティカスは簡潔に言いました。「しかし、誰もこのことを黙らせません。私はそんな風には生きていないよ。」

「誰も何も隠蔽するつもりはないよ、フィンチさん」

テイト氏の声は静かだったが、彼のブーツはポーチの床板にしっかりと植えられており、そこに生えているように見えた。父と保安官の間で、その性質が私には理解できなかった奇妙な争いが繰り広げられていた。

アティカスが立ち上がってポーチの端に行く番だった。彼は「うーん」と言い、庭に乾いた唾を吐きました。彼はポケットに手を入れてテイト氏と向き合った。

「ねえ、あなたはそれを言いませんでしたが、私はあなたが何を考えているか知っています。ありがとうございます。」

ジャン・ルイズ——と彼は私に向き直った。「ジェムがイーウェルさんを引き離したって言ったよね？」

「はい、先生、そう思いました…私は——」

「ほら、ヘック？心の底から感謝しますが、私は

頭の上にこのようなものをかぶって始めた少年。空気を浄化する最良の方法は、すべてを屋外に出すことです。郡にサンドイッチを持って来てもらいましょう。私は彼が彼のことをささやきながら成長することを望んでいません。「ジェム・フィンチ…彼の父親が彼をそのような状況から解放するためにミントを払った」などと言う人も望んでいません。早くこれを手に入れましょう

良いほうに終わりました。」

"氏。フィンチ"とテイト氏は気の抜けた様子で言った。「ボブ・イーウェルはナイフの上で倒れた。彼は殺しました彼自身。"

アティカスはポーチの隅まで歩いた。彼は藤の蔓を見つめた。それぞれのやり方で、お互いが同じように頑固なのだ、と私は思いました。誰が最初に屈服するだろうかと思った。アティカスの頑固さは静かでめったに明らかではありませんでしたが、ある意味ではカニングム家と同じくらいしっかりしていました。テイト氏の態度は無学で無愛想だったが、私の父の態度と同等だった。

「へー」アティカスは背を向けた。「もしこのことが隠蔽されれば、それはジェムにとって私がジェムを育てようとしてきたやり方を単純に否定することになるだろう。時々、私は親として完全に失格だと思うことがありますが、彼らが持っているのは私だけです。ジェムは他の人を見る前に私を見つめます、そして私は彼をまっすぐに見返せるように生きようとしてきました…もし私がこのようなことを黙っていたら、正直に言って、私は彼の目と目を合わせるこ

とができませんでした、そして私が彼を見つめた日

それはできません、私が彼を失ったことを知るでしょう。彼とスカウトを失いたくない、なぜなら彼らが私のすべてだから。」

"氏。フィンチ。館さんはまだ床板に植えられたままだった。「ボブ・イーウェルはナイフの上で倒れた。私はそれを証明できません。」

アティカスはで走り回った。彼の手がポケットに食い込みました。「ねえ、私のやり方でそれを見ることさえできないの？あなたには自分の子供がいますが、私の方があなたより年上です。

私の子供たちが成長したとき、もし私がまだ存在していれば私は老人になるでしょう、しかし今の私は——彼らが私を信頼しなければ、彼らは誰も信頼しないでしょう。ジェムとスカウトは何を知っていますか

起こりました。ダウンタウンで何か違うことが起こったと言っているのを彼らが聞いたら——
てか、もう持たないよ。街で一方的に生活し、自宅で別方向に生きることはできません。」

テイト氏はかかとでよろめき、辛抱強く言いました。「彼はジェムを突き落とし、あの木の下の根につまずいて、そして——ほら、見せてあげるよ。」

テイト氏はサイドポケットに手を入れ、長い飛び出しナイフを取り出した。灰

そうすると、レイノルズ博士が玄関にやってきました。「息子は、先生、校庭のすぐ内側のあの木の下に亡くなっています。懐中電灯はありますか？こっちの方がいいよ。」

レイノルズ医師は「落ち着いてのライトを点けることができる」と言いましたが、彼は彼を連れて行きました。

テイトの懐中電灯。「ジェムは大丈夫だよ。彼は今夜は起きないと思いますが、心配しないでください。彼を殺したナイフは一体何ですか？」

「いいえ、先生、まだ彼の中にいます。柄からすると包丁のようにも見えました。ケンはそうあるべきだ
もう霊柩がありますよ、先生、「夜ですよ」

テイト氏はナイフを軽く開いた。「こんな感じだった」と彼は言った。彼はナイフを持ち、つまずくふりをした。彼が前かがみになったとき、彼の左腕は前に下がった

彼。「そこを見て？肋骨の間の柔らかいもので自分自身を刺しました。彼の全体重がそれを押し込んだのです。」

テイト氏はナイフを閉じてポケットに戻しました。「スカウトは8年目です

古いよ」と彼は言った。「彼女は恐怖のあまり、何が起こったのか正確に知ることはできませんでした。」

「驚くでしょうね」アティカスは陰い表情で言った。

「彼女がでっち上げたと言っているのではなく、何が起こったのか正確に理解できなかったと言っているのです。外は真っ暗で、インクのように真っ黒だった。有能な証人を作るために暗闇に慣れている誰かを連れて行くだろう……」

「私はそれを持たないよ」アティカスは静かに言った。

「なんてことだ、ジェムのことなど考えていない！」

テイト氏のブーツが床板に激しくぶつかり、ミス・モーディの寝室の明かりが消えた
続けた。ステファニー・クロフォードさんのライトが点灯しました。アティカスとテイト氏は通りの向こう側を見つめ、それから
お互いを見つめた。彼らが待っていました。

テイト氏が再び話したとき、彼の声はほとんど聞こえませんでした。"氏。フィンチ、私はそれが嫌いです
こういうときは戦ってください。今夜あなたは、誰も経験する必要のない緊張にさらされています。なぜあなたがベッドにいない
のか、私にはわかりませんが、あなたが一度は2つと2つをまとめることができなかったのはわかっています、そして明日はそ
うなるから今夜それを解決しなければなりません遅すぎる。ボブ・イーウェルは

包丁が彼の股に刺さっている。」

テイト氏は、アティカスがそこに立って、ジェムほどの体格で腕が折れた少年でも、真っ暗な中で大人に襲いかかって殺せるほ
どの戦闘力が残っているなどと主張するつもりはないと付け加えた。

「ヘー」とアティカスが突然言った。「あれは君が振っていた飛び出し刃だったんだ。どこで手に入れたの？」

「酔った男がそれを剥がしたんです」とテイト氏は冷静に答えた。

思い出そうとしていました。イーウェルさんは私の上にあった…そして彼は倒れた…ジェムは起き上がったに違いない。
少なくとも私はそう思いました…

「えっ？」

「今夜ダウンタウンで酔った男からそれを剥がしたと言いました。イーウェルはおそらくその包丁をどこかのゴミ捨て場
で見つけたのだろう。研ぎ澄まして、時間を待って…ただ
時間を待った。」

アティカスはブランコに行き、座った。彼の手は膝の間に力なくぶら下がっていた。彼は床を見ていました。あの夜、刑
務所の前で彼は同じようにゆっくりと動いていた、私が彼が折り畳むのに永遠にかかると思ったとき

新聞を取り出して椅子に放り込みます。

テイトさんはポーチの周りにそっと固まっていた。「それはあなたの決定ではありません、フィンチさん、それはすべて私の
決定です。それは私の決断であり、私の責任です。一度だけ、もしあなたがそれを見ないなら、私
まあ、それについてできることはあまりありません。試してみたいなら、面と向かって嘘つき呼ばわりしてあげるよ。あなたの
息子は決してボブ・イーウェルを刺したことはありません」と彼はゆっくりと言いました。彼が望んでいたのは、自分と妹を安全
に家に連れて帰ることだけでした。」

テイト氏は歩みを止めた。彼はアティカスの前で立ち止まり、私たちに背を向けた。

「私はあまり良い人ではありませんが、メイコム郡の保安官です。生まれてからずっとこの町に住んで、もう43歳になる。

それをすべて知っています

私が生まれる前からここで起こっていました。黒人少年が理由もなく死亡した

そしてその責任者は死亡した。今度は死者に死者を埋葬させてください、ミスター。

フィンチ。死者は死者に埋葬させてください。」

テイトさんはブランコに行き、帽子を拾いました。それはアティカスの隣に横たわっていた。氏

テイトは髪を後ろに押し上げて帽子をかぶった。

「国民が予防に全力を尽くすのが法律違反だという話は聞いたことがない」

犯された犯罪はまさに彼がやったことだが、それを隠蔽するのではなく町にすべてを話すのが私の義務だと言うか

もしれない。そのとき何が起ころか知っていますか？私の妻を含むメイコムの女性全員がエンジェルフードケー

キを持って彼のドアをノックしていました。私の考えでは、ミスター・フィンチ、あなたとこの町に多大な貢献をしてくれ

た一人の男を取り上げ、その内気なやり方で脚光を浴びることは、私にとっては罪なことです。それは罪だし、それを気にするつもりはない。他の男性だったらまた違ったでしょうね。しかし、この男は違います、ミスター。

フィンチ。」

テイトさんはブーツのつま先で床に穴を掘ろうとしていました。彼は鼻を引っ張り、それから左腕をマッサージした。

「フィンチさん、私は大した者ではないかもしれませんが、それでもメイコム郡の保安官であり、ボブ・イーウェルはナイフで倒れました。お休みなさいませ。」

テイト氏はポーチから足を踏み鳴らし、前庭を大股で横切った。のドアがバタンと閉まり、彼は走り去った。

アティカスは長い間床を見つめて座っていた。ついに彼は頭を上げた。

「スカウト」と彼は言った。イーウェルはナイフの上に倒れた。もしかしたら理解できるでしょうか？」

アティカスは元気づける必要があるように見えた。私は彼に駆け寄って抱き締め、力の限りキスをしました。「はい、わかりました」と私は彼を安心させました。「氏。テイトは正しかった。」

アティカスは話をやめて私を見た。「どういう意味ですか？」

「まあ、それはモッキンバードを撃つようなものではないでしょうか？」

アティカスは私の髪に顔を入れて、それをこすった。彼が立ち上がって歩いて渡ったとき

ベランダから影に向かうと、彼の若々しい足取りが戻っていた。彼が中に入る前に

家に着くと、彼はブー・ラドリーの前で立ち止まった。「私の子供たちをありがとう、アーサー」と彼は言った。

[目次 - 前へ / 次へ](#)

第31章

ブー・ラドリーが足を引きずって立ち上がると、リビングルームの窓から光が差し込んだ彼の顔で輝いた。彼の一挙手一投足は不確実で、あたかも自分の手と足が触れたものに適切に接触できるかどうか確信が持てていないかのようだった。彼はひどい咳き込み、ひどく動揺して再び座らなければならなかった。

彼の手が尻ポケットを探り、ハンカチを取り出した。彼は咳き込み、それから顔を拭いた。

彼の不在には慣れていたので、彼がずっと私の隣に座って存在していたことが信じられないことに気づきました。彼は音を立てなかった。

もう一度、彼は立ち上がった。彼は私の方を向き、玄関に向かってうなずきました。

「ジェムにおやすみを言いたいですよね、アーサーさん。すぐ入ってください。」

私は彼を廊下に案内しました。アレクサンドラおばさんはジェムのベッドのそばに座っていました。「お入りなさい、アーサー」と彼女は言った。「彼はまだ眠っています。レイノルズ医師は彼に強力な鎮静剤を投与した。

ジャン・レイズ、あなたのお父さんはリビングルームにいますか？

「はい、奥様、私もそう思います。」

「ちょっと彼と話しに行ってみます。レイノルズ博士が少し残してくれた…」彼女の声が尾を引いた。

離れて。

ブーは部屋の隅に流れ着き、顎を上げて立って、遠くからジェムを見つめていた。私は彼の手を取りましたが、その手はその白さに比べて驚くほど温かかったです。私が彼を少し引っ張ると、彼はジェムのベッドに連れて行ってくれました。

レイノルズ博士はおそらくカバーがかからないようにジェムの腕の上にテントのような配置をしていて、ブーは前かがみになってそれを眺めた。まるでこれまで少年を見たことがないかのように、彼の顔には恐るべき好奇の表情が浮かんでいた。彼の口

わずかに開いた状態で、彼はジェムを頭の前から足の先まで見ました。ブーの手が上がったが、彼はそれを横に下ろした。

「撫でてもいいよ、アーサーさん、彼は眠っているよ。でも、もし彼が起きていたら、それはできませんでした、彼はあなたを許してくれませんでした...」私は自分自身を説明していることに気づきました。"どうぞ。"

ブーの手がジェムの頭の上にかざされました。

「さあ、先生、彼は眠っています。」

彼の手はジェムの髪に軽く置かれた。

私は彼の体の英語を学び始めていました。彼の手が私の手をぎゅっと握りしめた、そして彼は彼は去りたいと述べた。

私は彼を玄関ポーチまで案内しましたが、そこで彼の不安な足取りが止まりました。彼はまだ私の手を握っていて、私を離す気配はありませんでした。

"家まで送ってよ?"

彼は暗闇を怖がる子供の声で、ほとんどささやきそうになった。

一番上の段に足をかけて立ち止まりました。私は彼を家の中まで案内して、

しかし、私は彼を家に連れて行くつもりはありませんでした。

"氏。アーサー、ここで腕を曲げて、そのようにして。その通りです、先生。"

私は彼の腕の曲がり方に手を滑り込ませた。

彼は私に対応するために少しがむ必要がありましたが、もしステファニー・クロフォード嬢が二階の窓から見ているならば、紳士なら誰でもそうするように、アーサー・ラドリーが歩道を私をエスコートしているのが見えるでしょう。

私たちは角の街灯まで来たが、ディルは何度そこに立って太いポールを抱きしめ、見つめ、待ち、期待したことだろう。ジェムと私は何回この旅をしたんだろうかと思いましたが、私は人生で二度目のラドリー正門に入りました。ブーと私はポーチへの階段を上って行きました。彼の指は玄関のドアノブを見つけた。彼はそっと私の手を放し、ドアを開け、

中に入り、後ろ手にドアを閉めた。二度と彼に会うことはなかった。

隣人は死とともに食べ物をもたらし、病気やその間のささいな出来事とともに花をもたらします。ブーは私たちの隣人でした。彼は私たちに石像人形2つと壊れた時計をくれました。

チェーン、幸運のペニー、そして私たちの人生。しかし、隣人は見返りに譲りません。私たちは木から取り出したものを木に戻すことは決してありませんでした。私たちは彼に何も与えませんでした。

悲しくなりました。

私は家に帰ろうと向きを変えた。街路灯が街まで続く通りを点滅させた。私たちの近所をこの角度から見たのは初めてでした。ミス・モーディの家やミス・ステファニーの家があり、そこに私たちの家があり、ポーチのブランコが見えました。ミス・レイチェルの家は私たちの向こうにあり、はっきりと見えました。デュボース夫人の姿も見えました。

私は後ろを振り返った。茶色のドアの左側には、シャッター付きの長い窓がありました。私はそこまで歩いて行き、その前に立って振り向いた。昼間なら郵便局の角まで見えるだろうと思った。

昼光…私の心の中では夜が消えていきました。昼間だったので近所は賑わっていました。ステファニー・クロフォードさんはレイチェルさんに近況を伝えるために通りを渡った。ミス・モーディはツツジの上に身をかがめた。それは夏だった、そして二人の子供
遠くから近づいてくる男に向かって歩道を走り回った。その男
手を振ると、子供たちは競って彼に近づきました。

まだ夏だったので、子供たちが近づいてきました。少年が釣り竿を後ろに引きずりながら歩道をとぼとぼと歩いていた。男は手を組んで立って待っていた
彼の腰に。夏の間、彼の子供たちは友人と前庭で遊び、自分たちで考えた奇妙な小さな劇を演じました。

それは秋で、彼の子供たちはデュボース夫人の家の前の歩道で喧嘩をしました。の
少年は妹を助けて立ち上がらせ、二人は家に帰りました。秋になると、彼の子供たちはその日の悩みと勝利の表情を浮かべながら、角を曲がってあちらこちらと小走りで歩き回った。彼らは榎の木に立ち止まり、喜び、
当惑し、不安を抱きました。

ウィンターとその子供たちは、燃え盛る家のシルエットを背景に、正門の前で震えていた。冬、ある男が通り
に出てきて眼鏡を落とし、犬を撃ちました。

夏、彼は子供たちの心が傷つくのを目の当たりにした。秋もまたブーさん
子どもたちは彼を必要としていた。

アティカスは正しかった。ある時彼は、立ってみるまではその人を本当に知ることはできないと言った
彼の靴を履いて歩き回ってください。ラドリーのポーチに立っているだけで十分だった。

降っていた小雨で街灯がぼんやりしていた。私が道を進んだとき
家に帰ると、とても年をとったように感じましたが、鼻の頭を見ると、元気に見えました。

ミステリーブーズだけど、寄り目で見るとめまいがしたのでやめました。家に帰る途中、私は明日ジェムに何で話さなければならぬか考えました。彼はそれを見逃して激怒し、何日も私に話しかけなかったでしょう。家に帰る途中、ジェムと私はこう思った

成長するだろうが、おそらく他に学ぶべきことはあまり残されていなかった

代数。

私は階段を駆け上がって家に入りました。アレクサンドラおばさんは寝てしまったので、アティカスの部屋は暗かった。ジェムが復活するかどうか見てみたい。アティカスはジェムの部屋にいて、ベッドのそばに座っていました。彼は本を読んでいた。

「ジェムはもう起きていますか？」

「安らかに眠っています。彼は朝まで起きないだろう。」

"おお。あなたは彼と一緒に座っていますか？

「1時間くらいだけです。寝てください、スカウト。長い一日を過ごしましたね。」

「そうですね、しばらく一緒にいようと思います。」

「自分に合わせなさい」とアティカスは言った。真夜中を過ぎていたはずだが、私は彼の愛想のいい黙認に戸惑った。しかし、彼は私よりも抜け目なく、座った瞬間に眠くなり始めました。

「何を讀んでるの？」私は尋ねた。

アティカスは本をひっくり返した。「ジェムのもの。灰色の幽霊と呼ばれています。」

私は突然目が覚めました。「なぜそれを手に入れたのですか？」

「ハニー、分かりません。拾っただけです。私がまだ読んでいない数少ない本の一つだ」と彼は語った。

と厳しく言いました。

「声に出して読んでください、アティカス。本当に怖いんです。」

「いいえ」と彼は言った。「しばらくは怖がらせるのに十分だったね。これも――」

「アティカス、私は怖くなかった。」

彼は眉をひそめたので、私はこう抗議しました。

それについてテイト。ジェムは怖がらなかった。彼に尋ねると、そうではないと彼は言いました。それに、本以外に本当に怖いものはありません。」

アティカスは何か言おうと口を開いたが、また閉じた。彼は本の真ん中から親指を取り出し、最初のページに戻りました。

私はそこに移動して、彼の膝に頭をもたれかけました。「うーん」と彼は言った。「The Grey Ghost」セカタリー著

ホーキンス。第一章…"

私は起きていようと決意しましたが、雨はとても柔らかく、部屋はとても暖かく、彼の声はとても低く、膝はびったりだったので、私は眠ってしまいました。

数秒後、彼の靴が私の肋骨をそとつづいているようでした。彼は私を立ち上がらせ、部屋まで歩いて行きました。

「あなたの言うことをすべて聞きました」と私はつぶやきました。「…

全然眠れなかった、船と『スリーフィンガード・フレッド・アンド・ストーナース・ボーイ』のことだ…」

彼は私のオーバーオールを脱ぎ、私を彼にもたれかけ、それを脱ぎました。彼は片手で私を抱き上げ、もう一方の手でパジャマに手を伸ばしました。

「そうだ、そしてみんな、ストーナース・ボーイがクラブハウスをめちゃくちゃにしたのだと思ったんだ」
インクをそこら中に投げつけて…」

彼は私をベッドに案内し、座らせました。彼は私の足を持ち上げて、私をその下に置きました
カバー。

「そして、彼らは彼を追いかけて、そして決して彼を捕まえることはできませんでした、なぜなら彼らは彼が何をしているのかわからなかったからです」

アティカスは、やっと彼に会ったとき、どうしてあんなことをしなかったのかと思ったそうです…アティカス、彼は本当に優しくかったです…」

彼の手は私のあごの下にあり、カバーを引き上げて私に巻き込みました。

「スカウト、やっと会えた時には、ほとんどの人がそうだよ。」

彼は明かりを消してジェムの部屋に入った。彼は一晩中そこにいて、ジェムが朝起きるときもそこにいます。

[目次 - 前へ](#)

スキャンと校正のメモ

[スキャンして匿名でバージョン 1.5 に校正済み]

[2005年3月30日、HTMLを校正し、バージョン2.0にフォーマット]、rbバージョンを作成
この詩からも。

このような本をもっと知りたい場合は、www.amazon.com を参照してください。